

ギャラクシーエンジェルⅡ ～失われた英雄と
心に傷を負った天使～

ゼクス

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

あらすじ

無限に広がる大宇宙。

その宇宙に最大の危機が訪れた。その危機から宇宙を救ったのは一人の英雄と、英雄が愛する天使だった。英雄と天使は宇宙から消え、世界は救われた。だが、それは真なる敵との戦いを告げる序章に過ぎなかった。

ギヤラクシーエンジェル用語集（ネタバレ注意）

《E^エD^デE^エN^ン文明》

詳細：約六百年前に滅んだとされていた文明。トランスバール皇国がロストテクノロジーと呼称する技術は全て『E^エD^デE^エN^ン』から発祥した物。実際には滅びては居らず、『クロノ・クエイク』に在る大災害後も存続していたが、『クロノ・クエイク』発生前に敵対していた『ヴァアル・ファスク』文明によって長い間占領されていたが、タクト・マイヤーズとエンジェル隊、そしてトランスバール皇国の力によって占領から解放された。

《クロノ・クエイク》

詳細：約六百年前に宇宙全体を襲った大災害。この災害によって『E^エD^デE^エN^ン』が築いていた銀河ネットワークは崩壊し、宇宙での長距離移動や長距離通信が使用出来なくなってしまう、多くの星が衰退する事になってしまった。その正体は『ヴァアル・ファスク』が作り上げた超兵器『クロノ・クエイク・ボム』のよって引き起こされたものだった。

《ヴァアル・ファスク》

詳細：銀河の最深部の近くに存在するヴァアル・ヴァロス星系の第三惑星ヴァアル・ラン

ダルに住む種族。基本的には人類とそう姿は変わらないが、人類よりも長い寿命を持っていて数百年という時間ですらわずかという感覚。それ故に『クロノ・クエイク』発生後も衰退する事は無く、逆に衰えた『E D E N』を占領出来た。また、『Vチップ』と呼ばれる機械を戦艦などに組み込む事で精神をリンクさせ、生身で複数の機械を遠隔操作できるなど人類には無い能力を持ち、その際に全身に赤い入れ墨状の紋様が現れる。故に『ヴァル・ファスク』には無人艦が数多く存在していた。王であったゲルン死亡後はトランスバールに降伏し、最低限の自衛の手段を残しヴァル・ファスク軍の保有を禁止された。

《白き月と黒き月》

詳細：両方とも『E D E N』文明から生まれた巨大な惑星型ロストテクノロジ。その正体は兵器開発実験プラント。だが、その造られたコンセプトは正反対。『白き月』が人間という不確定要素による進化や突然変異を取り入れ、その変動の振れ幅を利用して最大値を引き出すことをコンセプトとしているのに対して、『黒き月』は兵器としての不変性を重視し、人間の感情のような不確定要素を徹底的に排除して、変動の振れ幅を最低限に抑え常に安定した出力を目指すことをコンセプトしていた。二つの月は互いに争い、最終的に勝利した側の月が敗北した方の月を吸収して、より完璧なシステムを形成する筈だった。だが、『クロノ・クエイク』発生によってそれは頓挫してしまう。

また、『黒き月』の管理者であるノアは長い間コールドスリープしていたので月の真実を知っていたが、『白き月』の管理者は代替わりしているので情報が次々と欠落し、多くの真実が失われてしまった。それ故に『白き月』は本来の目的である『兵器開発』よりも、人々に寄り良い暮らしを与える方に意義を見出して行つた。また、『紋章機』や『クロノ・ブレイク・キャノン』などは『白き月』内部から発見された物である。

《紋章機》

詳細：全長が30メートルから60メートルの1人乗りの宇宙用大型戦闘機。トランスバールが誇る最強の戦闘機。約六百年前に時空震で滅びたとされていた『EDEN文明』の遺産をロストテクノロジー。『H.A.L.O.システム』と『クロノ・ストリング・エンジン』を搭載し、単独での長距離宇宙移動である『クロノ・ドライブ』を行なう事が出来る。パイロットに合わせてそれぞれカスタマイズされていて、『白き月』内部から七機『紋章機』は発見された。しかし、その内に七番機は『ヴァル・ファスク』のスパイに奪われ、奪還出来た時には既に大破し修復不可能と判断された。また、本作では六番機『シャープシューター』も大破し、七番機同様に修復は不可能になっている。

《H.A.L.O.システム》

詳細：『紋章機』に搭載されているシステム。パイロットと精神をリンクさせて、『紋章機』を制御する。正式名称は『有機脳人工脳連接装置』。このシステムこそ『紋章機』

が最強と呼ばれる所以。パイロットのテンション次第でクロノ・ストリングから自由にエネルギーを取り出すことができ、宇宙創生すら可能とされる。実際にタクトとちとせは、本来ならば行く事さえ不可能な『アナザースペース』に到達し、『クロノ・クエイク』の発生を阻止した。その反面、パイロットのテンションが低いと『紋章機』の性能は極端に落ちてしまう。

限定的な予知能力をも有し、使用者の望む未来を実現する力まである。神にも等しいその能力ゆえ、『紋章機』に乗る者は天使と呼称される。

《アナザースペース》

詳細：時間や空間の概念が通じない特殊な空間。この空間と本来の空間では時間の流れが違い、『アナザースペース』での数日が現実では数ヶ月になる。また、『ウイル』は『アナザースペース』の事を『無限回廊』と呼称している。

《ウイル》

詳細：『アナザースペース』内に存在する謎の組織の名称。その詳細と目的は不明だが、『ヴァル・ファスク』以上に人類と分かり合える可能性は低い。今のところヘレアとセレナと言う名前の構成員が判明している。タクトとちとせを『アナザースペース』内で襲った組織である。

《謎の紋章機》

詳細：全てにおいて謎の機体。シルエットがムーンエンジェル隊が乗る『紋章機』に似ている事と『アナザースペース』内に存在している事だけが判明している。

《ABSOLUTE》

詳細：通称『絶対領域』と呼ばれる虚数空間。平行宇宙同士を繋ぐ空間であり、宇宙同士を移動する時は絶対にこの空間を通らなければならない。

《セントラルグロウプ》

詳細：『ABSOLUTE』内部に存在する巨大施設。現在の平行宇宙に於ける調査拠点であり、この施設を使用しなければ平行宇宙を渡る為の『クロノゲート』を管理する事が出来ない。また、現在『クロノ・ゲート』の開閉が可能な人間は、元エンジェル隊所属の『ミルフィーユ・桜庭』しか発見されていない。

《クロノゲート》

詳細：『ABSOLUTE』へと辿り着く為の機械的な巨大な輪。『EDEN』側では首都惑星ジュノーのすぐ近くで確認され、『NEUE』側ではセルダールのすぐ近くで確認されている。

《NEUE》

詳細：『EDEN』が一番最初に接触する事が出来た平行宇宙。実際には『NEUE』の前にも他宇宙を探索しているが、既にその宇宙は滅びていた。セルダール、マジック、

ピコなどの惑星が主と成っている。また、それ以外にも辺境に勢力が存在しているが、今のところは詳細不明である。

《特殊電磁波発生ペイント液》

詳細・『黒き月』の管理者で在るノアが造り上げた対ゴースト用のペイント液。専用の弾頭ミサイルに搭載し、ミサイル爆発と共に液体が四散して物体に取り付く事で効果を発揮する。

効果発揮と共に電磁波が発生し、索敵などで感知する事が出来る様になる。欠点として付着した量が少なかった場合は電磁波が弱くなるので感知出来ない事が在る。因みに色がピンクなのは某『強運の天使』がノアに願った為である。

《ゴースト》

全長	62.4 m
全幅	39.5 m
全高	24.6 m

『武装』

- ・ 大口径の大型ロングバレルレールガン
- ・ 中型レーザー砲
- ・ ミサイルポット二門

・バルカン砲二門

詳細・『E D E N』製の『紋章機』に酷似した大型宇宙戦闘機。機体の両脚部にはそれぞれ大口径の大型ロングバレルレールガンが右側に、左側には中型レーザー砲が装備され、両翼部分には小型のミサイルポットらしき物が備わっており、コックピット付近にはバルカン砲らしき物が二門備わっている。『紋章機』に酷似した機体で在りながらも、内部からは生命反応が感知されなかつた。機械のような精密な操縦技術を有しているにも関わらず、人が持つ大胆ささえも発揮した異常な機体。

現在の『E D E N』及び『N E U E』の技術では探知する事が出来ないステルス性能を有し、『クロノ・ドライブ』とは違う未知の宇宙移動技術も有している。その目的は不明だが、『E D E N』及び『N E U E』と敵対する行動は見られない。

第0章 始まりのバットエンド

プロローグ 前編

無限に広がる大宇宙。

其処には数え切れない星々が存在し、星々が形成する銀河が広がっていた。多くの星から人は宇宙に進出し、広大な星間ネットワークが形成されていた。その文明を『E^エD^デE^エN^ン文明』と呼ばれていた。

だが、その広大かつ凄まじいテクロノジーを保有していた『E^エD^デE^エN^ン文明』に崩壊が訪れた。時を震わせる絶対的な災害。その名は『クロノ・クエイク』。宇宙全体にその災害は及び、『E^エD^デE^エN^ン文明』が築いていた銀河ネットワークは全てが使用不可能になった。その結果、多くの惑星が築いていた自らの文明は衰退の一步を辿った。『クロノ・クエイク』の災害は一時的で済まなかったのだ。

惑星間に於ける長距離移動の使用不可能。惑星と惑星の間での長距離通信の途絶。影響が完全に治まるまでに実に二百年以上の歳月が掛かってしまったのが文明の衰退の原因だった。

そして『クロノ・クエイク』の発生から六百年後。銀河には『トランスバール皇国』と

言う汎惑星国家が生まれていた。『EDEN文明』の遺産であるロストテクノロジー『白き月』を保有した巨大惑星国家である。

『白き月』と、其処に住む『白き月の聖母・シャトヤーン』のおかげで『EDEN文明』に変わる新たな銀河の中心となった皇国である。しかし、長い月日によつて皇国の貴族や皇族は腐敗し、自らに恩恵を齎した『白き月』への畏敬の念が失われ始めていた。

《トランスバール暦402年》

突如として13代皇帝ジェラルド・トランスバールは軍を率いて白き月に侵攻。争いを嫌った『白き月の聖母シャトヤーン』の行動によつて血を流す事は無かったが、『白き月』はトランスバール皇国の直轄地になってしまう。また、月の聖母シャトヤーンは皇帝の妃にされ、『白き月』及び白き月の巫女を近衛軍の所屬に組み込み、軍の基地が設置されてしまった。月の聖母シャトヤーンは事実上の幽閉状態となる。しかし、この皇族の行動に寄り、皇国各地で市民による暴動が発生。反貴族・ロストテクノロジーの全宇宙共有化の意識が高まり、反皇国思想のテロ活動が活発化してしまう事になった。

《トランスバール暦407年》

シグルト・ジータマイア少将に扇動され第五皇子エオニア・トランスバールは聖母シャトヤーンと白き月の解放及び、トランスバール建国目的の復活、正統性の回復、初期の理想を取り戻すことを掲げ、皇国に対してクーデターを起こす。しかし、これは

ジェラルド・トランスバールとジーダマイア少将の謀略だった。『白き月』の占領に寄る民衆と皇族及び貴族内での不穏分子を一掃する為に二人は裏で手を組んでいた。クイーターが始まるや否や、ジーダマイアが皇帝ジェラルドに寝返り、それが原因でエオニアは敗北する。結果エオニアは全ての権利を剥奪され追放刑を受け皇国外宇宙へと追放、親しいものも全員処刑される。

《トランスバール暦412年》

強力な無人艦隊を率いて追放されていたエオニア王子はトランスバールへと帰還を果たす。防衛にあたった第一方面軍と近衛軍を駆逐するなど無人艦隊は圧倒的な性能を示しトランスバール本星を制圧。軌道上からの砲撃により皇族の粛清を実行。これにより13代皇帝ジェラルド・トランスバール及び皇族の殆どが死亡。主だったジェラルド・トランスバールに組していた貴族達も死亡した。唯一『白き月』に居たシヴァ皇子は粛清を逃れ、『儀礼艦エルシオール』と『白き月』の最大戦力『紋章機』エンブレムフレームと共に残存勢力が集まるローム星系都市衛星フアーゴに集結した。しかし、長い放浪によってエオニア皇子の心は狂気に蝕まれていた。初戦には勝利するも、エオニア軍主力により都市衛星フアーゴが奇襲を受けた際、ジーダマイア大将を含む多くの高級将官を失ったばかりか、フアーゴに居た一般市民も大勢死亡してしまふ。

何とか難を逃れたシヴァ皇子が乗る儀礼艦エルシオールは『白き月』へと辿り着く。

そしてエオニアの背後に居る真の敵。『白き月』と対を成すロスステクノロジー『黒き月』の存在が知らされる。『黒き月』の存在に聖母シャトヤーンは封じていたエルシオールの主砲『クロノ・ブレイク・キャノン』と『紋章機』の真の力を解放する。これによってルフト准将率いる皇国軍の残存戦力と共にエオニア及び『黒き月』を打ち倒す事に成功した。後にこの戦いは『エオニア戦役』と呼ばれる。

《トランスバール暦412年・エオニア戦役より六カ月後》

『黒き月』及びエオニア皇子を倒した事によつて皇国に平和が戻ったかのように思われていた。だが、その平和が偽りだと言うように戦いは再び始まった。エオニア軍の残党、レゾム・メア・ゾムによる真・正統トランスバール皇国建国の発表。そして破壊した筈の『黒き月』の復活。しかし、これは全て嘗て『E D E N^{エデン}文明』が戦っていた敵対勢力『ヴァル・フアスク』の一員であるネフユーリアの謀略だった。『黒き月』の力を取り込んで建造された『超巨大戦艦オ・ガウブ』の前には『クロノ・ブレイク・キャノン』さえも無力だった。真なる『黒き月』の管理者である『ノア』から真実を告げられたムーンエンジェル隊は『白き月』へと集い、『黒き月』と『白き月』の技術を合わせて『七番機目の紋章機』を改造し、『超巨大戦艦オ・ガウブ』を撃破する。だが、これらは新たな戦いの序章に過ぎなかった。

《トランスバール暦413年》

ヴァル・ファスクの来襲。これを察知していたシヴァ女王陛下（皇位継承と同時に女性である事を発表）は即座に皇国軍最強戦力であるエルシオール及び六機の『紋章機』を派遣。第二次ヴァル・ファスク大戦が始まった。

エルシオールと『紋章機』は次々と迫るヴァル・ファスク軍を打ち倒して行く。そして彼らは滅んだとされていたロスステクノロジーの発祥の地である『EDEN』が存続している事を確認する。だが、『EDEN』は既にヴァル・ファスクによって占領されていた。宇宙全体に多大な被害を齎した大災害『クロノ・クエイク』は、実は自然によって発生したモノではなくヴァル・ファスクの兵器『クロノ・クエイク・ボム』に引き起こされた災害だったのだ。再び『クロノ・クエイク』を引き起こそうとするヴァル・ファスクの王ゲルンを倒す為に、『白き月』率いるトランスバール皇国軍はヴァル・ファスク本星へと侵攻し、最終決戦へと望んだ。

激闘の末に王であるゲルンを倒す事には成功したが、ゲルンの死と同時に『クロノ・クエイク・ボム』は起動してしまふ。トランスバール軍と紋章機が決死に攻撃を加えるが、『クロノ・クエイク・ボム』を破壊する事は出来なかった。誰もが第二次『クロノ・クエイク』の発生を思った瞬間、一機の『紋章機』が『クロノ・クエイク・ボム』へと向かった。ムーンエンジェル隊所属『烏丸ちとせ』が操る六番機『シャープシューター』だった。『クロノ・クエイク』を唯一止める手段。それは『紋章機』の出力を最大に発

揮し、『クロノ・クエイク』によって発生した膨大なエネルギーを『アナザースペース』と呼ばれる空間に流し込むと方法だった。だが、この方法には問題が在り、『紋章機』の出力が最大に常に発生してなければならぬ事と、『紋章機』も『アナザースペース』内部に飲み込まれてしまう。烏丸ちとせはエンジェル隊で唯一その不可能に近い方法を可能にする事が出来る女性だった。シャープシューターのコックピットの中にはちとせだけではなく彼女の恋人であり、エンジェル隊を率いて来た司令官タクト・マイヤーズの姿も在った。

二人の思いはシャープシューターの出力を最大に発揮し、『クロノ・クエイク』の発生は防がれた。だが、タクト・マイヤーズと烏丸ちとせは『アナザースペース』へと飲み込まれてしまった。

《トランスバール暦413年・ヴァル・ファスク大戦終結から数カ月後》

『EDEN』の主惑星ジュノーの軌道上。『白き月』は軌道上に待機し、其処から少し離れた宙域でエルシオールと五機の紋章機が待機していた。彼らの目的はただ一つ。『アナザースペース』に飲み込まれたタクト・マイヤーズと烏丸ちとせを帰還させる事だった。

二人が『アナザースペース』に飲み込まれる事を事前に知っていた『黒き月』の管理者であるノアは、『EDEN^{エデン}』及び『白き月』、そしてトランスバールの技術の全てを結集させて二人を帰還させる理論を遂に完成させたのだ。そして今日二人を帰還させる為の準備が進められていた。

「それじゃ、始めるわよ。エンジェル隊は全員その場所で待機していなさい」

『はい』

『了解よ！』

『任せましたわ』

『あいよ』

『必ず成功させます』

エルシオールのブリッジから褐色肌の金髪の十歳ぐらいの少女―『黒き月』の管理者ノア―からの指示に各紋章機に乗っている女性パイロット達が返事を返した。

その様子になアは満足げに頷きながら、自らの目の前に在るコンソールに手を伸ばして操作を開始する。すると、左目に大きな機械仕掛けらしいアイパッチを付けた男性―現エルシオールの艦長レスター・クールダラス―を横に伴った豪華な服を身に纏った美しい顔立ちの十一歳ぐらいの少女―14代女皇シヴァ・トランスバール―が神妙な顔をしながら質問して来る。

「必ず成功するのであるうな、ノア?」

「理論上ではなね。ただ『アナザースペース』自体が謎の空間だから、必ずとは保障出来ないわ。でも、成功確立は高いから大丈夫だと思う」

「…そうか。頼むぞ、ノア。タクトと烏丸を必ず帰還させてくれ」

「はいはい。それじゃ始めるわ。オペレーター! これから起きる事は逐一私にデータを送りなさい!」

「はい!」

ノアの指示にブリッジ内部は慌しく動き出し、各員が自らの行なうべき事を行ない出す。

彼らの想いは唯一つ。タクト・マイヤーズと烏丸ちとせを必ず帰還させる事だけだった。

「それじゃ、皆! タクトとちとせを連れ戻す為に気張りなよ!」

一番最初に号令を放ったのは、パープルカラーが施された多数の火気が備わっている四番機「ハッピートリガー」に搭乗している女性。

エンジェル隊の隊長を勤める軍服を肩の辺りから切り崩しマント風に羽織り、胸の開いた紫のフォーマルドレスを着て顔には片眼鏡モノクルをし、赤いセミロングの髪を帽子で覆った『フォルテ・シユトローレン』だった。

「はい！ フォルテさん！ 早く二人を助けて、皆でパーティーをやりましょう！」

フォルテの呼びかけに即座に答えたのはピンク色のカラーリングが施されて、機体の中心に備わっている主砲が目につく一番機「ラッキースター」に搭乗している少女。

天真爛漫と言う言葉が相応しく、ピンク色の髪に白い花を思わせるようなカチューシャを付けた強運の持ち主『ミルフィュー・桜葉』さくらばだった。

「そうね。主役が二人とも居ないパーティーなんて詰まらないし、こんだけ私達を心配させたんだから、二人には責任を取って貰わないとね」

次に答えたのは両脚部分に拳のような大型クローを二基を武装したシルバーマタリックにレッドカラーが施されている二番機「カンフーフアイター」に搭乗している少女。

腰まで届く金髪にマラカス思わせるような髪飾りを両側に付けて、真っ赤なチャイナドレスを變形させたような服装を身に纏っている『蘭花・フランボワーズ』ランファだった。

「ふふっ、でもあの二人の事ですから、もしかして二人つきりなのを良い事に仲良くしているかもしれませんわね」

「…でも、二人には帰って来て欲しいです」

最後に答えたのは電子線を得意とするライトブルーのカラーリングが施されている三番機「トリックマスター」と大きな円盤状のパーツが印象的なライムグリーンのカ

ラーリングが施されている五番機「ハーベスター」に搭乗している二人の少女。

ロップイヤーのようなうさぎ耳を頭に付けている青いシヨートカットの髪型の小柄で華奢なスタイルの『ミント・ブラマンシュ』。そして人形のように整った顔立ちと、緑色の豊かにカールした髪に看護婦の帽子を思わせるようなヘッドギアを身につけ、ナノマシンの扱いに長けている『ヴァニラ・H《アッシュ》』だった。

彼女達こそが『紋章機』を操るムーンエンジェル隊のメンバー。『アナザースペース』に居る烏丸ちとせを合わせて六人の隊員達。全員がタクトとちとせを取り戻すと気合が充分だった。

その気合いに『紋章機』は応え、全ての『紋章機』の左右から白い光の翼―『エンジェルフエザー』―が発生する。これこそが『紋章機』の真の姿だった。この状態の『紋章機』はデータ上の最大値を超えた出力が引き出される。

ノアは各『紋章機』の出力を利用し、シャープシューターのみで開いた『アナザースペース』への入り口を再び開き、タクトとちとせを帰還させる気だった。各『紋章機』はそれぞれ装備が違うが、メインフレームのみは共通項が在る。其処を利用して『アナザースペース』内のシャープシューターを呼び戻そうというが本作戦の内容だった。内容は簡単だが、実際に実現するに至るまでは試行錯誤が幾重にも掛かった。

それだけの労力が赦されたのは宇宙全体を救った英雄であるタクトとちとせを救い

出す為だった。

そして各『紋章機』が『エンジェルフェザー』を発生させると同時にノア達が作り上げた機械が起動する。すると、『紋章機』とエルシオールの前方の宇宙空間が歪み、黒い穴”のようなモノが出現した。

穴は徐々に大きさを広げて行き、五十メートルぐらいの大きさに達した瞬間、眩い白い光が穴の中心に発生し、周囲を照らした。その光に事の推移を見守っていた全員が成功を確信する。

発生していた光は徐々に治まり、何かが光の中心部分に姿を現す。

『ッ!?!』

光が治まった後に出現したモノに、見守っていた誰もが息を呑んだ。

出現したモノは確かに誰もが望んでいた六番機シャープシューターだった。だが、シャープシューターは見るも無残な姿に成っていた。

主武装である長距離大口径の大型ロングバレルレールガンは半ばから破壊され、他の兵装であるミサイルポッドやレーザーフランクス、ビーム砲なども使用不可能になるまで破壊されていた。背部のブースターも片方が使用不可能され、鮮やかだったブルーのカラリングも黒く煤け、メインフレームもかなりの規模で損傷が見受けられた。

「……………何よ、これ? ……うそでしょう! ……ちとせ! タクト!! 返事をして!」

「タクトさん！　ちとせ!!　お願いだから、返事をして下さい!!」
「落ち着きな！　二人とも!!」

無残にも大破したシャープシューターに慌てるミルフィューユとランファを治める為にフォルテが叫んだ。

フォルテも内心では動揺していたが、今はそれよりも優先する事がある為に動揺を押し込めてヴァニラとミントに指示を出す。

「ヴァニラ！　すぐにシャープシューターにリペアを行なうんだ！　ミント！　何か感じるかい!？」

「……深い……深い……悲しみが伝わって来ます……余りにも深く、詳しく聞き取れません」

「それじゃ、誰かが乗っているのは間違いね！　司令官！　これからシャープシューターを回収する！　そっちは救護班を格納庫に頼むよ！」

『分かった！　頼むぞ!!』

レスターへと連絡が終わった後、フォルテは他のメンバーに指示を送って大破したシャープシューターをエルシオールへと回収する。

エルシオールの格納庫には事前に連絡のおかげで医務官のケーラを初めとした医療班が揃っており、整備班が大破したシャープシューターの周りに集まってコックピット

のハッチを開けようとしていた。その様子をエンジェル隊は見つめ、タクトとちとせの無事を強く願う。

ハッチ部分にも損傷が見られ、中々開ける事は出来なかったが、整備班達の努力により遂にハッチが開く。

「……ガコン！」

「ちとせ！ タクト！」

ハッチが開くと共にフォルテを先頭にエンジェル隊は即座に近寄り、コックピット内부를覗く。

其処にはコックピットの入り口の傍で折れた両手を血で真っ赤に染めながら、身に纏っているエンジェル隊の制服を同じように真っ赤な血で染めて腰まで届くほどに長い黒髪の少女――『烏丸ちとせ』――が涙を流しながら倒れ伏していた。

『ちとせ!?!』

『ちとせさん!?!』

ちとせを確認したフォルテ達は近づこうとするが、その前に医務官のケーラがちとせに近づいて素早く診察する。

「……外傷は両手だけだわ……この制服に付いている血は彼女の血じゃない。ヴァニラ！すぐに両手の治療を行なって！」

た。ゆっくりとちとせは目を閉じて行き、そのまま眠りにつく。そのままちとせはカーゴに乗せられて医務室へと運ばれ行き、ヴァニラを除いたエンジェル隊員は悲しげに運ばれて行くちとせを見つめるのだった。

プロローグ 後編

エルシオールのプロリッジ内部は暗い雰囲気に含まれていた。

『アナザースペース』から無事に帰還すると思われていたタクト・マイヤーズと烏丸ちとせの二人。しかし、帰還を果たした二人が乗っていた『紋章機』シャープシューターは大破し、パイロットであるちとせは医務室で眠り続け、タクトは生死不明。誰もが無事に二人は帰還すると思っていたのに、無残な結果になってしまった事実の言葉が出せなかった。

何時もは元気なブリッジのオペレーターである『ココ・ナッツミルク』と『アルモ・ブルーベリー』の二人も、暗く沈んだ顔をしながら作業を続けていた。

現状エルシオールは『白き月』内部の港に停泊し、回収したシャープシューターの調査が行なわれていた。ちとせの意識が戻らない今、手掛かりが在るとすればシャープシューターだけだった。ノアを陣頭にして『白き月』の技術者達が急ピッチで調査している。その場にはレスター・クールダラスとシヴァ女皇陛下も同席している。二人とも少しでも情報を早く手に入れたいのだ。

ブリッジに居る誰もが早く調査結果が出て欲しいと願っていると、ブリッジの扉が開

きフォルテが足を踏み入れる。

「……ブウン！」

「失礼するよ」

「あっ！ フォルテさん！」

「もしかしてちとせさんの意識が戻ったんですか!？」

他のエンジェル隊のメンバーと共に医務室でちとせに付き添っていたフォルテの来訪に、ココとアルモは問い掛けた。

しかし、フォルテは首を横に振ってゆっくりと艦長席に近づく。

「いや、まだまだよ。此処に来たのは少しでも調査結果が出てないか聞く為さ。他の子達はちとせが心配で付き添っているから、あたしが来ただけさ」

「…そうですか…残念ですけど、まだ、クールダラス司令やノアさんから連絡は届いていません」

「……そうかい…まあ、そんなに早く結果は出ない事は分かってたけどね」

フォルテとて調査結果が出てない事は分かっていた。

ブリッジに訪れたのは少しでも気を紛らわせる為。医務室もブリッジ同様に暗い雰囲気な包まれているのだ。何時もほのぼのとして天真爛漫なミルフィューも、明るく元気なランファも悲しみにで暗く沈んでいる。冷静沈着なミントも悲しみを隠せずに俯き、

ヴァニラはケーラが止めるまでナノマシン治療をちとせに施して疲労していた。

エルシオールに居る誰もが予想外の事態に困惑しているのが現状だった。此処に居ても仕方が無いと考えたフォルテは、ブリッジから出て行こうと入り口に足を向ける。

「ービービーッ！」

「あっ！」

通信を知らせる音にアルモは慌てて、メインモニターのスイッチを押す。

すると、メインモニターに険しい表情を浮かべたレスターが映し出された。

「クールダラス艦長！」

『……アルモ……ココ……すぐに、エンジェル隊をブリッジに集合させてくれ。まだ、完全では無いが、ある程度の調査結果が出た。その報告行なう』

「はい！ 分かりました！」

アルモがレスターに返事を返すと共にメインモニターが消える。

すぐさま指示に従ってエンジェル隊を呼び出そうとするが、その前に背後からフォルテの声が聞こえて来る。

「エンジェル隊は至急ブリッジに集合しな！ 調査結果が出たらしいよ！」

その様子を見ていたアルモとココは五分と掛からずに集まるであろうエンジェル隊を思つて、苦笑を浮かべあうのだった。

三十分後のエルシオールブリッジ内部。

其処には既にエンジェル隊のメンバー全員が集まり、調査結果を持って来たレスター、ノア、シヴァを見つめていた。代表としてノアが前に一步踏み出す。

「全員集まったわね。それじゃまだ調査途中だけど、結論から言うわ。信じ難い事だけど、タクトとちとせは『アナザースペース』内で何者かに襲われたのは間違い無いわ」
告げられた結論に予測していたとは言え、ブリッジ内部に居る誰もが騒然する。

そんな中、ヴァニラが気絶する前のちとせが残した言葉を思い出してノアに報告する。

「ちとせさんは『ウィル』に襲われたと言っていました」

『『ウィル』ね…個人の名前なのか、組織名なのかは分からないけれど、『ウィル』がタクトとちとせを襲ってシャープシューターを大破させたのは間違い無いわ」

「でも、ちとせが負けるなんて!」

ちとせの実力を知っているランファは思わず叫んだ。

エンジェル隊の中ではちとせは新米だが、その実力はエンジェル隊の他のメンバーを上回るエースの座についている。中でも長距離精密射撃の腕はエンジェル隊では随一なのだ。そのちとせが天才的な指揮能力を持っているタクトも居て敗北した事実が、ランファには信じられなかった。

だが、それはあくまでシャープシューターが万全な状態だからこそその話だった。

「普通なら確かにタクトとちとせが負けるとは思えないわね。だけど、忘れたの？」

シャープシューターは『クロノ・クエイク・ボム』のエネルギーを全て『アナザースペース』に送っていたのよ。つまり、シャープシューターのエネルギー残量は殆ど無かった」「それじゃ、二人は抵抗らしい抵抗も行なえなかつたって言うのかい？」

「ええ、そうよ」

「…そんな」

ミルフィユは悲しげな声を上げ、他のメンバーもそれぞれ悲しげに顔を歪める。

場の雰囲気が悪くなった事をノアは察するが、まだ話は途中なので続ける。

「それと相手は多分タクトとちとせを捕獲する目的で動いたんでしようね、シャープシューターの破損はコックピット周辺は余り酷くなかったから……抵抗されないように武装を破壊したと見て間違い無いわ」

「調査班の報告でも同様の結果が出ている。また、ちとせの両腕の怪我についてだが……どうやら、あの怪我はちとせ自身が自ら傷つけた傷の可能性が高い事が判明した」「どう言う事ですの？」

「これを見て」

「……ブウン！」

ミントの質問に、ノアはコンソールを操作してメインモニターにシャープシューターのコックピット内部の映像を映し出した。

ちとせを運び出す時には気がつかなかったが、コックピット内部の出入り口のハッチには血が付いていて、何度も打ち付けたような後が残っていた。

「…これは…もしかして、ちとせは…」

「今フォルテが思い浮かべた通りだろう。恐らくちとせはコックピットの外に出ようと、何度もハッチを両手で殴ったんだ…腕が折れてもな」

「ちよつと待つてよ。ハッチの開け閉めなんて普通に出来るんじゃない？」

「通常ならな。だが、シャープシューターのハッチは外側のコンソール部分が破壊され、開け閉めが出来ない状態になっていたんだ」

「敵からの攻撃のせいですか？」

「いいえ、違うわ、ミルフィーユ…恐らくだけど、コンソールを破壊したのはタクトよ」
『えっ?』

ノアの言葉にエンジェル隊は驚き、ノアも同感だと言うように頷きながらコンソールを操作する。

すると、今度は外側のハッチ部分がメインモニターに映り、外側に付いているハッチの開閉コンソールが何かに撃ち抜かれていた。逸早く何で撃ち抜かれたのか気がつい

たのは、エンジェル隊の中で銃器の扱いに最も長けているフォルテだった。

「…レーザーガンで撃ち抜かれているね」

「ええ、そうよ。多分タクトはちとせをコックピット内に入れた後に、外部の開閉用のコンソールを破壊したんだと思うわ。理由は言うまでも無く、ちとせを護る為でしょうね」

『……………』

「敵に捕縛された後、タクトはちとせだけでも助けようとシャープシューターの中に閉じ込めた。私達が此方側の世界に連れ戻そうとしてしていると信じて…賭けに出た。その賭けにタクトは勝ったけれど…タクトは『アナザースペース』に取り残されてしまった。生きているのか死んでいるのかも分からないわ」

「クツ！ あの馬鹿が…」

「…クールダラス艦長」

苛立たしげに言葉を漏らしたレスターだったが、その顔は悲しみに溢れていた。

常日頃不真面目なタクトに対して気苦労が絶えないレスターだったが、タクトの事は心の底から信頼し、最高の親友だと思っている。そのタクトが死んだかもしれない事実にレスターの顔は悲しみに染まっていた。

ノアはその様子に僅かに顔を悲しげに染めるが、すぐに首を横に振って何時もの冷静

沈着な顔に戻る。

「……ヴァニラ。ちとせの制服に付いていた血のDNA検査は終わっているんでしよう？
結果はどうだったの？」

「……エルシオール内部に登録されているデータベースから……調査した結果……タク
トさんのDNAと一致しました」

「……そう……これでタクトが死亡している可能性が増えたわね」
「ノアよ」

静かに話して聞いていたシヴァがノアに声を掛けた。

その顔は他のメンバー同様に悲しさに染まっており、年相応の表情が滲み出ていた。
女皇に即位してからは皇族として責務を背負っていたが、今はその仮面が僅かに綻んで
いた。

「単刀直入に聞くが……マイヤーズは……タクトは此方に帰還出来るのか？」

「……ハッキリ言つて良いの？」

「構わん。気休めでこの場に居る全員が納得する訳が無いからな」

「……そう、ならハッキリと言うけど……『アナザースペース』からのタクトの帰還
は……不可能よ」

『ッ!?!』

残酷な事実一同は言葉を失うが、告げたノアには不可能だと頭に浮かんだ理論によつて分かつていた。

「先ず不可能だと言つた理由だけど、『紋章機』のような大型戦闘機レベルならともかく、タクト個人レベルでの『アナザースペース』への干渉は不可能なのよ。更に言えば今回シャープシューターを此方側に戻せたのは、同じ『紋章機』の存在が在つたからよ。装備は違つてもメインフレーム自体には大きな差は無いから、可能だつたの…だけど、タクト個人を連れ戻すのは技術的にも不可能なの」

「だつたら、こつちから『アナザースペース』には迎えないの!？」

「それも無理よ。『アナザースペース』への入り口を開けたのはちとせとタクトが乗つたシャープシューターだけ。タクトも居なくて、シャープシューターも大破してしまつた今、ちとせには『アナザースペース』への扉はもう開けない。更に言えば開く為には『クロノ・クエイク・ボム』のエネルギーまでも必要になるわ」

「……一歩間違えれば、『クロノ・クエイク』が起きるつて事かい？」

「そう。流石にタクト個人を助ける為に、宇宙全体を巻き込む事は出来ない。更に言えば、例え運よく扉が開いたとしても、『アナザースペース』に行けるのはエネルギーが枯渇した『紋章機』が一機だけ。『ウィル』が何者なのか分からないけれど、もしも大艦隊レベルの組織だつた場合、自殺に行くようなモノでしか無いわ」

「それでは……マイヤーズの事は……」

「……酷な言い方かもしれないけれど、タクト個人の為だけに宇宙全体を危機に晒す訳には行かないわ」

ノアは冷酷にシヴァの願いを不可能だと断じる言葉を告げた。

シヴァもノアの言葉の意味を理解している。個人としてはタクトの救出を願っても、為政者としてはタクトの帰還を諦めるしか無かった。シヴァは既にトランススパール皇国を背負う女皇。その顔は悔しげに染まり、唇を強く噛み締めていた。

エンジェル隊のメンバーはそのシヴァの様子から、どれほどまでにシヴァが苦しんでいるのか察し、フォルテは目元が見えないぐらいまで軍帽で顔を隠し、ミルフィーク、ラシファ、ミント、ヴァニラは目じりに涙を浮かべながら悲しげに顔を俯かせる。すると、ブリッジ内部に緊急の通信を告げるアラームが鳴り響く。

「……ビィビィッ！」

「医務室から緊急連絡です!!」

「医務室だと？　すぐに繋げ！」

「りよ、了解！」

レスターの指示にココはすぐに返答し、医務室との回線を繋ぐ。

同時にメインモニターに焦っているケーラが映し出される。

『大変よ！ 少し目を離れた隙にちとせがベットから消えたの！』

「何だと!？」

『ええ、すぐに探して欲しいの！ 今あの子は酷く精神状態が不安定だから、何か大変な事をするかも知れないわ!』

「クツ！ すぐに警備班に連絡しろ！ エンジェル隊もちとせを捜索するんだ!」

『了解!!』

レスターの指示にブリッジ内部は忙しく動き出し、エンジェル隊のメンバーはブリッジから出てちとせの捜索に乗り出した。

「ちとせ！ 何処に行ったのかな、ランファ!？」

「そんなの私にも分かんないわよ、ミルフィー!」

「…いや、分かるかもしれないよ、二人とも」

『えっ?』

横を走っているフォルテの言葉にミルフィーユとランファが顔を向ける。

すると、テレパスでフォルテの考えを読み取ったミントが走りながら説明する。

「ちとせさんは多分タクトさんを救おうとしている筈ですわ。そして救う為には『アナザースペース』に向かう必要が在ります。その扉を開く為に必要なのは第一に…」

『紋章機!!』

ちとせが向かった場所を察したメンバーは、『紋章機』が収容されている格納庫へと急ぐ。

その最中にヴァニラが疑問に思った事を前を走るフォルテに向かって質問する。

「ですが、フォルテさん……ちとせさんの専用機であるシャープシューターは大破し、『白き月』に運ばれています。他の『紋章機』は私達それぞれに調整されていますから、格納庫に向かったとは言い切れないのでは？」

皇国最強の戦闘機である『紋章機』だが、それぞれ専用機としてカスタマイズされている。

これは『紋章機』に搭載されている『H・A・L・Oシステム』に適合出来る人間に限られているのが理由だった。現にミルフィューが乗る一番機ラッキースターは、ミルフィューしか乗る事が出来ない。他の機体に関してもそれぞれのパイロット用に微調整が施されているので『H・A・L・Oシステム』に適合出来るちとせが乗ったとしても、シャープシューターのように自由自在に操る事は出来ない。ましてや『アナザースペース』への扉を開く事が出来る出力を發揮する事など到底不可能だった。

それはエンジェル隊の中でも最も勉強熱心なちとせが知らない筈が無い事実。だが、今のちとせは確実に格納庫に向かっているとフォルテは確信していた。

「ケーラ先生が言っていただろう？　ちとせの精神状態は不安定だったって？」

「何時ものちとせさんならともかく、今のちとせさんでは冷静に物事を判断出来ませんわ。だからこそ、格納庫に向かって居ると見て間違いありません」

ミントは断言するように呟いた。

二人の説明にミルフィユ、ランファ、ヴァニラは納得するように頷き格納庫へと急ぐ。そして辿り着いた格納庫では、フォルテ同様にもちとせの行動を先読みしたレスターが警備班を複数配置し、クレータ班長を筆頭に整備班の面々も周囲を警戒していた。

まだ、ちとせはやって来ていないとフォルテ達は安堵しながらクレータに状況を聞こうとする。だが、その前にフォルテの耳に僅かながらも何かの音が響く。

「……ギイツ！」

「ん？」

「どうしたんですか、フォルテさん？」

「シッ！ 静かに……」

口の前に指を翳し、フォルテは神経を研ぎ澄ませて格納庫内を見回す。

「……ギイツ……ギイツ！」

(聞こえる。擦るような音が……聞こえて来る場所は?)

フォルテの目は真つ直ぐにラッキースターが置かれている場所に向き、次の瞬間、ラッキースターの傍の通風孔から這い出るように病院着を着たちとせが出て来た。

「ハア、ハア、ハア」

『ちとせ!!』

『ちとせさん!!』

荒い息を吐くちとせに向かって歩いてフォルテ達は叫ぶが、ちとせは構わずにラッキースターに向かって歩き出す。

その様子に自分達の声が届いていないと分かったフォルテ達は、急いでちとせを止めようと走り出す。

「クレータ!! ロックの方はしてあるのかい!」

「はい! クールダラス艦長の指示で既に全『紋章機』はロックして在ります!」

「よし! 皆! ちとせを止めるよ!」

『はい!!』

フォルテの指示に全員が頷き、ちとせを止める為に走り出す。

そしてラッキースターの傍に近寄ると、既にちとせはラッキースターのコックピット内部に入ろうとしていた。プログラミングにも優秀な成績を残しているちとせならば、クレータが掛けたロックも解けるとフォルテは悟っていたが、既に取り押さえるには充分だった。

何よりもちとせが乗ろうとしている『紋章機』がラッキースターで在る事が助かった。

一番機ラツキースターは、他の『紋章機』以上に扱いが難しい機体。強運の持ち主で在るミルフィューユしか乗る事が出来ない機体なのだ。その分性能や出力は他の機体よりも秀でてゐる。ちとせも其処に目をつけた。現状で『アナザースペース』を開くほどの可能性は最も高い機体が在るとすれば、それはラツキースターしか無かつた。

そしてちとせはラツキースターのコックピット内部に入り込み、フォルテ達は取り押さえようと走り出した瞬間、ラツキースター内部から悲鳴が響く。

「いやあああああああああああああつ!!!」

「どうしたんだい!? ちとせ!!」

『ちとせ!』

『ちとせさん!!』

聞こえて来た悲鳴にフォルテ達がラツキースターコックピット内部を覗いて見ると、両手で体を抱き締めて怯えるように体を震わせているちとせが居た。

「ああ、アア……タクトさん……タクトさん」

「……ちとせ」

「……………ケーラ先生が言っていました」

何かに怯えているちとせを目にしたヴァニラは、ケーラが危惧していた事態がちとせに起きてゐる事を悟って悲しげに呟いた。

そのヴァニラの様子に気がついたミルフィュー、ランファ、ミント、フォルテが目を向けると、ヴァニラは悲しさと憂いに満ちた声でちとせに起きている事を告げる。

『『精神的^P外傷^T』です。ちとせさんはタクトさんを助けられなかった事が原因で、『紋章機』に乗るとその時の事がフラッシュバックするようになってしまったんだと思います』

「……そうかい」

ヴァニラの言いたい事が分かったフォルテは、憂いを覚えるように瞳を悲しげに染めながらちとせに手を伸ばす。

「ほら、ちとせ……医務室に戻ろう」

「……フォルテさん……私……私……ウワアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

「……今は泣きな」

自身の胸の中で泣き続けるちとせを優しくフォルテは抱き、その頭を撫でるのだった。

この数日後。『皇国の英雄』タクト・マイヤーズの殉職がシヴァ女皇から発表されると共にタクトは2階級昇進。

その葬儀はトランスパール皇国と『EDEN^{エデン}』において盛大に行なわれ、多くの者が

タクトの死に嘆き悲しんだ。また、『精神的^P外傷^T』を負った烏丸ちとせはエンジェル隊を除隊し、以後『白き月』でノアの補佐役として平行宇宙と『アナザースペース』に関する研究を行なうようになったのだった。

時間や空間の概念が通じない特殊な空間。

其処はノア達が『アナザースペース』と呼ぶ場所。本来ならば誰も存在していないとされていた場所に存在しているモノが居た。

「……逃げられたわね」

「ああ、そうだね」

「何を嬉しそうにしているの?」

「嬉しいさ。どうやら今回の文明は、僕らが居る場所に辿り着いただけじゃなく、再び扉を開ける事も出来たんだから……長い時を待っていたかいが在ったと言う事さ」

「……そうね。今回の世界は当たりかもしれないわ」

意味深な会話を少年のような声と、少女の声で交わされる。

其処に在る感情は歓喜。遂に待ち望んだ時が訪れたと言うように喜びに二人は溢れていた。

「でも、もう少し待ちましょう。本当に今回が当たりなのか、詳しく見極める必要があるわ」

「分かってるさ。それに偶然だけど、『器』を一つ手に入れる事が出来た」

「だけど、もう一つの……私の『器』には逃げられたわ」

「怒らないでくれよ。あの『器』は何れ手に入れるからさ」

「そう……なら暫らくは待つわ……そう言えば、手に入れた『器』の中身は如何したの？」

「ああ、アレかい。もう一つの『器』を逃した責任を取って貰って、『無限回廊』に放逐したよ。死ぬ事も無く、誰にも見えず、誰にも触れられず、誰にも気づかれない。もう一つの、君の『器』を逃がした罰としては充分だろう？」

「……まあね。それじゃ暫らくは観察しましょう。本当に今回の世界が当たりなのかどうかをね、ヘレア」

「そうだね、セレナ」

二つの存在はこれからの方針を決めると共に、その存在は希薄になっていった。

上下左右。ありとあらゆる感覚が失われたソレは、ただ空間を漂っていた。

前に進んでいるのか、後ろに進んでいるのか、それとも上がっているのか、下がっているのかさえもソレは感じられず果ても見通せない空間を漂っていた。

(……ハハハハハッ……連中が言っていた罰つてこれの事か……確かにこれは辛いな)

自らに起きた事を悟ったソレは乾いた笑い声を上げた。

自身がした事には後悔は無い。最も大切な者を、自身の今の状態にした連中から護り切る事が出来たのだから。

(……シャープシューターは俺の目の前で消えた……きつと皆がやつてくれたんだ……きつと泣いてるだろうな……会えたら流石に叩かれるだろうなあ……何言っているんだろうなあ俺……もう皆には会えないし、触れる事も出来ないのにさ)

触れる事も話す事も、そして認識さえされる事をソレは剥奪された。

もはやその手は何も掴めず、愛しい者を抱き締める事さえ出来なくなっていた。それは何よりも辛い罰。時間の概念が無い空間に永劫に漂い続ける事が、ソレに与えられた罰。このまま自らが崩壊するまで漂い続けるのかと諦めと絶望が心を支配して行く。

しかし、誰にも認識されない筈のソレに近づく影が在った。その影は全長四十メートル以上の大きさを持った巨大な何かだった。自らに近づく影に気がついたソレは、何処と無く見覚えが在る影の姿に目を見開く。

(『紋章機』ツ!?)

第1章 新入隊員（絶対領域の扉編）

1—1

『EDEN』で起きた第二次ヴァル・ファスク大戦から四年の月日が流れ、世界には大きな変化が起きていた。広大に広がる大宇宙。それは一つでは無かった。

宇宙は無数に存在し、互いに交わらないように存在している。

トランスバール暦414年にその事実が判明した後、『EDEN』では首都惑星ジュノーのすぐ近くに巨大な機械的な輪——『クロノゲート』——が発見された。

その後の調査結果の後、『クロノゲート』の先には別の平行宇宙に存在している事が判明したのだ。

そして調査を継続した結果『クロノゲート』の先には宇宙同士を繋ぐ場所が在った。その場所は、『ABSOLUTE』と呼称される虚数空間。其処には数多くの『クロノゲート』だけではなく、巨大施設『セントラルグループ』が存在し、『クロノゲート』を管理するシステムも備わっていた。

それによって他の平行宇宙への行き来も可能となり、こうして宇宙は新たな時代を迎えた。だが、平行宇宙への行き来を可能とする『ABSOLUTE』をもってしても、一

人の女性が最も望む場所へは行く事は出来なかったのだった。

——ジリリリリリッ!!

「……………ん?」

鳴り響く目覚まし音に机の上に頭と体を乗せて眠っていた腰まで届く長い黒髪の女性は目を覚まし、ゆっくりと体を起こしながら机から落ちている目覚まし時計に手を伸ばす。

——カチッ!

「……………また、調べている途中で眠ってしまったんですね」

此処数年ずっと続いて起き方に女性は苦笑を浮かべて、机の上に載っている資料に目を向ける。

どうやら眠りにつく前に調べていた事は終えていたのか、其処には女性が望む結果が記されていた。

「……………やっぱり、先輩方から送られて来た情報をまとめると、この宙域内に現れる可能性が高い……………この辺りにはまだ、海賊が出没すると言う情報も在りますし……………でも、『ノNEUE』での目撃情報も減って来ている……………本当に現れるの?」

女性の顔には隠し切れない不安が浮かんでいた。

今のところ唯一自分が最も望んでいる願いを叶える事が出来る存在が、遠く離れようとしている事を漠然と女性は悟っていた。その存在を知ってから今日に至るまで、女性はずっと追い続けた。だが、幾ら追っても追いつけず、まるで会いたくないと言うようにその存在は女性の前から離れて行く。

胸中に浮かぶ不安と恐怖を振り払うように女性は顔を横に振るい、ゆつくりと立ち上がる。

「……そう言えば今日はフォルテさんが新しい新入隊員を連れて来る日。急いで身嗜みを整えないと！」

今日の予定を思い出した女性は、すぐさま部屋に備わっているバスルームへと移動した。

数年前からは考えられないが、此処数年の間はきちんとしていた女性の生活リズムはかなり崩れていた。調べ物をしていて途中で眠ってしまうのは日常茶飯事。食事をするのも忘れて研究に没頭する事は当たり前。そのせいで倒れた事は何度も在った。

その度に医者からは注意され、女性の先輩達からは怒られた。だが、それでも女性は止まらなかった。止まってしまったら、もう其処で居なくなつた大切な人と永久に会えなくなるような強迫観念を女性は感じているのだ。

バスルームで身嗜みを整えた女性はすぐさま部屋の中に置いてある鑑の前に座り、濡れた髪の毛を整える。整え終えると共に支給された制服を身に纏い部屋から出ようとするが、フツと机の方に振り返って敬礼を行なう。

「烏丸ちとせ。行つて参ります……タクトさん」

そうちとせが敬礼した机の上には、四年前に『E D E N』の首都惑星ジュノー解放パーティーで撮つたドレスを着た恥ずかしそうにしているちとせと、照れくさそうに笑っているタクト・マイヤーズが写つた写真が飾られていたのだった。

漆黒の宇宙の海を移動する巨大な戦艦の艦影が在つた。

全長が1000メートルに達するのでは無いかと思われるその巨大戦艦は、『E D E N』の最新鋭技術によって作り上げられた戦艦『ルクシオール』。『N E U E』宇宙に発見された新しい『紋章機』の運用を担う母艦でも在る。

その最新鋭艦に接近するシャトルの姿が一機在つた。

「ウワア……教官？ アレが噂のルクシオールですか？」

シャトルの窓からルクシオールを目撃した小柄で女性的な優しい顔立ち少年——『カズヤ・シラナミ』は、ルクシオールの大きさに驚きながら横に座っている軍服を纏い、軍

帽を被った赤い髪の女性―『フォルテ・シュトローレン』―に質問した。

そのカズヤの様子にフォルテは苦笑を浮かべながら頷く。

「そうだよ。で、アンタの仕事場さ」

「じゃ、あそこに僕が入隊するエンジェル隊が居るんですね？」

「正確に言えば『ルーンエンジェル隊』さ。『エンジェル隊』って言う『EDDEN』じゃ、あたしらが居た『ムーンエンジェル隊』の事になるからね。『NEUE』でも今のところは『エンジェル隊』の事はあたしらの方になるだろうけど……カズヤ」

「は、はいー」

「良いかい。これからは『エンジェル隊』って言ったら、アンタが配属される『ルーンエンジェル隊』だつて言われるようにしなよ。今のところ、『ルーンエンジェル隊』の知名度なんて、フォルテ・シュトローレンが教習を施した部隊っていう程度だ。だけど、それじゃ駄目だよ。『フォルテ・シュトローレンはルーンエンジェル隊の教官だった』なんて言われる様になりなよ」

「はい！ 分かりました！」

「よし！ 良い返事だよ！ 期待しているからね！」

元気なカズヤの返答にフォルテは緩ませながら、カズヤの頭を撫でた。

カズヤは在る意味特殊過ぎる事情が在って、急遽ムーンエンジェル隊に入隊する事に

なつた初の男性隊員。其処に至るまでの経緯も、本来ならば普通は在り得ないと断言するような経緯なのだが、とある理由でフォルテ達はその経緯が納得出来た。だからこそ、フォルテが直々に鍛え、今は『E D E N』に居るノアが座学を教えたのだ。

この様子ならばルーンエンジェル隊のメンバーとも早く仲良くなれるとフォルテが考えていると、フツとルクシオールに居る人物の顔が脳裏に過ぎつた。

「ああ、そうそう……言い忘れていたけど、ルクシオールにはあたし以外の元ムーンエンジェル隊の隊員が居るんだよ」

「えっ？ 誰ですか？」

「……『烏丸ちとせ』って言う名前の隊員さ。今は『白き月』の技術者で、ルクシオールに派遣されているんだよ……（表向きは）」

ちとせがルクシオールに派遣されている本当の理由を知っているフォルテは、内心で苦い思いを抱く。

四年前に『アナザースペース』から帰還した後から、ちとせは変わった。そうなつた経緯を知っているフォルテは、ちとせが目的を果たすまで止まらない事を嫌と言うほどに理解していた。

（……タクト……今のちとせを見たらアンタは……後悔するかい？ ……もし生きていて帰つて来れたら、そんな時は覚悟しときなよ……あたしら全員でたこ殴りにしてやるか

らね)

フォルテは隣に座っているカズヤに悟られないようにしながら、自らが認めた最高の指揮官だった男に向かって内心で宣言するのだった。

そのままシャトルは何事も無くルクシオールに着艦し、格納庫内に入っていった。

カズヤとフォルテがシャトルから降りると共に、二人を出迎えるように男性と少女がシャトルへと歩いて来た。

男性の方は銀髪で右眼をメカニカルなアイパッチで隠し、厳格そうな雰囲気を出していた。逆に少女の方は優しげな雰囲気を出しているオレンジ色の髪の毛に両側に付いている髪飾りが似合っていた。初めて会う人物達にカズヤは緊張するが、フォルテは親しげに話しかける。

「久しぶりだね、二人とも」

「ああ、久しぶりだな、フォルテ」

「お久しぶりです、フォルテ教官」

フォルテが差し出した右手を男性は握り返し、少女の方は嬉しそうに笑いながら頭を下げた。

男性はゆつくりとカズヤの方に目を向けて、自身の自己紹介を行なう。

「レスター・クールダラスだ。階級は大佐で、このルクシオールの艦長を勤めている。そ

れでこつちが…」

『アプリコット・桜葉』さくらばです。階級は少尉で、この艦に搭載されている『紋章機』RA-001 クロスキャリバー”のパイロットを務めています”

「カズヤ・シラナミ少尉です。 ”RA-000 ブレイブハート” のパイロットとして、ルクシオールに配属されました。よ、宜しくお願いします!!」

緊張で体が固くなりながらも、カズヤはレスターとアプリコットに挨拶を返した。

その姿にレスターは苦笑を浮かべながら、カズヤの肩に手を置く。

「……ポン！」

「そう緊張するな。新米だから緊張するのは分かるが、余り固くなり過ぎたら実戦での戦いに影響が出る。緊張感は適度に持つようにしておけ」

「は、はい！」

「お前が乗る『ブレイブハート』は『ルーンエンジェル隊』にとって重要な機体だ。期待しているぞ」

「はい！ 精一杯頑張らせて貰います！」

「良い返事だ」

カズヤの返事にレスターは満足そうに笑いながら、再びフォルテに顔を向ける。

「それじゃ、レスター。カズヤの事は宜しく頼むよ」

「ああ、存分に扱き使ってやるから安心しておけ」

「ええっ!？」

レスターの発言にカズヤは声を上げた。

その様子にアプリコットは苦笑を浮かべながら近づき、カズヤを安心させるように語り掛ける。

「大丈夫ですよ、シラナミさん。レスターさんは厳しいですけど、優しい人ですから」

「そ、そうなんだ……あれ？」

「どうかしましたか？」

「い、いや……レスターさんって? ……上官をそう言う風に呼んで良いのかなって思ってます?」

「この艦では緊急時以外は今のリコのような接し方で構わん……ハア、と云うか『エンジェル隊』が居る艦だと、一般的な軍の船のような雰囲気では力が発揮出来るのだ」

「まあ、そうだね。あたしらの時もそうだったし」

「こうして『エンジェル隊』の司令官になって良く分かった……アイツは最初からその辺りの事を理解していたんだろうな」

「それ以外にも自分が楽しむ事も在っただろうさねえ」

「おかげで俺がどれだけ苦勞を抱え込まされた事か」

(アイツって? ……一体誰の事だろう?)

レスターとフォルテの間だけで通じている会話にカズヤは疑問を覚えてアプリコットに視線を向ける。

向けられたアプリコットも二人の会話に出て来る人物が分からないのか、困惑したようにカズヤに視線を向けていた。昔話が始まりそんな雰囲気なり始めた事にカズヤとアプリコットがどうしたものかと悩んでいると、足音が近づいて来る。

「遅れてすいません!」

「あつ! ちとせさん!」

嬉しそうなアプリコットの様子に、カズヤは声が聞こえて来た方に顔を向ける。

其処には腰まで届くほどに長い黒髪を赤いリボンで結んだ女性『烏丸ちとせ』が走って来ていた。ちとせはアプリコットとカズヤの前で立ち止まり、荒い息を落ち着かせるように息を吐く。

「ハア、ハア、ハア、ご、ごめんなさい。ちよつと頭に思い浮かんだ方法をノートに書いていたら、時間が経っていて、本当にすいません!」

(この人がフォルテ教官と同じ元『ムーンエンジェル隊』の烏丸ちとせさん! 綺麗な人だな……だけど、何か悲しそうに見えるんだけど)

僅かにちとせが発する雰囲気を感じたカズヤは困惑したように見つめる。

すると、先ほどまで話していたレスターとフォルテの会話がピタリと止まり、フォルテは厳しい眼差しをちとせに向けていた。

「……………」

「お、お久しぶりです、フォルテさん」

「……………また、痩せたね、ちとせ。それに化粧で隠しているけど、顔色もあんまり良くないね?」

「数日前に仕事が終わった後に廊下で倒れていた。幸い心配して後を追っていたココが発見したので大事には至らなかったが、モルデン先生から極度の過労だと診断されたそうだ」

「ク、クールダラス司令」

フォルテに知られたくない事を話されたちとせは、非難するような視線をレスターに向けるが、フォルテは構わずにちとせの腕を掴む。

「ちよつと来な!」

「フオ、フォルテさん!?!」

「こうなっていると思って、少しだけ早めに来たんだよ。レスター、ちよつとちとせを借りるよ?」

「ああ、構わんぞ。その為に今日のちとせの仕事は新入隊員の案内だけにしておいたか

らな。少しばかりフォルテに灸をすえて貰つて来い」

そうレスターは厳しい眼差しをちとせに向けながら告げ、フォルテはちとせを引つ張りながらルクシオール内に消えて行つた。

突然の事態にカズヤは口をポカンと開けて呆然とするが、ちとせの普段の勤務や生活内容を知っているアプリコットは頷いていた。

「ちとせさん。これで自分の体の事を氣遣つてくれたら良いんですけど」

「……難しいだろうな……」

（一体何なんだろう？ この暗い雰囲気は？ 教官の様子も可笑しかったし……ちとせさんには何か在るんだろうか？）

何処と無くしんみりとした雰囲気を感じたカズヤは、事情が分からずに首を傾げる。

それを見咎めたレスターは雰囲気を変えるように首を振るい、次にアプリコットに体を向ける。

「さて、リコ。お前は当初の予定通り、シラナミに艦内を案内してやれ」

「はい、レスターさん」

「それじゃ、俺は仕事に戻る。またな、シラナミ。それと案内が終わつたらブリッジにリコと一緒に来てくれ。渡す物が在るからな」

「は、はい！」

カズヤはレスターに返事を返した。

そのままレスターは格納庫を歩いて行き、残されたカズヤとアプリコットは顔を見合
わせる。

「それじゃ行きましようか、シラナミさん」

「う、うん」

アプリコットの微笑みにカズヤは顔を僅かに赤くしながら頷き、ルクシオールの艦内
に向かって歩き出すのだった。

ルクシオールから少し離れた場所の宙域。

その宙域を航行する一隻の艦艇が進んでいた。その艦艇は『E^エD^デN』が『N^ノE^{エイ}U^ウE』
に來訪する前の代物であり、既に時代遅れの艦艇でしか無かった。

その艦艇を操縦するアラビア風の衣服を着ている赤毛の少女―『アニス・アジート』―
は、注意深くレーダーを見つめていた。そしてレーダーの一点に反応が現れる。

「ーピーコン！ ピコン！」

「よっしゃあ！ 久々の反応だぜ！ ……『E^エD^デN』の連中が來訪して來てからと言う
もの。生活は豊かになっただけれど海賊の奴らも数が減ちまったからなあ。欲しい物も

増えて借金も増えちゃったし、此処いらで稼がねえとな」

アニスはそう呟くと共に艦の操舵を操縦し、レーダーに映った反応が在る方向へと艦を向ける。

「……それにしてもこんな辺境の地方に大型艦の反応が現れるなんて、思っても見なかったぜ。まあ、多分『EDEN』の連中に追い立てられて中央から逃げ出した海賊連中だろうな……相棒の方は今回は使わねえ方が良いか。性能は良いんだけど、やつぱ今の懐事情じゃ使えねえよお」

アニスは艦の操舵を操作しながら、艦の格納庫に収められている自らの愛機の事を考える。

性能に関しては今操っている艦などとは比べ物にならず、『NEUE』に技術提供した『EDEN』にも負けないとアニスは自負している。しかし、如何せんその性能故にアニスの懐の消費は大きい。『EDEN』が来訪する前は海賊狩りで賄っていたが、今は宇宙の治安も安定して来たので海賊の数は極端に減ってしまった。

それはそれで良いのだが、アニスの懐事情にとつては大打撃を食らってしまった。『EDEN』製の艦が出回っている時代にアニスが『NEUE』の旧式の艦に乗っている理由がそれだった。

少しでも懐事情を良くする為にアニスは艦の速度を上げようとする。しかし、フツと

レーダーに目を向けて異常を発見する。

「ん？ ……何だこりゃ？」

アニスが見つめるレーダーには、発見した大型艦の反応以外にも一つの反応が出ている。

其処までならばアニスは驚かない。だが、今出ている反応は何か可笑しかった。明滅を反応は繰り返して、アニスが乗る艦に向かって来ている。敵かと判断してアニスは敵の姿を捉えようと艦に付いているモニターに姿を映し出そうとするが、レーダーに反応が出ているにも関わらずモニターには何も映らなかった。

「……………どうなっついていやがるんだ？」

何も漆黒の宇宙以外に何も映らないモニター画面に、アニスは困惑しながら改めてレーダーに目を向ける。

すると、レーダーには既に艦の目の前までに反応が近づいて来ているが示されていない。にも関わらず何も姿を見つけれられない事にアニスが恐怖を感じた瞬間、先ほどまで確かに在った反応が突如としてレーダーから消失する。

「……………消えやがった……………もしかして今のが…………『ゴースト』なんじゃねえだろうな？」

『ゴースト』。それは『EDEN』が『NEUE』に來訪する少し前から『NEUE』宇宙に現れるようになった存在。当時の『NEUE』宇宙に蔓延っていた宇宙海賊を次々

と撃破し、一般船などを数多く救った存在。

しかし、それだけの功績を残しながらその姿は確認される事が殆ど無く、突然レーダーに反応が現れたり消失する事から何時の頃からか、『幽霊』^{ゴースト}と呼ばれるようになった。唯一『NEUE』の中心惑星であるセルダールで一度だけその姿を確認されたと言う話が出ているが、一般にはその事は伏せられている。まさか、その『ゴースト』に目を付けられたのでは無いかとアニスは震える。

「……こりゃ、一応何か在了った時の為に相棒の用意をしといた方が良いな。『ゴースト』の正体が何のかわからねえけど、相棒なら負ける事はねえ筈だ」

アニスはそう呟きながら、艦を自動操縦に設定して格納庫に仕舞っている愛機の準備を行なう為に格納庫へと急ぐのだった。

『RA-005』を確認…及び同宙域に『RA-001』、『RA-003』、『RA-004』の反応を確認……戦闘の可能性を確認……このまま監視を継続する『うくん。これで『NEUE』に在る『紋章機』は五機確認出来たか。残る一機は何処に在るのかな?」

《不明……現状捜索していないのは、『NEUE』に於いて辺境宇宙域のみ。戦闘終了後、

即時搜索を推奨》

(……いや、悪いんだけど、暫らくはセルダール辺りに居たいんだ：何かキナ臭そうな匂いがするからさあ)

《不許可……本機の目的とは一致せず……本機の乗り手を迎える事で要求の承認を推考する》

(……それはもつと認められない。俺は確かに協力する事を了承したけれど、彼女を巻き込まない事が前提だった筈だ。それが駄目だったら俺を排除して新しい誰かを迎えば良い。出来るならね)

《………推考の結果、要求を承認する》

(……ありがとう……)

本来ならば自らをどうする事も出来る存在が、自らの要求を了承してくれた事を感謝した。

四年ほどの付き合いでは在るが、最初の頃は一方的に相手側は要求だけを述べて来た。其処を何とか上手く立ち回り、自分が望むような方向へと進めるように成れた。元々心理戦には長けていた事が助かった。

更に言えば相手側も今受け入れている相手よりも、新たに受け入れる存在が劣る可能性が在る事を危惧しているからこそ要求を呑んだのだ。

(……………会えないよなあ、やっぱり……………ゴメンよ)

遠く離れた位置に存在するルクシオールへと向かうアニスが乗る艦を、宇宙の闇に紛れながら追跡するのだった。

1—2

アプリコット・桜庭にルクシオール艦内を案内されているカズヤ・シラナミは、内心で案内された場所の数々に驚いていた。

トレーニングルームやシミュレータールーム、ブリーフィングルームなどはともかく、明らかに軍艦には在ると思えないゲーム機器が置かれているレクリエーションラウンジから始まり、宇宙コンビニや銀河展望公園と言った施設がルクシオール内部には配置されていたのだ。

「艦の中に公園まで在るなんて…」

「普通驚きますよね。私も最初に見た時は驚きました」

銀河展望公園へと案内されたカズヤは、噴水やベンチまでも置かれている施設に驚き、青空が浮かんでいる天井を見つめる。青空自体は液晶パネルで造られた人工的なモノだが、それ以外に関しては地上に在るような公園と大差なかった。

「シラナミさんが驚くのは当然ですけど、この艦の元になった『エルシオール』には宇宙クジラが住んでいるクジラルームって言う人工的な海が造られている施設も在るんですよ」

「す、すごいな、それは」

自分が考えていた軍艦のイメージが次々と崩れていく事に内心狼狽しながらも、アプリコットの案内で次は食堂へと向かう。

「此処が食堂です」

「うわあ、広いなあ」

「艦内の殆どの人が食事をしますから……例外が在るとすれば艦長職で忙しくて出前を頼むレストランさんと……ちとせさんぐらいです」

「えっ？　ちとせさんは此処で食事をしないの？」

「……はい……シラナミさんも何れ知る事だから教えておきますけれど……ちとせさんはルクシオールに配属されてからは、ずっと自室で食事を取っているんです」

「そうなんだ……何か理由でも在るの？」

「……すいません。其処からはプライベートの事になりますから……あつ！　料理が美味しくないとかじゃないですよ！　此処の食堂の料理は本当に美味しいんです！　今コックさんを紹介しますね！　ランティさん!!」

（ランティだつて!?!）

聞き覚えの在る名前にカズヤが驚いていると、調理場の方から背が高い緑色の髪の子十歳前後の男性が出て来た。

「おう、リコ。一体どうしたって!? お前は!?」

「ランティイ! ランティイじゃないか!」

「カズヤ!?! 何でお前が此処に居るんだ!?!」

カズヤとランティイは思っても見なかった再会に驚いた。

その様子にアプリコットはカズヤとランティイを見回す。

「あの? お二人ともお知り合いなんですか?」

「うん! 料理学校時代の同期でね! そっか、ランティイが料理を作っているなら桜庭さんの言葉には納得出来るよ! ランティイは料理学校をトップで卒業したからね」

「お菓子部門じゃお前には負けたがな」

「えっ? シラナミさんって、お菓子を作るんですか?」

「ああ、そうだけ、リコ。実際俺もコイツにはお菓子じゃ勝てない。しかし、今日新入隊員が来るって聞いていたが、まさかお前だったとは……いや、ちよつと待てよ? 確か

リコや他のエンジェル隊のメンバーは新しいエンジェル隊員が来るって言うていたが」

「あつ、それ僕の事だよ。今日からエンジェル隊の一員なんだ」

「何イイイイイイイッ!?!」

知らされた事実にはランティイは驚愕した。

ランティイの驚愕の意味が分からないアプリコットとカズヤは首を傾げるが、次の瞬間

にランティイから度肝を抜くような問いが放たれる。

「お、お前……料理学校時代から女顔だとは思っていたが……本当に女だったのか!」

「そ、そんな訳無いだろう! 僕は男だよ!」

「ほ、本当か?」

「本当だよ! 僕が乗る予定の機体はエンジェル隊が乗る『紋章機』の支援機だからエンジェル隊の所属になったんだよ!」

「そ、そうか……そう言う事だったのか……いや、済まねえ。何せ『エンジェル隊』だからなあ。今まで女性隊員しか居なかったのに、男のお前が隊員だって聞いたから驚いちゃまった」

「……まあ、ランティイの言いたい事も分かるよ」

旧エンジェル隊である『ムーンエンジェル隊』も、現在の『ルーンエンジェル隊』も隊員は全て女性だった。其処にカズヤと言う初の男性隊員が入隊するのだから、ランティイは驚きは当然の事だとカズヤも納得出来る。

すると、ランティイは何か別の事に気がついたのか表情を変えてカズヤに接近する。

「あつ! エンジェル隊で初の男性隊員って事は!?! ハーレムじゃねえか!?!」

「えっ?」

「ちくしょう! 俺は食堂で仕事しないと行けないのに、お前はリコやカルーアさん、そ

れにナノナノと楽しくお喋り出来るって事だよな！　こんな風に触れ合う事だって…」

「……ガシッ！」

「ッ!?!」

「あっ!」

興奮して思わずアプリコットの肩に手を置いたランティは、すぐさま何かに気がついたように目を見開く。

しかし、既に時遅く、次の瞬間、ランティは明らかに自らよりも小柄な筈のアプリコットに悲鳴を上げながら投げ飛ばされてしまう。

「いやあああああああああああっ!!」

「……ゴォ!!」

「グエフウ!?!」

投げ飛ばされたランティは床へと激突して苦痛の声を漏らした。

突然の事態にカズヤがポカンと口を開けていると、我に帰ったアプリコットが慌ててランティに駆け寄る。

「ご、ごめんなさい！　ランティさん!!」

「い、いや……今のは急に触った俺が……悪いから気にしないでくれ」

「……えくと？　今のは一体?」

目の前で起きた光景の処理が追いつかないのか、カズヤは困惑しながらアプリコットとランティに質問する。

すると、僅かに顔を暗くしたアプリコットが顔を俯かせながらカズヤに事情を説明する。

「そ、その……実は私、男性恐怖症なんです」

「えっ？ でも、レスターさんや僕、それにランティとは普通に接していたよね」

「……はい、会話をする事は出来るんですけど」

「今の俺みたいに触れたりしたら、投げ飛ばされるって訳だ。リコ、急に触って悪かった」

「い、いえ、此方こそ投げてしまつてすいません」

「……さて、そろそろ仕込みの時間だ……ああ、それとカズヤ」

「ん？ 何だい？」

「暇な時で良いから、デザートを作るの手伝つてくれ」

「？ ……それぐらいなら構わないよ。僕もお菓子は作りたしい」

突然のランティの申し出に驚きながらも、カズヤは了承した。

それに対してランティは何時に無く真剣な顔をしながらカズヤを見つめ、すぐにその顔のまま厨房の方へと歩いて行く。

「そうか……なら、暇な時は頼むぞ……お前のお菓子なら、もしかしたらちとせさんも食べ
てくれるかもしれないからな」

「えっ?」

最後にランティが小声で呟いた言葉が聞き取れず、カズヤは疑問の声を上げるが、ラ
ンティは厨房の中に入って行った。

困惑したようにカズヤはアプリコットに視線を向けるが、向けられたアプリコットは
悲しげに俯いて食堂の出入り口の方に足を向けていた。

「まだ、案内していない場所がありますから、行きましょう。次は医務室を案内しま
すね」

「あつ、うん……(何だろう? さつき少し見えたランティの顔……何か悔しそうに見えた
……それに桜庭さんも悲しそうに見えるし……一体何なんだろう?)」

自分が分からない艦内事情に疑問を覚えながらも、カズヤはアプリコットの案内で艦
内を歩いて行く。

そして次の行き先の医務室に辿り着く。医務室の中には丸い眼鏡を掛けたレスター
よりも年上の落ち着いた雰囲気を持つている白衣を着た男性と、その男性の手伝いをし
ていると思わしき、腰から白くて長い尻尾のようなモノを伸ばし、猫のように細長い瞳
孔の瞳を持った水色の髪の少女が居た。

二人は入って来たアプリコットとカズヤに気がついて顔を向ける。

「あつ！ リコたん！」

「おやおや、これは桜葉さん。何か御用でしょうか？」

「こんにちはナノちゃんにモルデン先生。今は今日からエンジェル隊に入隊する事になるカズヤ・シラナミさんの案内しているんです。シラナミさん、此方の男性の方がルクシオールの医務官の『モルデン・ベークル』先生です」

「初めまして、『モルデン・ベークル』と言います」

「ど、どうも…カズヤ・シラナミです。宜しくお願いします！」

「元気があつて良いですね」

カズヤの元気な自己紹介にモルデンは微笑んだ。

次にリコはモルデンの横に居る少女を手で示し、カズヤに紹介する。

「そして此方の女の子が、私と同じ『ルーンエンジェル隊』所属で『RA-003 ファーストエイダー』のパイロットを務めている」

『『ナノナノ・プディング』と言うのだ！ RA-003 ファーストエイダー』のパイロットなのだ」

「僕の名前はカズヤ・シラナミ。今日から宜しくね」

「宜しくなのだ！ ……カズヤって呼んでいいのだ？」

「うん。構わないよ」

「それじゃ、ナノナノの事はナノナノって呼んで良いのだ！」

「ありがとう、ナノナノ」

ナノナノの言葉にカズヤは微笑みながら頷き、モルデンとアプリコットはその様子を微笑ましそうに見つめていた。

「早くも打ち解けたようですね」

「見たいですね……そう言えばナノちゃんは どうして此処に？」

「少し医務室の備品のチェックを手伝って貰っていたんです……少々栄養剤が不足がちになってきましてね」

「あつ！ それじゃ後で倉庫から出しておきますね」

「お願いします」

アプリコットの申し出にモルデンは笑みを浮かべながら頷いた。

その間にナノナノはカズヤに質問を繰り返して行なっていた。

「カズヤは、一人で此処に来たのだ？」

「いや、一人じゃないよ。フォルテ教官と一緒に来たんだ」

「フォルテ先生が来ているのだ!？」

カズヤの報告にナノナノは嬉しそうに微笑んだ。

フォルテはカズヤだけではなく、アプリコットやナノナノ、そしてこの場には居ないもう一人の隊員もフォルテの教導を受けて慕っている。その相手が居る事実にはナノナノは目を輝かせる。

「うん。まだ、ルクシオールに居ると思うよ。ちとせさんを引っ張っていったから」
「……ゾクッ！」

「……そうですか、フォルテさんがちとせさんを」
「えっ？ 何この雰囲気？」

ちとせの名前が出ると同時に変わった医務室の雰囲気にカズヤは困惑した。先ほどまで和やかにアプリコットと話していたモルデンは真剣な顔になり、ナノナノも何処と無く雰囲気を変えていた。

「……ちとせ……これで少しは無茶を止めてくれると良いのだ」

「そうですね。もう少し自分の体を気遣って欲しいものです。事情は分かっています。それでも無茶は体にはいけません」

「……え〜と？ もしかしてちとせさんって、問題児か何か何でしょうか？」

「……シラナミ君もすぐに分かるでしょうから言っておきますが、彼女の事は注意深く見ていて欲しいのです」

「……この前も廊下に倒れていたのだ。ココがすぐに見つけてくれたから良かったけ

ど……もう何度もちとせは倒れているのだ」

「ええっ!? 何度もちとせさんは倒れているんですか!? もしかしてちとせさんって何かの病氣を持っているんですか!?!」

「病氣と言えば病氣です。ただ彼女の場合は……精神的なものでして……治療法が無いのです」

「精神的?」

「そうです。だから、シラナミ君」

「は、はい!」

「ちとせさんには注意を払っていて下さい。彼女は今、本当にギリギリの瀬戸際に居るんです……いえ、自ら其処に立っていると言うべきでしょう」

モルデンは沈痛な顔をしながらカズヤに告げた。

其処には何も出来ない自分に対する苛立ちも宿っている。カズヤは困惑しながらも領き、アプリコットとナノナノと共に医務室から退出した。

「それじゃあ、最後にティーラウンジに行きましょう」

「ティーラウンジって……まさか?」

「はい、喫茶店の事です」

「可愛いウエイトレスさんも居るのだ!」

「……もう何がこの艦の中に在っても驚けない」

自らが持つ軍艦のイメージが完全に破壊された事に項垂れながら、カズヤはアプリコットとナノナノと共にティーラウンジへと向かい出す。

すると、ティーラウンジに辿り着く前の少し離れた通路の場所で困ったように立ち止まっているエンジェル隊の制服を着た金髪の女性が、すぐ傍の空中に猫の頭部のような形をした生物を浮かばせながらティーラウンジの方を覗いていた。その後ろ姿を見たリコは女性に声を掛ける。

「あつ！ カルルーアさん!!」

「カルルーアなのだ！」

「ツ!? ……リコちゃんにナノちゃん…いきなり背後から声を掛けられて驚きましたわ」

金髪の女性―『カルルーア・マジヨラム』―は知っている二人の姿に安堵の息を漏らした。

何か何時もと違う様子のカルルーアにアプリコットとナノナノは疑問を覚えながらも、カルルーアにカズヤを紹介する。

「カルルーアさん。此方の男性の方が今日からエンジェル隊に入隊する事になった」

「カズヤ・シラナミです。宜しくお願ひします」

「ご丁寧にも…私は『カルルーア・マジヨラム』と申します。RA-004 スペル

キャスター」のパイロットを務めています。それでこっちが…」

「あちしの名前は『ミモレット』と言うですに！」

「うわっ！　ぬいぐるみが喋った!?!」

カルーアの横に浮かんでいた猫の頭部の様なぬいぐるみだと思っていた物が喋った事に、カズヤは驚愕した。

その様子にミモレットは怒りで顔を染めて、カズヤに食って掛かる。

「ぬいぐるみじゃないですに！　あちしは魔女であるカルーア様の使い魔ですに！」

「ええっ！　カルーアさんって魔女なの!?!」

「私の事はカルーアと呼んで構いませんわ。代わりに私はカズヤさんって呼ばせて貰います」

「あつ、はい…それでカルーアが魔女って言うのは？」

「本当の事ですわ」

「しかも、カルーア様は『魔法惑星マジック』で12人しかいない公認A級魔女なのですに！」

『魔法惑星マジック』。『NEUE』に於いてセルダールと並ぶ惑星の一つであり、『魔法』と言う『科学』とは違う文明が発達している。カルーアはそのマジックに於いても惑星内で12人しかいない公認A級魔女だった。

カズヤも魔女の存在は知っていたが、まさか目の前に居るカルーアが魔女だと知り、驚きと興奮を覚えた。そのままカズヤはカルーアと話しようとするが、その前にアプリコットが疑問に覚えた事をカルーアに質問する。

「そう言えばカルーアさん？ どうしてこんな所に居るんですか？ ティーラウンジの方を見ていましたけれど」

「そ、それは…」

「見ればわかるですに……今ティーラウンジでは大変な事が起きているんですに」

「大変な事？」

ミモレットの言葉にカズヤ、アプリコット、ナノナノはティーラウンジの方を覗く。

其処にはティーラウンジの中で互いに向かい合うように座りながら、ちとせに説教を行なっているフォルテの姿が在った。離れている事とピロティの入り口の扉が閉まっているおかげで聞こえずに済んでいるが、フォルテの説教は見ていただけで凄まじいと分かった。現に説教されているちとせは体を縮こまらせ、自らが説教されていないにも関わらずウエイトレスらしき少女は涙目だった。

カズヤ、アプリコット、ナノナノはフォルテの姿に思わず体を震わせ、カルーアとミモレットは同感だと言うように頷く。

「先ほどからずつとあの様子ですの〜」

「カルーア様とお茶をしに来た時には、あの状況でしたに」

「つてことは、僕らと別れてから教官はティーラウンジにちとせさんを連れて来たのか」
「其処からずつとちとせさんに説教しているようですね」

「フォルテ先生が怖いのだ」

それぞれちとせに説教しているフォルテに怯えて顔を見合わせていると、ティーラウンジの入り口が開きちとせが出て来た。

余程フォルテの説教がきつかったのか、ちとせはフラフラと体を揺らしながらコンビニが在る方向へと歩いて行く。カズヤ達はそのちとせの姿に合掌すると共に、ティーラウンジの中へと入る。

「い、いらつしやいませー！」

入つて来たカズヤ達に涙目のウエイトレスが挨拶して来た。

その姿にアプリコットは哀れみも覚えながらもウエイトレスに話し掛ける。

「こ、こんにちは『メルバ』さん。た、大変だったみたいですね」

「ええ、まあ…本当に凄く怒りようでしたから」

ウエイトレスの少女『メルバ・ブラウニー』は憔悴した顔で頷いた。

その様子にかズヤ達が哀れみを覚えていると、フォルテがかズヤ達に気がつく。

「カズヤ達じゃ無いか。ルクシオール案内は終わったのかい？」

「此処で最後ですよ、教官。後はブリッジに行くだけです」

「そうかい……まあ、あんた等も座りなよ。カズヤの『エンジェル隊』入隊祝いだ。好きなもん頼みな。あたしの奢りだよ」

「ありがとうございます！ 教官！」

「フォルテさん！ ありがとうございます！」

「ありがとうなのだ！ フォルテ先生！」

「どうも、頂かせていただきます」

カズヤ達はそれぞれフォルテに感謝を告げながら椅子に座り、注文をメルバに頼んだ。

フォルテも追加のコーヒーを頼むと、ゆっくりとカズヤ達の顔を見回す。

「カズヤ。どうだった、ルクシオールは？」

「……軍艦だとは思えない施設が沢山あって驚きっぱなしでしたよ」

「ハハハハハッ、まあ、確かにそうだね……それで他の『ルーンエンジェル隊』のメンバーには全員会ったのかい？」

「えっ？ まだ、他にも居るんですか？ てつきり、此処に居る桜庭さん、ナノナノ、それにカルーアだけだと思っていたんですけど？」

「ああ、もう一人居るんだよ。カルーア」

「はい〜」

「紹介してやりなよ」

「分かりました〜。ミモレットちゃん。お願いします〜」

「任せるでしに!」

カルーアの呼びかけにミモレットは力み出す。

カズヤは一体何が起こるのかと見つめていると、ミモレットの口から茶色いものを吐き出された。出て来たのが市販されているチョコレートボンボンだとカズヤが認識すると同時に、慣れた様子でカルーアは口を含む。

次の瞬間、カルーアの体が緑色の光に包まれ、下からまるで風が吹いているように髪と洋服が風になびいた。すると、きちんと着ていた制服の上着の前のボタンがすべて外れ、羽織のような格好になり、服の上からでもわかつた豊満な胸元の谷間が見えるように強調される。更に変化は続き、カルーアの輝くの様な金髪が紫色に変わって行き、目が若干つり上がる。

明らかにカルーアが別人へと変わった事にカズヤが啞然としてみると、カルーアだった人物がフレンドリーに話し掛けて来る。

「ハア〜イ、シラナミ。アンタの事はあの娘を通じて見ていたわ。アタシはテキーラ。

『テキーラ・マジヨラム』よ。宜しくね」

「え、ええー!!」

魔法については常識的な知識しかないカズヤは、先ほどまでカルーアだったテキーラと名乗る女性に動揺を禁じ得なかった。

その様子にアプリコットは苦笑しながら、狼狽しているカズヤに事情を説明する。

「シラナミさん、カルーアさんとテキーラさんは二重人格なんです。意識と同時に体も入れ替わっちゃうんですよ」

「そう言う事。カルーアは魔法の実験を中心にやっているけど、私は実践、使う方をメインにしているわ。ついでに荒事もアタシ担当。『紋章機』で戦う時はアタシだから、合体する時は宜しくね」

「そ、そうなんだ。よろしくね。テキーラ」

いきなり目の前で起きた超常現象に思考が追いつかないながらも、カズヤは挨拶を返した。

その姿にテキーラは何か悪戯を思いついたような顔をしながらカズヤに接近して、手袋越しにカズヤの顎を触る。

「ふーん……シラナミ、アンタ結構可愛い顔してるじゃない?」

「え、ええっ!?!」

美しい美女に迫られたカズヤは更に狼狽し、近くに在るテキーラの胸元の谷間や白い

肌に視線が移ってしまう。すると、アプリコットがテキーラとカズヤの間に割り込んで来る。

「だ、ダメですテキーラさん!! シラナミさんが困っています!! 離れて下さい!」

「あら、そうかしら? 私の胸元に視線が向いていたし、案外こういうのが好きだったりして?」

「シラナミさんはそんな人じゃありません!!」

確実にからかっているテキーラに対してリコは力強く宣言した。

からかわれた本人であるカズヤはどうすれば良いのかと視線を彷徨わせる。その様子を見咎めたフォルテがテキーラに注意する。

「その辺にしておきな、テキーラ」

「はくい。お久しぶりですね、フォルテ先生」

「そうだね。直接会うのは確かに久しぶりだ」

「それで、烏丸の方はどうなんです?」

「しつかり叱ってやったよ。出て行った時にコンビニの方に歩いて行っただろう? あ

れは食事を買に行っただよ。何事も無ければ、そのまま自室に戻って食事を食べべ終えると共に寝っちまうだろうさ」

「流石フォルテ先生! あの烏丸を休ませるなんて並大抵の事じゃ出来ませんよ!」

フォルテの手腕をテキーラは笑みを浮かべながら絶賛した。

ただ叱っていただけではなく、フォルテは叱り終わつた後のちとせの行動を誘導したのだ。ただでさえ疲弊しているところにフォルテの大説教でちとせの精神は更に疲弊した。其処で自室で食事を取れば、ちとせは深い眠りにつく。

其処まで見越して説教を行なつたフォルテに、アプリコット、テキーラ、ナノナノは尊敬の眼差しを向ける。

「……あの〜」

「ん？ 何だい、カズヤ？」

「…艦内を見回っている時から気になつたんですけど、ちとせさんには何か在るんですか？」

「……あの子はね。無くしたんだよ。自分を支えてくれた翼を」

「えっ？」

フォルテの言葉にカズヤが意味が分からないと言うような声を上げるが、他の面々は僅かに顔を暗くした。先ほどまでカズヤやアプリコットをからかっていたテキーラも静かになり、フォルテはゆっくりと真剣な眼差しをカズヤに向ける。

「……ちとせが元『ムーンエンジェル隊』の一員だつてのは教えたね」

「はい」

「入隊した頃のちとせは今のアンタよりも『エンジェル隊』の雰囲気困惑していたんだよ。『トランスバール皇国最強の部隊ムーンエンジェル隊』。あの子は憧れながら『ムーンエンジェル隊』に入った。だけど、自分の理想と現実の違いに悩んでいた。当時のちとせは真面目で柔軟さがあんまりなかったからね。それを良い方向に向かわせたのが、当時のあたしらの司令官『タクト・マイヤーズ』だ」

「あつ！ 知ってますよ！ 確か『トランスバール皇国の英雄』って呼ばれている人ですよね？」

「……まあね。タクトはちとせを支えて『エンジェル隊』に溶け込ませた。おかげでちとせはあたしらと馴染んで『ムーンエンジェル隊』のエースにまでなった」

「エース!? ちとせさんが!？」

「そう。だけどね。今のちとせは『エンジェル隊』に入隊した頃のちとせに戻っている。いや、もしかしたらもつと悪いかもしれない。自分を支えてくれた翼が無くなった事は、其処まで響いて居るんだよ」

（支えてくれた翼? あつ！ そう言えば『タクト・マイヤーズ』さんって……殉職したって話が）

『EDEN』での出来事を少なからず知っているカズヤは、フォルテが言いたい事をおぼろげに理解した。

「……暗い話をしたね。さて、私はそろそろセルダールに戻らないと行けないから失礼するよ」

「フォルテ先生。帰っちゃうのだけ？」

「悪いね、ナノナノ。今度会った時に遊んでやるからさ」

「約束なのだ！」

「ああ、約束だ。んじゃ、会計はしておくから。またね」

フォルテは右手を上げながら別れの挨拶を終えると、会計を済ませてピロティから出て行った。

残された四人とミモレットは暗い雰囲気を晴らそうとするかのようにそれぞれの身の上話をしながら、注文した品々を食べたり飲んだりして談笑した。

三十分後、カズヤとアプリコットは、ピロティでテキーラとナノナノと分かれた後、ブリッジを目指していた。『エルシオール』と違い、『ルクシオール』には直通エレベーターが存在しているので移動は簡単だった。

カズヤがブリッジ内部に足を踏み入れてみると、其処には10名ほどのクルーがそれぞれ仕事をこなしていた。そして中心に在る艦長席にレスターが座っており、モニター画面に映っている人物と通信を行っていた。

『それじゃ、今の任務を終えた後に『セントラルグロウブ』に帰還して頂戴。アレ』の

微調整の為の試運転をしたいから」

「了解した。本艦は任務終了後に『セントラルグロウブ』に帰還する」
『宜しくね』

ーローブウン！

(今のはノアさん?)

通信が切れる前にモニターに映っていた見覚えの在る人物の姿に、カズヤは僅かに驚きながらもアプリコットと共にレスターに近寄る。

「カズヤ・シラナミ！ 只今参りました！」

「おお、シラナミか。リコ、艦の案内は終わったのか？」

「はい、レスターさん」

カズヤとアプリコットが来た事に気がついたレスターは二人に体を向けた。

「シラナミ。此処がブリッジだ。何か在れば此処かブリーフィングルームに呼ぶから、良く覚えておけよ」

「はいー！」

「それと渡す物だが……ココ。頼んでおいた物を持って来てくれ！」

「はい、司令」

レスターの呼びかけに茶色の髪を結んだ眼鏡を掛けた女性がオペレーター席から立ち

上がり、レスターの横に移動した。

「彼女はルクシオールでのチーフオペレーターを務めている女性だ」

『ココ・ナツツミルク』よ。階級は大尉でこのブリッジのチーフオペレーターをしているの。宜しくね、カズヤ君！」

「はい、此方こそ宜しくお願いします！」

「元氣な返事ね。それに真面目そうだし」

「ああ、『エンジェル隊』にしては珍しいまともな奴だ。心が洗われるようだ」

(ええー!!)

ココとレスターの評価に内心でカズヤは叫ぶが、横に居るアプリコットは苦笑を浮かべていた。

何せ『エンジェル隊』は昔も今も破天荒なメンバーが多い。昔の『エンジェル隊』に苦勞させられたレスターからすれば、カズヤの真面目さは嬉しい事だった。

「その真面目さを貫けよ、カズヤ」

「は、はあ」

「フツ、さてココ」

「はい……カズヤ君。これを渡しておくわね。貴方の部屋のカードキーよ」

ココはカズヤに手に持っていたカードキーを手渡した。

渡されたカズヤはカードキーを両手で持ちながら見つめ、ココが説明する。

「まだ、暗号は登録していないから、決まったら連絡して頂戴。それと無くさないようにね」

「は、はい！　ありがとうございます！」

「それじゃ、此処での用は終わりだ。一度自分の部屋を確認して来い」

「分かりました」

「リコも案内ご苦労だったな」

「いえ、シラナミさんとお話出来て楽しかったですから」

レスターの労いにアプリコットは平然としながら答えた。

その様子にレスターの横に居たココは僅かに目を丸くするが、すぐさま表情を戻して自身のオペレーター席に戻ろうとする。レスターも艦長席に座り直し、カズヤとアプリコットは退出しようとする。

だが、二人の退出を遮るようにブリッジ内部に警報音が鳴り響く。

「ービーイイイッ！　ビーイイイッ！」

突然の警報音にブリッジ内部は騒然となり、退出しようとしていたカズヤとアプリコットは慌てて振り返る。

「何事だ!？」

「所属不明の艦が一隻、本艦に接近して来ます！」

「所属不明だと？ モニターに映せるか？」

「はい。メインモニターに映します」

ローブウン！

レスターの指示に従って男性オペレーターが操作すると共にメインモニターにルクシオールに接近する艦影が映し出された。メインモニターに映る艦をレスターは注意深く観察する。

「……旧式の『NEUE』製の武装艦だな」

「はい。幾つか武装が追加されていますが、データの照合の結果、間違いなく『NEUE』製の武装艦です。スキヤンの方でもこれと言った違いは見受けられません」

「こんな辺境に武装艦……海賊の可能性が高いか」

顎に手をやりながらレスターは武装艦の正体を推測する。

セルダールを中心に『EDEN』軍が介入するようになってからは、来訪前に『NEUE』の宇宙中に居た海賊達は次々と捕縛された。しかし、なかには辺境に運よく逃げ延びる事が出来た海賊も居る。

今接近している武装艦はその類だとレスターは推測すると共に、すぐさまブリッジ内部に指示を出す。

「総員！ 第二戦闘配備だ！」

「了解！ ブリッジより各施設に通達！ 本艦はこれより第二戦闘配備に入ります！
これは訓練ではありません！ 繰り返しします。本艦は第二戦闘配備に入ります！」

ココはレスターの指示に従って警報を発しながら艦内放送を行なった。

カズヤとアプリコットは戦闘になるかもしれないと考えてレスターの傍に近寄る。

「司令！ 僕達は如何すれば良いんですか!？」

「まあ、待て。先ずは相手と通信出来るかどうかを確かめてからだ。お前達は此処で暫らく待機していてくれ」

『はい！』

慎重論を告げるレスターにカズヤとアプリコットは頷いた。

レスターは通信士に接近して来る武装艦との通信が行なえるかどうか確かめるように指示を出す。同時にブリッジの扉が開き、慌てた様子のちとせが入って来た。

「ちとせ！」

「烏丸ちとせ！ 只今到着しました！ 一体何が在ったんですか!？」

「ちとせか……今所属不明の武装艦がルクシオールに接近して来ている。見たところ海賊の可能性が高い。戦闘になるかもしれないから、お前も席に着け」

「はい！ クールダラス司令！」

ちとせはレスターに返答すると共に、開いていたオペレーター席に座ってコンソールを操作し出す。

カズヤがそのちとせの背を見つめていると、横に立っていたアプリコットが説明する。

「ちとせさんはブリッジでは解析や探索を行なうのが仕事なんです」

「そうなんだ」

「顔色も良さそうですし、きつとフォルテ先生の言葉が効いたんですよ」

アプリコットは安堵の息を漏らしながら、流れるような動きでコンソールを操作しているちとせの横顔を見つめる。

すると、接近して来ている武装艦と通信を試みていた通信士がレスターに慌てて顔を向ける。

「武装艦と通信繋がりました！ メインモニターに映します！」

「ブーン！」

レスター達の視線がメインモニターに移ると共に、モニターに気の強そうな雰囲気を感じている赤い髪の少女『アニス・アジート』が映し出された。

『おっ！ 漸く通信が通じる距離になったみてえだな！ やい、お前ら！ すぐに降伏して積んでいる荷物を渡しやがれ！ そうすりゃ、痛い目をみずに済むぜ！』

「……此方は『E D E N』軍所属の艦、ルクシオールだ」

アニスの物言いに内心で苛立ちを感じながらも、それを億尾にも出さずにレスターは自らの所属を教えた。

軍の艦艇だと分かればアニスの物言いも変わるだろうとレスターは考えたのだ。泡行く場は戦闘にならずに投降するかもしれない。しかし、レスターの考えを否定するようアニスがモニター内で叫ぶ。

『へっ！　嘘つくならもつとマシな嘘をつくんだな！　こんな辺境に『E D E N』軍が出張って来るかよ！』

「当艦は試験運行と『N E U E』の調査任務を行なっているのだ」

『ああ、はいはい。最もらしい話はもう良いぜ……それよりも、さっさと降伏してくれよお。こつちも遊んでいる暇はねえんだから』

(ん?)

アニスの言い方に引つ掛かりを感じたレスターは、左目を細めてアニスを観察する。

平然とした顔をしているが、良く見ればアニスの頬には僅かに汗が流れていた。更に良く見てみれば、通信を繋いでいるレスター達以外にも気になる事が在るのか、視線を何度も横に彷徨わせている。

「(……何かを焦っている？　一体何をだ?)……聞くが、何を怯えているんだ？　今更

俺達に喧嘩を仕掛けた事を後悔しているのか？」

『ば、馬鹿！ テメエら何かに怯えかつよ！』『ゴースト』じゃ在るまいし、見えているお前ら何かに怯え…』

『『ゴースト』だど!?』

(ええっ！ 『ゴースト』だどど!?)

聞き覚えの在る通称にレスターとカズヤは驚き、アプリコット、ココ、そして他のブリッジメンバーも驚愕した。

アニスから詳しい話を聞こうとレスターは口を開けようとするが、その前にオペレーター席に座っていたちとせがコンソールに両手を叩きつけながら叫ぶ。

ーバン!!

「何処で『ゴースト』に出会ったの!? 今すぐ答えて!」

(ちとせさん!)

何らかの執念が籠もっているような叫びと、必死さに溢れたちとせの形相にカズヤは目を瞬かせた。

メインモニターに映っているアニスもちとせの気迫に圧されて体を震わせていた。しかし、すぐさまアニスは我に返って、自らが圧された事実を怒りを覚えたのか、顔を赤くしながら叫ぶ。

『うつせえ！ 何で俺がテメエらの質問に答えねえと行けねえんだ！ ……もう良い！ 力尽くで荷物は頂くから、覚悟しやがれ！』

「待って！ まだ話が!？」

「ブーン！」

質問に答えて貰おうとちとせは言い募ろうとしたが、無情にもメインモニターの画面は消えた。

その事実がちとせは顔を俯かせ、訳が分からないカズヤは視線を彷徨わせる。レスターは悔しそうにしているちとせの背に視線を向けながらも、ブリッジ全体に指示を出す。

「武装艦が攻撃して来るぞ！ シールドを張れ！ ココ！ 『エンジェル隊』全員を至急ブリーフィングルームに集合させろ！」

「分かりました！」

「ちとせ！ お前は周辺の索敵に入念にやるんだ！ 僅かな反応も見過ごさな！」

「……了解しました」

レスターの指示がちとせは顔を俯かせながら険しい声で答えると共に、オペレーター席に座り直す。

そのままちとせはコンソールを操作して自らの周りに展開されているモニターを注

意深く見つめる。其処には、ほんの僅かな反応も見過ぎさないと言う気迫が宿っていた。

ちとせの気迫を感じながら、レスターはカズヤとアプリコットの傍に駆け寄る。

「カズヤ、リコ！　すぐにブリーフィングルームに移動だ！　敵の有効射程までまだ距離が在るとは言え、ボサツとしている暇は無いぞ！」

『りよ、了解!!』

先ほどのちとせの気迫の籠もった叫びに負けまいぐらいの歴戦の戦士の風格を宿しているレスターに、カズヤとアプリコットは返事を返し、三人はブリーフィングルームへと急ぐのだった。

1—3

ブリーフィングルーム。円の形を描くように机の形に座席がそれぞれ置かれ、中央部に液晶モニターが映る作戦立案室。

その場所にブリッジから移動して来たレスター、カズヤ、アプリコット、そして艦内放送で呼ばれたテキーラとナノナノが集合していた。全員が集まった事を確認したレスターは頷くと共にコンソールを操作して液晶モニターを展開する。

「作戦を説明する。目標は当艦に接近して来る旧式型の武装艦一隻だ。今のところレーダーに何の反応も見えないところから、敵はこの一隻だけだと推測される」

レスターが説明すると共に液晶モニターにアニスが乗る武装艦が映し出され、カズヤ達はそれぞれ確認する。

「今回の任務は『敵艦拿捕』だ。どんな理由が在れ、相手は軍艦である、ルクシオールに攻撃しようとしている。此れを見逃す訳には行かない。よって、敵艦の武装と推進装置を全て破壊する事に重点をおいてくれ」

『はいー』

「また、この敵艦への攻撃だが、カズヤとリコの二人で頼む。『クロスキャリバー』と『ブ

レイブハート』を合体させて早急に無力化を行なってくれ」

「分かりました！」

「はい！」

カズヤとアプリコットはレスターの指示に迷う事無く頷き、満足そうにレスターは頷く。

そんな中、呼ばれたにも関わらず具体的な任務を言い渡されていないテキーラとナノは困惑し、レスターに視線を向けていた。二人の視線にレスターは気がつき、向き直って二人に指示を出す。

「テキーラとナノナノは、カズヤとリコのバックアップを頼む。ナノナノは敵艦への攻撃は控えてカズヤとリコの支援に集中してくれ」

「了解なのだ！」

「テキーラはルクシオールの護衛を行ないながら、周辺索敵を頼む。伏兵も考えられるからな。僅かな反応も見逃すな」

「ハァーイ！ でも、司令官さん。随分を慎重なのね？ 相手は旧式の武装艦一隻だけの海賊でしょう？ 何でシラナミと桜庭だけの出撃じゃないの？ 合体した『紋章機』一機だけで充分だと思っただけ？」

「……『ゴースト』が近くに居る可能性がある」

「フェツ!?!」

「ちよつ! それマジ!?!」

伝えられた事実になのなのとテキーラは驚愕し、カズヤとアブリコツトに視線を向けると、二人は頷く。

その様子に事実なのだと悟ったテキーラは、ゆっくりと顎に手をやりながらレスターに向かって口を開く。

「…なるほどね。確かに『ゴースト』が居るかも知れないなら、この布陣も納得だわ」
「絶対に『ゴースト』を見つけるのだ!」

（何だろう? 今の二人の言葉……まるで最初から『ゴースト』を探していたみたいなきい方だったけれど）

カズヤはテキーラとなのなの言い方に疑問を覚えて首を傾げた。

『NEUE 《ノイエ》』に於いて『ゴースト』は有名な存在。にも関わらず、その姿が殆ど確認されていない事から様々な憶測が飛び交っている。正体不明の有名な存在がすぐ近くに居るかもしれない事は驚くべき事。

現にカズヤ自身も『ゴースト』が近くに居るかも知れないと知らされた時は、僅かに興奮を覚えた。だが、なのなのとテキーラの様子はカズヤとは違い、まるで探していたモノが見つかったような印象を放っていた。困惑したようにカズヤが視線を彷徨わせ

ていると、レスターがカズヤに説明する。

「カズヤ。赴任初日だから説明は控えていたが、実はこのルクシオールが辺境宙域を航行していたのは試験運行だけではなく……『ゴースト』の捕捉も在ったんだ」

「ええっ!? ほ、本当ですか!?!」

「本当ですよ、シラナミさん」

「最新の目撃と言うか、『ゴースト』らしき存在の情報を集めて、この辺りに居るかもしれないから『EDEN』軍の最新鋭艦ルクシオールの試験運行と言う名目も兼ねて捜索していたのよ」

「テキーラの言うとおりだ」

「で、でも!?! 『ゴースト』は『EDEN』軍が来訪する前から『NEUE』で海賊達を退治してくれていたんですよ! その『ゴースト』を捕捉するって、一体どう言う事なんですか!?!」

『EDEN《エデン》』軍が『ゴースト』を追いかける理由が分からず、カズヤは困惑に満ちた顔でレスターに質問した。

「詳しい説明をしている暇は無い。だが、俺達が『ゴースト』を追う理由は、//力を借りたい//からだ」

「力を……ですか?」

「そうだ。『NEUE』出身のお前からすれば、海賊達を退治してくれていた『ゴースト』を追い駆けたくないだろう。だが、どうしても俺達には『ゴースト』を見つけて力を借りたい事情が在るんだ……俺の親友の安否を知る為に」

「えっ?」

小声で僅かに聞こえて来たレスターの最後の方の言葉に、カズヤは呆気に取られたような顔をしてレスターの横顔を見つめる。

其処には何かしらの固い決意を持つていると言うような雰囲気は漂っていた。少なくとも『ゴースト』を追い駆けている理由には、途轍もない事情が在る事だけはカズヤは察する事が出来た。

「…分かりました。もし本当に『ゴースト』が現れたら、司令の指示に従います」

「すまない。事情は後で必ず説明する…それでは、『ルーンエンジェル隊』! 出動せよ!!」

『了解(なのだ)!!』

号令が放たれると共に、カズヤ、アプリコット、テキーラ、ナノナノは、自らの愛機が在る格納庫へと走り出すのだった。

(……うん。やっぱり、戦闘は避けられそうに無いな)

遠く離れた場所に見えるアリスが乗る旧型の武装艦は、真つ直ぐにルクシオールへと向かっていた。

ルクシオールに接近すると共に武装艦のエネルギー反応も上がっている事から、戦闘が行なわれるのは間違いなかった。

(……やっぱり介入する事も考えた方が良いな、此れは……『紋章機』同士が争うのは不味いんだろう?)

《肯定……既に『E^エD^デE^ンN』側の『紋章機』の内、『GA-006』、『GA-007』が使用不可能状態……これ以上の『紋章機』消失は戦力低下に繋がる可能性が高く……本機の目的に影響を及ぼす可能性大。よって、これ以上に『紋章機』消失は認められない》(分かっているさ。だから、俺達は『N^ノE^イE^エE』製の『紋章機』が無事なのか調べていたんだから)

意味深な会話を行ないながら、再び武装艦とルクシオールの方にセンサーを向ける。

すると、ルクシオールの上方部分のハッチが開き、白とオレンジ色の色合いをした『RA-001 クロスキャリバー』と、ライトブルーカラーの両翼の双胴部が目立つ『RA-003 ファーストエイダー』、そしてグリーンの色合いに三つの球体が周りに浮かんでいる『ファーストエイダー』に似ている『RA-004 スペルキャスター』が

ルクシオールから発進した。

それに続くように三機が発進した一から更に上部分のハッチも開き、内部からホワイトカラーの先に発進した『紋章機』三機とは明らかに形状が違う槍の穂先を思わせるような形をした機体―『RA―000 ブレイブハート』―が漆黒の宇宙へと飛び立った。
(ん?) 他の三機の『紋章機』はともかく、最後の機体は何だい?)

《データ照合…『NEUE』製の『紋章機』の支援機『RA―000』》
(支援機?)

《『NEUE』製の『紋章機』と合体を行なう事によって、合体後の『紋章機』の性能を増幅させる事を目的として設計された機体。また、互いのパートナーの親密さが高かった場合、増幅値の幅も上昇》

説明を肯定するように変化が起きた。

先に進んでいたクロスキャリバーを追うようにブレイブハートは後方に移動し、一定の距離に達した瞬間、ブレイブハートは変形を開始した。前に突き出して部分が後方へと移動し、先に進んでいたクロスキャリバーのスラスタの間に挟まり、四本のアームで連結した。

同時にブレイブハートがオレンジ色の光を発し、クロスキャリバーは速度を上げて武装艦へと突き進む。

(うおっ！ 本当に合体した上に変形もした！ ロマンを感じるね)

《…理解不能…》

(…まあ、それはそれとして……三機の『紋章機』の布陣…これは気がつかれているかな？ 俺達が居る事に)

戦闘形態に変形して武装艦に攻撃を開始したクロスキャリバーと、残り二機の『紋章機』の配置を確認し、ルクシオールが潜んでいる自分達に気がついている可能性に気がつく。

明らかに武装艦一隻に対して『紋章機』三機同時出撃は過剰戦力過ぎる。武装艦内部に隠れているもう一機の『紋章機』は起動していないのでルクシオールが感知している可能性は低い。他に考えられるとすれば、伏兵を気にしての配置なのか、それとも武装艦を追って来た此方の存在に気がついているかの二つしか無かった。

《本機は現在、完全ステルスモードを起動中。現在の『E_エD_{デン}』及び『N_ノE_{エイ}U_エ』の技術では、本機の感知は不可能》

(そうとは限らないな。俺達が「最初に現れてからもう四年が経っている」。それに怖い子が『E_エD_{デン}』には居るから、俺達が居る事がバレていても可笑しくない》

《……『紋章機』同士の戦闘を回避し、本機が安全に戦闘区域から退却する為の本機のこれからの行動の指示を要求》

(了解。さてさて、どうしたものかな)

センサーで武装艦がクロスキャリバーの攻撃に、そう長くは絶えられない事を確認しながら、自分達がどう動けば穏便に事を済ます事が出来るのか作戦を練り出すのだった。

「ほう……初陣にしては中々やるな、カズヤは」

メインモニターに映る武装艦とブレイブハートとの合体を終えたクロスキャリバーの戦いぶりに、レスターは僅かに感嘆していた。

普通初陣と成れば緊張や興奮で本来の実力が発揮されない事が多い。これまで海賊退治などで何度もクロスキャリバーに乗っているアプリコットはともかく、今回の戦闘が本当の初実戦であるカズヤの実力は発揮されないとレスターは思っていた。だが、レスターの考えに反するようにカズヤは的確にアプリコットの支援を行ない、敵武装艦の武装を破壊していた。

ブレイブハートと合体したクロスキャリバーは万能型の機体。合体した事によって機動力と攻撃の命中精度が増幅したクロスキャリバーは、武装艦を完全に圧倒していた。しかも、エネルギーの消費は僅かと言うデータを示して。

(選ばれ方はともかく、やはりミルフィューユが選んだ奴と言う事か…だが、俺達の本命はこのままでは現れなさそうだな)

レスターはゆつくりとメインモニターから視線を動かして、戦闘が始まってからずっと自らのオペレーター席に備わっているレーダーを凝視しているちとせの様子を伺う。

時々メインモニターに視線は動いているが、ちとせは殆どコンソールの操作を行ないながらレーダーを見ていた。其処には凄まじい気迫が宿っていて、僅かな戦場の変化も見過ごさないと言意志が見える。ルクシオールの中で最も『ゴースト』の存在を欲しているのはちとせだった。

レスターも『ゴースト』を探しているが、ちとせはそれ以上。寝食を削ってちとせは『ゴースト』を搜索している。今の宙域に『ゴースト』が居るかも知れないと予測したのもちとせだった。その『ゴースト』が近くに潜んでいるかも知れない事実、ちとせの集中力は増していた。

この分ならば例えば伏兵が潜んでいたとしても、ちとせならば発見出来るとレスターが考えている間にクロスキャリバーは武装艦の武装を全て破壊し終えたばかりか、推進装置も破壊して航行不可能な状態にしていた。

『ブレイブハートより、ルクシオールへ！ 目標の沈黙に成功しました！』

「そうか…なら、エンジェル隊はそのまま周囲を警戒に行なってくれ。本艦はこのまま

武装艦に接近し、首謀者を取り押さえ…」

「司令!!」

レスターの言葉を遮るように、突然のココが叫んだ。

その叫びにレスターの顔がココに向けられると共に、驚愕と困惑に満ちた声でココが報告して来る。

「敵武装艦内部から新たなエネルギー反応が出現! しかも、このエネルギー反応のパターンは、ルクシオールに配備されている『紋章機』と一致する部分が見受けられます!!」

「何だと!?!」

ココの報告にレスターが驚愕した瞬間、武装艦の内部からワインレッドカラーのスペルキヤスターに似た形状をしている『RA-005 レリックレイダー』が装甲を突き破って宇宙空間へと飛び出したのだった。

「…嘘」

「…ちよつ、これマジなの!?!」

「…これって、まさか!?!」

『紋章機』なのだ!？」

武装艦から飛び出したレリックレイダーの姿に、カズヤ達は揃って驚愕した。

モニター画面に映っている機体は、明らかに現在の『NEUE《ノイエ》』が保有している技術から造られた機体ではなく、アプリコット達が乗るクロスキャリバーと同じ『NEUE《ノイエ》製の紋章機』。まさか、海賊行為を行なっている少女が『紋章機』を保有していると思つてなかった。想定外の事態にレリックレイダーから一番近いに居るクロスキャリバーに乗っているアプリコットとカズヤの行動が一瞬完全に止まってしまう。

その隙をレリックレイダーに乗っているアニスは見逃さなかった。

『ダメエラー！ 良くも俺様の船をぶち壊してくれたな!! もう手加減はしねえ！ 纏めて吹っ飛ばしてやるぜ!!』

全周囲で通信波がレリックレイダーから発せられると共に、レリックレイダーの双胴部が回転して、真ん中辺りから双胴部が開き、巡航形態から戦闘形態へと変形した。同時にレリックレイダーが白い光が発せられる。

その意味に気がついたのは同じく『紋章機』に乗るアプリコット、ナノナノ、テキィラだった。

『紋章機』は操縦者のテンションのよつて能力が上下する。そして操縦者のテンシヨ

ンが一定レベルに高まると、『紋章機』は強力無比な一撃を放てるようになる。

レリックレイダーの操縦者であるアニスは、自らの船が破壊された事実の怒りによってテンションが一定レベルを超えていた。機体中央下部に備わっている発射管―『グラビティクラスト』―がクロスキャリバーに向けられる。

即座にアプリコットとカズヤは退避しようとするが、一瞬の遅れが仇となり、レリックレイダーのロックから逃れる事は出来なかった。

『ジエノサイド…』

(駄目だ！ 間に合わない！)

完全に回避が遅れてしまった事にカズヤは思わず目を瞑ってしまった。

だが、次の瞬間、レリックレイダーとクロスキャリバーの丁度真ん中辺りを一条の閃光が通り過ぎる。

ーズキュウン!!

『んなあ!?!』

『…えっ?』

突然の予想外の介入にアニス、アプリコット、カズヤは驚いた。

助けようとしていたナノナノとテキーラも、突然の何者かの介入に驚いていた。そしてレリックレイダーに乗っているアニスは、備わっているレーダーに目を向けて気がつ

く。『先ほどまで全く反応が無かったにも関わらず、現れている反応に』。

『まさか!?』『ゴースト』か!?』

アニスの言葉を肯定するように、次の瞬間、レリックレイダーの周りを幾条もの閃光が通り過ぎる。

ーズスキユウン! ズスキユウン! ズスキユウン!!

『この野郎!』

自らに向かつて放たれる閃光にアニスは苛立ちながらも、閃光が放たれている方向に機首を向けるが、其処には漆黒の宇宙空間が広がっているだけで、閃光を放っている機影の姿は無かった。

(クソツツ! やつぱりさつきと同じで姿が捉えられねえ! しかもこの攻撃、明らかに手加減してやがる!!)

アニスは熱くなり易いが、相手の技量を見抜けない訳ではない。寧ろ高い洞察力を持つている。

だからこそ、今レリックレイダーに向かつて放たれている攻撃が、レリックレイダーを撃墜する為ではなく動きを封じる為のモノだと悟っていた。

(クツツ! 見えねえ『ゴースト』だけじゃなくて、さつきまで戦っていた連中も動揺が治まる頃だ……悔しいが、此処は逃げるしかねえな!)

自らの圧倒的な不利を悟ったアニスの行動は素早かった。

瞬時にレリッククレイダーの機首を反転させて、そのまま全速力で戦場から退避する。

『ちくしょー!!! 次に会ったらお前ら覚えとけよお!!! この借りは必ず返すからな!!!』

小物チックな捨て台詞と共に、レリッククレイダーは戦場から去って行った。

カズヤ達は呆然とレリッククレイダーを見つめるが、すぐにハツとなつて先ほどもで攻撃が放たれていた方向に目を向ける。しかし、其処にはやはり漆黒の宇宙空間が広がっているだけで、攻撃の主の姿は無かった。更には一瞬前までは確かに在ったレーダーの反応さえも完全に消えている。

『ゴースト』と言う通称どおり、まるで幽霊にでも在ったかのような印象をカズヤ達が感じていると、ルクシオールから多数のミサイルが一斉に閃光が在った方向に向かって発射される。

oooooooooooooooooooooooooooo!!!

『クロスキャリバー、合体を解除! テキーラー!』

「了解よ!」

通信機から聞こえて来たレスターの指示に、ルクシオールの傍で待機していたスペルキャスターがクロスキャリバーの方へと急発進した。

それに気がついたアプリコットとカズヤはレスターの指示に従って合体を解除する。同時に放たれたミサイルが次々に爆発し、広範囲にピンク色に輝く液体のような物が四散した。その一部が何かに掛かったかのように空間に張り付く。

「……ペチャツ！」

『カズヤ！ すぐにスペルキャスターと再合体しろ!!』

「りよ、了解!!」

「行くわよ！ シラナミ!!」

ブレイブハートはレスターの指示通りに先ほどスペルキャスターと合体した時と同様に変形し、前方を進んでいるスペルキャスターのブースターの間に入り込んで合体した。

合体を終えて能力が増幅したスペルキャスターをテキーラはすぐさま操作し、周囲の索敵をすぐさま行なう。

「……ッ！ 見つけた！ 桜葉！ プディング！ 目標は現在のスペルキャスターの位置から上方。距離2500の位置を移動中よ！ すぐさま追うわよ!!」

『了解（なのだ）!!』

テキーラからの情報にクロスキャリバー、ファーストエイダーは動き出し、目標に向かって移動する。

スperlキヤスターもそれに続き、カズヤは移動の操作を行ないながら、索敵に集中しているテキーラに質問する。

「テキーラ。どうして『ゴースト』の位置が分かるようになったの？　今もリーダーに

『ゴースト』の反応は映ってないのに？」

「さつきルクシオールから発射されたミサイルが在ったでしよう？　あのミサイルの中

身は『特殊電磁波発生ペイント液』なのよ。その電磁波を合体して能力が増幅したスperlキヤスターで捉えたって言う訳よ」

「そんな物が在ったの!？」

「そうよ。ステルス性能が凄い対『ゴースト』用の特殊兵装。因みに作成者は、アンタも良く知っているノアよ」

「ノアさんが!？」

『特殊電磁波発生ペイント液』。現在の『E^エD^デN^ン』及び『N^ノE^{エイ}U^ウE^エ』の技術を上回るステルス性能を持った『ゴースト』を捕捉する為にノアが作り上げた兵装。何らかの物体にペイントが付着すると同時に特殊な電磁波を発生させる効果が在る。因みに色がピンクなのは、某『強運の天使』が可愛い色が良いとノアに願ったせいである。

この為に例え付着したペイントを消す為にステルスを張り直したとしても、ペイントから発せられる電磁波は消える事が無いので捕捉する事が出来る。欠点が在るとすれ

ば、付着した量によって電磁波の強さが決まるので少量の付着では捉え切れない面が在る事である。故に捕捉し切れない事も在るのだが、ブレイブハートと合体して、索敵能力が増したスペルキャスターならば捕捉する事が出来る。

この為にエネルギー消費が激しいと言う欠点を持っているスペルキャスターを、ルクシオールとの傍で待機させていたのだと悟ったカズヤは、レスタターが敷いた布陣の意味を知って驚嘆する。

(凄い！…流石は歴戦の戦士だ！)

「……ッ！…見えました!!」

カズヤが感心している間に、前方を移動していたクロスキャリバーから発見の報告が届いた。

即座にクロスキャリバーから送られて来る映像に目を向けてみると、不自然に宇宙空間を移動しているピンク色のポイントが映し出されていた。

それはルクシオールでも確認され、即座にレスタターから次の指示が飛ぶ。

『良し！ ナノナノ！ 『チャクラム』を『ゴースト』の前方に向かって撃つて！』

「了解なのだ!!」

ナノナノは即座にレスタターの指示を実行し、ファーストエイダーの武装である遠距離誘導レーザー『チャクラム』が発射された。

発射された環状のレーザーは『ゴースト』の行く先を塞ぐように曲がり、『ゴースト』のスピードが僅かに落ちた。アプリコットは『ゴースト』に聞こえるように全方位に向かつて通信波を発する。

「お願いです、『ゴースト』さん!! 私達の話聞いて下さい!!」

アプリコットは必死な声で叫ぶが、『ゴースト』からの返答は無かった。

変わりに突如としてピンク色のペイントの周辺が歪み、何かが現れ出す。そしてカズヤ達の目の前に遂にソレは姿を現した。

主翼部分に付着しているペイント以外の機体の色は闇色のダークブルー。形状は『E^エD^デE^ンN』製の『紋章機』を殆ど一致していて、機体の両脚部にはそれぞれ大口径の大口径ロングバレルレールガンが右側に、左側には中型レーザー砲が装備されていた。両翼部分には小型のミサイルポットらしき物が備わっており、コックピット付近にはバルカン砲らしき物が二門備わっていた。

カズヤ達は現れた『ゴースト』の姿に呆然と成ってしまった。

(此れが『ゴースト』の正体?!? でも、これって…『E^エD^デE^ンN』製の『紋章機』なんじゃ!?)

明らかに変わった『ゴースト』の正体に、カズヤは内心で驚愕の叫びを上げた。

そしてルクシオールのブリッジでも現れた『ゴースト』の姿にカズヤ同様に大小成れ

ど驚愕が隠せないでいた。明らかに『ゴースト』には『E^エD^デN^ン』の『紋章機』の特徴が数多く見られる。

メインフレームなどは完全に一致しているのだから、『E^エD^デN^ン』出身者が多いルクシオールの内での驚愕は当然だった。だが、そんな中でレスター、ココ、そしてちとせだけは『ゴースト』の正体に驚きは無く、逆にやはりと言う感情が満ち溢れていた。

「(…やはり、『ゴースト』の正体は、あの時に俺達の前に現れた機体だったか…ならば) …ココ! 『ゴースト』のスキャン結果はどうだ!？」

「…四年前に『E^エD^デN^ン』に現れた時と同じです…『ゴースト』からは生命反応が感知出来ません」

『ッ!?!』

告げられた『紋章機』で在るならば、絶対に在り得ない報告にブリッジに居るメンバーはレスターとちとせを除いた全員が騒然と成った。

『紋章機』とは、〃人間という不確定要素による進化や突然変異を取り入れ、その変動の振れ幅を利用して最大値を引き出すことをコンセプト〃の元に作り上げられた大型宇宙戦闘機。故に人間が乗る事を前提に造られている。にも関わらず、『紋章機』である筈の『ゴースト』からは生命反応が感知出来なかった。

では、『ゴースト』は『紋章機』ではなく、ただ『紋章機』に似た形をした紛い物の戦

闘機では無いのかとブリッジに居るオペレーター達の脳裏に考えが浮かぶ。艦長席の近くで立っているレスターもまた、自らが持つ知識から『ゴースト』の正体を推測していた。

(嘗て『黒き月』が『紋章機』を横して造り上げられた『ダークエンジェル』と言う機体が在ったが：『ゴースト』はやはりのその類の機体と同じ無人なのか？ ……とにかく今は確保を優先だ)

嘗て敵対した機体を思い出しながらも、すぐさま思考を切り替えてレスターは『ルンエンジェル隊』に指示を飛ばす。

「各機！ これより『ゴースト』の確保に移るぞ！ ファーストエイダーは先ほど同様に『チャクラム』で『ゴースト』の行く手を塞げ！ クロスキャリバーは『ゴースト』のスピードが低下すると共に前方に出て失速！ スペルキャスターは『ゴースト』の後方に取り付くんだ！」

『了解!!』

レスターの指示を聞いた『ルンエンジェル隊』は即座に動き出した。

ステルスを解いた事に寄ってスピードが更に上がった『ゴースト』に追い縋り、ファーストエイダーが『チャクラム』を前方に撃ち出す。

自由自在にレーザは曲がり、『ゴースト』の行く手を遮る。『ゴースト』は前方を塞

ぐように走るレーザーを回避する為に僅かに減速して『ルーンエンジェル隊』との距離が縮まる。

其処を見逃さずに事前にナノナノからレーザーが撃ち出される位置を知らされていたクロスキャリバーが『ゴースト』を追い抜き、前へと躍り出た。そのまま減速し、『ゴースト』との幅が縮まって行く。

『ゴースト』はクロスキャリバーを追い抜こうとするが、それを阻むように『ゴースト』の頭上を取ったファーストエイダーが『チャクラム』の砲身を構えて睨みを効かせていた。これによって横へ移動しようとすれば『チャクラム』が撃ち込まれてしまう。ならば、減速して移動しようにも後方にはスペルキャスターが回り込んでいる。

「もう逃がさないわよ!!」

「お願いですから、止まって下さい!」

「逃げ道は無いのだ!!」

（凄い! 完全に『ゴースト』は包围されている!）

ブレイブハートの中に乗っているカズヤは、『ルーンエンジェル隊』を指揮して『ゴースト』を包围したレスターの手腕に興奮していた。

もはや『ゴースト』に逃げ道は無い。例えクロスキャリバーに『ゴースト』が攻撃して来たとしても、今の包围状況ならばナノナノが迎撃する事が出来る。もはや『ゴースト』

ト』は『ルーンエンジェル隊』が敷いた包囲網によって袋の鼠だった。

ルクシオールに乗る者達ももはや『ゴースト』には逃げ場は無いと思っていた。

人間が乗っているならば、意表を付くような無茶な機動を行なって包囲網から脱出する事が出来る可能性が在る。しかし、『ゴースト』からは生命反応が出ておらず、無人である事を示している。

無人機は常に最善に近い行動と人の運用が最小限で済む事が強みだが、その分行動はパターン化されていて如何する事も出来ない状況に成れば何も出来なくなる。言うなれば諦め易いのだ。幾度も無人機や誘導式の艦艇と戦った事が在るレスターは、其処まで見越して『ルーンエンジェル隊』による包囲を完成させた。

『ゴースト』の後方の位置取りを行なっているテキーラは、『ゴースト』を確保する為にコンソールを操作し、牽引用ワイヤーを取り付けようとする。

「捕獲するわ！ ワイヤー発…」

「ローブウン!!」

「なっ!?!」

「えっ!?!」

スペルキャスターがワイヤーを『ゴースト』に向かって発射しようとした瞬間、突如として『ゴースト』の速度が急低下した。

それによって『ゴースト』とスペルキャスターの距離が一気に縮まり、激突し掛ける。
「ま、不味い!!」

カズヤは瞬時にレバーを操作し、『ゴースト』同様にスペルキャスターの速度をスピードを低下させて激突を防ぐ。

しかし、それによって僅かに包囲網に穴が開き、『ゴースト』は機械のような精密な動作で僅かに開いた包囲網の穴を潜ってファーストエイダーの背後に回りこんだ。自らの背後に移動された事に気がついたナノナノは、慌てて『ゴースト』に目を向けるが、既に『ゴースト』は急カーブを行なつてクロスキャリバー、ファーストエイダー、スペルキャスターに背を向けていた。

機械のような精密な操作技術に、人が乗る事で得られる大胆さが合わさった『ゴースト』の動作に、アプリコット、ナノナノ、テキーラ、そしてカズヤは呆気に取られてしまふ。その間にも『ゴースト』との距離は離れて行き、慌ててカズヤ達は追い掛ける。まだ、追跡出来る距離に『ゴースト』は居る。

次こそは逃がさないとカズヤ達は『ゴースト』を追い駆ける。だが、クロスキャリバー、ファーストエイダー、スペルキャスターの機首が『ゴースト』に向けた瞬間、突如として『ゴースト』の目の前の宇宙空間が歪み出す。

「何だ…アレ?」

発生した歪みを目撃したカズヤは困惑に満ちた声で呟き、アプリコット、ナノナノ、テキーラも困惑する。

宇宙空間に発生した歪みは徐々に強まり、遂には空間自体に罅が走って黒く輝く穴のようなモノが出現した。先が見通せないほどの黒く輝く穴の中に、迷う事無く『ゴースト』は飛び込む。同時に穴は一瞬の内に消え去り、先ほどまでレーザーに映っていた『ゴースト』の反応も、スペルキヤスターが捉えていた電磁波も完全に消失していた。

「……今のは？」

「…『クロノ・ドライブ』じゃないですよね？」

「…ドライブ反応は無かったのだ」

「…全く未知の…移動法って事でしようね」

カズヤ達は狐に化かされたような気持ちを抱きながら、呆然と『ゴースト』が消え去った漆黒の宇宙空間を見つめるのだった。

「……見つけました…やっぱりそうだったんですね」

ルクシオールに在る自らが座るオペレータ席に座って、『ゴースト』が現れてから消え去る瞬間まで見ていたちとせは、希望に満ち溢れた顔をしながら呟いた。

四年間、ずっと求めていた場所に至る手段。ソレを遂にちとせはハツキリと見つけた。『ゴースト』が消え去る瞬間に出現した黒く輝く穴。その先が何処に繋がっているのか、ちとせは理解したのだ。

「…必ず…必ず…次は逃しません…だから、もう少し待っていて下さい…タクトさん」
 即座にちとせは先ほど得られたデータを検証する為に、コンソールを操作し出す。
 レスターとココが、その様子を複雑な感情で満ちた顔で見つめるのだった。

(いや、思っていた以上に厄介な包囲網だったなあ)

《……………》
 (多分あの『E^エD^デE^エN^ン』の最新鋭艦の艦長は…… “レスター” だろうな。上手く新しいエンジンエル隊を指揮しているようだし、少しは柔軟になったみたいだな、あの堅物のレスターが……月日の流れを感じるなあ)

《……………》
 (……あの、もしかしなくても怒ってる?)

《…怒りと言う感情は存在せず…》

(いや、明らかに怒ってるよね? もしかしなくてもピンク色のペイントが付いた事に

怒って…)

《本機のこれからの行動の指示を即座に要求》

(……はい)

有無を言わさない雰囲気屈して、悲しさに満ち溢れながら今後の方針を決める。

(……そうだなあ。やつぱりセルダール付近に向かつてくれるかな。どうにもきな臭い匂いだけじゃなくて、嫌な予感がするんだよ。最悪の場合は、『ABSOLUTE』に行く必要が在るかもしれない)

《…『ABSOLUTE』の防衛機構が機能する可能性が在ると?》

(かも知れない。まあ、可能性だけどね)

《…了解。本機はこれよりセルダール宙域に向かう》

方針が決まると共に『ゴースト』は通常の宇宙空間へとシフトし、ステルスを起動させて宇宙空間に姿を暗ませながら真っ直ぐにセルダールへと向かうのだった。

1—4

戦闘終了後、カズヤ達はレスターの指示に従ってルクシオールの格納庫へと帰還した。

四人とも自らが乗っていた機体から降り立ち、先ほど起きた出来事に難しげな表情を浮かべている。海賊と思っていた少女が『NEUE』製の『紋章機』を所持していた事も驚いたが、それ以上に『ゴースト』の形状と、最後に見せた『クロノ・ドライブ』とは明らかに違う移動方法には言葉を失うしか無かった。

カズヤは難しそうに顔を歪めながら、同じように難しげな顔をして考え込んでいるテキーラに質問する。

「…ねえ、テキーラ？ 最後の『ゴースト』が消えた事だけど、もしかして『魔法』って事は？」

「無いわね。消える瞬間にも魔力は感じられなかったし…第一に魔法の発動の気配を感じていたら、私が即座に注意を発していたわ」

「そっだよね」

「……ただね」

「うん？」

何かを思い悩むような声を発したテキーラにカズヤが首を傾げる。

「……『ゴースト』……アレは多分危ない存在だと思うの。シラナミは感じていなかった
ようだけど、アイツを追い駆けている時に、何か得体の知れない雰囲気を感じたわ」

「……私もです」

「ナノナノもなのだ。何て言えば良いのか分からないのだけど……怖く感じたのだ」

「怖く？ ……桜庭さんも？」

「……は、はい。私、『ゴースト』の前を先行していて、まるで観察するかのような気配を
背後から感じていたんです……無機質で、殆ど感情が感じられない視線で見られている
ような」

「うくん……僕は何も感じなかったんだけど……どうしてだろう？」

同じように『ゴースト』に対してアプローチを仕掛けたのに、アプリコット、ナノ
ノ、テキーラが受けた印象を感じなかったカズヤは更に首を傾げる。

そのカズヤに対してアプリコットがカズヤが乗っているブレイブハートと、自分達が
乗っている『紋章機』の一番の違いを考えて言葉を発する。

「多分ですけど、シラナミさんが乗っているブレイブハートには『H^h・Aⁱ・L^l・O^o・シス
テム』が在りません。其処が受けた印象の違いだと思います」

「『H. A. L. O. システム』は限定的にだけど、予知能力を操縦者に与えるわ。多分私達の『紋章機』が『ゴースト』を警戒しろって警告を発したのかも知れないわね」

「『紋章機』が『ゴースト』を警戒？」

「そつ……あくまで仮説だけだね。それよりもそろそろブリッジに行つて報告しましよ。司令官さんも帰還報告を待っていると思うわよ」

「あつ！ そうだね。すぐにブリッジに向かおう」

テキーラの指摘にカズヤは頷き、急いでブリッジに向かおうとする。

だが、ブリッジへの直通エレベーターにカズヤ達が辿り着く前に、整備員の服を来た壮年のガタイの良い男性がカズヤ達を呼び止める。

「おう、ちよつと待ちな！」

「あつ！ 班長さん！」

呼び止めた人物が整備班の班長を務めている『クロワ・ブロート』だと気がついたアブリコットが振り返った。

クロワはゆつくりとカズヤ達に近づき、アブリコットに何らかのデータが入った電子機器を手渡す。

「ブリッジに行くならコイツをちとせの嬢ちゃんに渡しておいてくれ。今回のブレイブハートの戦闘データが入っているやつだ」

「はい。分かりました」

「頼んだぜ……それと、新入り」

「は、はい！」

声を掛けられたカズヤは緊張しながらも返事を返した。

クロワはカズヤの顔を真っ直ぐに見つめるが、すぐさま楽しげに顔を歪めてカズヤの背中を叩く。

「パーパン！」

「おめえさん、初の実戦にしちや中々やるじゃねえか！」

「あ、ありがとうございます！」

「何か機体の事で異変を感じたら、すぐに俺達整備班に伝えな。バッチリ整備してやるからよお！」

「はい！ 宜しくお願いします！」

「んじや、リコ。ちとせの嬢ちゃんに頼むぜ！」

「はい！ 必ず届けます！」

クロワはアプリコットの返事に笑みを浮かべながら頷くと共に、ブレイブハートと『紋章機』の調整を行なっている他の整備班の下へと戻って行った。

カズヤ達は直通エレベーターに乗り込み、ブリッジへと辿り着く。

ブリッジの中は先ほどの戦闘での検証で忙しいのか、慌しい気配に満ちていた。その中でレスターは艦長席に座り、オペレーター達から送られて来るデータに逐一目を通していた。カズヤ達はレスターにゆっくりと近づき、艦長席の傍で立ち止まり敬礼を行なう。

『ルーンエンジェル隊』!! 帰還しました!

「ああ、戦闘はご苦労だった。今丁度戦闘記録をある程度取り纏め終わったところだ」
「もう、終わったんですか?」

「まあな。『ゴースト』との戦闘は全て記録しながら解析を行なっていたからな」

レスターはそう言いながら、自らのオペレーター席で少しでも『ゴースト』に関するデータを得ようと解析を続けているちとせに僅かに視線を向ける。

アプリコット、ナノナノ、テキーラはレスターの視線が何処に向いたのかを悟り、気まずそうに表情を歪めた。ちとせがどれだけ『ゴースト』に対して執着しているのか、三人とも理解しているからこそだった。唯一事情が分かかっていないカズヤは疑問の表情を浮かべる。

すると、ゆっくりとレスターが四人の顔を見回し、カズヤとアプリコットに最初に声を掛ける。

「カズヤ、リコ。武装艦との戦闘は見事だった。初めての合体だったにも関わらず、コン

ビネーションは出来ていたぞ。特にカズヤは初の実戦で在りながら、緊張せずに行動出来ていたようだな。おかげでクロスキャリバーのエネルギーを思っていたよりも消費せずに済んでいた。良くやったぞ」

「は、はい！　ありがとうございます！」

「シラナミさんのサポートのおかげですよ」

「……だが、武装艦から『紋章機』が現れた後の行動は別だ。二人して同時に固まってしまった事で危うく相手に攻撃されそうになった。流石に『紋章機』が現れるなどと予測出来なかったせいだろうが、それでも今後は注意しろ。一歩間違えば、お前達二人ともあそこで撃墜されていた可能性も在るんだからな」

「あつ……はい、すいませんでした」

「……申し訳ありません」

レスターの言いたい事を悟ったカズヤとアプリコットは顔を僅かに俯かせた。

『ゴースト』の介入で助かったが、アニスが乗るレリックレイダーは必殺技を放とうとしていた。『紋章機』の必殺技がどれほど強力なのか知っているカズヤとアプリコットは、レスターの言葉に同意するしか無かった。

厳しい表情で二人をレスターは見つめるが、フツと表情を柔らかくして話し掛ける。

「まあ、今後は注意してくれば良い。俺達もあの『紋章機』には驚いたからな」

「やっぱり、あの赤い機体は『紋章機』だったの?」

「ああ、テキーラの言うとおりだ。アレは『NEUE』製の『紋章機』だ。ルクシオールに在る『紋章機』と同じクロノ・ストリング・エンジンのパターンが確認された」

「と言う事は、五番目の『紋章機』と言う事になるのだ?」

「そう言う事だ。あの『紋章機』とそのパイロットに関しては調査する事になるだろう。だが、それ以上に問題なのは『ゴースト』の方だ」

その言葉にカズヤ達の顔は無意識に引き締まり、真剣な表情でレスターを見つめる。

「……『ゴースト』に関しては逃げられはしたが、ペイントが付いた事は良かった。アレは特殊な溶液を使わなければ消える事は無いからな」

「つまり……今まではステルスのせいで発見出来なかった『ゴースト』が、今回の件で付着したペイントのおかげで発見し易く成った訳ですね」

「カズヤの言うとおりだ。とは言ったものの、『ゴースト』にはステルス以外にもう一つ、最後に見せた『クロノ・ドライブ』とは違う移動法が在るからな。やはり容易には捕捉出来ないだろう」

「何か移動法に関しては分からないでしょうか?」

「今は調査途中だ。憶測で話す事は出来ない」

推測は出来ているが『ゴースト』に関しては機密に分類される情報も在るので、レス

ターはある程度の調査が終わってからしか、カズヤ達には話せなかった。

カズヤには後で『E D E N^{エデン}』軍が『ゴースト』を追っている理由を説明するつもりでは在るので、その時に共にエンジェル隊全員にレスタターは説明する事を決めていた。

『ゴースト』に関しては後日、カズヤに『E D E N^{エデン}』が『ゴースト』を追っている理由を話す時に全員に説明する。今日のところは戦闘で疲れただろうから、全員休んで構わんぞで」

「分かりました」

「はい」

「ゆっくり休ませて貰うのだ！」

「んじゃ、そろそろ戻りますか」

レスタターの言葉にそれぞれが頷きながら返事を返し、最後に答えたテキーラが言い終えると共にその体は光に包まれた。

光が消えた後にはテキーラではなく、何時もの姿であるカルーアの姿が在った。元に戻った事でカルーアは目を瞬かせていたが、すぐに柔らかな笑みを浮かべる。

「戦闘が終わったみたいですね」

「はい、終わりましたよ、カルーアさん」

「ハア、こうして何度見ても人が姿形を変えるのには信じられん」

「あつー！ やつぱり司令も最初は驚いたんですか？」

「ああ…俺は占いや魔法とは一切信じていなかったからな…『N E U E』に魔法技術が在ると聞いた時は耳を疑ったぐらいだ」

現実主義者のレスターからすれば、魔法とは御伽噺や眉唾物でしか無いと思つていた。

その魔法が現実存在している事を知り、『ルーンエンジェル隊』に魔女が入隊すると聞いた時の衝撃は人生においてベスト10以内に入るほどのモノだった。

カズヤとレスターが雑談を行なっている間に、アプリコットは真剣な表情でコンソールを操作しているちとせに近寄ってクロワに渡された機器を差し出す。

「はい、ちとせさん。クロワ班長からブレイブハートの戦闘データだそうです」

「ありがとうございます、リコちゃん」

差し出されたデータをちとせは受け取り、即座に自らのコンソールに繋げて操作し出す。

「ブレイブハートの実戦投入は初めてですから、貴重なデータになります」

ちとせのルクシオールでの仕事には、『ブレイブハート』の機動データ及び戦闘データの収集及び調査も在る。

『ブレイブハート』は他の『紋章機』とは違い、六百年前に作成された『ブレイブハート』

ト計画』と言う設計図から現代で造り上げた機体。それ故に不具合が無いかどうかの調査もカズヤの派遣が告げられた時にノアからちとせは受けていた。リコから渡されたデータをちとせは注意深く見つめ、クロスキャリバーとスペルキャスターとの合体では不具合は出ていない事を確認する。

「……問題は無いようですね。でも、今回だけでは判断出来ませんし、クロワ班長には今後データをお願いしないと」

「分かりました。班長にはそう伝えておきますね」

「お願いします」

柔らかな笑みを浮かべるちとせの姿に、アプリコットは内心で漠然とした不安を感じる。

ちとせが『ゴースト』に対して深い執着心を抱いている事はアプリコットも理解している。とある事情でアプリコットも、出来る事ならば『ゴースト』には力を貸して欲しいと願っている。だが、先ほどの『ゴースト』との接触で不安を抱いた。

『ゴースト』には自分達が知らない何か途轍もない秘密が在る。クロスキャリバーだけではなく、ファーストエイダー、スペルキャスターが警告を発するほどの秘密なのだから、その秘密はきつとちとせにとつて良くない事なのではないのかとアプリコットは考えていた。

(でも……ちとせさんに取っては『ゴースト』さんが本当に最後の希望……私が『ゴースト』さんに力を貸して欲しいと願っていたのとは違う)

「? ……リコちゃん? 顔色が悪いですけど、どうかしましたか?」

「いえ、何でもないです!」

様子が可笑しいアプリコットを心配したちとせに、慌ててアプリコットは答えた。

その様子にちとせは首を傾げてアプリコットを見つめるが、アプリコットは曖昧な笑みを浮かべるだけだった。すると、レスターがアプリコットに近寄って来て話し掛ける。

「そうだ、リコ。今日行なわれる予定だったカズヤの歓迎パーティーだが、準備の方はどうなっているんだ?」

「あつ! そう言えば戦闘の方で忙しくて忘れていました。すぐにランテイさんに確認して来ますね!」

「えつ! 僕の歓迎パーティー!?!」

話を聞いていたカズヤは思わず叫び、レスターはゆっくりとカズヤに向かって振り返る。

「ああ。今日お前が来る事が決まってから計画されていた催しだ。最初は『エンジェル隊』内だけの催し程度だったんだが、他の乗員も知って盛大にやる事になったんだ……」

これを俺が知った時は、今も昔も『エンジェル隊』はやはり変わらんと思ってたぞ」

「フフツ、そう言わないで下さい、クールダラス司令。親睦も深めるには良い事です。私も先輩方と本格的に仲良くなれたのはピクニックをしてからでしたし」

「ああ、分かっている…だが、もちろんお前にも出席して貰うぞ、ちとせ。『ゴースト』の情報を書き調べたいだろうが、それとは別の話だからな」

「…はい。出席はしますから安心して下さい」

（素直に聞いてくれたか。フォルテの説教だけではなく、『ゴースト』が明確に自分が求める存在だと分かったからだろうな）

レスターはちとせがパーティーに出席してくれる事を内心で安堵した。

今回行なわれるパーティーはもちろんカズヤの歓迎も在るが、同時にちとせに少しでも栄養を取って貰い、体調を良くする事も含まれている。気を抜けば本当に倒れるまでに研究を続けてしまうちとせ。

これで仕事に影響が出ていればレスターも司令として注意出来るのだが、ちとせの都合は与えられた仕事以上の事もやり通してしまうので注意は余り出来なかつたのだ。

今回の『ゴースト』との接触で、少しは自分の体調に対する気遣いも戻って欲しいと内心でレスターが願っていると、恐る恐るカズヤが声を掛けて来る。

「あゝ」

「何だ、カズヤ？」

「…歓迎してくれるのは本当に嬉しいんですけど、僕からも何かお礼がしたいので、パーティーに出すスイーツを作っても良いでしょうか？」

「お前が？ ……ああ、そう言えばお前はパティシエを目指していたと資料に書かれていたな」

「はい。皆と少しでも親睦を深めたいですから…駄目でしょうか？」

「…お前を歓迎する為のパーティーなんだが……まあ、食堂のコックが赦せば構わんぞ」
「ありがとうございます！」

了承を貰えたカズヤはレスターに向かって頭を下げた。

すると、アプリコット、ナノナノ、カルーアが楽しそうに笑みを浮かべながらカズヤに近寄って来る。

「シラナミさんがお菓子を作ってくれるんですか！ 楽しみです！」

「ナノナノも楽しみなのだ！ クッキーとか作れるのだ？」

「うん！」

「あらあら、これはパーティーの楽しみが増えましたわ、それじゃ、私もナノちゃんのようにリクエストをしても大丈夫でしょうか？」

「構わないよ、カルーア。桜庭さんも何かリクエストが在ったら言って良いよ」

「そうですね、それじゃあ…」

アプリコツト、ナノナノ、カルーアは楽しげにカズヤにリクエストを告げて行く。

その様子をレスターは、意味深な瞳でアプリコツト達と楽しそうに話しているカズヤを見つめるのだった。

三時間後の食堂室。其処には多くのクルーが集まり、これから始まる歓迎パーティーが開始されるのを今か今かと待っていた。

既にルクシオールは長距離宇宙移動である『クロノ・ドライブ』へと移行しているの
で襲撃などに襲われる心配は無く、ブリッジの乗員も最小限の人数を除いて集まってい
る。そして歓迎パーティーの開始を告げる為に、代表としてレスターが手にコップを持
ちながら立ち上がる。

「…それでは、今日よりルクシオールの一員となったカズヤ・シラナミの着任を祝って、
乾杯！」

『かんぱーい!!』

レスターがコップを掲げると共に食堂に居た全員がコップを掲げて、カズヤの事を祝
した。

祝されたカズヤはレスターの横で頭を下げる。それと共にそれぞれの場所で食事が開始された。

パーティーの形式は立食式なので、賑わいながら楽しそうに食事を取っている。中でも主賓で在るカズヤが作ったお菓子には注目は集まり、多くの者達はその味に絶賛していた。もちろんその中にはカズヤにお菓子のリクエストを頼んだエンジェル隊の面々の姿も在った。

「うわゝ、このフルーツケーキ、美味しいです！」

「クッキーも美味しいのだ!!」

「ええゝ、本当に美味しいですわゝ。こんなに美味しいお菓子を作れるなんて、カズヤさんは凄いですわねゝ」

アプリコット、ナノナノ、カルーアもカズヤの作ったお菓子を絶賛する。

それを聞いたカズヤは嬉しそうに満面の笑みを浮かべていた。やはり自分が作った物を喜んで食べて貰えるのは嬉しい事だった。頑張つて作ったかいが在ったとカズヤが内心で喜んでいると、食事をよそつた皿を持っているちとせとココが近づいて来る。

「すいません。一緒に相席させて貰って良いでしょうか？」

「あつ！ はい、どうぞ」

「ありがとうございます」

「ありがとう、カズヤ君」

許可を貰ったちとせとココは椅子に座り、手に持っていたお皿をテーブルの上に置く。

ちとせは椅子に座って真っ直ぐにカズヤを見つめると、改めて自己紹介を行なう。

「改めて自己紹介をさせて頂きます。ルクシオールに『白き月』から派遣されている烏丸ちとせ大尉です。戦闘の時などは敵の解析を主に行なっています。今後とも宜しくお願います」

「本日付けで『ルーンエンジェル隊』の一員になったカズヤ・シラナミです。此方こそ宜しくお願います」

「ええ…カズヤ君と呼んで構いませんか？」

「はい、構いませんよ」

「先ほどの戦闘は見事でした。初陣であれだけ戦えて、ブレイブハートと他の『紋章機』との再合体もスムーズに行なえたのは素晴らしいかったです」

「ありがとうございます！」

賞賛してくれたちとせにカズヤは嬉しそうに頭を下げた。

ちとせとココはその様子を微笑まじげに見つめ、ココはテーブルに持って来ていたカズヤが作ったお菓子を口に含む。

「アムツ……本当に美味しいわね。これって、もしかしたらミルフィーユさんに匹敵するかも知れないわ」

「ミルフィーユ……もしかしてミルフィーユ・桜葉さんの事ですか?」

「ええ、そう……」

「はい! お姉ちゃんです!」

ココの言葉を遮るように、突然にアプリコットが興奮しながら割り込んで来た。

何時もの気弱で真面目な様子が見えないアプリコットにカズヤは面を食らうが、すぐにアプリコットの言葉の意味を理解して驚く。

「お姉ちゃんって……そう言えば苗字が同じ……もしかしてミルフィーユさんって、桜葉さんの!?!」

「あつ! シラナミさん。私の事はリコで良いですよ。皆からそう呼ばれてますし」

今更ながら自分が桜葉と呼ばれ続けていた事に気がついたアプリコットー以降『リコ』ーは、カズヤにそう告げた。

「う、うん……それでミルフィーユさんがお姉ちゃんって事は、やっぱり桜葉、じゃなく
てリコのお姉さんなの?」

「はい! お姉ちゃんは『ゲートキーパー』でお菓子作りが上手で、優しくて格好良くて可愛くて優しく笑顔がステキで、世界で一番のお姉ちゃんなんです!!」

「アハハハツ、リコはお姉ちゃんが大好きなんだね?」

「大好きです!! お姉ちゃんは良く私がお勉強をしている時に休憩しようっておやつのケーキを焼いてくれたんです。その時以外にも美味しいケーキを作ってくれるんですけど……」

元氣だったリコの喜色満面だった笑顔と声は徐々に萎んで行き、遂には声から力が失われて行った。

その様子にカズヤが疑問を覚えるが、事情が分かっているちとせ達はリコ同様に僅かに顔を暗くしながら、ココがカズヤに事情を説明する。

「ミルフィーユさんは、今は『ABSOLUTE』に居て、『NEUE』と『EDEN』との空間を繋ぐ『ゲートキーパー』の任にしているのだけど」

「今のところ、『ABSOLUTE』に在る『セントラルグロウブ』に置かれている機器を操作出来る素養が在る人物はミルフィーユ先輩しか発見出来ていないんです。だから、ミルフィーユ先輩はずっと『ABSOLUTE』に居るしか無いんです」

「あつ…(そうか。それでリコに元氣が無くなったんだ)」

今のところ『セントラルグロウブ』の機器を操作出来るのは、ミルフィーユしか発見されていない。

『EDEN』と『NEUE』の行き来を可能にする為にはミルフィーユが必要。故にミ

ルフィーユは『セントラルグロウブ』から離れる事は出来ない。つまり、今のミルフィーユには自由が無いのだ。だからこそ、リコは実の姉に自由が無くなった事をカズヤは悲しんでいるのだと悟った。

「ミルフィー先輩以外に、『ゲートキーパー』の素養が在る人物を搜索しているのですけど」

「今のところ発見されていないの。何とかミルフィーユさんにも自由を上げたいのだけどね」

「……その為にも『ゴースト』の力が必要なんです」

（ん？ どうしてちとせさんは『ゴースト』の事を言ったんだ？）

今の話に繋がらない言葉を発したちとせにカズヤは疑問に満ちた表情を向ける。

自らに向けられている視線に気がついたちとせは、曖昧にカズヤに微笑み返すと共に話を戻す為口を開く。

「リコちゃんは本当にミルフィー先輩と仲良い姉妹なんですよ。ミルフィー先輩もリコちゃんの事をプライベートの時には良く話してくれていましたから……そう言えばカズヤ君がエンジェル隊に入隊する切っ掛けを作ったのもミルフィー先輩なんです」

「…それは知りませんでしたよ。僕が入隊する事になったのは殆ど偶然でしたし」

「その偶然を呼んだのがミルフィー先輩なんです。ミルフィー先輩は強運の方ですか

ら」

「そうよ、カズヤ君。ミルフィーユさんが十枚のコインを同時に投げるとね、十枚全部表や裏で揃うなんて当然なんだから」

「ええー!! それは凄いですね! 普通だったらバラバラになる筈なのに!」

「ええ、だからミルフィーユ先輩に選ばれたカズヤ君には何か在るかも知れないと言う事で入隊の合格通知が発行されたんです」

「そうだったんですか… (僕の入隊にリコのお姉さんが関わっていたなんて…何か運命のようなものを感じちゃうな)」

そうカズヤは内心で呟きながら食事を取っていると、突然リコがハツとしたような顔になり、カズヤの顔を見つめる。

「あつ! 分かりました! シラナミさんはお姉ちゃんに似てるんだ!! 雰囲気とお砂糖の匂いとかが!!」

「えっ?」

突然突拍子も無い事を叫んだりリコに、カズヤだけではなく話を聞いていたエンジェル隊面々に、ちとせとココも目を見開いて首を傾げる。

「ミルフィーユ先輩にカズヤ君が?」

「うーん…私はそう思えないけど…強いて言えばお菓子作りぐらいじゃ無いかしら」

ミルフィーユの事を良く知っているちとせとココは、リコが言う似ていると言う場所が殆ど見出せなかった。

天真爛漫を地で行っているミルフィーユに対して、カズヤは真面目な性格をしている。強運も持っている気配は無く、ココが言うとおり共通点はお菓子作りが上手いぐらいしか見出せなかった。しかし、妹であるリコは何かを感じたのか、カズヤの傍によつて思わず手を握ってしまう。

「きつと、お姉ちゃんが生ラナミさんを選んだのは、雰囲気似ている人だったからですよ！」

「……ギョツ！」

『……えっ?』

リコがカズヤの手を握っている事に気がついた面々は、思わず呆気に取られた表情を浮かべた。

男性恐怖症であるリコが男性に触れた場合、その相手は小柄な体格をしているリコからは考えられない怪力が発揮され、投げ飛ばされてしまう。しかし、今リコがカズヤの手を握っているにも関わらず、リコは普通に接している。

「あらあら、リコちゃん? 男性恐怖症が治りましたの?」

「……へっ?」

カルーアの指摘にリコは漸く自分がカズヤの手を握っている事実気がついた。

「…ええー!! 何で私! シラナミさんの手を握っても平気なんですか!」

「いや…僕に聞かれても…」

「原因は分かりませんが、これでリコちゃんの男性恐怖症が治る見込みが出来たかも知れませんが…(私と違って)」

ちとせは困惑しながら話しているカズヤとリコを微笑ましげに見つめていたが、フツと自らの手に険しい視線を向けた。しかし、すぐに表情を戻して新しいエンジェル隊とカズヤを微笑ましげに眺めながら食事を再開するのだった。

「……時は来た…今こそ全てを取り戻し、『唯一神』として君臨する時…『E D E N』の最大戦力も予定通り『N E U E』から離れた…此方の全ての準備も終えている。フハハハハハハハハハハツ!!」

何処とも知れない場所で平和を壊そうとする者は動き始めていた。今宇宙に新たな戦いが起ころうとしている。それによって起きる結末を知る者は、まだ誰も居ないのだった。

《第一章『新入隊員』終了・第二章『事態急変』に続く》

第2章 事態急変

2—1

カズヤがルクシオールに赴任してから六日後。

各宙域に在る中継地点や惑星が保有している軍から送られて来た赤い『紋章機』に関する情報と、『ゴースト』に関する分析が終わった事で、ブリーフィングルームでは会議が開かれる事になった。

既にカズヤを含めたエンジェル隊の面々は席に座り、司令官で在るレスターが来るのを待っていた。

そしてブリーフィングルームの扉が開き、レスターが入室して来る。

ブリーブウン！

「待たせたな」

入室したレスターはエンジェル隊の面々が揃っているのを確認する。

ゆつくりと自らが座る位置に移動するが、レスターは座る事無く立ったまま全員顔を見回すと共に口を開く。

「今日集まって貰ったのは言うまでも無く、先日襲撃して来た襲撃犯の身元が判明した

事と、『ゴースト』に関する説明の為だ。待たせて悪かったな、カズヤ」

「いえ、大丈夫です」

「そうか……では、話を始める。まずは武装艦に乗ってルクシオールを襲撃して来た犯人についてだが……かなり有名な人物だと言う事が分かった」

「どんな人なんですか？」

そうリコが質問すると、レスターは手元のコンソールを操作する。

すると、モニターに先日ルクシオールを襲ったアニスの画像が展開される。

「名前は『アニス・アジート』。トレジャーハンターの仕事をしているらしいが、同時に海賊狩りも行なっていたらしい」

「では、この前にルクシオールに通信をして来た時の言葉は？」

「……カルーアが考えているとおり、本気で言っていたと言う訳だ。頭痛がするような事実だな」

レスターは額に手をやりながら溜め息を吐き、カズヤ達も乾いた笑みを浮かべるしか無かった。

てつきり挑発の類か何かでアニスは言ってきたのだとレスターは考えていたのだが、実は全て本気で言っていた可能性が出て来たのだ。今でも思い出すだけで頭痛がして来るような気持ちを抑えながら、レスターは話を再開する。

「話は戻すが、『E D E N』が『N E U E』に来訪する前には、多くの海賊達を討伐して来た様だ。おかげで各惑星の軍や警察には顔が知られていたので判明するのは早かった。まあ、其処へんの海賊に負ける事は先ず無かっただろう」

「『紋章機』の力ですね？」

「ああ……カズヤの考えている通り、アニス・アジートは『紋章機』を使って海賊退治を行なっていたようだ。有名さでは『ゴースト』以上に有名だが、『E D E N』が来訪して来てからは状況も変わったと言う事だ」

「どう言う意味なのだ？」

「簡単だ。アニス・アジートが生業としていた仕事の大半が『E D E N』軍に取られてしまったと言う訳だ」

現在の『N E U E』に於いて『E D E N』は海賊退治と共に、『N E U E』に在るロステクノロジーの調査も同時に行なっていた。

その調査によって現在ルクシオールに在る『紋章機』も各惑星から発見されている。アニスの乗る『紋章機』もまた、ロステクノロジーの一つ。そしてアニスが生業としているトレジャーハンターとしての行ないは、『E D E N』が介入した事によって少なくなつて来ている。当然海賊の数も少数になつて来ているので、アニスの生業事態が消えかかつて来ているのだ。

「こんな辺境に居たのも、軍から逃げ延びた海賊を狙つての事だろう」

「あの…アニスさんはどうなるんでしょうか？ 流石に軍の船である、ルクシオールを狙つた訳ですから」

「…今までの功績とルクシオール自体に被害が無かつた事も在るから情状酌量の余地は在るかも知れんが、流石に事情聴取は免れん」

流石に勘違いで軍の船を襲つてしまつたでは済まされない。

乗つていた『紋章機』を何処で手に入れたかも知る必要が在る。取り合えずアニスを発見したら事情を聞くようにとだけは、レスターは各方面に打診した。遠からずアニスの件に関しては解決するだろうとその場に全員が考える。

「…さて、アニス・アジートに関しては此処までだ。次は全員が最も気になっている『ゴースト』に関してだ」

（遂に来た！）

ずっと気になっていた事が遂に話される事に気がついたカズヤは、より真剣さに満ちた顔をしながら居住まいを正す。

何故『EDEN』が最新鋭艦だけでなく『紋章機』までも使用して『ゴースト』を追っているのか。『ゴースト』の形状が『EDEN』製の『紋章機』と類似しているのか。最後の見せた移動法の正体は何なのか。

『ゴースト』に対する謎を少しでも知る為に、カズヤは真剣さに満ちた顔をしながらレスタアの説明に耳を傾ける。

「まずはカズヤが一番気になっているだろう、『E D E N^{エデン}』が『ゴースト』を追っている最大の理由を話す。他のメンバーは知っているが、その理由は先日の方に『ゴースト』が消失した時に行なった移動法が理由だ」

「あの黒い穴のようなモノに『ゴースト』が消えたのですか？」

「そうだ……これは極秘事項に分類される事だから他言は絶対にするな。もしも誰かに許可無く話せば厳罰処分どころか、軍法会議に掛けられるぞ」

（ぐ、軍法会議いー!? そ、そんなにまで!? だから皆教えてくれなかったのか!?!）

カズヤは、どうして自分よりも『ゴースト』に関する事を知っている筈のエンジェル隊の面々が話してくれなかったのか納得した。

同時にこれからレスタアが語る事は本当に重大な事実で在る事もカズヤは理解する。そしてレスタアもカズヤ同様に真剣さに満ちた顔をして説明を続ける。

『ゴースト』が使用した移動法は、俺達が使用している長距離宇宙移動法である『クロノ・ドライブ』と全く違う移動法だと言う事は既に理解しているだろう？」

「はい。『クロノ・ドライブ』だったら、ドライブ反応が出る筈なのに『ゴースト』が移動する時は出てませんでしたし」

「そうだ。あの移動法が『クロノ・ドライブ』と同じ長距離宇宙移動ならば問題は無かった。ただの技術の違いで済んでいた筈だった。だが、違った……『ゴースト』が使用した移動法。アレは、平行宇宙間での移動すら可能とする方法だ」と判明しているんだ」
「…えっ? …ええええええ!!!!!!」

知らされた事実にかズヤは驚愕に満ちた叫びを上げ、同意するようにエンジェル隊の面々は神妙な顔をしながら頷く。

そしてレスターは手元のコンソールを操作し、モニターに三つの円のような者が出現する。

左の円の中央には『NEUE』。真ん中の円には『ABSOLUTE』。右側の円には『EDEN』と印されていた。

「通常『EDEN』から『NEUE』に移動する為には『ABSOLUTE』を必ず通らなければならない」

モニター画面に映る『EDEN』の円から矢印が飛び出し、『ABSOLUTE』を通って『NEUE』の円に辿り着く。

「だが、『ゴースト』は『ABSOLUTE』を通らずに『EDEN』から『NEUE』へとやって来た事が判明している」

新たに『EDEN』から矢印が飛び出すが、その矢印は『ABSOLUTE』の円を

通過せずに、遠回りするように動き『NEUE』へと辿り着いた。

「今の図は『ゴースト』の平行宇宙間での移動法を簡単に説明したモノだ」

「ちよつと待つて下さい！ 今の話が本当だとしたら『ゴースト』は『EDEN』でも確認されているんですか!？」

「ああ、奴は『EDEN』でも確認されている。四年前、『EDEN』側の『クロノゲート』が起動した直後にな」

そうしてレスターはゆっくりと語り出す。一番最初に『EDEN』が、そしてレスター達が『ゴースト』を確認した時の出来事を。

《トランスバール暦414年》

その年は『EDEN』において大きな転換期を迎えた年だった。

『アナザースペース』からシャープシューターを帰還させる術を探している最中に、六百年前は多次元文明で物資のやり取りが行なわれていた事が『EDEN』の首都惑星ジュノーに存在する巨大データスペース『ライブラリ』から発見されたのである。それが事実だったのかを調べる為に調査が行なわれ、遂に平行宇宙に辿り着く為の扉である『クロノゲート』が発見された。

そして『クロノゲート』を開く事が出来る人物が、『ムーンエンジェル隊』に所属しているミルフィュー・桜葉で在る事も調査によって判明した。その結果、本当に平行宇宙が存在しているのかを確かめる為に、ミルフィューに寄る『クロノゲート』の起動が行なわれた。

「そろそろ時間ね」

『クロノゲート』起動の瞬間を見る為に、『エルシオール』に乗って経過を監視していたノアは真剣な面持ちでモニターを見ていた。

モニター画面には『クロノゲート』に向かって接近するラツキースターが映し出され、それを護るように他の『紋章機』が周囲を経過していた。これまでの調査結果で必ず成功する事は判明しているが、何かしらの不足の事態が起きる事も考えられるので逐一情報はエルシオールに送られて来ている。

ノアはその情報を自身の横でコンソールを操作して整理しているちとせに目を向ける。集中しているのかちとせは真剣さに満ちた顔で送られて来るデータを整理して行く。

『アナザースペース』に現状行く手段が無い今、ちとせは平行宇宙に方法を賭けた。シャープシュータは修復不可能だと告げられ、『精神的外傷』に寄って『紋章機』に乗る事が出来なくなつたとせは、もはや『アナザースペース』に行く事は出来ない。なら

ば別手段を探すしか無いと考えて、『ムーンエンジェル隊』を除隊し、『白き月』でノアの助手としてちとせは働く事にした。

幸いにもちとせはパイロットとしてだけでなく、他の面でも優秀な成績を出している。ノアも快くちとせを助手として受け入れた。ノア自身も出来る事ならばタクトを『アナザースペース』から助け出したと考えている。

だからこそ、その切欠になるかもしれない今回の『クロノゲート』起動を誰もが固唾を呑んで見守っていた。それは現場に居る『ムーンエンジェル隊』の面々を含め、エルシオールのブリッジに居る誰もが思っている事だった。

そしてブリッジに居る誰もが固唾を呑んでモニターを見つめていると、ラッキースターが接近すると共に『クロノゲート』が反応し、ゲートの中心に光が発生する。発生した光は徐々に広がって行き、遂に『クロノゲート』は六百年の時を超えて平行宇宙への扉を開いた。

『クロノゲート』起動を確認！ ラッキースター及び周辺への異常は観測出来ません！

「報告」苦労様。それじゃ司令官？ 『クロノゲート』の内部に突入するわよ。ライブラリの情報だと、あの先には『A B S O L U T E』と呼ばれる空間が広がっている筈よ」「分かった。エンジェル隊及びエルシオール！ 『クロノゲート』内部に前進だ！」

現エルシオールの艦長であるレスターが号令を発すると共に、ラツキスターを先頭にして各『紋章機』が移動を開始し、エルシオールも『クロノゲート』へと前進する。

これから向かう未知の世界に誰もが固唾を呑む。しかし、その覚悟を遮るように突如としてブリッジ内部に接近警報が鳴り響く。

ーピーピコン!!

「あつー!」

「どうした、ココ?」

「『クロノゲート』に向かって高速で接近する機影の反応を確認しました!」

「何だと? 映像は出せるか?」

「はい。最大望遠で捉えていますので、モニターに映します」

レスターの指示に従ってココはコンソールを操作して、全員の目がモニターに移ると共に接近する機影の姿が映し出される。

『ッ!?!』

モニターに映し出された機影の姿に、ブリッジ内部に居る誰もが息を呑んだ。

『クロノゲート』に向かって接近する機体。それは今、『クロノゲート』のすぐ傍に待機している『紋章機』と同じ形状をしていた。機体のカラーはダークブルー。武装は両脚部にそれぞれ大口徑の大型ロングバレルレールガンが右側に、左側には中型レーザー

砲が装備されている。更に両翼部分には小型のミサイルポットが装着されていた。

だが、武装以外は間違いないく、『ムーンエンジェル隊』が乗る『紋章機』とその全てが一致している機体だった。

「馬鹿な!?! 『紋章機』だど!?!」

「ええ、形状は間違いないく、『紋章機』ね。でも、『白き月』ではあんな『紋章機』は発見されていないわ」

「だったら、アレは一体? ……取り合えず、何故此処に来たのか知る必要が在るな。アルモ、あの『紋章機』と通信が繋がるか調べてくれ」

「了解です」

レスターの指示に従ってアルモはコンソールを操作し、接近する『紋章機』らしき機体と通信を試みる。

だが、アルモが幾ら呼び掛けても『紋章機』らしき機体とは通信が繋がらず、ただ真っ直ぐに『クロノゲート』に向かって前進し続ける。

「駄目です! 此方の呼びかけに答えてくれません」

「チッ! こんな重大な時に……仕方が無い! エンジェル隊に連絡! 『クロノゲート』に接近する『紋章機』らしき機体に接近して対処を……」

「待って下さい!」

レスタアの指示を遮るように突然ココが声を上げ、全員の視線がココへと集まると、ココは信じられないモノを見つけたかのように震えながら報告を行なう。

「あの『紋章機』らしき機体のスキャンをしたんですが…生命反応が出てないんです。あの機体は無入機です！」

「何だと!?!」

「無人機ですつて!?! ちとせ! 『クロノゲート』の観測に使っていたセンサーを使用して、今の報告が本当かどうか調べて!」

「は、はい!」

ノアが発した指示をちとせはすぐに実行し、『紋章機』らしき機体をスキャンする。

その結果判明したのは、ココが告げた事が正しかった事を示す表示だった。

「ノ、ノアさん。…ココさんが言っている事は事実です。あの『紋章機』は無入機です!」

「……ノア? 覚えが在るか?」

『紋章機』に似た無人機……そんなの私は知らないわ。第一『紋章機』は『白き月』が考えた機体よ。『黒き月』が前に作った機体は『紋章機』と形状が違う機体だし」

「ならば、アレは一体? ……こうして居ても分からんか。フォルテと通信を繋げ!」

「は、はい! 此方エルシオール! フォルテさん、応答をお願いします!」

「……ブウン!」

ココが呼びかけると共にメインモニターにフォルテが映し出された。

『此方フォルテ・シュトーレン。こっちでも確認したけど、ありやなんだい？』

『EDEN』から送られて来た八番目の『紋章機』って訳じゃ無さそうだね』

「ああ、そうだ。此方のスキャン結果であの機体は無人で在る事が判明したところだ」

『『紋章機』に似た無人機って訳かい？』

「どうやらそうらしい。今のところ此方に対して何もして来ていないが、『クロノゲート』の起動と共に現れたところから防衛機構の可能性も在る。接触には十分に警戒して当たってくれ。最悪の場合は撃墜も視野に入れて構わない」

『…了解したよ。これよりエンジン隊は接近する『紋章機』に似た機体に接触を図る』
「頼んだぞ」

ーブーン！

レスターが言い終えると共にモニター画面からフォルテが消え、変わりに『クロノゲート』に接近する『紋章機』に似た機体の映像が映し出されたのだった。

「んじゃ、皆聞いていたね」

四番機ハッピートリガーに乗りながらフォルテが呼びかけると、モニターに映ってい

るそれぞれの『紋章機』に乗っているエンジェル隊の面々が真剣な顔で頷いた。

「相手はどうやら無人機らしい。『クロノゲート』の起動と共に現れたところから防衛機構の可能性が高い。接触には充分注意してあたりな」

『了解よ、フォルテさん！』

『はい、分かりました！』

『『紋章機』に似た機体…気になりますわね』

『敵対して来ないのが一番です』

ランファ、ミルフィーユ、ミント、ヴァニラはそれぞれ呟きながら、自らが乗る機体を操作してゆつくりと『紋章機』に似た無人機に接近する。

映像から見たところ、相手の武装は遠距離から中距離を主に戦う事に装備されている。近距離の武装はバルカン砲だけしかなく、近距離には弱いとフォルテは判断し、ランファに呼びかける。

「ランファ。まずはアンタが接近してみな。相手の武装から見てカンフーフアイターとは相性が悪そうだからね」

ランファの乗るカンフーフアイターは『紋章機』中で随一のスピードを誇り、近接戦闘が出来る機体。

故にカンフーフアイターならば例え相手が攻撃して来たとしても、持ち前のスピード

を活かして懐に飛び込む事が出来る。フォルテが発した指示にランファは頷き、他の『紋章機』を追い越して相手の機体に接近する。

「さあ、アンタが何なのか知らないけれど、私達の邪魔をするなら容赦しないわよ！」

カンフーフアイターは真つ直ぐに無人機に接近し、何が在っても即座に対応出来るに集中する。

真つ直ぐに相手側は接近し続け、ランファが訝しげに顔を歪めた瞬間、接近していた機体が突如として宇宙空間に溶け込むように消え去る。

「えっ!?!」

消えた機体にランファは慌ててセンサーを確認するが、何も反応を示して居なかった。

「ちよつと! どう言う事!?!」

『落ち着きな! ランファ! ミント、何か反応は無いのかい!?!』

フォルテは慌てるランファを落ち着かせるように叫ぶと、即座に偵察が得意な機体である三番機トリックマスターに乗っているミントに声を掛けた。

「…リーダーに反応は在りません。本当に突然に消えたとか思えませんわ」

『トリックマスターでも捉えられないって言うのかい!?! だったら何処に!?!』

『フォルテさん！ 上の方を見て下さい!!』

ミルフィューユの呼びかけに全員が上の方に目を向けてみると、悠々と消えた筈の機体がレーダーに反応を写さずに飛んでいた。

『なっ?! 何時の間にあたしらの上に?!』

「いえ、フォルテさん。それよりも今のあの機体の反応がレーダーに出ていませんわ」

『此方でも同じです。こうしてモニターに映っている姿だけでしか確認は…あつ!』

ヴァニラが乗るハーベスターが旋回して追い駆けようとしたと同時に、再び『紋章機』に似た無人機はヴァニラ達の目の前から消え去った。

しかし、今度は逆にレーダーの方に反応が映り、まるで何かを確かめるように辺りを動き回っていた。

「…:…:どうやらあの機体。ステルス能力を有しているようですわね」

『…:…:ミントの言うとおりだね。さしずめ自分の性能テストの為にあたしらで遊んでいってところかね?』

『舐めたまねしてくれるわ。あたし達でテストですつて…:覚悟は出来ているんでしょうね!!』

ランファの言葉に答えるように再び『紋章機』に似た無人機は姿を現した。

即座にエンジェル隊、そしてエルシオールは今度こそ相手を見逃さないというように

リーダーとセンサーを起動させる。この場に在る全てのセンサーが無人機に向いている。た。

再び消える前に捕まえるかと思いつながら全ての目が無人機に集まった瞬間、無人機の方の宇宙空間が歪む。

「…なんだい、ありや?」

『空間が歪んでいる?』

『ちよつと、何が起ころの?』

フォルテ、ミント、ランファは目の前で起きようとしている現象が分からず、困惑した声を上げた。

ミルフィュー、ヴァニラも不安そうに歪んだ空間を見つめっていると、歪みは空間に罅を作り上げ、黒く輝く穴が出現した。

『ッ!?!』

『まさか!?! あの穴は!?!』

エルシオールから状況を見ていたノアは、無人機が発生させたと思わしき穴を目撃して叫んだ。

その場に居る誰もが似たような黒く輝く穴を目撃した事が在るのだ。まさかと言う思いに誰もが取られた瞬間、出来なかつた無人機との通信が繋がる。

『EDEN』製の『紋章機』を全機確認完了……これより本機は『NEUE紋章機』の
確認作業に移行する』

男とも女とも判別出来ない合成音が通信機から発せられると共に、無人機は黒く輝く
穴へと飛び込み消え去った。誰もが無人機と穴が消え去った空間を見つめ、言葉が出せ
なかつた。

先ほど無人機が発生させたと思わしき黒い穴。その穴を彼らも造り上げた事が在つ
た。

最初にエルシオールに乗るノアが我に返り、慌ててデータを収集していたちとせのコ
ンソールを操作して、自らの判断が間違っていないかを確認し始める。誰もが固唾を呑
んでノアの言葉を待っていると、ゆっくりとノアが呟く。

「……これって……やっぱり……」

「何か分かったのか？ ノア」

「…あの無人機が発生した穴は…データを見る限り…『アナザースペース』に繋がってい
る可能性が在るわ……信じられない事だけどね」

『……………』

告げられた情報に誰もが言葉を出せなかつた。行く事は現状では不可能だと判断さ
れていた『アナザースペース』への道。其処に辿り着く術が突然現れた事態に言葉が出

せなかったのだった。

「と言うのが、『ゴースト』と俺達が一番最初に接触した時に起きた出来事だ」

四年前の出来事を語り終えたレスターは一息吐きながら、カズヤ、リコ、ナノナノ、カルーアの顔を見回した。

「…え〜と…『EDEN』で『ゴースト』が確認されていたのは分かりましたけど…どうしてそれで『ゴースト』が平行宇宙への行き来も可能なのか分かったんですか？ 『クロノゲート』が現れた時に開いていたんだったら『ABSOLUTE』から通って来たって事も考えられるんじゃないでしょうか？」

「い〜え〜、それでは可笑しい点がありますわよく、カズヤさん」

「えっ？」

突然カルーアから声を掛けられたカズヤは、疑問に満ちた視線をカルーアに向けた。

「だって〜、『ゴースト』が『NEUE』で確認されるようになったのは、『NEUE』に在る『クロノゲート』が起動する前ですもの〜」

「あっ！ そう言えばそうだ」

カルーアの指摘にカズヤは納得したように頷いた。

『ゴースト』が『NEUE』で確認されたのは、カルーアの言うとおり『EDEN』が来訪する前。その前は『クロノゲート』が起動しておらず、平行宇宙への行き来は不可能になっていた。にも関わらず、『EDEN』に現れた筈の『ゴースト』が『NEUE』で活動していた事を考えれば、確かに『ゴースト』には現状で判明している『ABSOLUTE』を介しての平行宇宙への行き来以外の手段が存在している事になる。

集まって来る情報にカズヤが納得していると、レスターが更なる情報を伝える。

「更によえば『ゴースト』は惑星セルダールでも一度だけ、その姿を捉えている。これは『EDEN』が来訪する前にセルダール軍が捉えた『ゴースト』と海賊の戦闘映像だ」
レスターがそう良いながら手元のコンソールを操作すると、モニターに映像が映し出された。

『EDEN』が来訪する前なので解像度は余り良くないが、海賊艦数隻を相手に一方的な戦いを繰り広げているステルスを解いた『ゴースト』が見受けられる。それは戦闘とは呼べるものではなく、無慈悲に、そして感情を一切感じさせない機械的な冷酷さを『ゴースト』から感じさせるものだった。

必死になって『ゴースト』に当てようと放たれる艦砲は、容易く最小限の動きに寄って回避され、逆に『ゴースト』が放つ攻撃は正確に相手の武装を破壊して行く。人が乗っ

ている場所には攻撃していないが、寧ろ一思いに沈めた方が楽になれるだろうと言えるのが『ゴースト』の戦い方だった。

カズヤは今見ている映像と、先日接触した『ゴースト』が本当に同一機なのか疑問を覚える。前回の時に『ゴースト』は攻撃らしい攻撃を行なわなかったが、本格的に戦う時になった時には映像に映る『ゴースト』と戦わなければならないのかもしれないと、カズヤを含めたエンジェル隊全員の背中に冷や汗が流れる。

「この映像と『E D E N』で捉えた映像を解析した結果、間違いなく同一機で在る事が判明した。この戦闘の後に再び『ゴースト』はステルスによって姿を消し、以降は姿を現さずに『N E U E 《ノイエ》』を飛び回っている……さて、これでカズヤも『ゴースト』には俺達知っている平行宇宙への移動手段以外の移動法が在るのは納得出来ただろう？」

「はい……（そうか、だから、ちとせさんはあの時に『ゴースト』の事を呟いていたのか）カズヤは何故ちとせがパーティーの時に『ゴースト』の存在を呟いたのか納得出来た。もしも『ゴースト』を捕縛し、『A B S O L U T E』を介した平行宇宙への移動以外の方法が判明出来れば、現在『セントラルグロウブ』から出る事が出来ないゲートキーパーであるミルフィューを解放する事が出来る。

リコもその事が在って『ゴースト』の力を望んでいた。そしてカズヤはどうして

『E^エD^デN^ン』が軍を動かしてまで『ゴースト』を捕捉しようとしていた理解した。

『ゴースト』が持つ移動法は現状では『E^エD^デN^ン』が欲している技術であり、同時に敵対した時は対抗する事が難しい技術でも在った。好きに平行宇宙を『ゴースト』は移動出来るが、カズヤ達は『A^アB^ブS^ソL^ルL^ルU^ユT^トE』を介さなければ移動出来ない。もしも『ゴースト』が『E^エD^デN^ン』や『N^ノE^イU^エ』に敵対する勢力に渡るか、或いは『ゴースト』自身が敵対した時に対抗する手段が無い。

今のところは『ゴースト』は『E^エD^デN^ン』や『N^ノE^イU^エ』に不利益になる事を及ぼしていないが、相手は得体の知れない存在。いつ何時に何が起こるか分からないからこそ、『E^エD^デN^ン』軍は『ゴースト』の捕捉を決めたのである。

「これが『ゴースト』を『E^エD^デN^ン』が追っている理由だ。確かに『ゴースト』は『E^エD^デN^ン』や『N^ノE^イU^エ』に対して敵対意思を示していない。だが、保有している技術が危険過ぎるんだ」

「……納得出来ました。どうして『ゴースト』を追っているのか良く……だけど、司令？ 司令はこの前僕に『俺の親友の安否を知る為に』って、言っていましたけど……アレはどういう意味なんですか？ 差し支えなければ教えて欲しいんですけど？」

「……『ゴースト』がどう言う理論で平行宇宙を渡っているのか正確なところは分らん。だが、『ゴースト』が発生させる穴の先に在る空間の名称は分かっている。俺達は其

処を『アナザースペース』と呼んでいる」

「『アナザースペース』？」

「時間も空間も無い空間らしいが、詳細は不明だ。だが、本当に時間も空間も関係ない世界だとすれば、『ゴースト』が『ABSOLUTE』を介さずに移動出来ているのに納得が行く。そして『EDEN』は二度、『アナザースペース』への扉を開いた事が在るんだ」
そう告げるレスターの顔には僅かな悲しさと後悔が浮かんでいた。

あの時にレスターがちとせを、そして親友であるタクトを送り出した判断は間違っていない。二人が行かなければ、再び宇宙は未曾有の災害に襲われていたのだから。だが、それでもやはりタクトが戻って来れなかった事はレスターに後悔を抱かせていた。

「……一度目に開いた時に『アナザースペース』には二人の人物が飲み込まれた。一人は今ルクシオールに居るちとせだ」

「ちとせさんが!？」

「ああ……してもう一人が俺の親友であり、『EDEN』に於いて英雄と呼ばれているタクト・マイヤーズだ……ちとせは二度目に『アナザースペース』が開いた時に帰還を果たしたが、タクトは『アナザースペース』に取り残されてしまった。だが、再び『アナザースペース』の扉を開くのは、現行の技術では不可能だった」

「じゃあ、タクト・マイヤーズさんは殉職したんじゃないかって?」

「『アナザースペース』で生死不明と言うのが真実だ：（実際のところは死亡している可能性が高いのだがな）」

カズヤにはまだ話していない事実、『アナザースペース』内部に存在する謎の勢力『ウイル』の事が脳裏に過ぎったレスターは内心で苦い想いを抱く。

『アナザースペース』は確かに時間も空間も関係ない世界。実際に行った事が在るちとせの証言に寄れば、辿り着いてから一日時間は経っていないかった。レスター達の間からすれば数ヶ月も経過していたにも関わらず。だが、タクトは負傷を負っている。更に言えば『ウイル』がどのような連中なのかも分からない。死亡している可能性は高いが、生きている可能性も在る。

ちとせやレスター達はその僅かな可能性に賭ける為に『ゴースト』を追っているのだ。「……さて、これで『ゴースト』に関する説明だ。次はこれからのルクシオールの行動について説明する」

「これからどうするんですか？ やっぱ、このまま『ゴースト』の捜索を行なうんですか？」

「リコの質問は最もだが、現状のルクシオールの備品状況を考えたところ、一度『ABSOLUTE』に帰還する事になった。その後ルクシオールの整備及び新しい武装のテストを実行する」

「それじゃ、『ゴースト』の搜索は一度止めるのだ？」

「ああ、既に『ゴースト』はこの宙域には居ないだろう。奴の目的は今だ不明だが、自分を狙っている連中が居る場所に何時までも居るとは思えんからな…：エンジェル隊は別命が在るまでは通常通りにしていて構わん。では、会議は終わりだ」

『了解（です）（なのだ）』

会議が終わり、リコ、ナノナノ、カルーアはブリーフィングルームから出て行く。

カズヤもそれに続こうとするが、ブリーフィングルームから出る前にレスターが呼び止める。

「待てカズヤ。すまないが、俺と一緒に艦長室に来てくれ。お前に渡しておきたいものが在る」

「？ 分かりました…：（何だろう？ 僕に渡したいモノって？）」

疑問を覚えながらもカズヤはレスターと共にブリーフィングルームから出て、艦長室へと向かうのだった。

2—2

ブリーフィングルームを出たカズヤとレスターは、真つ直ぐ艦長室へとやって来ていた。

其処は綺麗に整頓がされていて、余り使っている様子が無かった。実際にレスターは殆どブリッジで過ごしているの、本来の自室である筈の艦長室に戻る事は無く、寝る時もブリッジに寝袋を持ち込んで寝ている。艦長室に戻るのは大量の書類が在る時ぐらいなのだ。

その事を知らないカズヤはレスターは綺麗好きなのかと考えていると、レスターが机の中に手を入れて動物の耳のようなモノを取り出した。

「コイツをお前に渡す為に来て貰ったんだ」

「あのく、それは何ですか?」

『『テレパスファア』と呼ばれる生物だ』

「ええっ! そ、それって生き物なんですか!？」

カズヤはレスターが差し出して来ている動物の耳のような形をしているテレパスファアを凝視しながら叫んだ。

その様子に同感だと言うようにレスターは頷きながら、テレパスファーについて説明する。

「コイツは『E D E N^{エデン}』に在る惑星ブラマンシユの寄生生物だ」

「き、寄生つて？ ……だ、大丈夫なんですか？」

「ああ、ブラマンシユ星の人間だけに寄生する生物だからな。この生物は寄生した対象にテレパス能力を与える力が在るんだ。無論俺達には寄生しないでテレパス能力を与える事は無いが、コイツを握りながら誰かの事を思い浮かべるとその人物が何処に居るのか、今はどう言う気持ちを抱いているのか知る事が出来る」

「それは凄いですね！ ……それでどうして僕にこの生物をくれるんですか？」

そうカズヤが最もな疑問をレスターに質問すると、レスターは真剣さに満ちた顔をしてカズヤを見つめる。

「カズヤ」

「は、はい！」

「お前が乗る『ブレイブハート』はエンジェル隊の面々が乗る『紋章機』によつて力を発揮する。その上パートナーとの信頼関係が良好ならば尚更に力を引き上げる機体だ」

既に知っている事を話されたカズヤは、困惑したようにレスターを見つめる。

しかし、レスターはカズヤの困惑を理解していても真剣な眼差しを向け続ける。

「つまり、エンジェル隊との信頼関係が大事に成る。だから、エンジェル隊とのコミュニケーションは重要だ。それをし易くする為にこれを渡すんだ」

「で、でも良いんですか?」

「此処数日のお前の行動を見ていたが、悪用する事は無いと判断出来た。それにだ。コイツはそう言うのも察知出来て、悪用しようとする時は力を貸さないから安全だ」

「そうなんですか?」

「元々コイツは元『ムーンエンジェル隊』の一員から貰ったモノだ。渡した本人曰く、少しでも女性の気持ちに気がつけるようになれるようにと、ルクシオール赴任時に貰ったんだが……正直な話、エンジェル隊の面々に構っていられる暇は余り無い」

エルシオールに居た頃に比べれば柔軟になったレスターだが、やはり真面目過ぎるところは変わらず、エンジェル隊とは部下と上司の関係しか築けていない。

特に良く艦内の見回りと称して、『ムーンエンジェル隊』の面々と過ごしていたタクトと違って、一日の殆どをブリッジで過ごしているレスターは、『ルーンエンジェル隊』の面々と上司と部下の関係だった。それでも戦闘時は平均的な結果を出しているが、やはりタクトが指揮していた『ムーンエンジェル隊』の戦闘時のテンションの違いは大きい。『紋章機』にとつて操縦者のテンションがどれだけ重要なかを理解していても、レスターでは今の状況が限界だった。

其処でレスターが白羽の矢を立てたのがカズヤだった。エンジェル隊と早い内に打ち解け、男性恐怖症であるリコに唯一触れる事がカズヤは出来る。

「無論、俺も出来るだけやるつもりだが、お前自身も頑張ってくれると助かる」

「…分かりました。僕も頑張ってみます」

「済まんな」

自身の提案を了承してくれたカズヤに笑みを向けながら、レスターは持っていたテレパスファアをカズヤに渡すのだった。

「……………これって…本当に凄いよ」

レスターからテレパスファアを受け取った次の日。カズヤは自室でテレパスファアを繋々と眺めていた。

渡された時に効果は教えられていたが、実際に使ってみれば教えられた以上の効果を発揮していた。『ルーンエンジェル隊』の面々が艦内の何処に居るか分かるばかりか、強くテレパスファアを握れば、今エンジェル隊の面々がカズヤにどう言う気持ちを抱いているのかおぼろげながらも分かる。

確かにテレパスファアを持っていればエンジェル隊との関係も深まるのは早い。

「司令は其処まで考えて、僕にコレを渡してくれたんだらうな」

実際に昨日カズヤは、テレパスファーを渡されてから効果を確かめる為にエンジェル隊の面々に会いに行っている。

カルーアとは特別与えられている専用の魔法研究室で話をしたり、リコとは倉庫の備品の整理を手伝ったり、ナノナノとは銀河展望公園で一緒に日向ぼっこしたりとそれぞれカズヤは過ごした。就寝に着く前にはピロティで『EDEN(エデン)』のデザートについて話していたカルーアとリコから本を借りたりもした。

自分ではそれなりに楽しく過ごせたとカズヤは昨日の一日を振り返りながら、テレパスファーを制服のポケットに入れる。そのまま部屋から出ようとしますが、部屋を出る前に通信機から連絡音が響く。

「……ピピッ！」

「ん？ ブリッジから通信？ ……はい、こちらシラナミ」

『カズヤ君』

カズヤが通信機のスイッチを押すと共にココの声が聞こえて来た。

『今から格納庫に向かってくれるかしら』

「格納庫にですか？ 何か在ったんですか？」

『ちよつと急になったけどやる事が出来たの。エンジェル隊の子達も格納庫に向かつて

いる筈だから、詳細は格納庫に居るちとせさんに聞いて頂戴」

「分かりました。すぐに向かいます」

『お願いね』

その声と共にココとの通信機が切れた。

カズヤは疑問を覚えながらも急いで自室から出て、格納庫へと向かう為に直通エレベーターに乗り込む。

(一体何だろう？　ちとせさんが教えてくれるみたいだけど)

疑問を覚えながらも格納庫へとカズヤは辿り着く。

其処には既にリコ、カルーア、ナノナノが整備班長のクロワと、そばかすで鼻に絆創膏を付けた女性整備班員『コロネ・シユークルート』に、そしてちとせの前に立っていた。

カズヤは急いでリコ達の横に並び、クロワ、コロネ、ちとせに向かって話し掛ける。

「シラナミ！　只今参りました！」

「ご苦労様です。急に呼び出してすいません、カズヤ君」

「いえ……それで呼び出しの理由は何ですか？」

「今からそれを説明します」

カズヤの疑問にちとせは答えると、改めてカズヤを含めたエンジェル隊の面々の顔を

見回す。

「既にご存知でしょうが、ルクシオールは『ABSOLUTE』に帰還する事が決まりました。それで帰還する前に各『紋章機』及びブレイブハートのデータ収集を行ないたいのです」

「データ収集ですか？」

「ええ……本当はもう少し辺境宙域の探索を行なう予定でしたが、目標で在った『ゴースト』が居なくなつた事で予定は変わりました。そのせいでブレイブハートのデータが余り集まっていないのです」

リコの質問にちとせは僅かに残念さが籠もつた顔をしながら答えた。

本来の予定ではカズヤがルクシオールに赴任してからも、二週間以上は辺境宙域を探索する予定だった。その間に各『紋章機』との合体やブレイブハート単機での運用のデータを得たりする予定だったが、初日から探索目標だった『ゴースト』と遭遇し、その後は得られたデータの検証を行なっていたりしたのでブレイブハートに関するデータは集まっていなかった。

一応クロスキャリバーとスペルキャスターとの合体後のデータは得られたが、まだファーストエイダーとの合体データは得ていない。故に急遽『ABSOLUTE』に帰還する前にブレイブハートを含めた各『紋章機』のデータを収集する事が決まったので

ある。

「そう言う訳で『ABSOLUTE』に帰還する前にデータを収集する事が決まりました。隊員の皆には急かもしれませんが」

「いえ、元々決まっていた事ですし、構いませんわ」

「ナノナノも良いのだ」

「私も構いませんよ」

「僕も大丈夫です」

「ありがとうございます、皆さん」

ちとせは柔らかく微笑みながら感謝の言葉を告げ、カズヤは一瞬その微笑みに見惚れてしまう。

『ゴースト』に間接的に接触し、自らが望む手段をハッキリと確信出来たおかげでちとせは僅かにでは在るがカズヤが赴任する前よりも明るくなっていた。フォルテの説教も効果は出ているので、以前のように食事を抜いたり、早く食べられる物で済ませる事は無く、食堂で食事は取っている。最も研究しながら寝てしまう事は変わっていないのだが、それでもちとせの体調は良くなつて来ていた。エンジェル隊の面々もその事には喜んでゐる。もしかしたらこのまま『ムーンエンジェル隊』のエースと呼ばれていた頃のちとせが戻って来るかも知れないとさえ、リコ達は思い始めていた。

最もちとせの負っている心の傷の深さと大きさを知っているレスターとココは、そう易々と昔に戻る事はないと理解している。更に言えばリコ達が報告した『紋章機』が発したと言う警告の事も在る。今だ警告の意味は理解出来ないが、確実に『ゴースト』には何らかの危険性が存在している事は確か。

その事を知らないカズヤ達はちとせ、コロネ、クロアの指示に従いながら、データ収集の手伝いをして行く。

「カズヤん。次はブースターの操作の方を頼むわ」

「了解！」

コロネの指示に従ってカズヤはレバーを操作する。

それと共にコロネはコンソールを操作して、反応などの確認を行なって行く。別の場所ではクロスキャリバーの反応を調べているクロア。他の整備員に手伝って貰ってスperlキャスターのデータを収集しているテキィラ。そして最後にファーストエイダーのデータを収集しているちとせの姿が在った。

「…ファーストエイダーの反応は良いようですね。ナノちゃん、もう降りても大丈夫ですよ」

『分かったのだ！』

ファーストエイダーに乗っていたナノナノはちとせに答えると共に降りて来た。

長い時間パイロット席に座っていたので体が固くなったのか、体を伸ばしているナノの姿にちとせは苦笑を浮かべながら、今得られたデータをブリッジに転送する。

「これで今日は終わりです」

「合体はしないのだ？」

「はい。今日は各『紋章機』とブレイブハートのパイロットのデータ収集だけです。合体は後日に行いません。余り詰め込んでも疲れが溜まるだけですからね」

「ナノナノも早く合体してみたいのだ。合体していいいのナノナノだけだし」

「ええ、だからファーストエイダーとブレイブハートの合体は特に注意を払わないといけません」

クロスキャリバーとスペルキャスターは、既にブレイブハートとの合体を終えているので問題は無いが、ファーストエイダーはまだ一度も合体していない。

故にデータを収集する時は注意を他の『紋章機』よりも払わないとならない。

(そう言う点で言えば、前回の戦闘の時はクロスキャリバー、スペルキャスターのそれぞれの特性が合体時に活かしたのは良かったですね)

合体した二機の内、スペルキャスターの特性で在る索敵を活かした状況はちとせに取って助かった。

昔のように海賊船以外に今は戦闘が殆ど無い時代。更に言えば海賊船の殆どは旧式

なのでルクシオールに搭載されているセンサーの類で即座に発見出来る。その中でスペルキヤスターの特性が活かせる戦闘が在ったのは僥倖だった。

(私もすっかり研究者の考えが染み付いてしまいましたね……平和……それをずっと望んで戦っていたのに、今は寂しいとしか感じられない)

ちとせに取って今の世界の情勢は何よりも望んでいた。

だが、同時に寂しさをちとせはずっと感じ続けていた。望んでいた平和の筈なのに、其処に絶対にちとせにとつて必要だった存在が居ない。その存在が在ったからこそ、どれだけ辛く厳しい戦いでも乗り越える事が出来た。なのにその存在が今は居ない。

(…タクトさん……会いたい)

「…とせ！ ちとせ！」

「ッ！ ……あつ、ナノちゃん」

「ちとせ。どうしたのだ？ 暗い顔していたけど、やつぱりまだ体調は回復していないのだ？」

「いえ、大丈夫ですよ、ナノちゃん。心配かけてゴメンなさい」

心配そうに見つめて来るナノナノを安心させるようにちとせは微笑みながら、ナノナノの頭を撫でた。

しかし、やはり其処には隠し切れない寂しさと悲しみがあがり、ナノナノはそれを察知

するが何も言えなかった。自らが母親として慕っている女性から、ちとせが深い悲しみを持つているので不用意に昔の事を聞いてはいけなくと注意されている。

同じようにリコもミルフイーユから、カルーアとテキーラもフォルテから注意されている。

(…決めたのだ！　ちとせを悲しませている人！　会えたら絶対に叩いてやるのだ！)

そうナノナノが強い決意を固めた。

その間に他の場所でも調査が終わり、ちとせはクロア達から渡されたデータをブリッジに転送し終えると共にブリッジに戻る為に歩き出す。

カズヤ達もどれほどで『ABSOLUTE』に到着するのかレスターに聞く為に、ちとせと共にブリッジへと向かう。ちとせを先頭にカズヤ、リコ、テキーラから元に戻ったカルーア、そしてナノナノは直通エレベーターに乗り込む。すると、フツとリコは気になっていた事が在るのでちとせに顔を向ける。

「そう言えば、ちとせさんはルクシオールが『セントラルグロウブ』に到着したらどうするんですか？　ちとせさんが乗っていたのは『紋章機』やブレイブハートだけじゃなくて『ゴースト』の搜索もありましたけど？」

「…恐らくは降りる事になると思います」

「えっ?」

「まあ〜」

「ちとせ、ルクシオールから降りちゃうのだ?」

ちとせのリコの質問に対する答えに、それぞれが反応を示した。

特にナノナの顔には寂しさが浮かんでおり、ちとせは四人に向かつて振り返る。

「元々私は『白き月』から派遣された身ですので……任務に在ったブレイブハートに『紋章機』のデータが取り終われば、『白き月』に戻らなければなりませんから……それに、ノアさんの助手としての仕事に戻らないといけませんし」

「ええっ! ちとせさんって、あのノアさんの助手だったんですか!?!」

新たに教えられた事実にかズヤは心の底から思わず叫んだ。

元『黒き月』の管理者であるノアとカズヤは面識が在る。ちとせがルクシオールに赴任していたので、代わりにカズヤに座学を教えたのがノアだった。その時のノアの厳しさと容赦の無さを嫌と言うほどに味わったカズヤは、平然とノアの助手を務めていると言うちとせに驚きが隠せなかった。

しかし、驚いているのはカズヤだけで他のメンバーは逆にカズヤの驚きに首を傾げていた。

「シラナミさんは知らなかったんですか?」

「知らなかったよ。皆は知っていたの?」

「ええ、知っていましたわ。『紋章機』の説明をする時に紹介されましたから」

「ノアはちとせの事を良く褒めていたのだ！『ちとせのおかげで調査が良く進むわ』って言っていたのだ」

「そうだったんだ」

自分の知らない事が知らされたカズヤは、納得したように頷いた。

今だ自分が知らない人間関係がルクシオールには残っているのだとカズヤが実感していると、エレベーターはブリッジへと辿り着く。

五人はそのままエレベーターから降りて、ちとせが艦長席に座っているレスターに報告を行なう。

「クールダラス司令。本日のデータ収集は全て終了しました。合体に関しては後日改めて行なう予定です」

「報告ご苦労。データの方は受け取っているから大丈夫だ。後で提出用に纏めておいてくれ」

「了解しました」

ちとせはレスターに敬礼を行なうと共に、自らが座るオペレータ席に向かって行く。

その様子を見ていたカズヤ達はレスターへと近づき、代表としてカズヤがレスターに質問する。

「司令。『A B S S O L U T E』にはどれぐらいで着きそうなんですか？」

「後一週間だな。まだ、合体後の各『紋章機』のデータも取り終わっていないから、それが済んでからだ」

「そうですか。教えてくれてありがとうございます」

カズヤはレスターに礼を告げながら頭を下げ、他のメンバーもレスターに頭を下げる。

これでブリッジでの用は終わったとカズヤ達は退出しようとする。だが、突如としてオペレータ席に座っていたココが顔を上げてレスターに報告を行なう。

「司令!! 『セントラルグロウブ』から緊急通信です！」

「緊急だと? すぐに繋げ！」

「はい!!」

レスターの指示に従いココはすぐに通信回線を開こうとする。

突然の事態にブリッジに居た誰もがメインモニターに顔を向けると同時に、メインモニターに紫色の軍服を着た女性―現在『セントラルグロウブ』に勤務しているアルモ・ブルーベリーの姿が映し出された。

『良かった! この回線はまだ使用出来た! ミルフィーユさん! ルクシオールとの通信に成功しました!!』

モニターの先でアルモが喜びの声を上げると、モニターにアルモ以外にピンク色のフリルが付いたドレスを着た花飾りを頭に二つ付けた険しい顔をした女性が映し出された。

「お、お姉ちゃん!?!」

いきなり姉が現れた事と、何時も天真爛漫な笑みを浮かべている筈のミルフィューが真剣な顔をしている事にリコは思わず叫んだ。

「ミルフィュー！ 一体如何した!?!」

『レスターさん！ 大変なんです！ 『セントラルグロウブ』が攻撃を受けています!』

「何だと!?!」

『ABSOLUTE』での重要施設である『セントラルグロウブ』が攻撃を受けていると言う事実には、レスターだけではなくブリッジに居た全員が驚愕する。

「一体何処から攻撃を受けている!?!」

『分かりません！ 本当にいきなりだったんです!』

『クールダラス司令！ 既に『セントラルグロウブ』に駐留していた『EDEN』軍の半分以上が戦闘不可能になっているんです!』

「馬鹿な!?! 半分以上だと!?!」

『セントラルグロウブ』は現在『EDEN』及び『NEUE』に於いて重要な拠点。

それ故に防衛を行なっている艦は全て『E D E N』の新鋭艦。故に並大抵の戦力では陥落させる事など不可能な戦力が集中している。にも関わらず既にアルモの話では半分以上が戦闘不可能になっていると言う。

どれだけ『セントラルグロウブ』の護りが強固なのか知っているレスターは、アルモからの報告が信じられないと言う様に目を見開いていた。

『セントラルグロウブ』からは既に退避も始まっています!』

『私とミルフィーユさんは、この事を伝えようと残っているところです』

「…退避している時間は在るのか? 『E D E N』と『N E U E』の『クロノゲート』は

『セントラルグロウブ』から距離が離れているんだぞ?」

『そ、それなんですけど…信じられないような援軍が来てくれたんです。今はその援軍のおかげで敵と『E D E N』軍の戦闘は膠着状態に持ち込んでいるんです』

「援軍だと? 一体誰が援軍に來たと言うんだ、アルモ?」

『……『ゴースト』です』

『ツ!?!』

アルモが告げた援軍の正体に、ブリッジに居る誰もが困惑したように目を見開いた。

その困惑が分かると言うようにモニターに映っているミルフィーユが話を続ける。

『敵の背後から突然に『ゴースト』さんが現れたんです。それからすぐに『ゴースト』さ

んと通信が繋がって、『時間を少しでも稼ぐから』『E D E N』に退却しろ』ってメッセー
ジが送られて来たんです』

『それから『ゴースト』はすぐに敵艦に攻撃を開始したんですけど、幾ら『ゴースト』や
『E D E N』軍が敵艦を破壊しても次から次へと敵艦が現れるんです』

『待て……敵艦が現れるだと？ 一体何処から現れているんだ？』

『そ、それは……』

ーローブウン!!

アルモが最も重要な情報を告げようとした瞬間、突然に通信が途切れた。

レスターは即座に通信を繋いでいたココに顔を向けるが、ココは悲痛そうな顔をしな
がら首を横に振るう。

「駄目です！…通信が完全に切れました！」

「原因は!？」

「クールダラス司令!! 本艦周辺に強力な通信ジャミングが張られています！」

通信が切れると同時に原因の解析を行っていたちとせが、即座にレスターに報告を
行なった。

同時にブリッジ内部に警報音が鳴り響き、ココはルクシオールに接近する複数の艦影
をレーダーで捉える。

「本艦に接近する艦影を確認！ 数は八隻とされます！」

「総員第二戦闘配備！ 敵の詳しい情報を解析！ エンジェル隊はブリーフィングルームに向かえ!!」

『了解（です）（なのだ）!!』

レスターの指示にブリッジ内部は慌しく動き出し、『ルーンエンジェル隊』はブリーフィングルームへと急いで向かうのだった。

2—3

レスターの指示を受けてカズヤ達がブリーフィングルームで待っていると、レスターが内部に入ってきて来る。

それぞれ椅子に座りながら緊張したようにレスターの言葉を待つ。一週間前の戦いとは違い、今度の相手は複数であり、通信ジャミングまで使用して来ていると言う明確に敵対行動を行なっている。確実に戦闘が行なわれるのは間違いない。

海賊を相手に戦闘を行なってきたリコ、カルーア、ナノナノはともかく、実戦が一度しかしていないカズヤは緊張しながらレスターの言葉を待つ。その様子をレスターは横目で確認するが、今は何も言わずに状況を説明する。

「今回の作戦について説明する。目標はルクシオールに接近して来る所属不明艦八隻だ」

コンソールを操作し、現在ルクシオールが居る宙域の映像が映し出され、接近して来る八隻の艦艇がマーカーで示された。

「作戦の内容はルクシオールに接近して来る艦艇を全て撃沈する事だ」

「あの、戦闘を回避して敵艦の捕捉から逃れる事は出来ないでしょうか？」

純粹に疑問に思った事をリコはレスターに質問した。

戦闘で相手を倒す事も一つの手段だが、戦闘を避ける事も手段の一つだった。ルクシオールは『EDEN』の最新鋭艦であり、その足は速い。即座に反転すれば逃げ切る事は可能。だが、レスターは相手を撃沈する事を優先した。

「確かにリコの考えている通り、此処で反転すれば逃げ切れるかも知れんが……相手側は確実にルクシオールを狙って来ている。逃げ切るにしても多少の時間は掛かる。その間、ジャミングのせいで通信が出来ない。『ABSOLUTE』と即時通信を行なうのには、相手を撃沈した方が早い」

「……分かりました」

レスターの説明にリコは納得したように真剣な顔をしながら頷いた。

リコ自身『ABSOLUTE』の事は気になっていた。何せ直前の通信で『BSOLUTE』《アブソリュート》は、現在進行形で襲われている事が姉であるミルフィューの口から教えられたのだから。無事なのかどうかを確かめる為にも通信は早く復帰する事に越した事は無い。

質問が終わった事をレスターは確認し、話を再開する。

「説明を続ける。敵は全て同型艦。形状からして駆逐艦の類だと思われるが、詳細は不明だ。少なくとも『EDEN』や『NEUE』での艦のデータとはどれも一致しなかつ

た。また、広域スキャンを行なった結果、相手は無入艦だと判明している」

「無人艦？　じゃあ誰も乗っていないのだ？」

「間違い無いだろう。敵の行動を確認してみたが、ただ真つ直ぐにルクシオールに向かつて来る以外の行動を取っていない。センサーで伏兵の確認も行なってみたが、反応は無かった。恐らくはルクシオールの足止め目的でやって来た艦艇だろうな」

「足止めと言う事は、やっぱりこれは本格的な敵対行動と言う事でしょうか？」

「相手側はルクシオールを標的として行動している。何処の勢力かは不明だが、明確に敵対して来ている。どちらにしても戦いは避けられん。『ルーンエンジェル隊』は敵艦を撃退してくれ。それでは配置を説明する。今回の作戦でブレイブハートが合体する『紋章機』は……」

「司令！　お願いです！　今回の合体は私にしてください！」

レスターの言葉を遮るように突然にリコが叫んだ。

何時に無いリコの積極的な意見にレスターは目を丸くするが、リコは構わずにレスターに進言する。

「今なら凄い力が出せそうなんです！　だからお願いします!!」

(……ミルフィューの事が心配でリコのテンションが上がっているようだな)

レスターは即座にリコの状態を察した。

一刻も早くミルフィューの安否を確認したいと言う思いが、リコのテンションを一時的に引き上げている。予想外では在るが、これは僥倖でも在った。『紋章機』は操縦者のテンションによって性能が上下する。今のリコの様子とブレイブハートの合体システムが合わされば、前回の合体時よりもクロスキャリバーの性能が増幅される間違い無い。

同時に未知の相手と戦闘する事に緊張しているカズヤに安心感を与える事も出来る。とレスターは判断する。

「(予定ではスペルキャスターと合体させて中距離から一気に攻め込み、敵の足が乱れたところをクロスキャリバーとファーストエイダーで仕掛けるつもりだったが、此処はクロスキャリバーと合体させた方が良さそうだな) : 分かった。今回の合体はクロスキャリバーで行く。カズヤも良いな？」

「は、はいー！」

「よし。では、『ルーンエンジェル隊』出動せよ!!」

『了解(です)(なのだ)!!』

レスターが発した号令に『ルーンエンジェル隊』は敬礼を行なうと共に、即座に自らの愛機が置かれて格納庫に向かって走り出したのだった。

格納庫へと辿り着いたカズヤは自らが乗る機体であるブレイブハートに乗り込み、発

進する時を緊張と興奮、そして不安を抱きながら待っていた。

(この前とは違う……。本当の戦場だ。頑張らないと！)

相手は無人機とは言え、此方を沈める為に攻撃を行なって来る。

前回のミスで危なく撃沈されかけた事がカズヤの脳裏に過ぎる。

(か、考えちゃ駄目だ！)

悪いイメージが次々と脳裏に浮かび上がり、カズヤは頭を振って振り払おうとする。

そんなカズヤにブリッヅから通信が届き、レスターの声が耳に届く。

『聞こえるか、カズヤ？』

「は、はい！」

『…その様子だと緊張しているようだな？』

「い、いえ、大丈夫です！」

『隠す必要は無い。誰だつて戦うと成れば緊張や不安に襲われるものだ。俺だつて今も

緊張している』

「し、司令もですか？」

『ああ、そうだ』

レスターにはカズヤが抱いている不安が良く理解出来た。

昔、レスターも突然に重要過ぎる任務に恩師から就くように命じられた。その時に不

安が無かったのかと言われれば、勿論在った。何せトランスバールと言う国家を運命を左右するほどの任務だったのだから。それを乗り越えて完遂する事が出来たのは共に居たエルシオールの乗員達と、自らが担いでいた艦長だったタクトが居たからこそだった。

『カズヤ。陳腐な言葉だが、お前は一人で戦う訳じゃない、他の『ルーンエンジェル隊』のメンバーも居る。合体して一緒に戦うリコも居るんだ。無論俺達もな。フォローやバックアップは必ず入れる。だからお前は自分が出来る事を頑張れ』

「…司令……。ありがとうございます！」

自分の不安を少しでも晴らそうとしてくれたレスターにカズヤは礼を告げ、改めて操縦桿を握り直す。

同時にブレイブハートが発射する順番になった事を確認し、カズヤは操縦桿を動かす。

「カズヤ・シラナミ。行きます!!」

ブレイブハートは発進口から飛び出し、先に発進していたクロスキャリバーに向かい、そのまま二機は合体を終えると共に敵艦に向かって加速した。

「行きましょう、シラナミさん！」

「うん、リコ!!」

合体した事で相互での通信が行なえるようになったリコとカズヤは互いに呼びかけ、クロスキャリバーを更に加速させる。

同時にカズヤは前回の合体の時とは明らかに違う感覚を感じ取る。

(な、何だこれ!? この前と出力の桁が明らかに違う!)

前回の戦闘の時よりも明らかにクロスキャリバーの出力が違っていた。

それを表すようにクロスキャリバーは併走していたスペルキヤスターとファーストエイダーを追い抜いて、突出してしまう。

『ちよ、ちよっと! 桜葉、シラナミ! スピードを抑えなさいよ!!』

『このままだと、リコちゃんとカズヤだけで敵に向かっちゃうのだ!!』

「えっ!? は、はい!」

テキーラとナノナノの発した警告に、リコは慌ててクロスキャリバーのスピードを落とす。

リコ本人からすれば何時も同じ操縦を行っていた筈なのに、明らかにクロスキャリバーの出力は段違いに上がっていた。

その様子はルクシオールからも確認され、即座に解析を行なっていたちとせが結果をレスターに報告する。

「クールダラス司令。現在のクロスキャリバーの出力は、前回の時よりも大幅に上がっ

ています。同時に性能面も大きく強化されている事が確認されました。出力だけなら、好調時のラツキースターに匹敵するかもしれませぬ」

「そうか……これが『NEUE紋章機』とブレイブハートが合体した時の真価と言う事か」

前回の戦闘の時もブレイブハートと合体する事で、確かに性能や能力面での強化は見られた。

だが、今回ののは明らかに桁が違っている。テキィラ、ナノナノのテンションもデータ上では通常時よりも高い数値を表しているが、今のリコのテンションはソレさえも大きく上回っている。

その上、前回と違ってカズヤとリコの間の親密さも増している。改めて見せられたブレイブハートの真価にレスターやブリッジに居るメンバーが感嘆していると、クロスキャリバーを先頭にスペルキャスト、ファーストエイダーは敵艦に攻撃を開始した。

最初に攻撃範囲が広いスペルキャストが敵を攪乱する為に多数の遠距離誘導レーザー『ボルト』を放つ。

放たれたレーザーは独特な軌道を描きながら敵艦へと迫る。本来真っ直ぐにしか進まない筈のレーザーが、不規則な動きで迫る事に対処が難しいのか、敵駆逐艦へと直撃する。それに続くようにクロスキャリバーが通常時を寄りも増しているスピードを利

用して急接近し、元々備わっている近距離ビームファンクスを駆逐艦に向かって連射する。

「食らえ!!」

攻撃を開始したりコに続くようにカズヤは操縦桿を操作して、駆逐艦の武装に向かってブレイブハートに備わっているラピッドレーザーを撃ち込む。

敵駆逐艦の武装はラピッドレーザーによつて破壊され、更なるクロスキャリバーの追撃攻撃に寄つて呆気なく駆逐艦は撃沈された。リコはすぐさま操縦桿を動かし、自分達をフォロウする為に周りの駆逐艦にチャクラムを放つていたファーストエイダーの援護に向かい、スperlキャスターと共に別艦へと攻撃を開始する。

戦闘はリコ達が敵を完全に圧倒していた。データで観測される情報では敵の駆逐艦は『EDEN《エデン》』軍の艦に劣らない筈なのに、三機の『紋章機』の前では全く歯が立たなかった。特に戦果を上げているクロスキャリバーは、既に合計五機の駆逐艦を沈めた。スperlキャスターとファーストエイダーもそれぞれ一隻ずつ沈めたが、今のクロスキャリバーには全く及んでいなかった。

そして残る駆逐艦が一隻になったと同時にクロスキャリバーから白い発光が発せられ、左右に取り付けられている合計二門の加粒子砲の照準が合わさる。

「シラナミさん！ 行きますよー！」

「うんー！」

「ハイパー…ブラスター…!!!」

リコが操縦桿に付いているスイッチを押すと同時に二門の加粒子砲から光が放たれ、一瞬にして駆逐艦を貫いた。

『ハイパーブラスター』。クロスキャリバーの最大の砲撃である強力無比な加粒子砲。通常時でも強力な砲撃はリコのテンションが高い事とブレイブハートに寄る増幅によつて更に強力になり、駆逐艦の船体をに大穴を開け、一拍の間をおくと共に宇宙空間に大きな爆発が起こった。

圧倒的な『ハイパーブラスター』の威力にブレイブハートから見えていたカズヤだけではなく、放った本人であるリコも呆然としてしまう。しかし、呆然としている二人に構わずに、すぐさまレスターから二人に通信が届く。

『紋章機全機に告ぐ！ これよりルクシオールの護衛を命じる。各機は離脱完了までルクシオールの護衛を命じる！』

「ク、クロスキャリバー！ 了解です！」

『スペルキャスターも了解よ！』

『ファーストエイダーも了解なのだ!!』

レスターの指示にリコ、テキィラ、ナノナノが応じると共にルクシオールは反転して

最大速度で現在の宙域から離脱するのだった。

ルクシオールが通信ジャミングを受けた頃、『ABSOOLUTE』内部は『セントラルグロウブ』を中心として激しい戦闘が行なわれていた。

突如として『セントラルグロウブ』に襲い掛かって来た多数の所属不明艦は、勧告も無く『セントラルグロウブ』の防衛を行なっていた『EDEN』軍に奇襲を仕掛けて来た。その奇襲により『EDEN』軍は大きな被害を受けた。その上、どう言う訳なのか所属不明艦の軍勢は『EDEN』軍の防衛網の穴を正確に攻撃し、次々と『EDEN』新鋭艦を戦闘不能に追い込んでいった。このまま所属不明艦の軍勢に逢えなく、『EDEN』軍は敗北してしまうと、戦場に居る者の多くの脳裏に絶望が過ぎった。

だが、突如として今度は所属不明艦の軍勢が背後から奇襲を受けた。その奇襲を行なったのは『EDEN』軍が秘密裏に追跡を行なっていた『ゴースト』。

『ゴースト』は何時も使用しているステルスを使用せず、その姿を『EDEN』軍と所属不明艦の軍勢に晒しながら、次々と所属不明艦を撃沈して行つた。この行動に奮い立ったのは言うまでもなく『EDEN』《エデン》軍だった。

詳細は不明ながらも『ゴースト』の形状は『EDEN』製の『紋章機』を一致してい

る。『E D E N』にとつて『紋章機』とは最強の象徴にして、戦場に共に居るだけで安心感を与えてくれる存在。それ故に『ゴースト』が共に戦つてくれる事は、『E D E N』軍に僅かながらも安心感を与え、同時に士気を引き上げていた。

そのおかげで戦況は『E D E N』軍が巻き返し、何とか五分五分の状況に持ち直せていた。無論『ゴースト』は其処まで見越してステルスを解除して現れたのは言うまでも無い。

(何とか戦況は持ち直せたな)

《肯定……。しかし、以前戦況は此方が不利》

『E D E N』に繋がっている『クロノゲート』に退却しようとしていた『E D E N』艦に攻撃しようとしていた駆逐艦を、大型バレルレールガンに寄る精密射撃で『ゴースト』は撃沈しながら、即座に別の艦艇に向かつて機首を向けて移動する。

(出来るだけ『セントラルグロウブ』に敵艦を近づけないようにしてくれ。まだ、『セントラルグロウブ』から避難出来ない人員が居る。だから、避難が終わるまで時間を稼ぎたいんだ)

《了解》

素早い速さで防衛艦の間を通つて『セントラルグロウブ』に突攻しようとしていた突撃艦を、両翼部分に備わっている小型のミサイルポットから撃ち出したミサイルで沈め

ながら、『ゴースト』は目まぐるしく戦場を飛び回る。

当然ながら所属不明艦の軍勢は『セントラルグロウブ』への侵攻だけではなく、自分達の邪魔をしている『ゴースト』にも攻撃を行なっている。だが、『ゴースト』に攻撃を集中させようとすれば、『EDEN』艦が所属不明艦を攻撃して行動を阻む。そのような行動が取れるのは、『ゴースト』と『EDEN』軍の動きが連携しているからこそだった。(ミルフィーに感謝しないと行けないな)

最初に撤退するようにメッセージを送ると共に、現状の指揮を任せて欲しいと頼んでいた。

普通ならば了承される事など無い提案。幾ら『紋章機』に似ている『ゴースト』とは言え、『EDEN』とは殆ど交流らしい交流はしていない。寧ろ『ゴースト』は『EDEN』との接触は出来るだけ避けていた方なのだから。

幾ら『NEUE』で海賊退治として有名な『ゴースト』とは言え、普通なら現状の指揮など任せてくれる筈が無い。不可能とさえ言つて良い。だが、その不可能を可能にして来る者が『セントラルグロウブ』には居た。『時空の女神』と言う異名で現在呼ばれている『ミルフィーユ・桜葉』である。

『ゴースト』はメッセージを送ると共にミルフィーユと交渉を行ない、指揮権を得る事が出来た。最もその代償は当然ながら大きかったが。

(はあく、気が重いな)

ミルフィーユに頼まれる事を理解しているが故に、今後の事を思つて気持ちには沈む。それでも尚、『E D E N』軍に送る指揮は的確であり、順調に『セントラルグロウブ』から退却は進んでいた。だが、それも限界に近づいて来ていた。

的確に最小の攻撃で敵艦を落として居るとは言え、『ゴースト』にも限界は存在する。更に言えばダメージも蓄積されて来ていた。

《両翼ミサイルポット残弾数ゼロ……及び大型バレルレールガン残弾数ゼロ……エネルギー値も50%以下に低下中……機体強度半減》

(くっ！ 流石にそろそろ限界か！ もう少しなのに！)

戦闘を開始してから実に『ゴースト』は二十隻以上の敵艦を落としている。

『E D E N』軍の連携も加えれば合計では六十隻以上に撃墜数は上がる。しかし、それも限界に近かった。戦場に残っている『E D E N』軍の艦艇も残り少ない。退却は進んでいるのは喜ばしいが事だが、『ゴースト』に襲い掛かる攻撃は更に過激さを増していた。

更に言えば撃沈しても敵艦は次々と現れるので、補給出来る場所が無い『ゴースト』では最終的に相手側が勝利するのは当然の結末。寧ろこれまで持たせられていたのが不思議なぐらいなのだ。

(後一隻だ！ あの一隻が『セントラルグロウブ』から出るシャトルを回収出来れば避難は終わる！ 何とか持つ……ッ!?)

一瞬の隙。エネルギーが低下し、残弾数もゼロになってしまった『ゴースト』のほんの僅かな隙をつけて放たれた敵艦からのレーザー射撃が、『セントラルグロウブ』から発進するシャトルを受け取っていた艦に直撃した。

幸いにも撃沈はしなかったが、これ以上戦場に残れるほどの耐久が在るようには見え無かった。すぐさま退却しなければ避難した者達もろとも今度こそ撃沈されてしまう。即座に『ゴースト』は指示を飛ばす。

(残っている全艦は避難艦を護衛して退却……。クソッ！)

不利なのは最初から分かっていたこと。

今まで持ちこたえられていたのが奇跡に近い。だが、遂にそれも限界に至った。これ以上の戦闘継続は不可能だと判断し、せめて残り僅かでも時間を稼ごうと『ゴースト』は迫って来ている敵艦の軍勢に使用出来る中距離ビーム砲の照準を合わせる。

だが、『ゴースト』が攻撃を開始する前に退却を命じた筈の『EDEN』^{エデン}軍の艦艇が前に出て来る。

(なっ!?)

突然の指揮を無視した行動に『ゴースト』は攻撃を中止した。同時に今まで指揮の為

に繋げていた通信から声が届く。

『此処は我が艦が時間を稼ぐ！』『ゴースト』！ 濟まないが『セントラルグロウブ』に残っている『時空の女神』と通信士を救助してくれ！』

(……………)

『本艦にはシャトルは無い。しかもシャトルでは途中で撃沈される可能性も高い。だが、其方ならば『セントラルグロウブ』に入って彼女達を救助して即座に退却出来る筈だ。どうか、頼む』

(……………行けるかい?)

《可能…本機だけならば即座に退却は可能……これ以上の戦闘継続は不可能に近い為、相手側の提案を受け入れ即時離脱を推奨》

受け入れるべき提案。このまま戦えば敵に撃沈されてしまう。

それは望むところではない。本来の目的も果たせていない現状で自らが沈む事は『ゴースト』にとつて絶対にしてはならない。本当ならば戦闘継続が難しくなった状況で見切りをつけ、『EDEN』軍を見捨てて退却する予定だった。

その予定を崩したのは自らが受け入れている存在が赦さなかった事と、退却しようとする度に走る理解不能なノイズのせいだった。ノイズは今も走り、計算では退却しなければならぬのに退却を阻んでいる。機械である筈の自らに走るノイズに苛立ちを覚

えながらも、ソレを悟られないようにしながら内に居る存在に呼びかける。

《此処で本機が沈むのは容認不可…本機はこれより『セントラルグロウブ』に向かい、救助者に乗せると共に即時離脱……異論は認めず》

(……分かった…離脱する)

悔しさと悲しさに支配されながらも了承し、『ゴースト』は機首を『セントラルグロウブ』に向けて急行する。

その様子を確認した『E D E N』軍の艦は、『ゴースト』が自分達の頼みを聞いてくれた事を感謝していた。本来ならばこのまま『ゴースト』は自分達の頼みなど叶えずに離脱する事が出来る。にも関わらず『ゴースト』は『セントラルグロウブ』に向かってくれた。

その上、自艦が前に出なければ殿も行なつてさえくれようとしていた。例え得体の知れない機体とはいえ、其処までされて『ゴースト』を見捨てる事は出来なかつた。

『総員！ 敵艦を『セントラルグロウブ』に近づけさせるな!!』『E D E N』軍の底力を奴らに見せてやるんだ!!』

今までの戦闘で損傷が多く見受けられるにも関わらず、一隻の艦は真つ直ぐに五十隻以上存在している敵艦隊に向かって突撃し、撃沈される直前まで奮戦したのだった。

2—4

『セントラルグロウブ』内部通路。

『セントラルグロウブ』のマスターコアが置かれている中心部から離れたミルフィューとアルモは、互いに手を握り合いながら必死に脱出用のシャトルが出入りしている港場に向かって走っていた。

「ミルフィューさん！ 急ぎましょう！」

「うん！ だ、だけど、ドレスのせいで走り難いよお！」

走る度に邪魔をするようにヒラヒラと揺れる自らが着ているフリルの付いたピンク色のドレスに、ミルフィューは愚痴を零した。

現在発見されている唯一の『ゲートキーパー』と言う事で、神秘さを持たせる意味も在って着ているドレスだが、現状では動き難いだけの服でしかなかった。これならば『ムーンエンジェル』隊の制服の方が動き易いとミルフィューが内心で考えていると、港場に繋がる出入り口が見えて来る。

「もう少しですよ！」

「そうだね、アルモ！ 急ごう！」

二人は互いに言い合いながら出入り口を通り、港場へと辿り着いた。

だが、既に其処には脱出用のシャトルは一隻も残っていないかった。本当ならばミルフィーユとアルモが来る前にシャトルが一隻戻って来る筈だったのだが、敵の攻撃に寄って脱出用のシャトルを受け取っていた艦が損傷を負った為にシャトルは戻って来ていなかった。

愕然とした表情をミルフィーユとアルモは浮かべ、呆然と立ち尽くしてしまふ。その二人の背後から音も無く人影が忍び寄り、ミルフィーユを背後から羽交い絞めにする。

「――ガシツ！」

「キャッ！」

「ミルフィーユさん!?!」

ミルフィーユの悲鳴にアルモは慌てて振り返った。

そしてアルモは驚愕で目を見開く。ミルフィーユを背後から羽交い絞めにして人物をアルモは知っていた。羽交い絞めにされているミルフィーユも顔を動かし、アルモ同様に目を見開いて自身を捕まえている相手を見つめる。

「ど、どうして貴方が!?!」

「フフフツ、全てを取り戻す時が来たと言う事だ、『時空の女神』よ」

「それじゃ、今起きている襲撃の首謀者は!?!」

「この私と言う事だ」

アルモの叫びに楽しげに相手は答え、ゆつくりとレーザーガンを取り出してアルモに照準を合わせる。

「……カチャッ！」

「ッ!?!」

「必要なのは『時空の女神』のみ。貴様には死んで貰うぞ」

「そんな事をさせません!!」

ミルフィューは叫ぶと共に相手から逃れようと暴れるが相手はビクともせず、煩わしげにミルフィューに顔を向ける。

「無駄な事は止めるのだ。予想外のイレギュラーは在ったが既に戦況は決した。もうまもなく『セントラルグロウブ』は陥落する。『N₁E₁U₁E₁』宇宙の中心惑星である『セルダー』も我が手に落ちた。貴様らには逃げ場など無い」

「そんな!?!」

「さあ、死ぬが良い!!」

「アルモ! 逃げて!!」

レーザーガンの引き金を引かせないと言うようにミルフィューは必死に暴れるが、相手を構わずに引き金に指を掛ける。

アルモは迫る死の恐怖から逃れようと背を向けて走り出そうとするが、無情にもレーザーガンの引き金は――引かれなかった。

「……ドオオオオオン!!」

「何ッ!?!」

引き金が引かれる直前、港場の入り口から凄まじい勢いで『ゴースト』が飛び込んで来た。

止まる事など考えていないようなスピードに寄って、強力な風圧を巻き起こり、レーザーガンを構えていた相手は慌てて体勢を低くし、アルモも手摺りに掴まって吹き飛ばされそうになるのを耐える。その間に港の奥側に飛び込んでいた『ゴースト』が逆噴射をしながら戻って来て、アルモのすぐ傍で急停止する。同時に『ゴースト』のコックピット付近に備わっているバルカン砲がミルフィーユを捕まえている相手に向けられる。

自らが持つレーザーガン以上の強力な火力を向けられた相手は、完全に動きが止まってしまう。その隙にアルモは『ゴースト』の傍に駆け寄る。すると、『EDEN《エデン》』製の『紋章機』と同じようにコックピットらしき場所のハッチが開き、無人の内部がアルモの目の前に晒された。

「ハ、ハ、これって!?!」

「アルモ! 『ゴースト』さんに乗って逃げて!!」

「ミルフィーユさん!? でも!?!」

「レスターさんに! 皆に伝えて! お願い!!」

「さっせんぞ!!」

ミルフィーユの叫びに首謀者は慌ててレーザーガンをアルモに向け直す。

自らの腕の中にミルフィーユが居る事から、『ゴースト』が向けているバルカン砲は威嚇に過ぎないと悟ったのだ。

自身に向けられたレーザーガンに、アルモは辛そうに顔を歪めながらも慌てて『ゴースト』のコックピットに向かつて飛び込む。同時にレーザーガンが発射されるが、『ゴースト』は急に機首を動かす事で発射されたレーザーを自らの装甲に当てさせた。

「キャツ!!」

「ーードゴツ!」

急に機首が動いた事でコックピットに飛び込んだアルモは体勢を整える暇が無く、コックピット内部の壁にぶつかつた。それによってアルモは気絶し、コックピット内部に倒れ伏す。

「このイレギュラーが!!」

自らの計画を悉く邪魔をする『ゴースト』に、首謀者は怒りながらレーザーガンを連射する。

だが、個人用のレーザーガンでは『ゴースト』の装甲を傷つける事は出来なかった。その間に『ゴースト』は機首を港場の入り口の方に向け直し、開いていたコックピットのハッチが閉じる。同時に『ゴースト』外部スピーカーからミルフィューに向かって、合成されたと思われる男性の機械音声が響く。

『ミルフィュー!! 必ず! 必ず助けに来る!! だから、待っていてくれ!!』
「えっ? ……今の声は?」

合成された音声のせいでハッキリと断言出来なかったが、それでも何処か懐かしさを覚える言い方にミルフィューは呆然と『ゴースト』を見つめる。

ソレと同時に『ゴースト』の背部スラストターが噴射し、港場から『ゴースト』は急加速で飛び出した。その先には既に『セントラルグロウブ』を包囲するように無数の敵艦が周囲を囲んでいたが、『ゴースト』は更にスピードを上げる。

それと共に『ゴースト』が向かった先の空間が歪み、罅割れるように黒い穴が発生し、『ゴースト』は迷う事無く飛び込んで戦場から消え去った。

「おのれ! おのれええええええええ!! イレギュラーが!! 貴様だけは、貴様だけは必ず破壊してくれる!! 『唯一神』である私の邪魔をしてくれた事を必ず後悔させてくれるぞ!!」

全ての元凶である首謀者は『ゴースト』が消え去った空間を睨みながら、怒りと憎悪

に満ちた叫びを上げた。

その腕の中に捕らわれているミルフィューは、先ほど『ゴースト』から聞こえた声の頭から離れずに『ゴースト』が消え去った空間を呆然と見つめていたのだった。

その頃、足止めの為に派遣されたと思わしき駆逐艦八隻を撃退し終えたルクシオールは、安全と思われる宙域に辿り着いていた。

襲い掛かって来た敵の正体が分からないので現実とは言えないが、一先ず広域センサーに敵の反応が出ていない事を確認したレスターは、第三警戒態勢にまで警戒を下げ、ルクシオールの護衛を行なっていた『ルーンエンジェル隊』にも帰艦指示を出した。帰艦したカズヤ達はすぐさまブリッジへと向かい出した。敵が居なくなつた事によつて通信ジャミングは無くなつている。『ABSOLUTE』との通信が可能になっているかもしれないとカズヤ達は思いながら直通エレベーターに乗り込んで、ブリッジへと辿り着く。

『ルーンエンジェル隊』！ 帰艦しました！

「……………苦勞だった」

険しい声と凄みを感じさせるような声でレスターはカズヤ達に声を掛けた。

何時も以上に気を張っているレスターにカズヤ達は驚きながらも、レスターの傍に近寄り、リコがレスターに質問する。

「あの……司令？ 『ABSOLUTE』との通信はどうなんですか？」

レスターが発する雰囲気から何時ものように気軽には呼べず、リコは恐る恐る質問した。

それに対してレスターは表情を変えずに、ゆっくりとリコ達に向かって首を横に振るう。

「…残念だが、『ABSOLUTE』との通信は繋がらなかった。それだけではなく、セルダール付近に在る『EDEN』関連の中継地点及び本星セルダールとも通信は不可能になっている」

「そんな!？」

「これは……かなりヤバそうな状況みたいね」

『ABSOLUTE』だけじゃなくて、セルダールまで通信が繋がらないのは可笑しいのだ」

「……お姉ちゃん」

それぞれがレスターの発言に声を漏らし、現状が自分達が考えている以上に不味い事態になっている事を悟った。

レスターは四人の内心を悟るが、今得ている情報を隠していても意味は無いと考えてオペレーター席に座っているココに呼び掛ける。

「ココ。さっきの放送をモニターに映してくれ」

「宜しいのですか？」

「構わん。遅かれ早かれ知る事だ」

「分かりました」

ココはレスターの指示に従ってコンソールを操作し出す。

カズヤ達はレスターとココの会話の内容の意味が分からず疑問に首を傾げると、レスターが説明する。

「お前達が戻る前に『NEUE』全域に放送が流れた。しかも通信回線に割り込むような形でな」

「もしかして…私らが戦った不明艦の首謀者からの宣戦布告かしら？」

「ああ……テキーラの言うとおりだが……問題はその首謀者だ」

戦闘が終わっているにも関わらず、レスターが発する雰囲気は戦闘中の雰囲気と同じだった。

同時にカズヤ達は気がつく。ブリッジ内部は何処か困惑し、誰もが動揺をしているに体をソワソワと動かしていた。ココやちとせも良く見れば何か在り得ない事を見たか

のように疑問と困惑に満ちた顔をしている。

一体自分達が居ない間に何が在ったのかとカズヤ達が疑問に思うと同時に、作業を終えたココが告げる。

「メインモニターに映像を映します」

ローブウン！

『えっ!?!』

メインモニターに映し出された映像の中に立つ見覚えの在り過ぎる人物の姿に、カズヤ達は揃って驚いた。

映像に映し出されたのは一週間前にルクシオールにカズヤを送り届けてセルダールに向かった筈の人物。『フォルテ・シュトレン』が厳しい表情をしながら立っていた。予想もしていなかった人物が映し出された事にカズヤ達は驚いて固まってしまいが、映し出されたフォルテは構わずに厳かに口を開く。

『我が名はフォルテ・シュトレン。この『NEUE』宇宙に新たな秩序をもたらす存在だ』

「きよ、教官!?! 一体何を言ってる!?!」

「落ち着け、カズヤ…。まだ、話は終わっていない」

動揺するカズヤの肩をレスターは叩き、続きを見るように促がす。

ナノナノ、リコ、テキーラは不安そうに顔を歪めながら、先ほど映像に映し出されたフォルテが偽者で在る事を願った。

カズヤも同じ気持ちだった。それだけフォルテは『ルーンエンジェル隊』の面々に信頼されている。レスターもまた同じ戦場を共に戦い抜いただけに、フォルテがクードターなど実行するとは思えなかったが、少なくともセルダールが支配下に置かれているのは紛れもない事実だった。

「……エンジェル隊は一先ず自室で休んでいて構わん。今後の方針が決まり次第、ブリッジに呼び出す」

実際に現状はレスター達にとって不味い状況だった。

帰還する予定だった『ABSOLUTE』とは連絡が取れず、その前に行けるセルダールはクードター軍の支配下。フォルテの放送のせいで『EDEN』への不信が『NEUE』で高まろうとしている。

素直に『EDEN』の艦であるルクシオールを入港させてくれる惑星が在るのかも分からない。

（あの不明艦は少なくともこれまで『NEUE』で確認されていない。『EDEN』でも同様だが、フォルテの放送のせいで『EDEN』とは無関係だと言っても信じては貰えんだろうな。誰が考えたかは分からんが厄介な策を使って来る）

少なくとも現状が楽観視出来る状況では無くなって来ている事をレスターは悟っていた。

だが、それを表に出すようなミスは起こさない。ただでさえ親しい相手がクーデターの実行犯かも知れない状況にカズヤ、リコ、ナノナノ、テキーラは動揺している。特にリコはミルフィーユの事も在るので尚更に不安が募るような事を言う訳には行かない。指示に従ってブリッジから出て行くカズヤ達の背をレスターは無言で見つめ、四人の姿がブリッジから見えなくなると、ちとせとココに話し掛ける。

「ちとせ、ココ…艦長室に来てくれ。今後の事に関して話し合いたい」

「…了解しました」

「了解です」

ちとせとココは座っていたオペレーター席から立ち上がり、レスターと共にブリッジから出て艦長室へと移動する。

無言のまま三人は艦長室に入り込み、確りと扉にロックを施すと、顔を見合わせて話し合いを始める。

「それでちとせ？ さっきの映像の解析は済んだか？」

「はい…特に可笑しい点は見受けられませんでした。それと映像のフォルテさんも調べましたが、容姿と声紋が一致しました。最もこれらは偵察用のグローブや変声機など

を使えば誤魔化す事が出来る類なので本人かどうかは断言出来ません」
「確かにな」

「でも、もしも本物のフォルテさんだったら可笑しい点が在ります。今フォルテさんが最も信頼している機体である『ハッピートリガー』は『ED^エEN^デ』でフルメンテを受けているんですから。あのフォルテさんが『ハッピートリガー』じゃなくて無人機を主力に使うなんて考え難いです」

ココの意見にレスターとちとせは同感だった。

これまでフォルテは数多くの無人機を相手に戦って来た。それ故に無人機の利便性と不便さを良く知っている。何よりもフォルテが最も信頼している機体は愛機である『ハッピートリガー』。しかし、『ハッピートリガー』は他の『ED^エEN^デ』製の『紋章機』と共に、二週間ぐらい前にフルメンテナンスの為に『ED^エEN^デ』に在る『白き月』に送られている。

最も信頼する機体が手元に無いと言うのにフォルテがクーデターを起こすとは、レスター、ちとせ、ココには考えられなかった。

「……状況から考えて本当にクーデターを起こしたのがフォルテ本人だったとしても、何らかの事情が在ると考えるべきだろうな。無論偽者と言う可能性も無くは無いが」

「……偽者で在る事が一番望ましい事ですけれど」

ちとせとしては放送に映っていたフォルテが偽者で在る事を願っていた。

偽者ならばフォルテは姿を悪用された被害者の立場に収まる。だが、もしも本物だった場合は何かしらの処罰が待っている。レスターとココもその事を察して顔に苦いものが浮かぶ。

「…どちらにしても俺達が現状で行なうべきなのは、やはりセルダールに向かって真実を調べるしか無いと言う事だ。その為には……ちとせ。済まないが後で倉庫の物資がどれだけ残っているか調べてくれ。本来ならリコに頼みたいところだが、今はリコを落ち着かせたいからな」

「了解しました」

レスターの言いたい事を察したちとせは頷いた。

先ほどの戦闘で凄まじい戦果を上げたりコだが、言うなればアレは火事場の馬鹿力に近い代物。ミルフィューの安否が早く確認したいと言う決意でテンションが通常時より上がっていたが、今は逆に心配でテンションが大幅に下がっているのは間違い無い。

今は休ませる事を優先すべきだとレスターは考え、ちとせとココも同感だった。

「さて、話は変わるが、セルダールも心配だが問題はもう一つ、『ABSOLUTE』の方だ」

『ABSOLUTE』に敷かれていた防衛網は、そう簡単には破れる筈は無いと思つて

いましたが……ミルフィー先輩とアルモさんの話では、最初は一方的に追い込まれていたと思われませう」

「それにアルモが最後に言っていた言葉も気になります」

『『幾ら『ゴースト』や『EDEN（エデン）』軍が敵艦を破壊しても次から次へと敵艦が現れる』……確かにアルモはそう言っていた。……最後に言いかけた言葉が聞ければ敵の正体も分かったかも知れんが……どちらにしても俺達は厄介な敵と戦わなければならんようだな』

これから始まるであろう未知なる敵との戦いにレスターは厳しい声を出し、ちとせ、ココは無言のまま頷くのだった。

（教官……一体何が在ったんですか？）

自室に戻ったカズヤは、先ほどブリッジで見た『NEUE』全土に放送された映像の事が頭から離れず悩んでいた。

カズヤにとってはフォルテは厳しい教官だったが、同時に尊敬出来る人物。その人物がクーデターを引き起こし、セルダールを支配下に於いたなどと言う事は信じられないような出来事だった。

（偽者で在って欲しいけど……もしも本物だったら、僕らは教官と戦わなければならなくなる……そんな事にならないで欲しいけど……他の皆は如何しているんだろう？）

フツと自分以外の『ルーンエンジェル隊』の面々が気になったカズヤは、ポケットからテレパスファアを取り出して強く握る。

すると、カズヤの脳裏に今の『ルーンエンジェル隊』の面々が抱いている気持ちがおぼろげながら浮かんで来る。やはりそれぞれが不安や悲しみを抱いていた。テキーラから戻ったカルーアも、ミモレットから事情を聞いたのか心配と悲しいと言う気持ちを抱いていた。ナノナノも同じ気持ちだった。

その中でリコは特に悲しみの感情が強い事をカズヤはテレパスファアから感じ取った。

（やっぱり、リコが一番辛いみたいだ。お姉さんであるミルフィーユさんが襲われている場所に居たんだから……よし！）

カズヤは何か決意を決めたような顔をして立ち上がり、自室から出て行く。

そのまま通路を通り、意を決したようにリコの部屋の扉に備え付けられているインターホンのボタンを押す。

「……ピンポン！」

『……はい』

「えくと、カズヤだけど今大丈夫かな？」

『……ちよつと待つて下さい』

少し遅れて了承の返事が告げられ、部屋の扉が開いた。

カズヤは扉が開くと共に現れたリコの姿に驚いた。其処には何時もの明るい印象を放っているリコは居なかつた。予想はしていたが、やはりリコは暗い顔をして悲しみに満ちた目をしていた。

「何か…御用でしょうか？」

「うん……少し話をしないかな？ 一人で居ると暗い事ばかり考えちゃうからさ」

「……どうぞ」

「失礼します」

上がつても良いと了承されたカズヤは部屋の中に足を踏み入れる。

其処には女の子らしい部屋が広がり、可愛いぬいぐるみなど整理されて置かれていた。エンジェル隊に与えられている部屋は一般的な下士官よりも広く、自室にバスルームなども配備され、ちよつとしたホテル並みに完備されているのだ。

カズヤはリコに促されながら部屋の中に置かれている椅子に座る。リコはその間に紅茶を作り終え、テーブルの上に乗せる。

「…リコ。やつぱり、お姉さんの事が心配なの？」

「……はい。さっきの戦闘では早く『A B S O L U T E』と通信がしたくて何時もより頑張れたんですけど…通信が出来ないって分かっていたからは心配で」

(リコはミルフィューさんの事が大好きだからな)

この一週間の間でカズヤはどれだけリコがミルフィューの事を大切に思っているのか知っている。

そのミルフィューの安否が確認出来る状況では無くなり、尚且つ直前まで通信を行なっていたのだからリコの不安は当然だった。

「…もしもお姉ちゃんに何か在ったらと思うと、心配で…もしかしたら怪我しているかもしれないと思うと不安で堪らなくて…」

「(こ、これは予想以上にリコは悪循環に嵌まっている。な、何とかしないと！ ……そうだ!!) …リコ、確かミルフィューさんって運が凄く良いんだよね?」

「…はい」

「だつたらさあ、ミルフィューさんは無事だと思うよ。ほら、『A B S O L U T E』に居た『E D E N (エデン)』軍がピンチだった時に『ゴースト』が駆けつけてくれたって話が在っただろう? アレだって偶然とは言えないじゃないか。きつとミルフィューさんの運が『ゴースト』を呼んでくれたんだよ」

「…そうかも知れませんか」

カズヤの指摘にリコは確かにと言うように頷いた。

『ゴースト』の介入は確かに偶然と呼ぶには出来過ぎている。寧ろミルフィューコの運が作用したと言う方が頷ける。少しだけリコの顔に浮かんでいた悲しみが薄れた事を感じたカズヤは、更に話を続ける。

「それに『ゴースト』だって凄く強い機体じゃないか。戦況が不利だったのを五分五分に持ち込んだって通信で言っていたし、きつとミルフィューさんは無事だよ」

「シラナミさん……ありがとうございます」

カズヤが自分を励ましに来てくれたのだと悟ったりリコは、今だ影が在りながらも笑顔を浮かべて礼を告げた。

まだ、不安は残っているがそれでも一人で居る時よりは楽になったのをリコは感じる。カズヤの発する雰囲気はミルフィューコに近い事も在る。知らず知らずの内にリコはカズヤの傍に近寄り、体を預けてしまう。

（えっ？ ええええええっ!?!）

突然の大胆なリコの行動にカズヤは内心で動揺に満ちた叫びを上げた。

だが、リコは構わずにカズヤに自らの体を深く預ける。

「ごめんなさい……少しだけこうさせて下さい」

「う、うん……構わないよ」

動揺しながらもカズヤは同意を示し、暫らく二人は寄りそうに互いに体を預けるのだった。

『NEUE』宇宙のとある宙域。

その宙域の空間に突如として罅が発生し、罅は黒い穴へと変わると同時に『ABSOLUTE』から脱出した『ゴースト』が飛び出して来た。

《通常空間へのシフト完了》

(…了解……それじゃあ先ずは機体の修復に当たらないといけないな)

《肯定……本機の損害は戦闘への影響も発生……よつて本機はこれより補給地に向かう》

(いや、補給地に行く前に補給地近くの惑星の向かって欲しいんだ。アルモを降ろした
いからね)

内部のコックピットに乗っているアルモの事を告げた。

救出したとは言え、何時までもアルモを乗せたままには出来ない。特に補給地に連れて行く訳には行かない。補給地の場所が知られてしまえば、今後の行動に影響が出て来る。

(流星に連れられたまま行動は出来ないからね。幸いあの星には『ムーンエンジェル隊』のメ

ンバーが居る。アルモを預けるのは問題無いよ)

《……行動に関しては問題は無し……しかし、本機一機のみで行動には許可出来ず》
 (…何が言いたいんだい?)

《以前よりの要求。〃本機の乗り手を迎える事を推奨する〃》

(ツ!?! ……駄目だ。それは許可出来ない)

《乗り手を迎える事で本機のリミッターは解除される。敵は『A B S O L U T E』の防衛機構。戦力強化は必須。故に本機の乗り手を迎える事は必要と判断される》

(……それでも駄目だ!)

『ゴースト』が告げる事は確かに理に適っていた。

『A B S O L U T E』の防衛機構は強力な敵。戦力を強化するのは当然の事。だが、どうしても許可出来ない理由が在った。それは『ゴースト』と言う機体の存在そのものの理由に繋がっていた。

(…言う事は分かる。だけど、この機体の操縦者を迎えるのだけは認められない)

《現在の状況で『A B S O L U T E』の防衛機構に打ち克つ策の提示を要求。それが出来なければ要求を認められず》

(…分かっている………少しだけ考える時間をくれ)

『ゴースト』はその願いに沈黙で答え、ゆっくりと進路を補給地が在る惑星へと向けて

進み出す。

(…ちとせ…俺は…)

《第二章『事態急変』終了・第三章『トレジャーハンター』に続く》

第3章 トレジャーハンター

3—1

「……様。セルダールは予定通りに支配下に治める事が出来ました」

『そうか。其方は予定通りに進んだようだな』

とある一室の中で妙齢で踊り子のような服装をした女性が、自らが主としている相手に戦果の報告を行っていた。

通信の相手はミルフィークとアルモを『セントラルグロウブ』で襲った相手。セルダールを支配下に於き、『セントラルグロウブ』も手中に治めた全ての元凶である首謀者だった。予定通りの戦果を上げられた事に女性は満足していたが、その主である首謀者の顔は不満に満ちていた。

「其方で何か在ったのでしょうか？」

『余計な邪魔が入ってな。』セントラルグロウブ』に居た『EDEN』^{エデン}の連中の大部分に逃げられてしまった。ゲートキーパーは確保出来たので即座に『EDEN』^{エデン}側の『クロノゲート』は閉じさせたが：予想していた以上の損害も出ている』

「余計な邪魔とは？」

『『N E U E』に居る貴様ならば知っているであろう？ 忌々しいイレギュラー、『ゴースト』の事を？』

「では、『ゴースト』が其方に現れたと言うのですか!？」

予想外過ぎる存在が主が行なっていた戦闘に乱入して来た事実には、女性は驚愕した。

『ゴースト』の事は女性も良く知っている。寧ろ『N E U E』では宇宙を渡る者間では知らない者が少ないほどに有名な存在なのだから。その『ゴースト』が『A B S O L U T E』で行なわれた戦闘に乱入し、自分達側に多大な被害を及ぼした事実は女性にとって見逃せない事実だった。

『奴は突如として現われ、『E D E N』の者どもを逃がした。危なくゲートキーパーにも逃げられるところだったが、確保する事は出来た。しかし、何時までもあのイレギュラーを放逐して於く訳にはいかん』

首謀者にとって『ゴースト』は自分の計画を邪魔した機体と言うだけではなく、その機体が保有している移動手段も忌々しいと思えなかった。

『ゴースト』の持つ移動手段は自らが考える理想とする世界には不要としか言えない手段。計画を邪魔された事だけではなく、『ゴースト』と言う機体そのものを首謀者は嫌悪しているのだ。

自らの主が『ゴースト』を嫌っている事を察した女性は笑みを浮かべる。何故ならば

女性は『ゴースト』に関する有益な情報を手に入れているのだ。

「それならばお喜び頂ける情報があります」

『ほう…それは何だ？』

「セルダール付近の『EDEN』軍の中継地点を支配下に置いた時に得た情報ですが、どうやら『ゴースト』は一週間ぐらい前に『EDEN』軍の最新鋭艦に接触し、その時に特定の電磁波を発する液体を『ゴースト』は浴びたようなのです」

『なるほど…確かにその情報は有益な代物だ』

女性の言いたい事を察した首謀者の目に喜悦が浮かぶ。

『ゴースト』の厄介な所は、現代の技術では発見出来ないほどに優れたステルス性に在った。最も今回の戦闘で首謀者は『ゴースト』には卓越した操縦技術に加え、卓越した指揮能力も在る事を悟っていた。

一方的に追い込んでいた『EDEN』軍が息を吹き返し、戦況を五分五分にまで持ち直せたのは『ゴースト』の功績だったと首謀者は知っている。そして『ゴースト』がアルモを連れて逃げ去る時に見た光景も首謀者は忘れていない。

『…すぐにその『ゴースト』から発される電磁波のデータを送れ。我が軍勢にすぐに入力し、次こそは『ゴースト』を必ず破壊してくれる』

「了解しました。それで私はこれから如何すれば？」

『…予定通りルクシオールに在る『紋章機』を全て破壊するのだ。今のところ『N^ノE^イU^エE』を支配下に置く上で最大の障害となるのは、ルクシオールだ。アレも『ゴースト』と同じくらいに厄介な連中。早急に始末しろ』

「お任せ下さい。必ずやお喜び頂ける報告を上げて見せます」
『期待しているぞ』

ーブーン！

通信が途切れると共にモニター画面は黒く染まった。

女性は通信が切れたのを確認すると、ゆっくりと立ち上がり、体をほぐすように動かし、

「全く肩が凝るねえ。とは言っても一応の上司だからある程度礼節をしておかないとうるさいだろうし、あたしの目的の為に必要な事だからしょうがないか」

先ほどまでと打って変わって女性の口調は変わり、ゆっくりと通信装置に手を伸ばして部下へと連絡を取る。

ーブーン！

「どうだい？ ルクシオールの現在位置は判明したのかい？」

『いえ、残念ながら今だ不明です。どうやら止まる事無く動き続けているようですよ…
捕捉には今しばらく時間が掛かると思っています』

「まあ、相手側も自分達が狙われている事は理解しているだろうからね。でも、そろそろルクシオールは動き出す筈だよ。通信の傍受は念入りに行なっておきな！」

『ハッ！ 了解しました！ …それとお耳に入りたい別の報告が在るのですが？』
「なんだい？」

『実は、例のルクシオール以外に『紋章機』を所有している『アニス・アジート』の居所が判明しました。どうやら最近『E D E N』製の船を買い求めてセルダール付近に居たようなのです』

「『E D E N』製の船？」

部下の報告に女性は顎に手をやりながら考え込む。

女性の主にとって『紋章機』は破壊したい代物。それはルクシオールに在る『紋章機』だけではなく、アニスが乗る『紋章機』も同じだった。

現在の状況と今得られた情報を女性は吟味にし、口元を笑みで歪めると同時に部下に指示を出す。

「艦を発進させるよ。向かう先は『紋章機』を操る小娘が居る所だ。それと一つ用意する物が在るから、すぐに準備しな」

『どのような物でしょうか？』

その部下の質問に対して女性は用意する物を告げると、すぐさま通信を切って自らが

与えられた艦のブリッジに向かい出すのだった。

先日の戦闘から数日が経過し、ルクシオールはセルダール宙域付近を飛び回っていた。

本格的にセルダール宙域に入り込めば、先ず間違いなく戦闘になるのは目に見えている。元々『A B S O L U T E』で物資の補給を受ける予定だっただけに、現在のルクシオールに物資の余裕は殆ど無い。

一先ずは物資の補給を優先する事を決めたレスターは余り使いたくは無い手だったが、現在の状況で『E D E N』軍に物資の補給を行なってくれるであろう唯一の相手と連絡を取っていた。

「と言う訳で、補給の為に此方に其方の船を送って貰いたい」

『状況は分かりましたわ。宜しいです。ルクシオールの補給の為に家の商船を向かわせましょう』

「済まん、ミント」

レスターは通信の相手である元『ムーンエンジェル隊』のメンバーの一人であり、現

在は生家であるブラマンシユ商会の一員で『N E U E』での総括支部長になっている『ミント・ブラマンシユ』に礼を告げた。

現在の状況でルクシオールが安全に補給を頼める相手と言えば、同じ『E D E N』に關わるブラマンシユ商会しか無かつた。コネと言う手段としか言えなかつたが、このまま物資が尽きるよりはマシだとレスターは腹を決めてミントに連絡を取つたのだ。

礼を告げられたミントは柔らかない笑みを浮かべ、すぐにコンソールを操作して送られたルクシオールの位置に一番近い商船を調べる。

『さて、ルクシオールの現在位置に一番近い商船は……あら？』

「ん？ 如何した？」

『…いえ、何でも在りませんわ。取り合えずルクシオールに一番近い商船は分かりましたけど、何処で合流されますの？ 此方としてもクーデター軍に発見されるような場所で物資のやり取りはしたくないですけど』

「当然の判断だな。なら、合流地点は…」

レスターはミントに商船とルクシオールが安全に接触出来る地点を告げ、ミントもその場所ならと了承して通信を切つた。

これで物資の問題はある程度解決出来るかと安堵の息を漏らし、艦長席に座り込む。ミントが支部長を務めるブラマンシユ商会は『N E U E』に置いても一大企業。現在ルク

シオールが欲する物資は大体揃える事が出来る。無論揃え切れない物も在るで在ろうが、其処は何とかするしかない。少なくとも乗員達の間には不満が出る事だけは避ける事は出来た。

(孤立無援に近いルクシオールの状況で、内部からも離反者が出る事だけは何としても避けねばならん)

そうレスターが考えていると、ブリッジに繋がる直通エレベーターの扉が開き、リコとカズヤを伴ったちとせがブリッジへと入って来た。

「クールダラス司令。此方が現在不足している物資に関するデータです」

「ご苦労……ん？ カズヤにリコ？ 二人は如何したんだ？」

「二人は私が倉庫に在る物資を調べている時に手伝いに来てくれたんです」

「そうか。二人ともご苦労だったな」

命令していないにちとせの手伝いをしてくれたカズヤとリコに、レスターは労いの言葉を掛けた。

カズヤとリコは照れたように微かに顔を赤らめ、ちとせと、そして様子を窺っていた。ココは二人の親密さが数日前よりも深まっている事を悟る。最も詮索するような事を二人はしない。

寧ろ初々しい二人の様子にちとせとココは微笑みを浮かべる。最もレスターはカズ

ヤトリコの雰囲気の違いに気づかずに話を続ける。

「それじゃあ、『ムーンエンジェル隊』の先輩の一人が物資を渡してくれるんですね？」

「正確に言えば、後で補給された物資の代金は支払う事になるがな。そう言うところは抜け目が無い相手だ。だから、余り頼りたくは無かったんだが」

「…何か在ったんですか？ その先輩と？」

深々と溜め息を吐くレスターの様子にカズヤは疑問を覚えて質問した。

その問いにレスターは無言で頷く。思い出すのはミントにからかわれていた日々の出来事。ミント本人に悪意は無く、ただ本当にかからかっているだけに過ぎないのだが、それでもレスターはかなりの心労を受けていた。

正直な話、レスターからすれば借りを作りたいくは無手だがそうも言っていられない状況。故にレスターは自分の天敵と呼んで良いミントに連絡を取ったのだ。

事情が分かっているココとちとせは苦渋が僅かに滲んでいる顔を浮かべているレスターに苦笑を浮かべ、ミントと多少交流が在るリコも同様に苦笑を浮かべる。唯一ミントの事を知らないカズヤだけが、何時もと違う様子でレスターに首を傾げる。その様子にレスターは気がつくが、何も答えずにココの方に体を向ける。

「ココ。さっきの合流地点に移動だ」

「了解しました。現在の地点からだ」と『クロノドライブ』すれば一時間程度で着くと思

ます」

「早めに補給は終わりにしたいからな。すぐに移動を開始してくれ」

「了解しました」

レスターの指示に従ってココはルクシオールを動かし、すぐさまルクシオールは『クロノドライブ』へと移行した。

一時間で合流地点に着くのでその間にちとせは前回の戦闘時の時の合体紋章機のことをカズヤとリコに詳しく質問する。データは取っているが、やはりデータだけでは分からない面が在るのでちとせは事細かにカズヤとリコに乗っている時の合体紋章機の調子を質問して行く。カズヤとリコはちとせの問いに嫌がる事無く、自分達を感じた事を答えて行く。

そして質問している間に合流地点への到着予定時間になり、ルクシオールはドライブアウトして通常空間へと戻る。

「センサーで周囲を確認……近くに『E^エD^デN^ン』製の船を一隻感知しました」

「間違いないか？」

「はい。間違いなく『E^エD^デN^ン』製の船です」

「此方でも確認しました。ココさんの報告に間違い在りません」

ココの報告の念を推すようにちとせがレスターに自身のオペレーター席からの解析結

果を告げた。

「……ピイピイ！」

「相手側の船から通信です。物資の輸送の為に接近許可を求めています」

「……商船許可書を持っているか確認しろ。幾ら『EDEN《エデン》』製の船とはいえ、現在の状況では敵の偽装も在りえるからな」

「了解しました」

レスターの指示に従ってココは相手の船に確認を取る。

その様子を見ていたカズヤとリコは、険しい顔をしてココからの報告を待っているレスターを見つめる。

「司令……随分と警戒しているね？」

「はい。やっぱり今の状況だとおいそれと乗船許可は出せないんですね」

「実際に敵が偽装の船を送って来る事は在りますから」

カズヤとリコの話の横で聞いていたちとせは、二人に語り掛けた。

「昔、クールダラス司令が副指令を務めていたエルシオールに撃ち込まれたミサイルに偵察ブローブが乗っていた事が在ったそうです。それ以外にも敵側が直々に乗り込んで来た事も在ります」

「ちとせさんもそう言う経験が在るんですか？」

「…はい…在ります。そのせいでちよつと記憶が混乱した時が実は私には在るんです？」

「記憶の混乱つて!? だ、大丈夫だったんですか!？」

「ええ、安心して下さい、カズヤ君。そう言う事も在ってクールダラス司令は確認を取っているんです。『EDEN』製の商船が『NEUE』で商いをやるのには許可が今のところ必要ですからね」

違法な業者が『NEUE』に入り込まないように、『EDEN』は許可を発行している。逆に言えば幾ら『EDEN』製の船とは言え、許可書を持っていなければ怪しい船と言う事になる。更に言えばレスターが物資を頼んだ相手は、『EDEN』が許可をちゃんと発行しているブラマンシユ商会。許可書を提示出来るのが当然の商会なのだ。

その事を理解したカズヤとリコは領きながら、相手側の船から送られて来る許可書のデータを注意深く調べているココを見つめる。

「……ヒィ……!」

「チェック完了。間違いなく『EDEN』が発行した許可書だと判明しました」

「そうか」

ココの報告にレスターは安堵の息を吐き、カズヤ、リコ、ちとせ、そして他のブリッジメンバーも揃って安堵した。

もしも敵の策略に寄る船だったら自分達が罠に掛かったと言う事になる。その上物資の補給が出来ないとすれば、ルクシオールは追い込まれる。しかし、これで物資が補給出来て今後の行動は取り易くなった。

その事からレスターは乗船許可を相手側の船に出すようにココに指示を出し、ココはすぐさま連絡を取り出す。

「それじゃあ、私は搬入される物資のチェックのお手伝いに行つて来ます。

「あつ、なら僕も行くよ。補給の間は他に仕事も無いから手伝うよ」

「ありがとうございます、シラナミさん」

手伝いを買つて出てくれたカズヤにリコは笑みを浮かべながら礼を告げ、二人は直通エレベーターに向かって歩き出す。

しかし、二人がブリッジに乗り込む前に突然に警報音がブリッジ内部に響き渡る。

「ーっービイビイビイツ!!!」

「如何した!?!」

「そ、それが侵入者のようです! 場所は先ほど乗船した商船のシャトルからです!」

「何だど!?! クツ! すぐにスクリーンに監視映像を映せ!」

「りよ、了解です!!」

レスターの指示に従い、ココは即座にスクリーンに映像を映す。

カズヤとリコも慌ててスクリーンが見える位置まで戻る。すると、スクリーンには警備クルーに蹴りなどを食らわせて昏倒させて行く作業服と帽子を着た人物が映し出されていた。作業服を着た人物の身のこなしには隙が無く、訓練されている筈の警備クルー達が翻弄されるほどの腕前を持っている事はスクリーン越しでも分かるほどだった。

一体何者なのかと誰もがスクリーンに映る監視カメラからの映像を見つめていると、作業服を着た人物が上着と帽子を脱ぎ捨てる。

「あ、あの人は?!」

「アニス・アジート?!」

リコの驚愕と困惑に満ちた叫びに続くように、レスターが作業服を脱いでアラビア風の衣装のような赤い布を胸に着けているアニスの名を叫んだ。

カズヤの赴任初日にルクシオールに襲撃を行ない、所持している『紋章機』の事も在って重要参考人に指定されている人物。その行方知れずになっていた筈のアニスが再びルクシオールに襲撃を行ない、侵入して来た事にブリッジは騒然となる。

スクリーンに映るアニスは監視カメラを見つけるとナイフを取り出し、監視カメラに向かつて投げつける。同時にスクリーンの映像が消え、監視カメラが破壊された事をレスター達に知らせた。予想外の事態が起きた事にレスターは呆然とするが、すぐに我に

返って指示を出す。

「すぐに警備クルーに連絡して侵入者を捕まえろ！ 目的は分からんが、艦内で暴れ回れる訳には行かん！ 格納庫と機関室にも連絡を送れ！」

「りよ、了解です！」

「司令！ 僕も行きます!!」

「わ、私も行きます!!」

状況が不味い方向に進み始めた事を理解したカズヤとリコは、レスターに進言した。

レスターはカズヤとリコに目を向けて考える。先ほどスクリーンに映し出された映像からアニスの格闘能力はかなり高いと判断出来る。男のカズヤはともかく、小柄なりコでは逆に人質にされてしまう可能性が高い。リコの怪力は相手が男性で無ければ発揮されないもので、女性のアニスでは発揮出来ない。

（とは言ったとしても、今は少しでも早く侵入者を捕らえる為に手が必要だ。しかし、リコでは…）

「ービービィッ！」

「ッ!? 司令大変です！ 侵入者が乗って来たシャトルの内部からブローブらしき人形が複数現れたと報告が来ました!!」

「ブローブだと!? チィ！ 既に誰かに化けているのか!？」

『ブローブ』。センサーなどで相手の姿を写し撮り、ホログラムを発生させて身に纏う機械兵器。

敵地などに潜入し、破壊工作や攪乱、そして情報を盗み取るが主な目的として使用される。昔、ブローブに重要なデータを盗まれた事が在るレスターは、再びブローブの侵入を赦してしまった事実にも苦虫を噛み潰したような顔をする。

「どうやら目撃者の話では、アニス・アジートの姿に化けているようです」

「クツ！ 陽動目的か！ すぐに各部署の連絡を行なえ！」

「司令！ やっぱり僕達も行きます！ このままじゃルクシオールが荒らされます！」

「お願いです！ 司令!!」

「…クールダラス司令。二人とは私が一緒に行動します」

「ちとせ!？」

オペレーター席から立ち上がり、レーザーガンを取り出したちとせにレスターは驚いた。

幾ら軍人とは言え、今のちとせは昔とは違い、技術者として働いているので四年前よりも腕は落ちていない。そのちとせまで向かわせて良いのかとレスターは悩むが、カズヤ、リコ、そしてちとせの決意に満ちた顔を目にして腹を決める。

「…分かった。だが、無茶はするな。特にカズヤとリコは怪我だけはしないようにしろ。」

お前達に何か在れば、ルクシオールの戦力が落ちるからな」

『はい！』

「…ちとせ。悪いが二人を頼む。それと、お前も無茶はするな」

「分かっています」

「……………三人とも頼むぞ！」

『了解（しました）（です）！！』

レスターが発した号令と共にちとせを先頭にカズヤとリコは走り出し、直通エレベータに乗ってアニスが居ると思われる艦艇部に向かうのだった。

3—2

「今頃は上手く潜入を成功させている頃だろうかね」

『NEUE』宇宙に在る惑星アジート付近の宙域で、主から与えられた禍々しい色合いの黒と赤の艦艇——『デイスト・データー』——のブリッジに立ちながら踊り子のような衣装を纏った女性は楽しげな笑みを浮かべながら呟いた。

『ABSOLUTE』に居る主の指示に従い、女性はルクシオール及び『紋章機』破壊の為に動き出していた。その先兵と送り込んだのが、新たに『EDEN』製の船を購入してお金の工面に困っていたアニスだった。アニスを金で雇い、ルクシオールに潜入する為の工作を女性は行ない、傍受した通信からルクシオールが補給を受ける地点にアニスを配置した。

現在の状況でルクシオールに補給支援を行なう場所など限られているので、女性は重点的にその場所に通信の傍受を仕掛けた。結果は上手く行つた。予想通りルクシオールはブラマンシユ商会に物資の補給を求めた。後は当初の予定通り作戦を進めるだけだった。

（先ずはルクシオールの戦力を減らす事が重要だからねえ。流石に直接やりあうのは危

険が大きい。搦め手を使ってジワジワ追い込んでいるよ。そう…あの小娘の『紋章機』もね)

最初から女性はアニスも葬るつもりだった。

女性の主が脅威として認識しているのは『紋章機』。アニスが乗る『紋章機』も例外ではない。作戦が成功しようと失敗しようと、アニスの抹殺は決定事項だった。その事も知らずにルクシオールで暴れているであろうアニスを女性が嘲笑っていると、部下が話し掛けて来る。

「『ディータ』様。アニス・アジートと共に乗せていたブローブの起動反応が出ました」
「そうかい。なら、潜入は成功したと言う事だね。頼むよ、小娘。アンタの為に色々準備してやったんだ。ちゃんとあたしらの作戦どおりに成功させておくれよ」

女性―『ディータ』―は、口元を嗜虐さと邪悪さに満ちた笑みを浮かべながら、自分達の策略どおりに事が進んでくれる事を願うのだった。

ブリッジから直通エレベータに乗って艦艇部へと迫り着いたカズヤ、リコ、そしてちとせはエレベータを降りると共に周りを警戒するように見回す。付近に人影が見えない事を確認したちとせは、すぐさまエレベータを動かす為のコンソールに手を伸ばし、

素早い指の動きでエレベーターにロックを施す。

「……ピーッ！」

「これでこのエレベーターは起動出来なくなりました。クールダラス司令なら既にブリッジ付近への通路は全て封鎖している筈です」

「と言う事は、侵入者はブリッジには侵入出来ないって事ですね？」

「ええ。でも、油断は禁物です。相手側の目的が分からない以上、充分に警戒して行動しましょう」

「何処に私達は向かうんですか？ ちとせさん？」

「先ずは機関室です。侵入者が逃げ切る為にも、ルクシオールの足を止める必要があります。急ぎましょう」

ちとせの指示にカズヤとリコは真剣な顔で頷き、辺りを警戒しながら機関室に向かう。

何時もは緩やかな気配を発している筈のルクシオールの通路も、今は緊張感に満ちていてカズヤとリコは戦場に居るような雰囲気を感じていた。その中でちとせだけは、久々に感じる緊張感に懐かしさを僅かに感じていた。

一番最初に『ムーンエンジェル隊』をちとせは除隊したとは言え、優秀な軍人であり、『ムーンエンジェル隊』のエースだった。だからこそ雰囲気戸惑っているカズヤとリ

コと違って、その行動には淀みは全く無かった。カズヤはその姿を見て頼もしさを感じ、改めてちとせも『ムーンエンジェル隊』の一員だったのだと感じる。

そして三人は機関室へと辿り着き、すぐさま異常を察知して警戒するように辺りを見回す。

「…可笑しいですね」

「はい。確かレスターさんが機関室に警備クルーを送った筈なのに」

「誰も居ない」

送られた筈の警備クルーが誰一人姿が見られない事実には、ちとせ、カズヤ、リコは危機感を感じ、ゆっくりとちとせが機関室の扉に手をかけて二人に目配せを行なう。

カズヤとリコは無言で頷き、二人も支給されているレーザーガンを制服から取り出して身構える。ちとせは二人の準備が終わった事を確認すると、意を決して機関室の扉を開けてレーザーガンを構えながら飛び込む。

「ムウー！　ムウウウウウー！！」

「ステリーネさん!?!」

ちとせが飛び込むと共に機関室に入り込んだカズヤは、手足を縛られて口元をガムテープで封じられている機関整備員である眼鏡を掛けた作業服を着ている『マリア・ステリーネ』に驚いた。

慌ててカズヤとリコはステリーネの拘束を解き、ちとせはレーザーガンを構えながら周囲を警戒する。

「だ、大丈夫ですか!?!」

「大丈夫な訳無いだろう! あの女!?! クロノ・ストリング・エンジンを!?!」

拘束を外されたステリーネはカズヤに怒鳴ると共に、すぐさま立ち上がりクロノ・ストリング・エンジンが設置されている場所に向かって走り出す。

「ああっ!?! コンソールが滅茶苦茶になっっているだけじゃなくて、エンジンが一番管から五番管まで停止してる!?! うわああああっ!?! こっちも停止して、此処までも!?!」

多数のクロノ・ストリング・エンジンが設置されている場所から上がるステリーネの悲鳴に、カズヤとリコは機関室がやられてしまった事を理解して苦い顔をする。

その間にちとせは通信機を用いて、レスターに機関室の状況を知らせていた。

「クールダラス司令。機関室がやられました。復旧には時間が掛かると思われます」

『ああ、こつちでも出力の低下が確認出来た。しかし、送った筈の警備クルーは如何したんだ?』

「それが…私達が着いた時には誰も来ていませんでした」

『何だ?!?! どう言う事…!』

「キャッ!?!」

「リコ!？」

突然上がったリコの悲鳴にカズヤとちとせが目を向けてみると、背後から警備クルーと思わしき男性《・・・》に羽交い絞めにされているリコの姿が在った。

リコが男性に羽交い絞めにされている事実にかズヤは呆然となる。何故ならばリコは男性恐怖症。普通に話す事は出来るが、カズヤ以外がリコに触れれば酷い目に合う。それはルクシオールの男性クルーならば誰もが知っている事実。そして案の定男性に触られたと思ひ込んだリコは悲鳴を上げる。

「きやあああああああああつ!!!」

ーードオン!!

リコは悲鳴を上げながら自身を羽交い絞めにしていた男性クルーを投げ飛ばした。

投げ飛ばされた男性クルーは重たい物が落下したような音を上げながら床に激突し、ちとせは迷う事無く男性クルーの頭部に向かってレーザーガンを撃ち込む。

ーードオン!

「ち、ちとせさん!?! 一体何を!?!」

「…良く見て下さい、カズヤ君。これはルクシオールの一員じゃありません」

「えっ?」

ちとせの言葉に改めてカズヤが男性クルーに目を向けてみると、男性クルーの姿が消

え、代わりに人型の機械人形が頭部を破壊されて煙を上げていた。

「こ、これは……」

「侵入したブローブです。恐らく機関室に来る筈だった警備クルーの姿を写し取ったのでしょう」

「でも、確かココさんはブローブはアニスさんの姿になったって言っていましたけど」
「それこそが罠だったと考えるべきです。最初にアニス・アジートにブローブは化け、私達がブローブはアニス・アジートになっていると思いつまませたんです。此処に来る筈だった警備クルー達もそれにやられたのかも知れません。状況は私達が考えている以上に不味い方向に進んでいるようです」

そう、ちとせはカズヤとリコに説明すると共にすぐさまレスターに今得られた情報を報告する。

ブローブがアニス以外にルクシオールのクルーに化けている事を報告されたレスターは苦虫を噛み潰したような声で通信を切り、ちとせはカズヤとリコと共に別の場所へと移動を開始する。

「二人とも。とにかく、最初に会った時は相手に話し掛けて反応を見るように。ブローブは相手の姿は写し撮れますが、声は出せません。それと不審な動きが見られれば警戒にして下さい」

「はい」

カズヤはちとせの言葉に頷き、続いてリコも同じように頷く。

ルクシオールで不用意にリコに触れてしまう者は時たま居るが、先ほどのように羽交い絞めにしようとする者など誰一人としていない。だからこそ、ちとせはリコを羽交い絞めにした時点で相手がブローブだと悟り、迷う事無くレーザーガンを相手に撃ち込んだのだ。

（それにしても……さっきのリコちゃんの怪力。以前から思っていましたけど、リコちゃんの怪力には男性恐怖症と言う以外に何かが在るですね）

大の大人を小柄なりコが平然と投げ飛ばすだけでも異常な事だが、それ以上の重量が在る筈のブローブをリコは投げ飛ばした。

以前から男性恐怖症と言うだけでリコが男性を投げ飛ばせていた事にちとせは違和感を感じていたが、先ほどの光景を目にして違和感は更に募った。とは言っても現状で気にしているような事柄で無いので、すぐさま思考からちとせは消す。

（今は侵入者の捕縛とブローブの破壊を優先しなければ）

ちとせ、カズヤ、リコの三人は通路を走り、侵入者やブローブが居ないかを調べる。

しかし、侵入者らしき姿は発見出来ず、三人が訝しげに顔を歪めると、ティーラウンジの方から何かが割れるような音が響く。

「バーバリン！」

「今の音は!？」

「ティーラウンジの方からでした!」

三人は顔を見合わせると、すぐさまティーラウンジに向かって走り出す。

そしてティーラウンジに辿り着いてみると、ティーカップや皿などの破片が床に散乱し、倒れたテーブルを挟むように、“二人のメルバ・ブラウニー”が互いを睨みつけるように睨んでいた。

「メ、メルバさんが二人!？」

「ど、どつちが本物なんでしょうか!？」

無言で互いに睨み合っているのです、どちらがブローブなのか分からず、カズヤとリコは困惑したように二人のメルバを交互に睨みつける。

流星にちとせもただ対峙しているだけではどちらがブローブなのか判別出来ず、何とか正体を見極めようと目を凝らそうとした瞬間、右側に立っていたメルバが動く。

「フツ!？」

「つて!?! お盆!?!」

動くと同時にメルバが投げつけた物を目にしたカズヤは思わず叫んだ。

丸く給仕などが注文された物を運ぶ時に使う薄い台。どう考えても武器として使用

するべきで無い物を投げつけたメルバ。投げつけられた側のメルバは体を傾ける事で躲し、お盆を投げつけたメルバに接近する。

そのまま捕らえようと両腕を広げた瞬間、後頭部に衝撃を受けて動きが停止する。

ーゴッドゴツ！

走り出したメルバの後頭部に当たったのは、避けた筈のお盆だった。

回避されたお盆は空中でブーメランのように動き、戻って来ていたのだ。その事に気がつかずに回避したメルバに化したブローブは真っ直ぐに前に進み、後頭部にお盆が直撃したのだ。

そしてお盆を投げつけたメルバがゆっくりと重要な機械部分が破壊されたのか、本来の姿に戻って床に倒れ伏しているブローブに背を向けながら呟く。

『お盆格闘術・ツバメ返し』

(何ですかそれ!?)

訳の分からない格闘術の技名を呟くメルバに、カズヤは思わず内心でツツコミを入れた。

しかし、メルバがお盆格闘術の免許皆伝者だと知っているちとせとリコは感心したように破壊されたブローブを見つめる。

「見事な手際でした、メルバさん」

「はい、凄かったですよ！」

「いえ、皆の憩いの場でティーラウンジを荒らされた時点で私の負けです。うっかり敵の侵入を赦してしまうなんて……此処のウエイトレスとして恥ずかしいです。次は侵入してくる前に、この銃で破壊して見せます！」

「ーードン！」

(何処からそんな大振りな銃を出したんですか!?)

メルバが軽々と手に持っている大型の銃であるP90の姿に、カズヤは思わず内心で叫んだ。

明らかに小柄なメルバが扱えるとは思えないほどの銃だが、メルバは軽々と持っていた。ちとせとリコはメルバを頼もしそうに見つめ、ちとせは質問する。

「それでメルバさん。此処に侵入して来たのはこのブローブだけでしょうか？」

「はい。このブローブだけです。他に侵入者は居ません」

「そうですか。なら、此処は頼みます。リコちゃん、カズヤ君、別の場所に向かいましょう」

『はい!!』

ちとせの指示に従い、カズヤとリコはティーラウンジを出て別の場所へと向かう。

通路を三人は真つ直ぐ進んでいると、通路の先に元氣一杯なナノナノとヘトヘトで荒

息を吐いているカルーアが走って来た。

「あつ！ ちとせ！ カズヤ！ リコたんなのだ！」

「ハア、ハア、ハアア、漸く会えましたわ〜」

「ナノナノ！ それにカルーアまで!?!」

カズヤ達はナノナノとカルーアの傍に近寄り、ちとせが代表して二人に質問する。

「それでナノナノちゃんとカルーアさんは如何して此処に？」

「ナノナノは医務室でモルデン先生と一緒に薬の在庫を調べていたら、いきなり警報がなったから皆を探していたのだ」

「わ、私は自分の研究室にミモレットちゃんと一緒に居たんですけど、ナノちゃんが入って来て侵入者の事を教えてくれましたの〜」

「えっ？ 警報が聞こえなかったの？」

「私の研究室は防音がなされていますので、気がつきませんでしたの〜」

「それでミモレットに研究室の事を頼んで、ナノナノと一緒にカルーアは居たのだ」

「だ、だけれど、ナノちゃんの足が速くて息が切れてしまいました。ハア〜」

カルーアは大きく息を吐き出し、事情が分かったちとせ、カズヤ、リコは納得したように頷く。

「それで誰か怪しい人物は見ましたか？」

「誰も見ていないのだ」

「私も見ていませんわ」

「それじゃ、アニスさんは何処に行っただんでしょうか？」

「……ピーピー！」

突然通信音が鳴り響き、カズヤ達の視線がちとせに集まる。

ちとせがすぐに通信機のオンにすると、焦りに満ちたレスターの声が響く。

『ちとせ！　すぐに格納庫に向かってくれ！　ブレイブハートが発射シーケンスに入っているぞ！』

「ブ、ブレイブハートが!?　分かりました！　すぐに向かいます!!」

レスターの情報を聞いたちとせはすぐさま格納庫に向かって走り出し、慌ててカズヤ達もちとせの後を追い駆ける。

「急ぎましょう！　もしもブレイブハートが奪われれば、ルクシオールの戦力が低下してしまふ！　そうになったら、セルダールに行く事が出来なくなります!」

『はいー!』

「ハア、ハア、分かりましたわ」

カズヤ達はちとせの後を全速力で追い駆ける。

しかし、徐々にカルーアが遅くなって行き、次にリコが遅れてカズヤ、ちとせ、ナノ

ナノとの距離が離れて行く。普段ならば遅れるリコとカルーアが心配になるが、そうも言つてられずにちとせ、カズヤ、ナノナノは格納庫へと急ぐ。

そして格納庫に三人が足を踏み入れると、レスターが言つていた通りブレイブハートが出撃体勢に入つていた。

「あつー！ カズヤー！ ちとせ！ あそこを見るのだ!!」

ナノナノが指差す方向にカズヤとちとせが視線を向けてみると、ブレイブハートのコックピットに乗り込んでいるアニスが居た。

「アニス・アジート!!」

「すぐに発進を止めなさい!」

カズヤとちとせは叫ぶと共に走り出し、ナノナノも二人の後を追い駆ける。

とにかくブレイブハートの発進を止めなければならぬと、三人は急ぐ。しかし、途中で何かにちとせは気がついたように足を止めて格納庫に置かれているコンテナの影に向かってレーザーガンを撃ち込む。

「ブローブです!」

「ちとせさん!?! 一体何を!?!」

「ブローブです!」

カズヤの質問にちとせが険しい声で答えると共に、レーザーガンを撃ち込まれた格納

庫の影から重たい音を立てながら頭部を撃ち抜かれたブローブが床に倒れ伏した。

同時に格納庫の影から次々とアニスに化けているブローブが数体出て来る。

「変だと思っただんです。格納庫には整備班の皆さんが居る筈なのに、誰も今は居ません」

「あっ!？」

「そう言えば、皆居ないのだ!？」

カズヤとナノナノはちとせの指摘に格納庫内を見回し、整備班員の姿が誰一人として見えない事に気がつく。

迫って来ているブローブを油断無くレーザーガンを構えながらちとせは見回し、カズヤとナノナノに指示を出す。

「此処は私に任せて、二人は早くブレイブハートを!？」

「でも!？」

「ちとせ一人じゃ危な…」

ブローブスキュウウン!

ナノナノの言葉に覆い被さるようにレーザーガンの発射音が響き、ブローブが撃ち抜かれた。

カズヤとナノナノが呆然と撃ち抜かれて破壊されたブローブとちとせに視線を彷徨わせると、ちとせは二人に話し掛ける。

「今は技術者でも、私は元『ムーンエンジェル隊』の一員です。この程度の相手に遅れは取りません。さあ、早く！」

『は、はい(なのだ)!!』

有無を言わさないようなちとせの言葉に、カズヤとナノナノは慌てて走り出した。

走り出したカズヤとナノナノはブレイブハートの発進コンソールへと辿り着くが、既にブレイブハートは上の方へ上がって発進準備を行なっていた。

それを目撃したナノナノは走るスピードを上げて、勢いよく右手を伸ばしながらジャンプする。

「逃がさないのだ!!」

「ナノナノ!?!」

ジャンプして右手をブレイブハートの装甲を掴んだナノナノに向かってカズヤは心配して叫んだ。

しかし、カズヤの心配を他所にナノナノは猫のような身軽な動きでブレイブハートの装甲を登り、コックピットが在る場所まで上がって行く。

「す、凄い! じゃなくて!?! 急いで発進を止めないと!」

ナノナノの俊敏な動きにカズヤは感心していたが、すぐさま我に返って発進コンソールを操作する。

その間に装甲を登ってコックピットに辿り着いたナノナノは、操作を行っていたアニスに向かって掴みかかる。

「逃がさないのだ!!」

「うわっ! テメエ追って来やがったのか!」

「カズヤのヒコーキを返すのだ!」

驚くアニスにナノナノは掴み掛かり、二人は狭いコックピットで暴れ出す。

ナノナノは必死にブレイブハートの発進を止めようとアニスに掴み掛かる。だが、狭い場所で操縦席に座っているアニスはともかく、無理やりに入り込んだナノナノはアニスが強く抵抗すると共に足を踏み外してしまう。

「ーーーーズルッ!

「あっ?」

「ッ!? 危ねえ!」

「ーーーーガシッ!

ブレイブハートから落ちそうになっているナノナノを、アニスは慌てて右手でナノナの腕を掴み、落下を防いだ。

呆然とナノナノは自身を掴んでいるアニスと遠く見える格納庫の床を見回し、改めてアニスに顔を向ける。

「危ねえだろうが!？」 落ちたら死んじまうだろうが!？」

「……フェツッ! ウワアアアアアアアアアア!!」

「……………しゃあねえな」

泣き出したナノナノを見たアニスは、左手を伸ばしてブレイブハートのコンソールを操作し、発進装置を元の場所へと戻し出す。

ゆっくりとブレイブハートのコックピットが床に近づいて来るのをアニスが確認している、カズヤがコンソールを操作している事に気がつく。

「あいつ! コンソールを!? ……もう良いな」

ナノナノと床の距離が近い事をアニスは確認すると共に手を離し、ナノナノは危なげなく床に降り立つ。

それを確認したアニスはすぐさま操縦席に座り直し、コンソールを操作し出す。同時に開いていたブレイブハートの発射口ハッチの部分が閉じて行く。このままブレイブハートが発進する前にハッチが閉じるかと思われたが、アニスは構わずにブレイブハートを発進させ、縦ではなく横にブレイブハートを傾ける事で狭くなっていたハッチの間を滑り込むように通り過ぎ、アニスはブレイブハートを強奪し、ルクシオールから逃げ延びた。

その後、遅れてきたリコ、カルーア、そしてブローブを破壊し終えたたちとせとカズヤ、

ナノナノは合流し、ブリッジに戻ってレスターに報告を行なった。

大切な機体であるブレイブハートをアニスにまんまと強奪された事実には、レスターは苦虫を噛み潰したような顔をし、カズヤ達は申し訳なさそうに顔を伏せていた。

「クールダラス司令……ブレイブハートの件に関しては四人に指示を出していた私に責任が在ります。どうか寛大なご処置をお願いします」

『ちとせ（さん）!?!』

「いや、此方からも発進シーケンスの操作が出来なかった。今回はあちらの方が上手だったと言う事だ……しかし、ブレイブハートが強奪されたのは不味い」

「はい……アレはルクシオールに在る『紋章機』にとつて大事な機体です。何とか取り返さなければ」

「とは言っても、今のルクシオールは工作のせいで動けん。それに何処に奴のアジトが在るのかも分からん。どうしたものか?」

現状で打てる手が見つからず、レスターは表情を歪めて悩む。

ブレイブハートを取り戻す事は決定事項。今後の為にも『紋章機』の性能を増幅させるブレイブハートだけは、何としても取り戻さなければならぬ。しかし、ブレイブハートを強奪したアニスが居る場所が分からない。

どうすれば良いのかとレスターが今後について考え込んでいると、ココが報告を行な

う。

「あつ！ 司令！ 近くにドライブアウトの反応が出ました。それと通信が来ています」

「…繋いでくれ」

「了解」

レスターの指示にココはコンソールを操作して通信を繋ぐ。

すると、メインモニターにレスターが補給を要請した人物であるミントが映し出される。

『どうもレスターさん。お待ちせいたしましたわ！』

「ミント先輩!」

「ミント!? 何故お前が此処に!」

『一番近い船は偶然にも私が乗っていた船でした。会った時に驚かせようと思いましたが』

「……先にその話がされていれば」

告げられた事実にはレスターは思わず愚痴を零した。

補給の為に来る相手がミントだと最初から分かっていたら、アニスが侵入して来るような事態にはならなかった。その事実には思わず愚痴を零したレスターの様子に、ミント

は自分が来るまでの間に何か在った事を悟る。

『…どうやら私が来るまでの間に何か在ったようですね』

「その件で聞きたい事が在る。済まんがルクシオールに来てくれ」

『分かりましたわ。それと頼まれた物資は持って来たので其方にお届けしますわ』

「ああ、待つてるぞ」

そうレスターが言うと共に通信は切れ、メインモニターが黒い画面に戻った。

レスターはそれを確認すると共に直通エレベーターの方に向かって歩きながら、ココに指示を出す。

「ココ。俺はミントを出迎えて来る。機関室の修理が終わったら連絡をくれ」

「了解です」

「ちとせは済まないが機関室の手伝いに向かってくれ」

「はい。ミント先輩とは後で話せる機会も在るでしょうから私はステリーネさんの手伝いに向かいます」

「頼む。ルーンエンジェル隊は俺と一緒に行動だ」

『はい（ですわ）（なのだ）』

カズヤ達はレスターの指示に従い、レスターと共にミントの出迎えの為に格納庫に向かうのだった。

3—3

ルクシオール内部に在るティーラウンジ。

其処でレスターとルーンエンジェル隊のメンバーは補給物資を運んでくれたミントにアニスが襲撃を仕掛け、ブレイブハートが盗まれた事を説明していた。

その時にアニスが提示したブラマンシユ商会の者である事を示す商船許可書のデータもレスターは見せ、ミントは顔を険しく歪める。

「…確かにこれは私どもの商船の許可書です。ですが、可笑しいですわね？ この許可書を持っている商船は数日前にセルダールに向かった筈ですの」

「セルダールに？ 本当なのか？」

「間違い在りませんわ。私が指示を出した事なので良く覚えています」

「…そうか（まさか、今回の件にはクーデター軍が関わっているのか？）」

ミントから告げられた事実にはレスターは両腕を組みながら険しく顔を歪める。

許可書を持っていた商船がセルダールに向かったと言う事実からレスターは今回の襲撃の件の裏には、現在ルクシオールを支配しているクーデター軍が関わっている可能性が高い事に気がつく。何せ先日ルクシオールを足止めする為に無人艦を送って来た

ほどである。

ルクシオールがセルダールを支配下に置いてあるクーデター軍に狙われているのは間違い無い。もしもブレイブハートがクーデター軍に渡ってしまった場合の事を想定し、レスターの顔は歪む。

「…レスターさん。怖い顔をしておりますわよ。焦っても良い事は在りませんわ」

「これが焦らずに居られると思うか？」

「……そうですね。アニスさんがクーデター軍と繋がっているとしたら、少々不味い事態になりますわね」

（アレ？ 今司令何も話して居ないよね？ それなのに何で司令の考えがミント先輩は分かっただらう？）

何も話していない筈なのにレスターの考えをさも当然と言うように告げたミントに、カズヤは違和感を覚えて首を傾げる。

その様子に気がついたリコがカズヤに向かって小声でミントについて説明する。

「ミントさんは『テレパシスト』なんです」

「『テレパシスト』？」

「はい、簡単に言えば心が読めるんです。今のもレスターさんの考えを読んだからだと思います」

「なるほど。それで司令の考えが分かったんだ」

リコの説明にカズヤは納得し、改めてレスターとミントに視線を向けてみると、ミントは口元に付けていたティーカップをテーブルに戻す。

「さて、こうして互いの事情は分かった訳ですけど、実はレスターさん。私アニスさんが拠点としている場所に心当たりが在りますわ」

「本当か!？」

「はい。実を申し上げますと、アニスさんが乗っていたと言う『E D E N (エデン)』製の船は私どもが売った船ですの。もちろん売る前に身元を調べた結果、代々トレジャーハンターの家系を営んでいて海賊退治も行なっていたようですので大丈夫だと思いましたがと言う訳ですけど……まさか、海賊行為を行なっていたとは知りませんでしたけど」

「その海賊行為は勘違いだったようだがな。重要参考人ではなく襲撃者として各方面に打診しておくべきだったかも知れん……とにかく、ミント。お前が知るアニス・アジートの拠点の場所を教えてください」

「分かりましたわ。ですけど、私が教えたと言う事は内密にお願いします。情報を漏らしたと知られれば、信用に関わりますので、その点はお願いたします」

「分かった。さて、エンジンの修理の方は何処まで進んだか」

ミントの協力を得られる事が決まったレスターは通信機のスイッチを入れ、ブリッジ

と通信を繋ぐ。

「……ピピッ！」

「ココ。エンジンの修理の方はどのぐらい進んでいる」

『後二十分ぐらいで完了すると機関室から報告が届いています』

「そうか。なら、修理が済み次第ルクシオールは発進する。ミントからの情報提供のおかげでアニス・アジートの拠点が判明した。座標は後で伝える」

『了解しました。クロノドライブの準備をしておきます』

「頼んだぞ」

「……ピッ！」

ココとの通信を切り、レスターは改めてミントに顔を向ける。

「ミント。お前は補給が終わった後如何する？」

「そうですね。事の顛末が少し気になりますし、ちとせさんとも久々にお会いしたいのでルクシオールについて行きますわ。とは言っても私の船はルクシオールよりも足が遅いので付いて行く形になりますけど」

「そうか」

「…それとレスターさん。今回の件とは関係ありませんけど、実はお耳に入れておきたい話が在ります」

「何だ？」

「此処ではちよつと話せませんわ。この情報はかなり重要な情報ですので」

そう言いながらミントはカズヤ達に意味深な目配せを行ない、レスターは顔を険しく歪める。

目配せからミントが告げようとしている情報は本当に重要な情報だと分かったのだ。ルーンエンジェル隊の面々がいては話せないほどの情報。それを理解したレスターは椅子から立ち上がながらミントに声を掛ける。

「艦長室で話は聞こう。其処なら聞き耳を立てられるような事は無いからな。と言う訳で、ルーンエンジェル隊は各自指示が在るまでは休息していて良いぞ。アニス・アジートの拠点に着いたら間違いなく戦闘になるだろうからな。コンディションを万全にしておいてくれ」

『はい（なのだ）！』

「分かりましたわ」

カズヤ達はレスターの指示に返事を返し、それぞれティラウンジを出て行った。

レスターとミントもその後続き、二人は寄り道もせず艦長室に到着する。艦長室に入ると共にレスターは部屋にロックを掛け、改めてミントに向かい合う。

「それで話したいと言う情報は何だ？ ルーンエンジェル隊にも知られたくない情報の

ようだが」

「ええ…実を言えばルーンエンジン隊の皆様にも聞かれても問題は無いんですが、其処からちとせさんに知られる事が心配でティールラウンジでは話せませんでしたの」

「ちとせに知られたくない情報？ ……『ゴースト』に関する情報か？」

現状でちとせに知られたくない情報といえ、『ゴースト』関連しか無かった。

今のところセルダールがクーデター軍によつて支配下に置かれ、ルクシオールが孤立無援の状況に追い込まれた事に寄つて、ちとせの『ゴースト』に対する執着は低くなつている。レスターとしても今の状況で『ゴースト』に関心を向ける事は出来ない。

『ABSOLUTE』に『ゴースト』が現れた件は気になるが、今は自分達の方が優先だとレスターは考え、『ゴースト』の件は保留にしていた。その『ゴースト』に関する情報が在ると言うミントにレスターが難しげな顔を向けると、ミントは話し始める。

「はい、実は……」

ミントはレスターに自身の傍に近寄るようにジェスチャーを行ない、レスターは身を屈める。

二人しか艦長室には居ないというように、レスター以外の誰にも聞こえないように小さな声でミントは情報を告げる。聞き終えたレスターは目を見開き、本当なのかと視線でミントに問う。

視線の意味を悟ったミントは静かに頷く。

「今の情報に間違いは在りませんわ。何でも確認した情報なのですから」

「だとすれば確かに重要な情報だ。こんな事態に成っていなければ、すぐにでも確かめたいほどだな」

「ええ。ですから、この情報は今の状況でちとせさんには知られたくありませんの」

「分かった。この情報は俺の中で留めておく。しかし、『ゴースト』が『ABSOLUTE』以外で確認されたとなれば、『ABSOLUTE』が無事な可能性も僅かには在るか」

「もしくは『ABSOLUTE』が支配下に置かれ、『NEUE（ノイエ）』に逃げ帰って来たと言う可能性も在りますわ」

「……確かにな」

『ゴースト』が健在で在る事を確認出来たとしても、『ABSOLUTE（アブソリュート）』が無事で在る事を示す証拠には成らない。逆に『ABSOLUTE』が支配下に置かれたと言う事を示す証拠にも成りえる。

健在だと言う情報事態は有益な情報で在る事には変わり無いが、少なくとも楽観を与えてくれるような情報では無かった。その事を理解しているレスターとミントは難しげに顔を歪め合うのだった。

レスターの指示を受け、催眠ガスで眠らされていた整備班の面々が目覚めると共に、ルーンエンジェル隊の面々は自らが乗る『紋章機』の調整を行っていた。

これからルクシオールが向かう先で戦闘が待っている事を知っている為に、各々が真剣に『紋章機』の調整をしている。特に整備班の面々は不覚にも催眠ガスで眠らされ、ブレイブハートを強奪された事に責任を感じているのか、調整を執り行う様子は鬼気迫るほどだった。そんな中、カズヤは少し前までブレイブハートが在った発進装置の場所を眺めていた。

まだ、短い間しか乗っていないが、それでもブレイブハートはカズヤにとって相棒となっていた。その相棒を目の前で盗まれた事はやはりショックを感じていた。

「…はあ〜」

「随分と落ち込んでるな、カズヤ」

「あつ！ クロア班長」

カズヤは背後を振り向き、『紋章機』の調整を行っていた筈のクロアが立っている事に気がつく。

クロアはゆつくりとカズヤに近づき、申し訳なさそうな顔をしながらカズヤに話し掛

ける。

「…すまなかつたなあ、カズヤ…俺達が眠らされたせいで、おめえの相棒を奪われちゃった。本当にすまねえ」

「……いえ、班長達のせいだけじゃないです。僕がもつと早くコンソールを操作出来ていれば、ブレイブハートを発進させる事を防げたんですから…だから、絶対に取り戻して見せます」

「そうか…よっしゃ！ なら、俺もブレイブハートを取り戻す為に他の『紋章機』の整備を万全にしておくぜ！」

「宜しく願います、班長！」

カズヤとクロアは互いにブレイブハートを取り戻すと決意を固め合った。

同時に艦内にアナウンスが流れ、ルクシオールがアニスのアジトが在るとされる惑星アジトに向かう事が告げられたのだった。

惑星アジト。嘗ては代々トレジャーハンターを務めている家系を王朝として栄え、セルダール、マジックと並ぶほどの惑星だったが、『クロノ・クエイク』後に王朝は滅び、今では荒野が広がる惑星となっていた。

その惑星にアジトが在ったアニスは、新しく買った『EDEN（エデン）』製の船に乗って、ブレイブハートを強奪するように依頼した依頼人であるデュータと通信で話していた。

「へへん！ 依頼された品！ しつかりと手に入れて来てやったぜ、デュータさんよ」

『デュータじゃなくて、あたしの名前はデュータだよ』

「アレ？ そうだったっけ？」

『全く…それにしてもやるもんだね。幾らブローブを貸してやったとは言え、軍艦のルクシオールから目的の物を強奪して来るなんて』

「へっ！ 俺様が本気を出せばなんてこったねえぜ」

『……まあ、良いさあ。それじゃ依頼の品を渡して貰おうかね』

「あっ！ それなんだけだよお、ちよつと待つてくれねえか？」

『ん？ どうしてだい？』

「いや、そのさあ。依頼の品って『紋章機』と合体出来んだろう？ それで物は試しに相棒と合体させて見たんだよ。ああ、大丈夫。すぐに外して渡すからよお」

『……つまり、今依頼の品はアンタの相棒と合体状態に在る訳だね？』

「まあ、そう言う事だなあ」

『そうかい…それは……手間が省けて助かるねえ!!』

「ッ!？」

突然に残忍さに満ちた笑みと声を発したデータータにアニスは驚く。

しかし、アニスの驚きなどに構わずにデータータが乗る巨大艦『デイスト・データータ』に備わっている砲身がアニスの乗る船に向けられる。そして砲身からレーザーが発射され、アニスの乗る船に直撃する。

「ロードゴオン!!」

「なっ!? 何しやがんだ!？」

デイスト・データータからの攻撃に寄つて船が寄れる中、アニスは今だ繋がっている通信の先に居るデータータに向かって叫んだ。

怒りに向けられているデータータは涼しげな笑みを浮かべて、アニスの疑問に答える。

『決まってるだろう。最初からこうする予定だったのさ』

「テメエっ!? 俺の事を騙しやがったのか!？」

『フツ、あたしの主は『紋章機』が嫌いだねえ。アンタの『紋章機』も標的の一つだった訳だよ。そう言うわけで大人しく沈んで貰うよ。じゃねえ』

「ローブウン!」

一方的の言葉をデータータが言い終えると共に通信が切れた。

同時にデイスト・データータから次々と苛烈な攻撃が加えられ、船は衝撃に寄つて激し

く揺れ、損傷を負っていく。アニスは怒りで顔を真っ赤に染め、脇目も振らずに自らの相棒が在る格納庫に向かって走り出す。

その間にもデイスト・データーからの攻撃は続き、アニスが乗っている船は煙を上げ、もはや撃沈寸前にまで成っていた。

攻撃を命じたデーターは口元を残忍さに満ちた笑みで歪め、主から告げられた命令を遂行出来る事を喜んでいた。

『紋章機』一機とブレイブハートをこうも簡単に破壊出来るなんて幸先が良いね。この調子で残りの『紋章機』とルクシオールも破壊出来れば……)

ーピーピーッ!

「警報音? 一体何だい?」

突如としてブリッジに響いた警報音を聞いたデーターは、周囲の索敵を行なっている部下に向かって問い掛けた。

「我が艦と標的の船の間にドライブ・アウト反応が出ました!」

「ドライブ・アウト反応だって? この宙域に一体誰が……まさか!」

データーが何かに気がついたかのように目を見開くと同時に、デイスト・データーとアニスの船の間に光が発生し、ルクシオールがドライブ・アウトして来たのだった。

「ドライブ・アウト完了。周囲には……ええっ!!」

「如何した、ココ?」

ブリッジ全体に響くように突然叫んだココにレスターが質問した。

「は、はい! 例のアニス・アジートが乗る船が所属不明艦に攻撃を受けている模様です!
! しかも、位置は丁度本艦を中心として左右に分かれた位置に居ます!」

「何だと!? アニス・アジートが乗る船は無事なのか!」

「反応を見る限り、もう撃沈寸前のよう……ああっ!」

レスターに報告している途中でセンサーを確認したココは、デイスト・ディータの主砲から放たれた艦砲がアニスが乗っている船を貫くのを探知した。

一拍置いてアニスが乗る船は爆発する。ココは慌ててセンサーでアニスが乗っていた船が在った位置を調べる。アニスはルクシオールからブレイブハートを強奪している。もしもアニスが乗っている船にブレイブハートが在れば、回収は絶望的になってしまう。一縷の望みを賭けてココはセンサーでくまなく爆発した付近を探索する。

そしてココの祈りが通じたのか、ルクシオールのセンサーは爆発した付近を漂っている「ブレイブハートと合体したレリックレイダー」の反応を捉える。

「……ピーッ!」

「ブレイブハートの反応を確認！ 無事です！」

「モニターに映せ！」

「了解！」

レスターの指示に従い、ココはメインモニターに映像を映す。

モニターに映し出された映像には、背部スラスターを吹かそうとしているブレイブハートと合体したレリックレイダーの光景が在った。自らのオペレーター席でメインモニターを見たちとせは顔を青褪めさせ、思わず席から立ち上がってレスターに振り抜く。

「クールダラス司令！ 急いで回収をお願いします！ あのままだとただの的にしかありません！」

「ああ、どうやらアニス・アジートはブレイブハートの特性を良く知らずに自分の『紋章機』と合体させたようだな。このままだと確かに不味い」

ちとせの言いたい事を理解しているレスターは、苦虫を噛み潰したような顔で同意した。

ブレイブハートは『NEUE（ノイエ）』製の『紋章機』と合体したからと言って、合体した『紋章機』の力を増幅させる訳ではない。『紋章機』とブレイブハートの双方にパイロットが乗って、初めて真価を発揮するのだ。

しかし、アニスはその事を知らずにレリックレイダーとパイロットが居ないブレイブハートを合体させてしまっている。アレではブレイブハートは真価を発揮する事が出来ないどころか、逆にレリックレイダーを起動させる事も出来なくなってしまう。

案の定僅かに反応を見せていたレリックレイダーのスラスタは完全に機能を停止し、宇宙空間を漂い始めていた。その隙をデイス・テイターが逃す筈が無く、主砲がレリックレイダーに向けられる。

「司令！ 所属不明艦の主砲がああ『紋章機』に向けられています！」

「クッ！ ルクシオール前進だ！ シールドを張って『紋章機』と所属不明艦の間に割り込め！ 何としてもブレイブハートを護るんだ！」

「は、はい！」

指示に従いココは操舵を動かし、シールドを張りながらルクシオールは前へと前進を開始する。

デイス・テイターは何としてもアニスが乗る『紋章機』を破壊しようと主砲を発射する。その前にシールドを張ったルクシオールが割り込み、アニスが乗る『紋章機』の盾になった。

「ブレイブハート！！」

「クッ！」

シールドを張っているながらも襲い掛かる衝撃に耐えながら、レスターはカズヤに通信を繋ぐ。

「……ピッ！」

「カズヤ！ 聞こえるか!？」

『は、はい!』

「良いか、よく聞け。今ルクシオールは敵からの攻撃を防いでいる。他の『紋章機』を護衛につかせるから、お前はシャトルに乗ってブレイブハートに乗り込むんだ。現状でブレイブハートを回収するにはそれしかない。危険だが、やれるか?」

『な、何とかやってみます! ブレイブハートは絶対に取り戻して見せます!』

「頼んだぞ! ルーンエンジェル隊は発進。及びルクシオールの全兵装を敵に向けて発射だ! 何としてもブレイブハートを護れ!」

「了解しました!」

ココはすぐさま返事を返し、ルクシオールに備わっている兵装でデイスト・データに攻撃を開始した。

同時に『紋章機』の発進ハッチが開き、クロスキャリバー、スペルキャスター、ファーストエイダーが発進してデイスト・データの周りに集まって来ている巡洋艦と攻撃艦に向かつて行く。

その間にレリックレイダーと通信を繋ごうとコンソールを操作していたちとせが、レスターに報告を行なう。

「クールダラス司令！ アニス・アジートが乗っている『紋章機』との通信が可能になりました！」

「すぐに繋げ」

「はい！」

ちとせはレスターの指示に従い通信を繋ぎ、艦長席に備わっているモニターにアニスの顔が映る。

『ウワツ！ お、お前ら?!』

「…色々と言いたい事が在るが、今はそれどころじゃないから手短に言うぞ。今から其方にシヤトルが行く。邪魔をせずに大人しくいろ」

『そ、それよりも！ ど、どう言う事だよ!? お前から奪った奴をレリックレイダーに合体させたら、全然動かなくなっちゃったぞ?!』

「説明している暇は無い！ 良いか、邪魔だけは絶対にするんじゃないぞ！ 死にたくなければ大人しくしろ!!」

そうレスターは言い終えると共に通信を切って戦況の方に集中する。

実際にアニスに構っていられる状況では無かった。前回とは違い、今回は旗艦と思わ

しきデイスト・テイータが居る上に、攻撃艦が三隻ほど居る。その上、巡洋艦が六隻。それに比べてルクシオールは現在居る位置から動く事が出来ない。ブレイブハートを必ず取り戻すと決意しているおかげでルーンエンジェル隊のテンションは高いが、それでも現状はルクシオール側が不利だった。

（前回の時のようにクロスキャリバーの出力が好調時のラッキスター並みだったならば何とか成ったかも知れんが、今は無理だ。とにかくブレイブハートを取り戻し、エンジェル隊の誰かと再合体させなければ！）

ブレイブハートを取り戻した後の方針をレスターは決めると共に、即座にカズヤがブレイブハートに辿り着くまでの時間を稼ぐ為に指示を出すのだった。

ルクシオールから発進したカズヤが乗るシャトルは真っ直ぐにブレイブハートと合体したレリックレイダーの下に向かっていた。

ただ宇宙空間にレリックレイダーは漂っているだけなので、妨害も無くシャトルはレリックレイダーの下に辿り着き、宇宙服を着たカズヤがブレイブハートに乗り込む。

「よし。すぐに状態を調べないと…頼む！ 起動してくれ！」

祈るような気持ちでカズヤはコンソールを操作し、ブレイブハートを起動させようと

する。

外見ではアニスが乗っていた船が爆発した時の衝撃で装甲の一部が僅かに凹んでいるようにしか見えなかったが、もしかしたら無理やり合体させた影響が出ている可能性が在る。もしも此処でブレイブハートが起動しなかったらとカズヤは不安と恐怖を抱く。

その不安と恐怖を振り払うように、最後の起動スイッチをカズヤは強く祈りながら押し込む。

同時にカズヤの祈りが通じたのか、ブレイブハートのコックピットが明るくなっていき、ブレイブハートは起動する。

「ブウウウン！」

「良かった！ 良し、すぐに合体を解除して！」

「ブウウウン！」

「ん？」

突然響いた音にカズヤがコンソールに目を向けてみると、レリックレイダー側から通信を繋いでくれと言う事を知らせるメッセージが出ていた。

カズヤは顔を顰めながらも、コンソールを操作してアニスと通信を繋ぐ。

「ブウウウン！」

「何だい?」

『おい! どうなってるんだよ! お前の機体と合体したらレリックレイダーが全然動かなくなっちゃったぞ!』

「ブレイブハートは僕が乗らないと起動しないんだよ!!」

『何!? そうなのか!? なら、早く起動させろよ!』

「もう起動は終わってるよ! そっちも再起動させれば復帰する筈だ!」

『再起動だな! 良し!!』

カズヤの言葉に従って、アニスは自身のコンソールを操作してレリックレイダーを再起動させる。

それと共にブレイブハートだけではなく、アニスが乗るレリックレイダーのクロノ・ストリングエンジンから起動音が鳴り響き、レリックレイダーは復活した。

「ブーブウウウウン!!」

『おおおおつ!! すげえ! 何時もより調子が良いぜ! よっしゃ! このままあいつらに借りを返してやる!』

「なっ!! 何を言ってるんだ! すぐに合体は解除するよ!」

『うっせえ! こっちは買ったばかりの船を破壊されたんだ! このままじゃ腹の虫が治まらねえんだよ!!』

「そんなのそっちの都合だろう！　とにかく、合体は解除するからねえ！」
『あつ！　待て馬鹿！』

合体解除を行なおうとするカズヤを止めようとアニスは叫ぶが、カズヤは止まらずに合体を解除する為のボタンを押す。

だが、レリックレイダーとブレイブハートの合体は解除されず、コンソール画面にエラーが表示されていた。

「アレ？」

疑問の声をしながらカズヤはコンソールを操作するが、何でやっても合体は解除されず、エラーだけが表示されていた。

「ど、どうして!?　原因は!?　いや、それよりも司令に知らせないと!？」

とにかく、レスターに状況を伝えようとカズヤはルクシオールと通信を繋ぐ。

「司令！　大変です！　ブレイブハートの合体が解除出来ません！」

『何!?　本当か!?』

「はい！　幾らやっても合体が解除出来ないんです！」

『ちとせ！　原因は分かるか!?』

『恐らく無理やり合体させた事と、先ほどの爆発の衝撃で合体機構の一部が破損したのかもかもしれません』

『クッ！ こんな時に!?』

『……なら、このまま行くしかねえって事だよな!』

『ッ!?!』

喜んでいるような通信に割り込んで来たアニスの叫びと共に、レリックレイダーの背部スラスターが噴出し、ルクシオールの前へと移動を開始した。

「うわっ！ いきなり何をするんだ!?!」

『合体が解除出来ねえんだろう！ なら、このまま戦うしかねえだろうがよお!! こっちもあいつらに借りを返してえんだ!! 行くぜえええええ!!』

「ちよっ！ 待つてくれええええっ!!」

絶叫をカズヤは上げるが、レリックレイダーは止まる事無く、他の『紋章機』達とディスト・ディーターが率いる艦隊が戦っている戦場へと突撃するのだった。

3 — 4

突然自分達が戦っていた場に飛び込んで来たレリックレイダーに、リコ、テキィーラ、ナノノは驚いた。

カズヤがブレイブハートを取り戻す時間を稼ぐ為に彼女達はデイスト・ディータが率いる艦隊と戦っていたのだが、今だブレイブハートとレリックレイダーとの合体は解除されておらず、レリックレイダーと合体したまま戦場に入ってきた。

事前に出されていたレスターの指示では、レリックレイダーとの合体を解除したブレイブハートと三機の『紋章機』のどれかと再合体する予定だったはず。一体どう言う事なのかとリコ、ナノノ、テキィーラが困惑する。すると、ルクシオールとの通信が繋がり、レスターから報告が届く。

『三人とも聞こえるか？』

「聞こえているけれど……どう言う事なのよ、クールダラス？ ブレイブハートはアジートの『紋章機』との合体を解除して私達の機体のどれかと再合体するんじゃないの？」

『テキィーラの疑問は最もだが……ブレイブハートの合体機構に問題が発生した。アニス・

アジートが乗る『紋章機』との合体が解除出来ないんだ。しかも、アニス・アジートは所属不明艦とどうやら戦う気らしい』

「それマジ!？」

告げられた状況にテキーラは叫び、通信を通して話を聞いていたリコとナノナノも目を見開く。

現状で『紋章機』が一機戦力に加わる事は本来ならば喜べる事。しかし、それは味方だとハッキリ呼べる相手ならばの話。残念ながらアニスに対してはリコ、テキーラは余り良い印象を持っていない。

何セルクシオールに侵入して機関室の破壊やブレイブハートの強奪を行なった人物なのだから。ブレイブハートから落ちるところを助けられたナノナノは、リコやテキーラほどアニスに対する印象は悪くないが、それでも一緒に戦う事に関しては躊躇いを覚える。乱入して来た相手が今ルクシオールに居ない最後の『ルーンエンジェル隊』のメンバーだったならば問題は無かったかもしれないが、アニスは色々とやり過ぎているので一緒に戦う事にリコ達が躊躇いを覚えるのは当然だった。

無論レスターもリコ達の気持ちは理解している。本来ならばアニスの戦場への乱入など断固拒否するところなのだが、現状でそれが出来ないのも同時に理解していた。

『気持ちは分かるが言って聞くような相手ではない。此方の指示も無視して行動するだ

ろう。だから、リコとテキーラはルクシオールに接近する敵艦を優先して攻撃してくれ。ナノナノはアニス・アジートが乗る『紋章機』の支援を頼む！ アニス・アジートはともかく、今ブレイブハートにはカズヤが乗っている。何としてもカズヤの安全だけは確保しなければならん！」

「わ、分かったのだ！ ファーストエイダー！ これから支援に向かうのだ！」

「スペルキャスターも了解よ！」

「クロスキャリバーも了解しました！」

ナノナノ、テキーラ、リコは指示に従いそれぞれ自身が乗る『紋章機』を操作する。

ファーストエイダーは真つ直ぐにデータが乗るデイスト・データに向かつて居るレリックレイダーの後を追いかけて、クロスキャリバーとスペルキャスターはルクシオールに接近する敵巡洋艦と攻撃母艦に向かつて攻撃を開始した。

そしてブレイブハートが機能を回復した事に寄つて何時もよりも性能が増幅したレリックレイダーは、デイスト・データを護るように展開していた巡洋艦二隻に向かつて急速に接近していた。

「俺様の船を沈めてくれた借り！ ぜってえに返してやるぜ!!」

「……ピピッ！」

「あん？」

コックピット内部に響いた音にアニスが僅かに目を向けてみると、ブレイブハートからの通信を知らせる表示が出ていた。

うるさいので通信を切っていた事を思い出したアニスは、これから戦闘が始まる時に音が鳴るのは邪魔だと思い、改めてブレイブハートとの通信を繋ぐ。

ーピーッ!

「何だよ? そろそろ戦闘をおっぱじめるんだから邪魔すんな!」

『……邪魔って、勝手に戦場に入ろうとしているのはそっちだろう!? 今すぐにルクシオールと通信を繋ぎ直して司令の指示を聞いてくれ!』

レリックレイダーのコックピット内部にカズヤの怒声が響いた。

いい加減にアニスの勝手な行動にカズヤの我慢の限界が来たのだ。何せ戦場に向かってレリックレイダーを飛び立たせると共にアニスはルクシオールとの通信を切った。完全にアニスはレスターの指示を聞く気が無いと言う事を示す行動だった。

本来ならば緊急時に使用出来るブレイブハートに寄る『紋章機』を操作する機能が在るのだが、そのシステムも無理やりに合体した影響で思うように機能しなかった。しかもアニスは真っ直ぐにレリックレイダーをデイスト・データに向かわせている。明らかに強力な兵装が備わっているデイスト・データにブレイブハートと合体しているとは言え、レリックレイダー一機で挑むのは無謀としか言えない。

何とかカズヤはアニスを説得して、リコ、ナノナノ、テキーラと一緒に戦うと進言するが、アニスは構わずにレリックレイダーをデイスト・ディータに向かわせる。

『ちよ、ちよつと話を聞いてくれ!! 幾らブレイブハートと合体しているからって言ったって、この『紋章機』一機で戦うなんて無謀だよ!』

『うつせえ! 此処までコケにされたんぞ! それにさつきも言ったが、買ったばかりの船まで沈められてんだ! あの野郎にこつちが受けた借りを何倍にも返さねえと、気が治まらねえんだよ!!』

アニスは叫ぶと同時に操縦桿に付いているボタンを押す。

同時にレリックレイダーは巡航形態から戦闘形態へと移行し、左右のアームに備わっている遠距離誘導レーザー『スター』の照準が前方に居る巡洋艦に合わせせる。

「食らいやがれ!!」

レリックレイダーの左右のスターから大きさ200mぐらいの赤いブーメラン状のレーザーが発射され、巡洋艦に真っ直ぐに進み直撃すると共に数百mに及ぶ爆発を起こした。

スターの直撃と追加で受けた爆発に寄って巡洋艦の外装に大穴が開き、一拍置くと共に巡洋艦は大爆発を起こす。

ーードゴオオオオン!!

『……す、凄い威力だ』

ブレイブハートのコックピットから巡洋艦が撃沈するのを見ていたカズヤは、レリックレイダーの武装の威力に驚いた。

レリックレイダーの武装の威力は明らかにクロスキャリバー、スペルキャスター、ファーストエイダーを上回っていた。テンションが最大になった時に必殺技はそれぞれの長所があるので優劣は付けられないが、少なくとも通常時で使える武装の威力に関してはレリックレイダーが一番だった。

武装の威力に呆然とカズヤはなるが、長年レリックレイダーに乗っているアニスにとつては当然の事なので平静なままレリックレイダーをデイスト・データーに向かわせる。

「フン。やるもんだね」

自らが操る無人の巡洋艦を一隻あつさり撃沈させるのをデイスト・データーのブリッジから見ていたデーターは、感心したように呟いた。

（海賊退治で有名になるだけの事は在るつて事だね……だけど、馬鹿だね。幾ら『紋章機』だからって、一機じゃこつちに勝てる訳が無いんだよ！）

データーの口元が残忍さに満ちた笑みで歪むと同時に、モニターに映っていたレリックレイダーの左右から二隻の巡洋艦が砲撃を放った。

「なっ!?!」

左右から砲撃を放って来た巡洋艦に気がついたアニスは慌ててレリックレイダーを上昇させて砲撃を回避した。

しかし、上昇した先には巡洋艦よりも大きく、武装も上回っている攻撃艦が何時の間にか回り込んでいた。その事にアニスは気がつき、レリックレイダーが包囲されようとしている事に気がつく。それと共にレリックレイダーに通信がデイスト・データから通信が繋がり、勝ち誇った顔をしたデータが映し出される。

「オーブウン！」

「てめえ!?!」

『フフツ、確かにアンタの腕はかなりのもんだけどね。一機だけでこっちに勝てると思ってたのかい？ こっちはアンタが今まで倒して来た海賊どもとは違うんだよ』

「クツ！」

アニスが乗るレリックレイダーは高い機動力と近接戦闘力を持つ機体。

故に一撃離脱の戦法を得意としている。本来ならばその戦法を使って短期決戦で勝負を決めるのがアニスのやり方だった。だが、データは事前の情報でアニスが得意としている戦法を調べていた。

そしてアニスがレリックレイダーをデイスト・データに向かわせて来ている事に気

がついた時から罨を張っていた。アニスは気にも止めていなかったが、ルクシオールから援護が来ないように強力な攻撃艦二隻と巡洋艦三隻を足止めとして、データーは操作していた。

今回の戦いで重要なのはルクシオールの戦力を減らし、次の戦いで優位に戦いを進められるようになる事こそが重要。

(功績は上げとかないといけないんだよ。じゃないと『マジック』制圧の任に就かせて貰えなくなるからね)

それはデーターにとって何よりも重要な事。NEUE^{ノイエ}人で在りながらもクーデター軍に所属しているのは全てその為。惑星『マジック』を制圧する任だけは、他の誰にもデーターは譲る気は無い。

その為にも此処でレリックレイダーを破壊する為に命令を発しようとする。

データーの作戦はアニスに対して完璧だった。アニスの戦闘に関する情報を事前に調べ上げ、ルクシオールが乱入して来る不測の事態になっても冷静に対処し、アニスを包囲する事に成功した。

確かにデーターの作戦はアニスに対して見事しか言えなかった。だが、データーは一つだけ重要な事を見逃していた。ルクシオールの艦長が一体誰なのかを考慮する事を忘れてしまっていたのだ。

それを表すようにレリックレイダーに攻撃を放とうとしていた攻撃艦の横合いに、環状レーザーが直撃する。

ーードゴオン！

『ツ!?!』

突然の奇襲攻撃にデータだけではなく、攻撃されようとしていたアニスも目を見開く。

しかし、二人の驚きに構わず、今度はレリックレイダーと合体しているブレイブハートに備わっているラピッドレーザーが放たれ、攻撃艦の武装に直撃する。

それによって攻撃艦の武装の一部が破壊された。同時にレリックレイダーのコックピット内部にカズヤからの通信が届く。

『今だ！ 破壊した場所から敵は攻撃は出来ない！ すぐに移動するんだ！』

「わ、分かった！」

カズヤの指示に従ってアニスはレリックレイダーを操作し、煙を上げる攻撃艦の横を通り過ぎてデータが敷いた包囲網から抜け出した。

敵艦との距離が離れると共にレリックレイダーの横をファーストエイダーが並走し、アニスにナノナノから通信が届く。

『間に合ったのだ！』

「お、おめえは!? あん時の!?」

『…あの時は助けてくれてありがとうなのだ。でも、今は敵をやつつけるのが先なのだ!』

『僕とナノナノが援護する! とにかく今は敵を倒す事に集中しよう!』

「……わあつたよ! 足引つ張んじゃねえぞ!」

一先ずは敵を倒す方が先決だとアニスは判断し、攻撃しようとしている巡洋艦にレリックレイダーを向かわせる。

ファーストエイダーもその後を着いて行き、二機の『紋章機』は巡洋艦に向かつて攻撃を開始した。レリックレイダーは先ほどと別の巡洋艦を破壊した時と同じようにスターを放ち、敵の外観に大穴を開ける。更に追い討ちをかけるようにファーストエイダーがチャクラムを放ち、巡洋艦を沈黙させ、別の敵艦へとレリックレイダーと共に向かう。

一部の武装が破壊されたが、それでも通常の艦艇よりも武装が多い攻撃艦は二機の『紋章機』を破壊しようと照準を向ける。しかし、発射される前にブレイブハートからラピッドレーザーが撃ち出され、攻撃艦の武装は破壊された。ラピッドレーザーの威力は弱い、その点を補うように連射性は優れている。その上、攻撃を放つ為にエネルギーを武装に敵は集める必要があるので、ラピッドレーザーの弱点で在る威力の弱さを補え

ている。

次々と武装が破壊されてしまった攻撃艦は無防備に近い状態に追い込まれ、すかさず攻撃を加えたレリックレイダーとファーストエイダーによって撃沈されてしまう。

先ほどまで優勢だった筈の自分達側が一転して追い込まれ始めた事に気がついたデーターは、ヒステリックに叫ぶ。

「何だいこれは!? もっと確り無人艦を操作しな!」

「だ、駄目です! 敵の機動速度が速すぎて指示が追いつきません!」

「くっ! たったの二機を何で落とせないんだい! こうなったら、こっちも戦列に加わって…」

ーードゴオン!

データーの叫びをかき消すように爆発音と共に、デイスト・データーが突然激しく揺れた。

予想外の衝撃に立っていたデーターは床に倒れてしまうが、すぐさま顔を上げると共に席に着いている部下の男性が報告を行なう

「報告! ルクシオールから砲撃が放たれ、本艦に直撃! 航行には支障はありませんが、船体に損傷が出ています!」

「ルクシオールから攻撃!? どう言う事だい!? ルクシオールには攻撃艦二隻と残りの

巡洋艦三隻を向かわせていたはず!」

「ど、どうやら、ルクシオールは残りの『紋章機』に巡洋艦を全て破壊させて、攻撃艦を振り切ったようです!」

「ッ!? しまった!」

攻撃艦はその名称がつくように強力な武装の数々の攻撃力と強靱な装甲に防御力が高い艦艇。

しかし、高い攻撃力と防御力の為に速度や旋回性能が低い。逆にルクシオールは機動性とスピードを備えた高速艦。故にレスタターは先ずルクシオールに向かつて来た巡洋艦を優先してクロスキャリバーとスペルキャスターに破壊させたのだ。巡洋艦は攻撃艦よりも圧倒的に火力も装甲も弱い、その代わりに速度が在る。

ルクシオールが攻撃艦を振り切る時に最も邪魔なのは巡洋艦。だからこそ、レスタターはリコとテキーラに優先的に巡洋艦を破壊するように指示したのだ。もしもデイータがアニスだけではなく、ルクシオール側にもっと気を配っていたら話は変わっていた。今回の戦いでのデイータの敗因はルクシオールを、レスタター・クールダラスと言う男を甘く見ていた事だった。

(一、これが『E D E N』の英雄の一人の実力!? 甘かった! ルクシオールが現れた時点でアニス・アジートの『紋章機』に無人艦を全部向かわせていけば!?)

そうディータは内心で後悔するが、時既に遅い。

既にルクシオールと攻撃艦二隻との距離が開き、ディスト・ディータを攻撃射程に捉えている。その上、クロスキャリバー、スペルキャスターに加え、自分達が相手をしてきた敵艦全てを破壊し終えたファーストエイダー、レリックレイダーの四機の『紋章機』が居る。

幾ら強力な性能を持っているディスト・ディータとは言え、ルクシオールと四機の『紋章機』を相手に出来ない。無事な攻撃艦が戻って来るまでにディスト・ディータを破壊されてしまう可能性が在る事に気がついたディータは、すぐさま自分達が行なうべき事を瞬時に決める。

「……撤退だよ！　すぐに撤退しな！」

「りよ、了解しました！」

ディータの指示に従い、ディスト・ディータは急旋回を行なって戦場から撤退して行く。

同時にルクシオールを追っていた攻撃艦二隻も旋回し、ディスト・ディータ同様に戦場から撤退し出す。

自らの勝利を確信したアニスは勝ち誇った笑みを浮かべて、ディスト・ディータに通信を繋ぐ。

「へっ！… どんなもんだ！ 俺様はやられたら何倍にして借りは返す主義なんだよ！ 良く覚えとけ!! データさんよ！ アレ？ ……データだけ？」

『フン…今日のところは負けを認めてやるよ……だけど、アンタ…大事な事を忘れてるみたいだね』

「はっ？ ……忘れてるって……何がだよ？」

『自分で考えるんだね』

ーブウン！

悔しそうな声でデータが言い捨てると共に通信が切れた。

アニスはデータの言い残した言葉の意味を考えようとするが、考える前にすぐさま答えは出される。

突然並走していたファーストエイダーがレリックレイダーに向かってアンカーを撃ち込み、レリックレイダーを捉える。

ーブウン！

「うわっ！ 何しやがる!?!」

『一緒にルクシオールに来て貰う為なのだ!』

「ふ、ふざけんな！ 良いからワイヤーを外せ！ 外させねえってんだったら、暴れ…」

ーブウン！

「……へっ?」

突如としてコックピット内部の光が次々と消えて行き、レリックレイダーのクロノストリングエンジンは停止した。

呆然とアニスが固まっていると、ブレイブハート側から非常用の通信回線でカズヤから連絡が届く。

『悪いけど逃がさないからね。今ブレイブハートの機能を停止したから、もう逃げられないよ。君は一応強奪犯なんだからね』

「…し、しまったあああああああつ!!!」

自分がルクシオール側からどう見られているか思い出したアニスは、動かなくなったレリックレイダーのコックピット内部で頭を抱えながら叫んだのだった。

その後ファーストエイダーにレリックレイダーは牽引されて、ルクシオールの格納庫に運び込まれた。

格納庫にはレスターの指示を受けた警備員が配置され、レリックレイダーのコックピットが開くと共にアニスは手錠を腕に掛けられて拘束されてしまう。

「……ガツチャ！」

「ううっ。ちくしょう」

警備員に手錠を掛けられたアニスは悔しそうに声を漏らしながら、艦長室へと連れて

行かれる。

その様子を遠目から見ていたリコ、テキーラ、ナノナノ、そしてカズヤはそれぞれ複雑そうな視線を向けていた。

「……あのアニスさんって人……どうなるんでしょうか?」

「流石に今回は前回と違って敵しくなるでしょうね。機関室の破壊やブローブの侵入の手助け、それに警備班や整備班の連中にした事も在るから……利用されたからと言って見逃して良い事じゃないわ」

「……うーん。複雑なのだ」

「ナノナノはアニスに助けられたからね」

「……そう言えば、シラナミ?」

「うん? なんだい、テキーラ?」

「アンタ、アジートと敵との通信ブレイブハートから聞いていたんでしよう? だってら、敵の名前ぐらい聞いてないの?」

「あつ! それなら聞いてよ。確かデータ、いやデータって名前の方が正解なのかな?」

「はあつ!! データ?」ですって!」

カズヤが告げた今回の件の首謀者の名前を聞いたテキーラは、目を見開いて驚愕し

た。

テキーラの様子にカズヤ、リコ、ナノナノは驚いて目を向け、リコがテキーラに質問する。

「テキーラさん？ もしかして知っている相手なんですか？」

「……ええ、データータつて名前に確かに覚えが在るわ。だけど、私の知っている相手本人なのかは分からないわ」

「でも、知っている相手かも知れないんだよね。だったら、司令に報告した方が良くんじゃないかな？」

「……そうね。アジートは本人に会っているでしょうから、特徴も分かればハッキリ出来るわ。行きましよう」

カズヤの意見にテキーラは頷くと共に歩き出し、カズヤ達はその後を着いて行く。

直通エレベータに向かって歩きながら横目でカズヤがレリックレイダーの方に視線を向けて見ると、クロア班長の指示に従ってブレイブハートの修理を行なっている整備班の姿が在った。深い損傷は無いが、ブレイブハートには合体機構の異常などの問題が出ている。

早くブレイブハートの修理が終わる事をカズヤは望みながら、リコ達と共に直通エレベータに乗り込んで艦長室に向かう。

ブリッジへとカズヤ達が辿り着いて見ると、先ほど戦闘で得られた情報を分析しているのか慌しくブリッジ員は動き回っていた。チーフリーダーのココも敵艦の分析に忙わっており、ちとせは回収したレリックレイダーを解析しているのかコンソールを忙しく操作していた。

誰もが忙しい状況に気がついたカズヤ達は、邪魔をしないようにエレベータから出てブリッジから出て艦長室へと向かう。

艦長室前の扉に辿り着くと、横についているインターホンをキーラが押す。

「……ピンポン！」

『……何だ？ こっちは聴取中だ。報告なら後で聞くが』

「実はシラナミから気になる名前を聞いてね。もしかしたらさっきの敵旗艦に乗っていた相手。私の知っている奴かもしれないのよ。だから、アジートに特徴を聞きたいんだけど？」

『…分かった。今開ける』

「……ブーン！」

了承の言葉と共に扉のロックが外され、キーラを先頭にカズヤ達は入ろうとする。しかし、入る前にキーラがカズヤ達に顔を向けて指摘する。

「ああ、シラナミ達は部屋の外で待っていた方が良いかも」

「えっ？」

「全員で艦長室に入ったら狭くなるでしょう。それに聴取中だしね。気になるかもしれないけど、今は待つていた方が良いと思うわ」

「…そうですね。確かに艦長室に全員で入ると狭いですから」

「分かったのだ」

「僕も構わないよ」

「それじゃあね」

テキーラの言葉と共に扉が閉まり、カズヤ達は部屋の外で待機する。

防音が完璧なので中でのような会話が行なわれているかは分からない。一体どんな会話がされているのかとカズヤ達は気になるが、今は邪魔になるだけだと思い静かに待つ。すると、ブリッジとは違う別の通路からミントがやって来る。

「あら？ 皆さん如何しましたの？ こんなところで？」

「あつ！ ミントさん！」

声を掛けられたリコが顔を向けて見ると、ミントがゆっくりとリコ達に近寄る。

「今着いたんですか？」

「ええ、そうですね、カズヤさん。どうやら皆さん無事危機を乗り越えたようで何よりですわ。……それでレスターさんとアニスさんは艦長室の中に居りますの？」

「はい。後テキーラも一緒に居ます」

「……ええ、その様ですわね」

頭に付いているテレパスファアの力で艦長室の中の様子を悟ったミントは、難しげに顔を歪める。

ミントの予想通り艦長室の中は荒れに荒れている。実直で真面目な軍人であるレスターだからこそ、今回の一件は厳しく処罰する事は間違い無い。これがムーンエンジン隊の司令官だったタクトならば話は変わって居たかも知れないが、レスターでは確実にアニスを処罰する。

（此処でアニスさんを処罰するのは当然の事かも知れませんが……あの赤い『紋章機』の戦力は捨てがたいですわね）

ミントとしても騙されていたとは言え、商会の名を語って蛮行を行なったアニスの行動には怒りを覚えている。

信用第一の業界なのだから、その信用を汚すような行動をした者には怒りを禁じえない。しかし、簡単に処罰すると告げるにはアニスは捨て難い。長い間乗りこなしていただけに『紋章機』の操作技術はかなりの者。トレジャーハンターをやっているだけに高い洞察力を持っている事をミントは知っている。

「……此処は私が一肌脱ぎますか……アニスさんにはレスターさん達に直接力を貸せ

ない私の代わりをして貰いましょう) ……さて、私ちよつとレスターさんと交渉をして参りますわ」

「えっ? でも、今聴取中ですから交渉とかは無理なんじゃ?」

「大丈夫ですわ。ルクシオールの今後の為になる事ですから、きつと聞いてくれますわ」
(な、何だろう? ……ミントさんの笑みが凄く怖い)

笑顔を浮かべるミントにカズヤは言い知れぬ予感を感じ、思わず体を震わせてしま
う。

そしてそのカズヤの予感の中するのだった。

《第三章『トレジャーハンター』終了・第四章『衛星フェムト』に続く》

第4章 衛星フエムト

4-1

様々な機器が置かれている施設内部。

年代を感じさせないほどに機器関係には劣化が見えず、寧ろ新品に近いとさえ言えるほどだった。その場所に『ABSOLUTE』から脱出し、『NEUE』へと逃れて来た『ゴースト』が停泊していた。

人の気配が全く無いにも関わらず、『ゴースト』の周りに在る機械の類は忙しく動き回り、次々と損傷箇所を修理して行く。

(……この調子なら後数日でフルメンテも終わって万全な状態に戻るだろうね)

《肯定》

『ABSOLUTE』での戦闘でも深い損傷を負ったが、それ以外にも見えないダメージが蓄積していた。

今後の戦闘は寄り激しい戦闘が待っている事は明らか。今ルクシオールに在る『紋章機』と違って、『ゴースト』が整備や修理などを行なえる場所は、『NEUE』では現在フルメンテを受けて居る場所以外に無い。『紋章機』運用専用のルクシオールならば在

る程度は整備は行なえるだろうが、その為にはルクシオールに接触するしかない。加えて言えば、ルクシオールではあくまで“在る程度の整備”までしか行なえないのである。

後々ではルクシオールに接触する事も考慮しているが、その前に今居る場所で万全な状態に戻る必要が在った。

(……ああ、それと例のペイントの方は消せそうかい?)

《……現在成分の解析中……解析結果次第で消去出来るかは判明》

(出来る事なら消したいな。これが原因でこの前の時に他の『紋章機』に捕捉されたようだからね……多分敵側はこのペイントに関する情報を得ている筈だ)

思い出すのはアルモを連れ去る時に聞いた一連の件の首謀者の怒りに満ちた叫び。

確実に『ゴースト』を破壊する為に何かしら行なつて来るのは目に見えている。通常ならばステルスを使用すれば発見される事は無いが、残念ながら今『ゴースト』には目印となつてしまう電磁波を発生させるペイントが付着している。

その情報を敵側が入手していれば、無人艦に電磁波を捉える探知機を取り付けている可能性が高い。幾ら戦艦並みの力を持つていえるとは言え、数の暴力の前では前回と同じ結果しか待つていない。

(……まあ、今はフルメンテが終わるのを待つしか出来ないけどね)

《肯定……また、電磁波を感じされたとしても、この補給地の護りは万全》

(確かに。此処には“複数の自動砲台”が周りに設置されているから、そう簡単には侵入は出来ないからね。しかし、昔の人達には本当に助けられるなら……この施設のおかげで補給や修理の問題は解消できたからな)

《本機の最終目的の為に必要な事。時が来るまで本機が失われる事は何が在っても在ってはならない》

(……俺としては別の希望が在って欲しいよ。君が作られた目的は理解しているけど、納得は出来ない)

《……それは貴方が消えるからですか?》

(違うよ。まあ、言っても信じられないだろうけど、俺は“君にも消えて欲しくない”。例えそうなるように造られていたとしても、違う方法が在るかも知れないんだ。だから……)

《議論を行なう必要性を感じない》

(ツ!?)

有無を言わさぬ断言に言葉が出せなくなつた。

既に議論する余地など無いと言う断定。決まつた事を実行する機械として在るべき行動。寧ろ造られた目的を反する事こそが、本来ならば赦されない事だと言うほどに無

感動さが漂っていた。

本気で議論する気が無い相手の様子に、嘗て同じような考えを持つていたモノと敵対した事を思い出す。

(……………『黒き月』の意志と同じように目的が最優先か……だけど、俺は……いや、先ずはミルフィーを助け出す方を優先するべきか。どっちにしても『セントラルグロウブ』を占拠されたままにはしておけないんだから)

《……同意》

今優先すべき事を悟り、自分達が今後どう動くべきなのかを考え出す。

敵は強大な戦力を持った相手。最終的な目的も大切だが、目の前で起きている脅威も見過ごす事は出来ない。特に『セントラルグロウブ』で好き勝手に何かをされるのは不味い。もしも今、『セントラルグロウブ』が本来の役割に戻ってしまえば防ぐ事が出来ないのだから。

今回の敵は『セントラルグロウブ』の本当の正体を知らないだろうが、楽観視は出来ない。何かが起きて『セントラルグロウブ』が目覚めてしまえば、全てが終わってしまう。

《本懐……防がなければならぬ……何よりも優先すべき事項》

その為に気が遠くなるような長い年月を過ごしていた。『アナザースペース』内で偶

然にも天才的な戦闘指揮能力を持つ者を得られ、更には『E^エD^デE^エN^ン』製の『紋章機』の乗り手と深い仲にまで在る。

搭乗者になるのに全てを兼ね備えた相応しい存在が居ると言うのに、その搭乗を邪魔するのが寄りにもよって内に宿っている相手。その気になれば如何にでも出来る相手だが、かと言って消すには惜しいどころか悪手でしかないのはこれまでの戦闘で分かり切っている事。冷徹に判断出来る自らが判断し切れない事に、苛立ちを感じながら静かに時を待つ。

“自らに乗る事が出来る全ての資格を持つている搭乗者——『烏丸ちとせ』——が自らの意思で乗り込む時を”。

前回の戦闘から二日後。ミントからの補給も終わり、侵入された時に受けた被害も全て修復し終えたルクシオールはセルダールへと進路を取っていた。

向かう先はクーデター軍に支配された宙域だが、真実を明らかにする為にも向かわなければならぬ事は変わりない。テキーラからの情報で『N^ノE^イU^エE^エ』の人間もクーデター軍に協力している事が明らかになっただけに、尚更に真実の究明は出来るだけ早くしなければならぬ。更に言えばレスター達、『E^エD^デE^エN^ン』には時間が限られている。

ミントからの情報で既に『N^ノE^イU^エ』ではクーデター軍の放送以降、『E^エD^デE^ン』に対する不審が高まって来ている事が知らされた。その疑いを晴らさなければ今後の『E^エD^デE^ン』と『N^ノE^イU^エ』の交流に影響が出る。故にレスターは危険だと分かっていたが、セルダールに向かう事を決めたのだ。

だが、それ以外にもレスターを悩ます事が今のルクシオールには在った。前回の戦闘後に捕まえたアニスの事である。アニスはルクシオールの機関室破壊、不法侵入、更にはブローブ侵入の罪が在る。緊急事態では在るが、ルクシオールにアニスが行なった事は赦されない。当然ながらレスターはアニスをルクシオールの独房に入れるつもりだったのだが、其処にミントの横槍が入って来たのだ。

「……………ミント？ お前は今の提案を本気で言っているのか？」

「ええ、本気ですわよ、レスターさん」

艦長室の中は怒りを堪えるように顔を歪ませたレスターと、笑顔を浮かべているミントの姿が在った。

ミントの後ろには手錠を付けられたアニスが椅子に座っているが、何時もの元気さは無く静かに椅子に座っている。それだけレスターとミントから発する威圧感、部屋に充満していた。

因みにテキーラは笑顔を浮かべているミントが入って来た時点で危機感を感じ、即座

にミントと入れ替わるように艦長室から出て行ったので居ない。一人だけ逃げ去るテキーラをアニスは恨みがましい視線で睨んでいたが、テキーラは引き攣った笑みを浮かべるだけだった。

そしてテキーラの予感が当たり、今艦長室でレスターとミントの戦いが始まった。

原因は簡単だった。ミントはレスターに「アニスをルクシオールの戦力として加えないか」と提案したのが発端だった。

「…ミント。お前も分かっている筈だぞ？ 其処に居るアニス・アジートはブレイブハートの強奪に加えて、不法侵入。機関室破壊。更にはブローブの侵入の手助けまである。以前の時は勘違いで済んだかも知れないが、今回は見逃せん」

「確かにアニスさんが赦される事で無い事は承知しております。ですから、アニスさんにはその罪を償って貰う為にルクシオールで無償奉仕をして貰おうと思っておりますの」

「無償奉仕だ!! ちよつと待って何で俺がそんな事をしねえといけねえんだ!!」

「あら、アニスさん？ このままだと全ての件が解決した後に軍で裁かれる事になりますわ。そうなったらアニスさんの『紋章機』。確かレリックレイダーと言いましたわね？ 軍に接収されてしまいますのよ。序でにアニスさんも監獄行きですわ」

「んなっ!!」

ミントの告げた事実アニスは目を見開き、何かを言い返そうとするが口を閉ざし

た。

色々と不満は在るが、アニスにとってレリックレイダーは長年共に戦つて来た相棒。それが失われるのだけは何としても防がなければならぬ。無償奉仕に關しては納得は行かないが、レリックレイダーを奪われるぐらゐならばマシだと考えたのである。

黙つたアニスにミントは納得してくれたと思つて、改めてレスターに顔を向ける。レスターは苛立ちを堪えるような顔をしながらミントを睨んでいた。

「苛立つのは分かりませんが、今ルクシオールには少しでも戦力が必要な状況ですわ。セルダール付近の『EDEN』軍の駐留基地はクーデター軍の支配下に置かれ、『NEUE』では『EDEN』に対する不信感が強まって来ています。私も表立つて支援は出来ませんし、今回の件で明らかに敵はルクシオールを狙つて来ている事は間違いないりません」

「…確かにな」

レスターもミントの意見に同感だった。

今回の件を考えれば、明らかにルクシオールをクーデター軍は敵と見ている事は間違いない。正確に言えば『紋章機』を狙っている。今回の敵側の狙いはルクシオールの戦力低下とアニスの『紋章機』を破壊する事だった。

今後ともクーデター軍がルクシオールを標的として仕掛けて来るのは間違いない。そ

してルクシオールがこれから向かう場所はクーデーター軍の支配化に在るセルダール宙域。先ず間違ひなくクーデーター軍は待ち構えている。今のルクシオールには僅かでも戦力が必要。『紋章機』が一機加わってくれるのは確かに助かる。

ミントの提案はレスターにとって魅力的な話だが、アニスをルクシオールの一員として加えるにはアニスは色々やり過ぎていて、戦力としてレリックレイダーは確かに欲しいが、戦場で何よりも重要なのは信頼出来るかどうかこそが最も重要。残念ながらレスターの中ではアニスは信用も信頼も出来ないのだ。

その事をミントは察し、真剣な眼差しでレスターを見つめる。

「レスターさん。確かにアニスさんがルクシオールにした事を赦せないのは分かりますわ。ですが、此処はアニスさんを推薦した私を信じて下さい」

「……………」

無言のままレスターはミントの目を見つめる。

ミントの目には表立って何も出来ない自身に対する不甲斐無さとフォルテやミルフィージュに対する心配が満ちていた。今ミントには愛機である『トリックマスター』が無い。更に言えば軍属でも無いので、余程の事情が無ければ例え『トリックマスター』が在ったとしても乗る事は出来ない。

仕方が無い事だが、何も出来ない自分に対してミントは怒りを覚えているのだ。だか

「らこそ、レスターの頼みを聞いてクーデター軍が支配している宙域に近い場所で補給の支援を行なったのだ。」

「アニスをレスターに推薦しているのも、少なからずアニスの経歴と実力を知っているからこそ、今のルクシオールには必要だと思っっているからだ。」

「深々と、それこそ肺に入っている空気を全て吐き出すような深い溜め息をレスターは吐き出す。」

「ハア………分かった。お前の提案を受け入れよう」

「ありがとうございますわ♪」

「ちよつと待つてえ!? 何か話がまとまり掛けているけどよお! 俺は納得してねえぞ!?!」

「二人の威圧感を吞まれていたアニスだが、威圧感が治まり本格的に自分の今後の事が勝手に決まろうとしていたので叫んだ。」

「流石に自分の今後の事を勝手に決められるのは我慢ならない。自身の意見も告げようとアニスは口を開く。しかし、アニスが言葉を発する前にミントが服の中から一枚の紙を取り出してヒラヒラと見えるように振るう。」

「アニスさん。此方は私どもの商会にアニスさんがしている借金の証文書ですけど……もしも此方の提案を受けないと大変な事になりますわよ」

「大変な事だあ?」

「はい。先ずアニスさんが軍に捕まっている間、同然ながら支払いが滞って利息がとんでもな膨れ上がって行きます。つまり、自由になる頃には借金地獄が待っているでしょうね」

「んなあ!?!」

「もちろん私もは構わずに請求します。そんな生活はアニスさんもお嫌でしょう?」

「あたりまえだろうが!?!」

「でも、私どもとしても商売ですから…ですけど、私の提案を受け入れてくれるのなら、その間借金に利息は増やしません」

「なにっ!?! 本当か、それ!?!」

「はい。その上、クーデター軍からセルダールを解放出来た暁にはアニスさんの今まで借金をチャラする事を約束しますわ」

「よっしや! その話乗ったぜ!」

解決した時に借金が全てチャラになる事が分かったアニスは、満面の笑みを浮かべてミントの提案を了承した。

何せ買ったばかりの最新鋭の船の借金だけではなく、これまでブラマンシユ商会で買った品々の借金も在る。その全てがチャラになるのだからアニスが喜ぶのは当然

だった。喜び椅子から立ち上がって高笑いするアニスと、微笑みながらアニスを見ているミントの姿に、レスターは早まったかもしれないと僅かに後悔を抱いた。

そして自身の商会の仕事が在るミントと別れてから二日が経過し、ルクシオールはクロノドライブを使用してセルダールに向かっていた。

ドライブ空間内をルクシオールは前進する。そのルクシオールのブリッジに在る艦長席でレスターは二日の間に起きた出来事で頭痛を覚えていた。アニスを加えると決めてから二日の間に、アニスは色々やってくれたのだ。

乗員との賭け事から始まった乱闘騒ぎ。レクリエーションルームに置かれているゲーム機の破壊など、アニスは僅か二日だけでレスターが怒る事を何度もやってくれたのだ。無論そう言う悪い面以外にも良い面も在るには在るのだが、レスターにとって頭が痛い事の方が多かった。

「……司令？ 大丈夫ですか？」

「…大丈夫に見えるか？ カズヤ」

「……いえ…。すいません」

もうすぐセルダールに着くと言う事でブリッジを訪れていたカズヤは、レスターに申し訳なさそうに謝った。

一目見ただけで今のレスターからはかなりの心労が在ると分かるほどに顔色が悪

かった。何せ共に戦った仲間であるフォルテがクーデターを引き起こし、『EDEN』軍が関わる場所は殆ど支配下に置かれて孤立無援。更にはクーデター軍に狙われている。普通の司令官ならば当の昔に倒れて、クーデター軍に降伏しても可笑しくは無いほどのだ。

それをレスターは耐えていたのだが、アニスと言う更なる心労が加わったから顔色が悪くなるのも当然だった。寧ろ顔色が悪くなるだけで倒れないレスターにカズヤは尊敬の念さえも抱いていた。

(僕なら絶対に倒れているだろうな……司令は本当に凄い人だ)

カズヤがそう考えながらレスターを眺めていると、チーフオペレーターであるココが報告を行なう。

「まもなくクロノドライブが終わります」

「……そうか」

「…遂にセルダールに着くんですね」

「ああ、果たしてどんな状況になっているか」

セルダールが本当にクーデター軍の支配下に置かれているのかどうか。

それが最も知らなければならない情報。本当に支配下に置かれているならば、何としてもセルダールを解放しなければならない。出なければ時が経つほどにフォルテが

クーデター軍のリーダーを名乗っているだけに、『E D E N』の信用と信頼が失墜してしまふ。

現状で『N E U E』で自由に動ける『E D E N』軍はルクシオールしかない。危険だと分かっている場所に自ら飛び込むだけあって、ルクシオールに居る誰もが緊迫していた。

オペレーター席に座っているちとせやココは、ドライブアウト後にすぐさま索敵を行なえるように既に準備している。他のオペレーター達も、各自で自分達が行なえる事をすぐに出来るように準備していた。

更にレスターから機関室に居るステリーネにもドライブアウト後に、再びクロノドライブする準備を行なうように指示が出されている。時間を置かないでの連続クロノドライブは、クロノ・ストリング・エンジンに負担が掛かるが、そうは言つては居られない。待ち伏せされている可能性は充分に考えられる。

故に誰もが緊迫した雰囲気を放ち、ブリッジ内部は重い緊張感に包まれていた。その雰囲気を感じるカズヤも、険しい顔をして前を見つめながら立っている。

「セルダール……無事だと良いんだけど」

「そうですね。クーデター軍の支配下に在るようですから、本当に無事で居て欲しいです」

「私も同意見ですわ。セルダールの皆さんが無事だと良いのですけど」

「つて!! リコにカルーア!!」

聞こえて来た声にカズヤが振り向いてみると、何時の間にかリコとカルーアが背後に立っていた。

更に二人に続くように背後に居たアニスとナノナノがカズヤに話し掛ける。

「もうすぐセルダールに着くんだろう? 考える事は同じだろうが」

「だから此処に居るのだ!」

「待て!? 何故アニスが此処に入れる!」

艦長席に座っていたレスターは、アニスがブリッジに居る事に思わず叫んだ。

アニスに与えている権限は一般乗務員と同じぐらいの権限まで。ブリッジや機関室などの重要な区間には入る事が出来ないのだ。唯一ブリーフィングルームだけはルーンエンジェル隊の面々と共に戦うと言う事で入室を許可されているが、ブリッジには当然ながら入る事は赦されていない。

そのアニスが何故ブリッジに居るのかとレスターは質問しようとするが、その前にナノナノが平然と答える。

「あつ! 親分ならナノナノと一緒に来たのだ」

「だ、駄目だよ! ナノナノ! 勝手にアニスをブリッジに入れたりしたら!」

平然と答えるナノナノにカズヤは慌てて注意した。

流石に一般乗務員までの権限しか与えられていないアニスを、勝手にブリッジに入れるのは不味い。案の上レスターの米神に怒りが浮かび、ナノナノに声を掛けようとする。だが、声を掛ける前にココが報告する。

「五秒後にドライブアウトが完了します。五、四、三、二、一、零。ドライブアウト完了です」

ココが言い終えると共に、ルクシオールはドライブ空間から通常空間へと入った。

怒る機会を逸したレスターは怒りを抑えて前に顔を向けた。今は注意している状況ではない。

ブリッジに居る誰もが自身の行なうべきことに集中する。

「周辺索敵開始……あつ！」

「……ビイビイッ！」

「やはりか」

ブリッジ内部に響いた警報音にレスターは苦い声を出し、ココが索敵結果を報告する。

「ルクシオールの前方にクーデター軍と思しき艦影を捉えました。その数凡そ百隻以上です！」

「ええええっ!?!」

「そんなに敵が!?!」

「……りや、完全に待ち伏せされていたな」

報告に驚くカズヤとリコと違い、アニスは額から汗を流しながら言葉を発した。

元々待ち伏せされている可能性は考えられていたが、敵の数が百隻は流石に予想外だった。幾ら支配下に置いていたとは言え、『NEUE』の中心だったセルダールを見張る軍勢も必要な筈。待ち伏せが在ったとしても二、三十隻ぐらいだと考えていたがその倍以上の数が待ち伏せしていた。

どう考えてもルクシオール一隻が勝てる戦力ではない。ブリッジに居る誰もがそう思うと同時に敵から通信が届く。

「あっ! クーデター軍から通信が届いています!」

「…繋げ」

「了解」

ーブウン!

『ツ?!』

通信を繋ぐと同時にメインモニターに映った人物にカズヤ達は目を見開いた。

メインモニターに映ったのは、セルダールを支配下に置いたと『NEUE』中に放送

で宣言した人物。フォルテ・シュトローレンがクーデターを起こしたとは思えないほどに、平然とした顔をしながら立っていた。

『……やあ、レスター。そろそろ来る頃だと思っていたよ』

「此方の動きは完全に読まれていたようだな。しかも此処までの大艦隊でお出迎えとは」

『皇国の英雄の一人のアンタを出迎えるんだ。これぐらいは必要だろうか？』

「随分と評価してくれているな……さて、単刀直入に聞くが……お前は誰だ？」

『誰って？ フォルテ・シュトローレンに決まっているだろう？ 一緒に戦った相手を偽者呼ばわりするなんて傷つくね』

「お前がフォルテ教官の訳が無い!!」

話を聞いていたカズヤは思わず叫んだ。

それによくようにリコ、カルーア、ナノナノのメインモニターに映っているフォルテに向かつて叫ぶ。

「そうです！ フォルテさんがクーデターなんて起こす筈がないです！」

「本物のフォルテさんは何処に居るんですか!？」

「今すぐにセルダールを解放するのだ！」

思い思いにリコ、カルーア、ナノナノは叫び、良くフォルテの事を知らないアニスは

黙って映像を見つめていた。

「親分も何か言うのだ!」

「えっ? いや、俺良く知らないし」

叫んで来たナノナノにアニス戸惑う。

アニスは全くフォルテの事を知らないのです。ナノナノ達と違い、敵だと言う人物を観察していたのだ。全く知らない相手に叫ぶ事が出来る訳も無く、言うように詰め寄つて来るナノナノをアニスは落ち着かせる。

その様子をモニター越しで見ているフォルテはカズヤ達の叫びを気にした様子を見せず、平然としながら話を続ける。

『酷いね。人を偽者呼ばわりするなんて……あんなに面倒を見てやったのに?』

「お前がしている事は、どう考えてもフォルテがやる事じゃないからな。仮にお前が本物のフォルテだとすれば、何故クーデターを行なった?」

『クーデターを行なった理由かい? ……そうだね。何だか面倒になったからか。チマチマ技術支援なんてやるよりも……一度全部征服した方が手っ取り早く済む。これがクーデターを引き起こした理由だね』

ブリッジ内部は絶句したような雰囲気では包まれた。

クーデターを引き起こした理由が面倒だったから。そんな理由でクーデターを起こ

す事が許される筈がない。静かにレスターは目を閉じ、再び目を開けてモニターに映るフォルテを見つめる。

「……確かに起こした理由はともかく手っ取り早い方法かも知れんが、俺が知るフォルテはそんな理由でクーデターを起こすとは思えんし、そんな言葉を言う奴ではない」

『やれやれ、レスターもあたしを偽者扱いかい？ なら、こう言う理由だったらどうだい？』
 『『ゴースト』を手っ取り早く捕まえる為』
 『つて言うのは？』

『ッ!?!』

『『ゴースト』はあたしらの希望さ。アレを捕まえる事が出来れば、アイツを『アナザースペース』から救えるかも知れない。もう四年だ。幾らこつちと『アナザースペース』の時間の流れが違うからと言って、無事だと言い切れる保証は無い。アンタもそう思うだろう？』
 ちとせ?』

「っ!?!」

呼ばれたちとせは顔を上げ、メインモニターに映っているフォルテに顔を向けた。

『ちとせ。アンタだつて『ゴースト』を表立って捜索したいだろう？ だけど、やつこさんは『NEUE』じゃ、英雄扱いに近いから表立っては追えない。だけど、『NEUE』を支配出来れば追える様になるよ。どうだい、ちとせ?』

「……確かに私は『ゴースト』を求めています。四年前に出会った時からずっと」

『ちとせさん』

『ちとせ』

ちとせの答えにカズヤ達は不安が募った。

『ゴースト』を。正確に言えば、その先に在るモノをちとせがどれだけ望んでいるか知っているだけに、フォルテの意見にちとせが同意してしまうかもしれない。その事にカズヤ達は不安になるが、ちとせは毅然とした顔をフォルテに向ける。

「ですが！ 大勢の人々を支配しての結果で辿り着いた事を、あの人は喜びません！それは四年前の私達の想いを裏切る事です！それはフォルテさんなら良く知っている事の筈です!!」

『…………従う気は無いつて事だね?』

「当然だ。ちとせだけじゃない。このルクシオールに居る誰もがお前に従う気は無い」

『なら…………本気で行かせて貰うよ!』

「ルクシオール急上昇！ シールド最大出力だ!!」

フォルテの宣言と同時にレスターは指示を発した。

オペレーター達は即座にコンソールを操作し、ルクシオールは急上昇を行なう。同時に前方の大艦隊から数え切れないほどのレーザー攻撃が発射される。

直前までルクシオールが居た場所を無数のレーザーが通過した。もしも留まってい

たらルクシオールは例えシールドを最大で張っていたとしても撃沈されていただろう。レスターの判断は間違っていないかった。

しかし、やはり百隻以上もの艦隊からの攻撃は回避し切れず、次々と攻撃が直撃し、ルクシオールは激しく揺れる。

ーードゴオオオオオン!!

「グウツ!! 損傷は!?!」

「シールドが破られて艦艇部に被弾!! その他の区間にも攻撃が直撃しています!」

「流石にこれだけの艦隊の攻撃は防ぎ切れんか! ステリーネに通信を繋げ!」

「了解!」

レスターの指示に従い、ココはすぐさま機関室に居るステリーネとの通信を繋ぐ。

ーーブウン!!

「ステリーネ! すぐにクロノドライブの準備だ!」

『無茶を言わないで! シールドを最大出力にしているだけじゃなくて 最大船速で移動しているんだよ!?! その状況でクロノドライブなんて出来る訳が無いよ!』

「無茶でもやってくれ! 出なければルクシオールが沈む!!」

『ッ!?! 分かったよ!』

緊迫したレスターの声に一切の余裕が無い事を悟ったレスターは、ステリーネはヒス

テリックに叫びながらも了承して通信を切った。

「クロノドライブの準備だ！ 急げ！」

『了解!!』

指示に従いココを始めとしたオペレーター達は、すぐさまクロノドライブの準備に取り掛かる。

その間にも艦隊からは苛烈な攻撃が続き、シールドを破られてルクシオールから煙が上がり、損傷を負って行く。艦隊は止めを刺すつもりなのか、攻撃艦が前面に出て来てルクシオールに向かって主砲を向ける。

だが、その前にルクシオールの前方に緑色の光が生まれ、クロノドライブに移行しようとする。逃がさないと言うように攻撃艦軍の主砲が放たれるが、主砲がルクシオールに届く前にクロノドライブが始まり、ルクシオールは消え去った。

「逃げられたか。まあ、この程度で倒せるとは思ってたけどね」

旗艦からルクシオールが逃げ去る瞬間を見ていたフォルテは、予想通りの結果に呟いた。

追う事も出来るが、其処までは許可されて居ない。あくまでフォルテがルクシオールに対して赦されているのは迎撃まで。逃げられた時は別の者が追う事が決まっている。複雑そうな気持ちが籠もった瞳でフォルテは、ルクシオールが消え去った空間を見つ

めるのだった。

4—2

クーデター軍の大艦隊の攻撃からギリギリのところまで逃れる事が出来たルクシオールは、船体に損傷を負いながらもドライブ空間を進んでいた。防御に重点を置きながらも酷い損傷が船体には在り、本当にギリギリのところでの脱出だった。

後数十秒クロノドライブに入るのが遅れていれば、ルクシオールは宇宙の藻屑になっていただろう。

そしてルクシオールのブリッジでは、クロノドライブに入ると同時に損害の状況を調べていた。

「重要区間にはそれほどダメージは在りませんが、居住区間などには被害が出ています。現在モルデン先生が負傷者の治療を行なっています」

「死傷者は出ていないんだ？」

「はい。重傷は居るようですが、報告では命に別状は無いそうです」

ココの報告にブリッジに居る誰もが安堵の溜め息を吐いた。

事前に乗員の殆どを防御が高い艦艇部の方に移していたのが幸いだった。予想以上の敵の数に焦りを覚えていたが、何とかルクシオールは乗り越える事が出来た。

その事に誰もが安堵感を覚えるが、すぐに何かに気がついたナノナノがレスターに意図する。

「ナノナノはモルデン先生の手伝いに向かいたいのだ！」

医療用のナノマシンを扱えるナノナノは、これまでも医者であるモルデンの手伝いをしてる。

死者こそいないが重傷者は居る。今こそ自身の出番だと言うようにナノナノは、レスターに向かつて手を上げていた。レスターもナノナノの意見には賛成なのか頷くと共に指示を出す。

「ナノナノはすぐにモルデンの手伝いに向かつてくれ」

「了解なのだ！」

了承を貰えたナノナノはすぐさまブリッジを出て行き、医務室に向かつて行った。

それを確認したレスターはカズヤ達に顔を向けようとするが、その前に機関室に居るステリーネから悲鳴のような報告が届く。

「ブーン!!」

『もう限界!! こっちで強制ドライブアウトするよ!!』

そのステリーネの宣言と共にルクシオールはドライブ空間から強制的に抜け出し、通常空間へと戻った。

『……ギリギリだった。もう少しドライブアウトが遅れていたら、クロノ・ストリングが解放されていたよ』

「……ねえ、リコ？ 確かクロノ・ストリングが解放されたら……」

「ええ……ルクシオールに積まれているクロノ・ストリングの数だと……解放されたら、ルクシオールは跡形も無かったかも知れません」

「そうだったら、俺達も終わりだったな」

「本当にギリギリだったのですわね。私もハラハラドキドキしましたわ」

ステリーネからの報告にカズヤ、リコ、アニス、カルーアは汗を浮かべながら呟いた。一歩間違えば自分達の命が無くなっていた事を悟り、ブリッジに居る全員が汗を流している。そんな中、ステリーネがレスタターに機関室の状況を報告する。

『修理が完了するまでは、クロノドライブは出来ないよ。通常航行も同じく無理だからね』

「分かった。一応お前も医務室で検査を受けてくれ。検査が終わったら修理に取り掛かってくれ」

『…了解』

ローブウン

何処と無く納得していない雰囲気を出しながらも、ステリーネは指示を了承して通信

を切った。

本当は早く機関室の修理を行ないたかったのだろうが、何処か怪我をしているのかも知れない。無茶を命じたと僅かに後悔しながらも、それを表には出さずにレスターはカズヤ達に顔を向ける。

「さて、どうやらセルダールが支配下に置かれたのは本当だと言う事が分かった。その上、クーデター軍の戦力は予想以上だったようだ」

「……司令はあのフォルテ教官が本物だと思えますか？」

「……本物かどうかは分からん。だが、俺の知るフォルテは、あんな理由でクーデターを起こすとは考え難い」

「それじゃあ!？」

「……しかし、奴が取った戦略はフォルテを思わせる。一見大胆に見えるような戦い方だったが、ソレでいて正確に此方に被害を与える。奴の戦い方には本物だと思わせるに充分だ……偽者だとも言い切れん」

偽者の可能性が強まった事に顔を明るくするカズヤ、リコ、カルーアに、レスターは冷静に自身の意見を述べた。

確かに本物フォルテならば面倒になったと言う理由や、タクトと救う為と言う理由が在るとしてもクーデターを起こす筈が無い。だが、先ほど通信で話したフォルテが偽者

だと言いつれぬ。カズヤ達は気がついていないが、あのフォルテは『E D E N』でも知っている者が少ないタクトに関する情報を知っていた。

ちとせやココはその事に気がついていて、クーデターを引き起こしたのが偽者ではなく、本物のフォルテの可能性が高いと今回の事で思った。無論本物だとすれば、自分達に話した理由以外の別の理由が在ると思っている。だが、どちらにしてもあのフォルテとは戦わなければならない事には違いない。

「とにかく、本物にしる、偽者にしる。俺達はセルダールを解放しなければならぬ。何か意見は在るか？」

『……………』

「…『マジック』だな」

押し黙るカズヤ、リコ、カルーアと違い、フォルテとの交流が無いアニスは平然とレストアーを見ながら意見を告げた。

「この船だけで勝てねえんだったら、援軍が必要だろう。なら、セルダールと並ぶマジックと協力するしかねえな」

「…アニスの意見は最もだ。俺も同じ意見を持っている」

クーデター軍の戦力は予想以上。今回ルクシオールの迎撃に出た百隻以上の艦隊だけの筈がない。

支配下に置いたセルダール本星にも最低でも同数の戦力が在ると考えるべき。幾ら『紋章機』を四機艦載しているルクシオールでも、単体で勝てる戦力差ではない。しかし、『EDEN』軍の援護も期待出来ない。クロノゲートもクーデター軍の支配下に置かれているのは間違いないのだから、『EDEN』からの援軍は間違い無く来ない。

となれば、『NEUE』でセルダールと並ぶ魔法惑星マジックの協力を取り付けるしかない。幸いにもマジックには、旧ムーンエンジン隊のメンバーの一人が『EDEN』の大使として滞在している。協力を取り付けられる可能性は充分に在る。

「ココ。マジックへ向かう航路を幾つか出してくれ」
「了解しました」

「さて、取り合えず今のところルクシオールは動けん。機関室の修理が終わり次第、本艦は惑星マジックに向けて進路を…」

「……ビィビィッ！」

今後の方針をレスターが告げている途中で、突然に通信の知らせが届いた。

一体何なのかとレスターが視線を向けて見ると、医務室からの通信だった。訝しげに顔を歪めながらレスターは通信を繋ぐ。

「此方ブリッジ。どうした、モルデン？」

『た、大変です!! 負傷者の治療を行なっていたナノナノさんが突然倒れました!!』

「何ッ!？」

「ナノナノが倒れた!？」

モルデンからの報告にブリッジ内は騒然となった。

一体何故負傷者の治療に向かった筈のナノナノが倒れたのかと、ブリッジに居る誰もが疑問を抱く。レスターも疑問を抱くが、すぐさま冷静に立ち返ってちとせに顔を向ける。

「ちとせ！　すぐに医務室に向かうぞ！」

「はい！」

自分が呼ばれる事が分かっていたのか。すぐにちとせは席から立ち上がり、レスターと共にブリッジを出て行った。

カズヤ、リコ、カルーア、アニスは慌ててその後を付いて行き、一同は医務室に急いで向かう。

医務室にレスター達が辿り着くと、其処には一つのベットを心配そうに見つめる乗員達が居た。

レスター達はその間を抜け、ベットに目を向けて見ると、瞳孔が開いた目を開けているナノナノが横になっていた。その傍でナノナノを診察していたモルデンは、レスターの傍に居るちとせを見て僅かに顔を明るくする。

「ああつ、ちとせさん！ 良く来てくれました！」

「すぐにナノちゃんの状態を調べます！ モルデン先生は検査機器の準備を！」

「はい！」

モルデンは出された指示に従い、すぐにベットの周りに検査機器を準備を行ない出す。

重たい検査機器を運ぶモルデンを手伝おうと、ベットの周りに居た乗員達は動き出す。そのおかげでベットの周りが開き、カズヤ、リコ、カルーア、アニスは瞳孔が開いている目が開いたまま、ピクリとも動かないナノナノに言葉を失う。

その間にレスターは乗員達に何処に機器を置けば良いのか指示を出しているモルデンに近づき、事情を聞く。

「一体何が在ったんだ？」

「私にも詳しい事は分からないのですが……どうやらクロア班長の治療を終えたと同時に倒れたそうなのです」

「ああ、先生の言うとおりだぜ」

モルデンの言葉を証明するようにクロアが声を掛け、自身の見た事を話し出す。

「……怪我した場所を嬢ちゃんに見せて、嬢ちゃんが手を翳して傷が治ったと思ったら、いきなり倒れたんだ。それで別の奴を診ていた先生を慌てて呼んだって訳だ」

「……クロア班長。その時にナノちゃんの尻尾はどうなっていたか覚えていますか？」
 ナノナノを調べていたちとせが突然話を掛けた。

いきなりのちとせの質問にクロアは目を僅かに開けるが、すぐに思い出そうと顎に手をやる。

「嬢ちゃんの尻尾？ ……そういや、何時も揺れているのに見えなかつたぜ」

「……そうですか」

「ちとせ。どう言う事だ？」

「……これを見て下さい」

ちとせはそう言いながらナノナノの体を動かし、背中側が見えるようにする。

レスター達はちとせの言うとおりナノナノの背中に目を向け、目を見開く。何時もナノナノの腰の部分から出ていた筈の白い尻尾が、何処にも見当たらなかつたのだ。一体どう言う事なのかと誰もがちとせに目を向け、ちとせはナノナノをベットに戻しながら説明する。

「恐らくナノちゃんは治療に使う為の尻尾のナノマシンが足らなくなつて、自分を構成しているナノマシンを治療に用いたと思われます」

ナノナノは人間の姿形をしているが、“体をナノマシンで構成された集合体”。

その為に人間関係の医者であるモルデンではなく、ナノナノに何か在った時は技術者

であるちとせが診るようになっていた。ちとせもナノマシンの専門家ではないが、在る程度はナノナノの母親で在る人物から説明を聞いているので、何か在った時は簡単な診察程度は出来る。

故にちとせは現在のナノナノ状態が在る程度推測出来ていた。

「自分を構成しているナノマシンを消費した為に、意識を保てなくなったと診て間違いないと思います」

「つまり、ナノマシンを補充すれば元に戻ると言う訳か？」

「ナノマシン？ ……あつ！ そう言えば確かナノマシンのストックは!？」

話を聞いていたリコは、何かを思い出したように慌てて叫び、モルデンに目を向けた。自身の推測が当たっていない事をリコは願うが、モルデンは顔を暗くしながら首を横に振るう。

「…先ほど最後のストックを使用したので、もうナノマシンの在庫は在りません」
その報告に医務室内は沈黙で包まれた。

ミントからの補給のおかげでルクシオールには大体の物資は補充出来た。だが、ナノマシンのような特殊な物資の補充までは手が回っていなかった。元々ミントへの物資の補充以来は突然の事だったので、流石にナノマシンは無理だったのだ。

ナノマシンの在庫が少なかったのはモルデンだけではなく、ナノナノも知っていた。

ナノナノはナノマシンの在庫が切れ、尻尾の形をしていたナノマシンも切れたので自身を構成しているナノマシンも使用したのである。だが、自身を構成しているナノマシンを消費した為にナノナノは自我を構成し切れず、意識を失い死んだような状態になってしまったのだ。

「…例えばナノマシンの手に入れて、今からナノマシンをナノちゃんに与えても意識は戻る保障は出来ません」

「そんな!? ナノちゃん!?」

「何かナノちゃんを助ける方法は在りませんか!?」

「ちとせさん! 方法が在るなら教えてください!」

カズヤはちとせの傍に寄り、懇願するように頭を下げた。

ちとせは顔を僅かに俯かせ、次にレスターに視線を向けてナノナノを助ける方法を説明する。

「…ナノちゃんの意識を取り戻す方法が在るとすれば、『フェムト』に連れて行く以外に無いと思います」

『フェムト』……そうかつ! あそこはナノナノを見つけた場所。確かにあそこならナノナノを治療出来るかも知れんが……」

ちとせの言いたい事を察したレスターは、苦い顔を浮かべて悩むように眉根を寄せ

る。

『フェムト』の事を良く知らないカズヤ、アニスは一体何を悩んでいるのかとレスターを見つめていると、カルーアとリコが説明する。

『フェムト』は、惑星ピコに在る衛星の事です。ナノちゃんは其処で発見されたんですの」

「それにピコにはナノちゃんのお母さんで、ナノマシンのエキスパートのヴァニラさんも居ます」

「それじゃ、ナノの奴はその『フェムト』に連れていけば助かるって事だな。なら、さつさと向かおうぜ」

「……………」

「ん？ おい、如何したんだよ？」

押し黙るレスターにアニスは質問するが、レスターは答えずに何かを苦悩するように顔を歪ませる。

意識が戻らないナノナノを助ける為に『フェムト』に向かわなければならぬ。通常ならばすぐにレスターも『フェムト』に向かう事を決断するだろう。だが、今は即座に判断を下す訳には行かない。

何セルクシオールはエンジンの修理が完了し次第に、一刻も早くマジックに向かわな

ければならないのだから。惑星ピコに、正確に言えば『フェムト』に向かう事になれば、間違いなく大幅なタイムラグが出来てしまう。クーデター軍は『NEUE』を全てを支配すると宣言している。

当然マジックも標的になっている。もしもマジックまでもクーデター軍の支配下に置かれてしまえば、本当にどうする事も出来なくなってしまうのだ。だが、ナノナノも見捨てる事は出来ない。

どう判断を下すべきなのかとレスターは苦悩するが、アニスは構わずにレスターに向かつて叫ぶ。

「おい！ 何悩んでいるんだよ!? 今ナノが危ねえんだろう!? だったら、助けるのが当然だろうがあ!? テメエの子分なんだろう!?!」

アニスはそう力強く叫び、レスターはアニスとナノナノのそれぞれに視線を向ける。すると、ナノナノの治療をして貰った乗員達がそれぞれレスターに意見を述べる。

「司令。どうか、ピコに向かつて下さい!」

「機関室の修理に俺達整備班も手を貸します!」

「どうか俺達を助けてくれた、彼女を助けて下さい!」

「…整備班の力が在れば、修理も早くなるかもしれない。僕も頑張つて修理するから」
医務室に訪れていたステリーネも、レスターにピコに向かうように頼んだ。

すると、レスターは何かを決意したかのように自らの通信機のスイッチを入れてココに繋ぐ。

「……ピッ！」

「……ココ。進路変更だ。惑星ピコへの最短進路を調べてくれ。それとピコからマジックへの最短進路も調べておいてくれ」

『了解しました。すぐに調べます』

「頼んだぞ」

『司令』

通信の内容を聞いていた乗員達は喜びに満ちた顔をしてレスターを見つめる。

しかし、レスターは乗員達の様子に構わず、冷静さに満ちた顔で乗員達を見回しながら口を開く。

「急いでエンジンの修理に取り掛かれ。それと『フェムト』に向かうんだ。整備班は機関室の修理に当たるだけじゃなくて、『紋章機』の整備も行なっておけ。ボサツとしている時間は無いぞ！」

そうレスターが叫ぶと、乗員達はハツとしたような顔をして慌てて医務室から出て行った。

「ちとせとモルデンは、今のナノナノ状態を詳しく調べて資料に纏めてくれ。ピコに居

るヴァニラに資料を送るぞ」

「了解しました」

「分かりました」

「カズヤ、リコ、カルーア、それとアニスは整備班やステリーネへの差し入れを準備してくれ。休憩無しの長丁場になるだろうからな」

『了解！』

「分かった……その色々言つて悪かった」

アニスはそうレスターに謝罪し、レスターは僅かに口元に笑みを浮かべると、そのまま医務室から出て行つたのだつた。

「……ルクシオールはまだ発見出来ないのかい？」

「はっ！……申し訳ありません」

苛立ちに満ちたディータの質問に、部下の男は申し訳なさそうな声で答えた。

フォルテの猛攻からルクシオールが逃げ延びた後、その追撃の任をディータは受けた。セルダールが完全に支配化に置かれていると分かつた今、ルクシオールは間違い無くマジックに向かうとディータは読み、セルダールからマジックへと向かう為の航路を

重点的に見張っていた。

だが、一向にルクシオール発見の報は届かず、時間だけが過ぎて行く。

(まさか、既にルクシオールは沈んでいるんじゃないだろうね? ……いや、それなら残骸ぐらいは見つかって可笑しく無い筈。なら、一体ルクシオールは何処に?)

「……ッ!? こ、これは!?! デイーター様!」

「何だい? ルクシオールが見つかったのかい?」

何かを慌てている部下の様子に、漸くまともな報告が届いたのかと内心で期待しながらデイーターは質問した。

「いえ、ルクシオールの発見の報告ではありません」

「それじゃなんだい? つまらない報告だったら…」

「例の電磁波を偵察艦が捉えたようです!」

「ッ!?!」

告げられた報告にデイーターは目を見開き驚愕するが、すぐに口元を笑みで歪める。

ルクシオールは重要だが、今の報告はそれ以上の価値が在る情報。前回のミスを補うに有り余る事を成す事が出来るかもしれない情報なのだから。

「すぐに電磁波を捉えた宙域に向かうよ!」

「し、しかし! 我々の任務はルクシオールの追撃では!?!」

「フーン！ これだけ探して発見出来ないんだ。それよりもアレを破壊する方が重要なんだよ……（アレを、『ゴースト』を破壊出来れば、私はマジック占領の任を与えてくれる筈。マジック占領の任は誰にも揺るざる訳には行かないんだよ！）」

データーはそう内心で叫ぶと共に、すぐさま自らの旗艦であるデイスト・データーと追撃用に与えられた艦隊を率いて電磁波を捉えた宙域へと向かうのだった。

惑星ピコ。嘗てはナノマシン技術に寄つてセルダール、マジックに並ぶほどの惑星だった。

しかし、クロノ・クエイク後には文明は衰退し、今ではナノマシン技術の多くが失われ、『EDEN』の支援によって普及が行なわれている。その『EDEN』から派遣されている人物こそ、旧ムーンエンジェル隊のメンバーの一人であり、ナノナの母親代わりを担っている女性―『ヴァニラ・H』。

四年経った事で背も伸び、神秘的な雰囲気を生じた女性へと成長していた。そのヴァニラはピコに在る病院に訪れていた。

「どうやらルクシオールが此方に来るようです」

「ええっ!! それ本当ですか!?!」

ヴァニアの報告に病室の入院患者である女性は、驚愕と困惑に満ちた声で叫んだ。

「はい……どうやらナノナノに何かが起きたようです。その治療の為に来るようです」

「そうなんですか……心配ですか？ ナノナノちゃんの事？」

「……はい。ちとせさんも一緒に居ますから、本当に危険な状態になる事は無いと思いますが……それでもやはり心配です」

ヴァニアにとってナノナノは大事な娘。

『フェムト』にヴァニアが訪れた時、出会った少女こそがナノナノ。ナノナノはヴァニアを母としたい、ヴァニアも娘のようにナノナノを想っている。その娘が危険な状態に在る事は心をざわめかせる。

「私はルクシオールが来たら迎えに出るつもりです」

「その時は私もお願いします！ クールダラス司令に伝えないと行けない報告も在るんですから！」

「もちろんです、アルモさん」

そう、ヴァニアは『ゴースト』によって『セントラルグロウブ』から救出され、惑星ピコに運び込まれた女性――『アルモ・ブルーベリー』に向かって頷くのだった。

4—3

ステリーネと整備班の面々の頑張りに寄つてエンジンの修理を終えたルクシオールは、惑星ピコ付近の宙域へと辿り着いていた。

既に惑星ピコに居るヴァニラはナノナノに起きた事の詳細なデータを送り、惑星ピコで落ち合う事になった。最も例の放送のせいでピコにルクシオールが降りる許可は貰えず、ヴァニラが乗ったシャトルを受け入れる予定だった。

「それじゃ、もうすぐヴァニラさんが来るんですね？」
「ああ、そうだ」

シャトルの搬入口に向かいながら、レスターはカズヤの質問に答えた。

もうすぐピコに到着すると艦内アナウンスで知らされたカズヤは、ブリッジで詳しい話をレスターから聞こうとブリッジに向かっていたのだが、その途中でヴァニラの出迎えにシャトルの搬入口に向かっていたレスターと会い、二人は話をしながら搬入口に向かっていた。

「どうやらヴァニラは元タルクシオールが来ると知った時から乗るつもりだったようだ。到着予定時刻を伝えたら、その時間にシャトルで来ると連絡が届いた」

「…それだけヴァニラさんはナノナノの事を心配しているんですね。確か、ナノナノの母親代わりをしているんですよね？」

「そうだ……しかし、どうもそれだけでは無いようだ」

「えっ？ どう言う事ですか」

「通信じゃ話せない事らしい。会った時に話すと連絡が返って来た……（もしやヴァニラが話そうとしている事は、ミントが言っていた『ゴースト』に関する事かもしれないな）」

ヴァニラが通信で説明しなかったのは、『ゴースト』に関わる情報では無いかとレスターは考えていた。

ミントから補給受けた時に伝えられた『ゴースト』に関する情報。それは「惑星ピコに『ゴースト』が降り立った」と言う情報だった。正直な話、その情報をミントから聞いた時、レスターは信じられない気持ちを抱いた。何せこれまで『ゴースト』は明確に惑星に接触するような行動をした事は無い。各惑星が接触を試みようとしても、その姿を晦ましてしまう。にも関わらず惑星ピコに『ゴースト』は降り立った。

本来ならば情報を得た時点で惑星ピコの行政府に説明を聞きたいところだったのだが、状況が状況なので後回しにしていた。最もそれ以外にちとせが不安定になつてしまふ事も恐れ、レスターは情報を秘匿していたのだ。どちらにしてもヴァニラが来た時に教えてくれるだろうとレスターは思い、カズヤと共にシャトルの搭乗口へと向かう。

レスターとカズヤが搭乗口に辿り着くと同時に、シャトルが一機入って来て着陸する。

「丁度来たようだな」

そう、レスターが眩くと共にシャトルの入り口が開き、ヴァニラが降りて来る。

神秘的な雰囲気纏っているヴァニラにカズヤは見惚れてしまう。見惚れているカズヤに気がつくがレスターは構わずに、ヴァニラに近づく。

「久しぶりだな、ヴァニラ」

「はい……お久しぶりです、レスターさん」

「……今回のナノナノの事は済まなかった。もっと注意しておくべきだった」

「いえ……私もナノナノにナノマシンの使い過ぎる事に関して言うておくべきでした。レスターさんだけの責任ではありません」

「……すまん。それじゃナノナノのところに案内する」

「待つて下さい……。その前に会わせた人が居ます」

ヴァニラはゆっくりとシャトルの入り口の方に振り返り、釣られてレスターとカズヤも目を向ける。

すると、シャトルの入り口から『アルモ・ブルーベリー』が感極まるような顔をしながら出て来た。

「うう……うううっ」

「…ア……アルモなのか？」

「クールダラス司令!!!」

「……ガバツ！」

嬉しさに満ちた声と共にアルモはレスターに抱きついた。

抱きつかれたレスターは混乱してアルモを見つめる。それはカズヤも同じだった。

『セントラルグロウブ』の件で行方不明になっていた筈のアルモが、ヴァニラと共に現れたのだから。一体どう言う事なのかとレスターはアルモに抱きつかれながらヴァニラに質問すると、驚くべき答えが返って来た。

「アルモさんはピコに運ばれて来たのです。『ゴースト』に」

「……何だと？」

「ええええええええっ!?!」

レスターとカズヤは揃って目を見開きながら驚いた。

詳しく話を聞くと『NEUE』中にフォルテの放送が流れた後、深い損傷が目立つ『ゴースト』がピコにやって来た。そして惑星ピコの行政府に『ゴースト』からメッセーヂが送られ、ヴァニラが『ゴースト』を出迎え、『ゴースト』のコックピット内部に倒れているアルモを保護した。

その後アルモを外に連れ出すと共に『ゴースト』は飛び去り、その行方は不明となった。残されたアルモはヴァニラが病院に運び、治療をピコで受けていたのだ。

予想外のアルモとの再会で驚いたレスターだが、驚きから立ち直ると共に疑問に思つた事を質問する。

「待て？ 『ゴースト』のコックピットだと？」

「はい。其処に気絶していたアルモさんが一人《・》だけ居ました。他には誰の姿も無かつたです……そして『ゴースト』のコックピットの形状は……私達が乗る『紋章機』のコックピットと同じでした」

（……どう言う事だ？ 無人機の筈の『ゴースト』にコックピットが在つた？ いや、それ以外にも気になる事が在る……『セントラルグロウブ』からの避難者を匿つている。其方の惑星に在住している『EDEN』の人間に引き渡したい……何故ピコに『ゴースト』はやって来た？ 確かにナノマシン技術が残る惑星だが、如何にも引つ掛かるな）

気絶したアルモをナノマシン技術に寄つて、治療技術が高いピコに運ぶのは確かに不自然ではない。

だが、レスターはどうにも『ゴースト』の動きが気になつた。何か小骨が引つ掛かるような印象を感じ、レスターは顔を難しげに歪める。

話を聞いていたカズヤは知らされた事実にも固まっていたが、驚きから立ち返ると共にアルモに質問する。

「……そ、そうだ!? アルモさん!! ミルフィーユさんはどうなったんですか!? 通信の時に一緒に居ましたよね!! もしかしてミルフィーユさんも一緒に居るんですか!?」
悲しげな顔をしているリコの顔を思い出しながら、カズヤはアルモに問いかける。

その問いにアルモは暗く悲しげに顔を俯かせ、事情を知っているヴァニラも同じように悲しげに顔を暗くする。

二人の様子にカズヤは最悪の予感が頭を過ぎり、レスターも顔を険しくする。

「……何が在った? ミルフィーユに?」

「……………捕まっているんです。ミルフィーユさんは……『ヴェレル』に」

「ツ!! 『ヴェレル』だど!? では、『ABSOOLUTE』を襲った犯人は奴だったのか!?」
覚えの在る人物の名前が出て来た事にレスターは驚きながらも、内心では僅かに納得を覚えた。

平行宇宙を行き来する為の重要拠点である『ABSOOLUTE』に敷かれていた『EDEN』軍の防衛網は、そう易々と破れる代物ではない。一方的に追い込む為には内通者の存在は必要。

そして『ヴェレル』と言う人物は『セントラルグループ』の構造を知り尽くし、尚且

つ防衛網の情報を知る事が出来る人物だった。

「最初から得体の知れない奴だったが……まさか、奴が『セントラルグロウブ』の襲撃の黒幕だったとは……」

「……『ヴェレル』はこう言っていました。『全てを取り戻す時が来た』って……ミルフィーユさんは奴に捕まって、私も危ないところを『ゴースト』に助けられたんです」
「……そうか」

「あの……司令？ 『ヴェレル』って一体誰なんですか？」

『ヴェレル』に関して知っているレスター、アルモ、ヴァニラと違い、正体が分からないカズヤは質問するが、三人は答えずレスターはカズヤに顔を向ける。

「カズヤ。気になるのは分かるが、今は待ってくれ。詳しい話はアルモから詳細を聞いてからだ。今はそれよりもナノナノの事を優先だ」

「あつ！ は、はい！」

確かに『ヴェレル』に関しても重要だが、今はそれよりもナノナノの事の方が重要だった。

ミルフィーユの事は心配だが、ナノナノの方も放っておくわけには行かない。その上、これから衛星『フェムト』に向かう為に戦闘が控えている。

気には成るが今はナノナノを救う方に集中しようとカズヤは考える。

「それとミルフィーユの件はリコに伏せておいてくれ。アルモは途中でミルフィーユと別れ、他の者と避難誘導に当たっていた事にする。理由は言わなくても分かるな？」

「…は？」

もしもミルフィーユが捕らえられて居る事をリコが知れば、戦闘に間違いなく影響が出る。

詳細が明らかになり次第に伝えるのは決めているが、今は知らせる訳には行かない。もしも知ってリコのテンションが下がってしまえば、戦闘で撃墜されてしまう可能性が高いのだから。

カズヤもその事を理解し、姉の安否を知りたがっているリコに罪悪感を抱きながらも、今だけは話さないようにしようと心に決める。

(ゴメン、リコ)

頭の中に浮かぶりコにカズヤは内心で謝罪しながら、レスター達の後を付いて行く。

しかし、フツとカズヤは在る事を思い出し、歩きながらヴァニラに質問する。

「あつ！ そう言えば……あのヴァニラ先輩？ 一つ聞いて良いですか？」

「…何でしょうか？」

「え〜と……『ゴースト』に在るって言うコックピットに乗った時に、何か変な感じはしませんでしたか？」

「変な感じ？」

「はい。ルーンエンジェル隊の皆が『ゴースト』に接触した時に、怖い感じを受けたらしいです」

「怖い感じ？ ……全員がでしょうか？」

「僕は何も感じませんでしたけど……他の皆は怖い感じを『ゴースト』から受けたって言っていました。もしかしたらヴァニラさんも、何か感じたかもしれないと思って質問したんですけど？」

カズヤの質問にヴァニラは悩むように眉根を寄せて考え込む。

そして考えが纏まったのか、ヴァニラはカズヤの質問に答える。

「……私はルーンエンジェル隊の皆さんが感じたと言う印象を、『ゴースト』から感じませんでした。 ……寧ろ……」

「寧ろ？」

「……………いえ、何でも在りません」

ヴァニラはゆっくりと首を横に振るうと共に、前へと向き直り医務室へと向かって行く。

カズヤはヴァニラの様子に疑問を覚えて首を傾げるが、取り合えず気に成っていた事だけは分かり、内心で別の疑問について考える。

(皆が『ゴースト』から感じていた印象をヴァニラ先輩は感じていなかった。『紋章機』に乗っていないからかな。それともやっぱり気のせいなのか?)

そうカズヤが考えている間に医務室の前へとレスター達は辿り着き、レスターが医務室に最初に入る。

ローブウン!

「モルデン。ちとせ。ヴァニラが来たぞ」

「ああ、レスターさん。それは良かった」

「ヴァニラ先輩が来てくれたんですね!」

レスターの報告に、医務室で意識が戻らないままのナノナノの様子を見ていたモルデンとちとせは喜んだ。

ヴァニラはレスターの前に出ると共にモルデンに向かって頭を下げ、次に久々の再会であるちとせに顔を向ける。

「お久しぶりです、ちとせさん」

「此方こそ久しぶりです、ヴァニラ先輩」

「……以前お会いした時よりも、顔色は良いみたいですね。良かったです」

「……………心配してくれてありがとうございます。それでナノちゃんの状態ですが、私の見立てでは送った資料どおりだと思いますが、一応ナノマシンの専門家であるヴァニ

ラ先輩にも見て頂きたいのですけど」

「はー」

ちとせの頼みにヴァニラは頷くと共に、ナノナノの傍に近寄る。

意識が無く、ベットに横になっているナノナノを心配そうにヴァニラは見つめながら、注意深くナノナノを診察して行く。医務室内にはヴァニラがナノナノを診察する音だけが響き、他の誰もが静かに診察が終わるのを待つ。

その間にちとせはゆつくりとレスターの方に視線を向け、横に立つアルモに気がつき目を見開く。

「えっ!? ア、アルモさん!?!」

「ど、どうも……」

「如何してアルモさんが此処に!?!」

「…実はな……」

ゆつくりとレスターはちとせにアルモに起きた事を説明する。

事情を聞いたちとせは『ゴースト』がアルモを助けたと言う事実に驚愕し、ミルフィーユが敵の手に落ちている事に心配で顔を暗くする。

「まさか、あの『ヴェレル』が『ABSOLUTE』を占拠した首謀者だとは思ってもみませんでした」

「ああ、俺も驚いた。だが、確かに奴ならば『ABSOLUTE』の防衛網を知る事が出来ても可笑しくは無い」

「同感です……しかし、幸いだったのは防衛に当たっていた軍の殆どが『EDEN』に逃れてくれた事です」

「ああ、『EDEN』側も事実を知って動き出していると見て間違い無いだろう。『ゴースト』の援護も在ったとは言え、退避出来る時間を稼いでくれた艦隊と指揮官には感謝しなければ」

「……あの、その指揮をしてくれた指揮官に関してなんですけど」

嬉しい報告に喜ぶちとせとレスターに、恐る恐るアルモが声を掛けた。

何処か困ったようなアルモの様子にちとせ、レスター、そして話を聞いていたカズヤも目を向けると、アルモが何か怖がるようにレスターを見つめる。

「お、怒らないで欲しいんですけど」

「何がだ？」

「……実は、その『ABSOLUTE』で起きた戦闘の指揮を執ったのは……」

「『ゴースト』なんです」

「………はっ?？」

告げられた事実、レスター達は思わず間の抜けた声を出してしまった。

そして徐々にアルモの言った意味を理解して来たレスターは、困惑に満ち溢れた顔をして口を開く。

「ちよつ、ちよつと待て!? 『ゴースト』が防衛に当たっていた艦隊の指揮を執ったのか!?」

「は、はい!」

「誰がそんな許可を出したんだ!? 幾ら『ゴースト』が『EDEN』製の『紋章機』に似ているとは言え、相手は所属不明の機体だぞ!」

「その『ゴースト』がメッセージで指揮権を貰いたいつて送つて来たんです! それでミルフィューユさんが許可を出して…」

「……ミルフィューユか…確かにアイツなら許可を出しても可笑しくは無いか」

疲れたように溜め息をレスターは溢した。

所属不明の相手に指揮権を与えるなど普通ならば在りえない事だが、ミルフィューユならば在りえるとレスターは納得出来た。そう言う常識外れの事態を平然と引き起こすのが、ミルフィューユ・桜葉と言う女性なのだ。

話を聞いていたちとせも、ミルフィューユならば在りえると納得したように頷いていた。カズヤは話には聞いていたが予想以上に破天荒な行動をしたミルフィューユに驚き、言葉を完全に失っていた。

その間にナノナノの診察を終えたヴァニラが、ナノナノに毛布を被せ直して顔を上げる。

「……ちとせさんの見立てに間違いは無いと思います」

「そうか……やはり、フェムトに向かうしか無い訳だな？」

「はい」

レスターの質問にヴァニラは真剣な顔で頷く。

やはりフェムトに向かうしか手段が無いとハッキリし、レスターは通信機のスイッチを入れてブリッジと繋ぐ。

「……ピッ！」

「ココ。エンジェル隊を全員ブリーフィングルームに集合させてくれ」

『了解しました』

「頼んだぞ」

「……ピッ！」

通信を切ったレスターはゆっくりと医務室内を見回しながら口を開く。

「ちとせ。お前はブリッジに向かってくれ。詳しくアルモやヴァニラから『ゴースト』に関して聞きたいだろうが、これから戦闘になるからな。今はそっちに集中してくれ」

「了解しました」

「ヴァニラとアルモは医務室で待機していてくれ。戦闘が終わった後に連絡を入れるから、ブリッジに来てくれ」

「分かりました」

「はい！」

「カズヤは俺と一緒にブリーフィングルームだ」

「はい!!」

レスターの呼びかけにカズヤは返事を返し、アルモとヴァニラを残して医務室からちとせ、レスター、カズヤは出て行くのだった。

《成分分析率75%まで達成》

(漸くか……思っていたよりも分析に手間取ったな)

《分析の結果、本機に付着しているペイントに使われている成分は、全て『E^エD^デE^エN^ン』でのみ取り扱われている物と判明》

(流石だね。そう言うところまで抜け目が無い)

思い出すのは幼い外見でありながらも、大人顔負けの冷静な判断力と決断力を持った金髪の褐色肌の少女。

付着したペイントに『EDEN』^{エデン}でしか取り扱っていない物を用いている時点で、抜け目が本当に無い。ペイントを消す為には、同じように『EDEN』^{エデン}の成分で造られた物が必要なのだから。

今居る場所が特殊な施設で無ければ、ペイントを消す目処は立たなかつただろう。改めて彼女を恐ろしさを感じた。

《成分分析完了後…消去用の「ナノマシン」の作製を開始する》

（うん。それで頼む…そしてそれが終わつた後、俺達はセルダールで情報を収集後に、『紋章機』を運用していた艦に接触する）

フルメンテを行なっている間に、今後取る行動は決めていた。

やはり単独での行動は危険が多過ぎる。その上、敵側は此方を目の敵にして狙つて来る可能性が高い。故に他の『紋章機』を運用している、ルクシオールと接触して協力関係を結ぶ事を決めたのだ。

どちらにしてもミルフィューとの約束も在るので、ルクシオールとの接触は避けられない。ならば、早い段階で協力関係を築き、今後の行動をし易くする方がメリットが多い。接触した時に追われる可能性も在るが、電磁波を発するペイントさえ無くなればステルスによつて逃げ切る事は出来る。

（とは言つても、先ずはペイントの消去を急がないと）

《同意……早急な消去は必要事項》

(……やっぱり、怒っているよね？ 明らかにペイント付けられた事、怒ってるよね?)
《怒りと言う感情は存在せず》

何時ぞややったようなやり取りを行ないながら、付着しているペイントを消去する為の“ナノマシン”が出来るのを待つ。

ナノマシン作製を行なっている“小柄な影”が完成を告げるのを会話も無く黙したまま待つが、突然警報音が鳴り響く。

——ビィィィッ！ ビィィィィッ!!

(何だ!?)

《『NEUE』この施設に近づいて来る機影を自動砲台が感知。及び『NEUE』製『紋章機』の反応を複数感知》

(『紋章機』の反応だって!? まさか!?)

《自動砲台寄り送られて来た映像の照合の結果、接近して来ているのは『紋章機』を運用している艦艇と一致》

(……何で此処にあの艦が向かって来ているんだ?)

接近して来ている艦艇であるルクシオールの来訪は、完全に予想外だった。

近くにいる惑星ピコならば、重要な情報を持っているアルモが居るので訪れても可笑

しくは無い。だが、今潜んでいる施設は自動砲台などの護りが在るのでルクシオールがやって来る理由は普通ならば無い。

まさか、ペイントから出ている電磁波が感知されたのかと考えるが、施設内部に居る限り電磁波が感知される可能性は低い。秘匿性を重視している為に対策は施されているのだ。

(試運転で外に出た時から、あの艦が来るまで時間は経ち過ぎている。電磁波を感知されてた可能性は低い筈だ)

《同意》

(……一体何の為に此処に向かつて来ているんだ？ ……とにかく、まずは“あの子”をカプセルに戻した方が良いな。“あの子達”の秘密が知られたら、利用される可能性が高い。ナノマシンの完成が遅れるけど、すぐに戻してくれ)

《了解》

同意の音声が響くと共に、ナノマシン作製を行なっていたらしい“小柄な影”が作業を中断して通路に向かつて歩いて行く。

(それと自動砲台から送られてくれる映像を俺にも見せてくれ)

《了解》

同時に自動砲台からの映像が展開される。其処には、四機の『紋章機』と施設を護る

為に在る複数の自動砲台との戦闘が繰り広げられていたのだった。

4—4

ピコの衛星軌道上を移動している衛星フェムトの付近には、数え切れないほどの小惑星が漂っていた。

まるで衛星フェムトへの進行を阻害するように小惑星は周囲を囲み、更に小惑星に隠れるようにフェムトの防衛システムである自動砲台が複数配置されている。

現在の技術よりも自動砲台に使われている技術は上回り、ムーンエンジェル隊が自動砲台を破壊するまで、フェムトはピコの住人でさえも近づく事が出来ない場所だった。しかも、自動砲台には自動修復機能が存在し、例えば破壊出来たとしても時間が経てば自動砲台は復活する。故に、フェムトに入る為には自動砲台との戦闘は回避出来ない。

無論自動砲台には弱点が在る。砲台と言う事でフェムト自体が移動しない限り自発的な移動は行なえず、設定された場所に留まっている。だが、自動砲台の周囲には無数の小惑星が在り、艦艇などの砲撃では照準を合わせる事が出来ない。だからこそ、『紋章機』で自動砲台を相手にするのが最適なのだ。

「アジート！ 三時の方向の小惑星の後ろに自動砲台が在るわ！」

『あー！』

テキーラが出した指示にアニスは従い、レリックレイダーから発射されたスターが発射された。

スターは円を描くように小惑星の横を回り込み、背後に隠れていた自動砲台に直撃して自動砲台を破壊した。

それを確認したテキーラはコンソールを操作しながら、現在スペルキャスターの移動を操作する為に合体しているブレイブハートに乗るカズヤに指示を出す。

「シラナミ。次の奴は距離が離れているから、スペルキャスターを近づけるわ。ぶつからない様に操作しなさいよ」

『う、うん！ 分かったよ！』

カズヤは指示に従い、操縦桿を動かしてスペルキャスターを移動させる。

今回レスターが出した作戦は、小惑星に紛れるようにフェムトの周囲に展開されている自動砲台をブレイブハートと合体したスペルキャスターが発見し、残りのクロスキャリバーとレリックレイダーの二機で破壊すると言う内容だった。

自動砲台の自発的には移動出来ない弱点は、無数の小惑星と言う障害物のおかげで在る程度軽減出来る。しかし、同時に小惑星のおかげで自動砲台自体も敵に狙いが付け難いという弱点も在る。艦艇などの代物ならば問題が無い弱点だが、『紋章機』ぐらいの大きさならば弱点と言える。其処を突き、索敵能力が高いスペルキャスターが自動砲台の

正確な位置を察知し、障害物が少なく遠距離から狙える砲台はクロスキャリバーが、障害物が多く狙いが定め難い砲台は小回りが利くレリツクレイダーが破壊を行なう。

「桜葉。次のは障害物が少ないからアンタの番よ。位置を転送するから良く狙いなさい」

『分かりました……撃ちます！』

クロスキャリバーから発射されたレーザーは正確に障害物の間を通り、その先に在った自動砲台を破壊した。

「OK！ 後二、三台破壊すればシャトルが安全に通れるようになるわ」

『漸くか。たくよお。結構操縦に神経使うから疲れるぜ』

『そうですね。でも、テキーラさんの指示が在るおかげで安全に破壊出来ますから』

『もしもテキーラが居なければ、もっと疲れているよ』

「煽てても何も出ないわよ。さあ、さっさと片付けてプディングを助けましょう」

『了解（です）』

「あいよー」

そのまま三機の『紋章機』は小惑星の間に隠れる自動砲台を破壊し、シャトルが安全にフェムトに辿り着けるように道を作り上げた。

指示された事を終えた三機の『紋章機』は小惑星群の外で待機していたルクシオール

へと戻り、すぐさまルーンエンジェル隊の面々に加え、ヴァニラとちとせを乗せたシャトルが発進する。

ヴァニラとちとせは以前にもフェムトに訪れた事が在り、ナノナノを発見した施設への案内役だった。フェムトの施設内は今だ全てが解明されておらず、警備ロボットなどが徘徊している。幸いなのは施設内の防衛は警備ロボットだけなので、発見さえされなければ問題は余り無い。

発進したシャトルは問題なくフェムトへと辿り着く。それを確認したレスターはすぐさま医務室からアルモをブリッジへと呼び出した。

『ABSOLUTE』で起きた出来事を知っている面々は、レスターが呼び出したアルモの事で当然の事ながら驚いた。特に親友であるココはアルモが生きて再会出来た事に涙を流しながら抱きついて、再会を喜び合った。

その後、レスターはブリッジのメンバーにアルモが何故ルクシオール内に居るのかを説明し、今は『ABSOLUTE』で起きた戦闘に関して詳しくアルモから話を聞く。

「それで敵がこう動いたら『ゴースト』は……こんな感じで指示を出したんです」
「フム……確かに最適な指示だ」

自らが覚えている限りの『ゴースト』が『EDEN』軍に送っていた指示の内容をアルモは説明し、レスターはその指揮の手腕に感嘆するしか無かった。

それは同じように説明を聞いていたココも一緒に、他のブリッジのメンバーも『ゴースト』が出したという指示の内容に言葉が出せなかった。『ABSOLUTE』内で起きたと言う『EDEN』軍と『ヴェレル』が操っていた無人艦隊との戦闘で、追い込まれていた『EDEN』軍を『ゴースト』が持ち直したと言う事は知っていた。だが、それは『ゴースト』の性能に寄る者だと誰もが思っていた。

しかし、アルモの説明に寄ってそれは間違いだと判明した。『ゴースト』は自らの性能ではなく、高い指揮能力で『EDEN』軍を上手く指揮し、戦況を五分五分に持ち直したのだ。

「……クールダラス司令……これは如何考えても……」

「ああ……間違いなく、『ゴースト』は『EDEN』軍の艦を“知っているな”」

普通ならばいきなり艦隊規模の指揮を執る事など不可能に近い。

ましてや『ゴースト』は『EDEN』とは殆ど接触が無いのだから、当然軍に配備されている艦の情報など持っている筈が無い。だからこそ、レスターは『ゴースト』が『ABSOLUTE』で『EDEN』軍の指揮を執ったと聞いた時に信じられないと言う気持ちを抱いたのだ。

（もしも何の情報も無い全く未知の艦隊を指揮しろと言われたら、俺は無理だとしても……だが、『ゴースト』はそれをやってのけた。……まさか、軍内部に『ゴースト』

と繋がっている者が居るのか? …いや、それは流石に無い筈だ。しかし、この『ゴースト』が行なったと言う指揮……何処かで見覚えが在る気がする)

アルモが説明した『ゴースト』の艦隊に出した指揮。その動きにレスターは何処か覚えが在った。

いや、覚えではなく良く知っているときえも徐々に思つて行く。真剣にアルモが説明した『ゴースト』の指揮をモニターに出して、何度もレスターは確認する。その真剣さにブリッジに居る誰もが、声を掛けられずに居る。

そしてハッと何かに気がついたように艦長席からレスターは立ち上がり、何かを確認するように在る時の『ゴースト』の指揮をモニターに繰り返し映す。

「ツ!? ……………ま、まさか……………」

「あの……………クールダラス司令?」

「どうかしたんですか?」

何かに気がついたように顔を青褪めさせているレスターに、アルモとココは心配そうに声を掛けた。

だが、レスターは二人に気がつかず、自らの脳裏に浮かんだ推測で悩みこむように艦長席に座り込む。

(まさか……………いや、もしもアイツが戻つて来ているなら必ず俺達に連絡が在る筈だ。

何よりもちとせに連絡が無いのは可笑しい……だが、『ゴースト』の指揮はアイツの指揮に似過ぎている)

脳裏に浮かぶ推測。しかし、その推測をレスターは信じられなかった。

余りにも『ゴースト』の指揮能力の高さは、レスターが良く知る人物に似ている。何せずと副官としてレスターはその相手を支えて来たのだ。見間違いや勘違いではない。

だが、浮かんだ推測をレスターは信じたくなかった。もしも推測が当たっているとすれば、自分達は何故連絡の一つも無かったのだと怒りが込み上げて来る。特にちとせの苦悩を知っているだけに、尚更に推測が正しかった時は、怒りを抑え切れる自信が冷静を心掛けるレスターでも無い。

(……とにかく、この推測は俺の胸の内だけで留めておいた方が良いな。ココやアルモにも話せん。……そう言えば、カズヤがヴァニラに『ゴースト』に質問した時、ヴァニラの様子が何処か可笑しかったな)

余り気にはしていなかったが、カズヤがヴァニラに質問した時、何処かヴァニラの様子が可笑しかった事をレスターは思い出した。

戻つて来た時にそれとなく確認しなければならぬと思いつながら、改めてアルモに覚えてある限りの『ゴースト』が出した指揮について問うのだった。

衛星フェムト内部。長い間人の手が入らず、少なくとも六百年と言う年月が経過している筈なのに今だ劣化の痕跡など一切見せない衛生施設。内部は施設を護る警備口ボットが数え切れないほどに徘徊し、外の自動砲台と合わせれば要塞と呼んでも可笑しくないほどだった。

その施設に辿り着いたカズヤ達は、前にフェムトに來た事が在るヴァニラとちとせを先頭に移動用のベツトに載せたナノナノを護るようにカズヤ、リコ、アニス、カルーア、そしてミモレットが歩いていた。

「ほえ、こりや凄えな。こんなところが在った何て知らなかったぜ」

「私も資料では知っていましたけど、こんなに当時のままの形を残している施設が在るなんて驚きです」

「本当ですわね。今よりも昔の技術の方が高い事が良く分かりますわ」

アニス、リコ、カルーアはそれぞれ感嘆しながらフェムトの通路の中を進んで行く。

カズヤも事前にフェムトについて調べていたが、実際に見たフェムトは想像以上の施設だった。普通ならば長い年月経過した構造物は、人の手が入っていなければ劣化する。

しかし、フェムトには全く劣化している様子が見られない。人の手が入っていないも関わらず、フェムトが六百年前当時の形を維持していられるのは、ナノマシン技術のおかげだった。ナノマシン技術は人の治療だけではなく、機械の修復なども行なえる。

現在は多くのナノマシン技術が失われ、『E・D・E・N』の支援のおかげで技術復活が行なわれている最中だが、フェムトだけは嘗てのピコの技術が残っている。その技術がフェムトを昔のままの姿を残している理由だった。

「俺がこれまで見た遺跡なんかは、随分と劣化して形もまともに残ってねえのが多かったけど。此処まで昔の形を残している場所は、何か意味が在ると思うぜ」

「意味?」

「ああ、例えばぼよつぽど重要な施設だとか。なあ、そうだろうか?」

「はい。此処は嘗てナノマシンの重要研究施設だったとピコでは言われています」

アニスの質問にヴァニラは前を進みながら答えた。

それに続くように警備ロボットが来ないか警戒しながら先を見ているちとせが、捕捉するようにアニス達に説明する。

「そしてこの場所でナノちゃんは発見されました。ソレと共にこの施設に在る途轍もないモノを発見したのです」

「途轍もないモノ?」

「はい。この先にそれは在ります」

ちとせがそう告げると共に通路の先に扉が見えて来る。

近づくと共に扉は自動的に開き、ちとせとヴァニラが最初に入り、カズヤ達はその後を続ける。

「こ、これって!？」

「おいおい……こりゃ〜」

「まあ〜」

「これが資料にあった」

部屋の中に入ったカズヤ達はそれぞれ驚愕した。

室内には数え切れないほどの試験管のようなカプセルが在り、その中には髪の色などの違いは在るがナノナノとそっくりな少女達が眠るように目を瞑りながら培養層の中に浮かんでいた。

ちとせとヴァニラは驚くカズヤ達の様子に領きながら、ゆっくりと培養層の中で眠っている少女達について説明する。

「これがフェムト内部で発見された途轍もないモノです。そしてナノちゃんも此処で発見されました」

「それじゃ、ナノナノのこの子達はナノナノの姉妹って事ですか？」

「はい。そしてナノナノはこの子達の中で唯一目覚めた子なのです」

ヴァニラは説明しながら、唯一開いたままの状態になっているカプセルに近づく。

カズヤ達はそのカプセルこそがナノナノが入っていたカプセルだと悟り、ちとせとヴァニラの指示に従ってナノナノをカプセル内に入れる。

ナノナノがカプセルに入ったのを確認したヴァニラは、近くに在るコンソールに近づいて操作する。同時にカプセルの扉が閉まり、カプセル内から培養液らしきモノが出て来る。

「ゴゴゴゴッ！」

「今、カプセルを起動させました。後は自動的にコンピュータがナノナノの治療を行なってくれます」

「時間が掛かると思いますが、皆さん休んでいて下さい」

「はい」

「了解です」

「分かりました」

「なあ、ちよつと部屋の中を見回して良いか？　こう言うところは気になんだよ」

「構いませんけど、部屋の中だけにして下さい、アニスさん」

「あいよ」

ちとせの許可を貰ったアニスは、ナノナノの姉妹が眠っている培養層を興味深そうに見回す。

カズヤ達はその様子に苦笑しながら、培養層の中に居るナノナノに視線を向ける。治療が行なわれているのか、ナノナノが入っている培養層内部は気泡が次々と浮かんでいる。これでナノナノが目覚めるとカズヤは喜びながら、モニターを見つめているヴァニラに質問する。

「そう言えば、ヴァニラさん」

「何でしょうか？」

「どうしてナノナノだけ目覚めたんですか？ ナノナノが目覚めたんだったら、他の子達も目覚めても可笑しくないと思いますけど？」

「あつ！ それは私も気になります」

「私もですわく。だって、ナノちゃんが起きたんだったら他の子達も起きてても可笑しくないでしょうし」

純粋な疑問をカズヤ達は質問するが、ヴァニラだけではなくちとせも困ったような顔をする。

「……実はナノちゃんが如何して起きたのかは、全く理由が分かっていないんです」

『えっ？』

「私がこの施設に訪れた時、ナノナノのカプセルに近づくと共にカプセルが開いてナノは目覚めたのです。その理由が何なのかは、全く分かっていません」

「そして如何してナノちゃんだけが目覚め、他の姉妹が目覚めないのか？ その理由が判明していないのです」

「此処のデータとかに何か無いんですか？」

「残念ながら……この部屋はあくまでプディングシリーズの維持と管理だけの部屋のようなので、重要な情報は見つけられませんでした」

「他にも部屋は在りますが、幾つかの部屋はロックされていて入る事が出来ません」

カズヤの質問にちとせとヴァニラがそれぞれ答え、リコとカルーアは僅かに悲しげにナノナノを見つめる。

沢山の姉妹が居るのに目覚めたのはナノナノだけ。深い事情を知らなかったリコとカルーアは、ナノナノが内心では姉妹にも目覚めて欲しいと願っているのではないかと考える。カズヤも同様に考えながらナノナノを見つめていると、突然室内を探索していたアニスが一つのカプセルの前にしゃがみながら話し掛ける。

「おい！ 今の話本当なのかよ？」

「アニス？ 今の話って、ナノナノの姉妹が目覚めないって話の事？」

「ああ、そうだ。それで本当なのか？」

「ええ、本当です。いきなりどうしたんですか？」

「……だったらよお。何でこの培養カプセルの床に濡れた後が在るんだよ!」

『えっ!』

アニスの報告にカズヤ達は驚き、慌ててアニスがしゃがんでいるカプセルの傍に近寄って床に視線を向ける。

其処には確かに他の床と違い、明らかに濡れたような後が在って僅かに他の床と色が違っていた。すぐさまちとせは床にしやがみ、濡れた床を触ってみる。

「…確かに濡れています。恐らくは濡れた原因は培養液」

「それじゃ、この子はい最近にカプセルから出たって事でしようか?」

「ああ、間違いないと思うぜ。少なくとも完全に乾いてねえって事は、遅くとも一日以内に出て、今は戻ってるって事に違いねえ」

トレジャーハンターとしての経験からアニスは自らの推測を語り、今はカプセルに入って眠るように目を閉じているナノナノそっくりの姉妹を見つめる。

『EDEN』^{エデン}の調査チームやピコの人々がどうやって目覚めさせる事が出来なかった姉妹たちが目覚め、再び眠りについていた。一体どう言う事なのかと誰もが困惑する。特にちとせとヴァニラの困惑は深い。自分達がどうやって目覚めさせる事が出来なかったナノナノの姉妹を、一体誰が目覚めさせたのか。

自然に目覚めて再び眠りについたのでか、様々な推測が脳裏を過ぎるが、考えを遮るようにコンピュータから完了の音が響く。

「……ピイイイイ……!!!」

「……どうやらナノナノの治療が終わったようです」

音に気がついたヴァニラがコンソールに近づいて確認し、カズヤ達はナノナノが入っているカプセルに目を向ける。

其処には失われていた尻尾が戻ったナノナノが培養液の中に浮かんでいた。ゆっくりと培養液は抜かれて行き、カプセルの中から培養液が完全に無くなると共にカプセルが開く。すると、今まで意識が戻らなかったナノナノの瞼が動き、眠そうに目を擦りながら出て来る。

「……んうううくん」

「ナノナノ」

「……ふえ? ……ママ?」

呼ばれたナノナノは疑問に思いながら眠たそうにしながらも目を開け、ヴァニラが目の前に立っている事に気がつく。

「……ナノナノ? 夢を見ているのだ? ママが居る筈が……」

「夢では在りません。私は此処に居ます」

「ナノちゃん!!」

「……ガバツ！」

ナノナノが意識を取り戻した事に感極まったリコは、嬉し涙を流しながらナノナノに抱きついた。

リコが突然抱きついて来た事にナノナノは面食らうが、リコは構わずに抱き締め、続くようにカルーアが嬉しそうにナノナノの傍に近寄る。

「本当に良かったですわ。心配しましたのよ」

「心配? ……ツ!? そうなのだ! ナノナノ、班長の治療が終わった後、急に意識が遠くなって…それで…気がついたらママが居たのだ」

「ナノナノ。貴女は自分を構成しているナノマシンを使用した事で、意識が保てなくなつたのです。その治療の為にフェムトに来たのです」

ヴァニラは困惑するナノナノに説明しながら、リコに抱きつかれているナノナノの体を見回す。

事情を聞いたナノナノは申し訳なきようにヴァニラ、リコ、カルーア、ミモレット、カズヤ、アニス、ちとせの顔を見回して頭を下げる。

「…ありがとうなのだ。皆に心配を掛けて…本当にゴメンなさいなのだ」

「後でルクシオールの皆さんにも、お礼を言っておきなさい。皆さん、ナノナノの為に頑

張ってくれたのですから」

「はいなのだ。ママ」

「……それとナノナノ。本当に本調子に戻ったのか調べたいので、私に変身して下さい」

「フエツ!!」

(変身? 一体どう言う意味だろうか?)

ヴァニラの発言に目を見開いたナノナノを見たカズヤは、ヴァニラの言った言葉の意味が分からず首を傾げる。

まさか、本当にナノナノがヴァニラに変身出来るのかとカズヤは考えながら、嫌がるように後退りし始めたナノナノを見つめる。

「い、嫌なのだ! 変身だけは絶対に嫌なのだ!」

「でも、本当に本調子に戻ったのか調べなければいけません。今後のルクシオール行動にこれ以上支障を来たす訳には行きません」

「ううう……わ、分かったのだ。だけど、本当にちよつとだけなのだ」

ゆつくりと嫌そうにしながらもナノナノは了承した。

同時にナノナノの体が光り輝き、光が治まると共に服装から髪型、姿形が全てヴァニラと同じに変身したナノナノが立っていた。

「えええっ!? ナノナノがヴァニラさんに!?」

「そ、そっくりです!」

「まあ、驚きですわ〜」

「ふえ〜、こりや驚いたぜ」

初めて見るナノナノの変身能力にカズヤ、リコ、カルーア、アニスは驚いた。

知っていたヴァニラとちとせは驚く事無く変身を終えたナノナノに質問する。

「何処か変なところは在りますか?」

「……いいえ。問題は在りません」

「うわっ! 声までそっくりだ!」

「これがナノちゃん的能力の一つです。この変身能力のおかげで、ナノちゃんはナノマシンを瞬時に操り、負傷を負った人を治療出来るんです」

ナノナノの変身は姿形だけではなく、相手の思考さえも写し撮り、変身した相手と完全と同じになる。

この能力のおかげでナノナノは治療相手の生体情報を読み取り、異常を瞬時に発見してナノマシんに寄る治療を行なう事が出来るのだ。

ちとせの説明にカズヤ達は感心しながらヴァニラに変身したナノナノを見つめると、再びナノナノの体が光り輝き元の姿に戻る。

「ふええええええええ……もう良いのだ？」

「はい。どうやら問題は無いようですね」

「すげえな。おい、ナノ！ 今度は俺に変身してみろ！」

「い、嫌なのだ！ さっきのはママに言われたから変身したけど、もう変身は嫌なのだ
！」

ナノナノは本当に嫌だと言うように首を横に振るつた。

しかし、アニスは構わずにナノナノににじり寄り、ゆっくりとナノナノに手を伸ばす。

「本当にちよつとだけで良いからよ。なつ？」

「嫌なのだああああああつ!!!」

「あつ！ おい、待て!!」

突然ナノナノは部屋の外に向かって走り出し、アニスは慌てて追い掛けた。

ちとせとヴァニラはアニスとナノナノが部屋の外に飛び出した事に顔色を変える。

「行けません！ この施設には警備ロボットが居るんです！」

「もしも発見されたら、他の警備ロボット達も動き出してしまいます」

「そ、それって不味いじゃないですか?! 急いで二人を連れ戻さないと！ リコ、カルー

ア、ミモレット！ 二人を追い駆けよう！」

『はい！』

「分かったですに!!」

「私も一緒に行きます! ヴァニア先輩はシャトルの準備をお願いします!」

「分かりました。皆さん、お気をつけて」

カズヤ達はちとせと共に外に飛び出し、ナノナノとアニスを連れ戻す為に駆け出した。

ヴァニアもシャトルの発射準備の為に外に出ようとする。だが、出る直前に先ほどまで操作していたコンソールのモニターが急に砂嵐が起きたようにぶれた。僅かに聞こえた音にヴァニアがモニターに目を向けると、メッセーヅらしきモノが映し出される。

「……これは……『すぐに脱出しろ。ちとせが狙われている』……ちとせさんが!」

メッセーヅの内容を読んだヴァニアは目を見開きながら叫び、慌てて部屋の外に飛び出す。既にちとせ達の姿は何処にも見えなかったのだった。

(止める! 今すぐに命令を撤回するんだ!)

《要求は認められず……本機の乗り手を発見した現状、即座に獲得すべき》

監視装置に映ったちとせを発見した瞬間、即座に施設内部の警備ロボットに捕獲の指示を飛ばした。

何処に居るかも不明だった相手が、自らが居る施設にやって来た。内に居るモノが警告を勝手に相手側に送ったようだが、それは狙っているちとせ本人に見られる事は無かったので問題は無い。

何よりも優先すべきなのは、搭乗者の確保。それさえ出来ればリミッターを外す事が出来る様になる。

《先ほど捉えた自動砲台と『紋章機』との戦闘分析の結果、やはり本機の早急なりミッター解除は必要だと判断》

(たった一度の戦闘で判断すべき事じゃない筈だ！ だから、待つてくれ！)

《……施設内部の警備ロボットを全て捕獲に当てる》

一方的に言い捨てると共に、施設に配備されている警備ロボットが動き出し、ちとせの捕獲の為に動き出す。

もはや完全に止まる気が無い事を悟り、自身では如何する事も出来ず、強く施設内部に居るちとせ達に向かって願う。

(…頼む！ 脱出して逃げ延びてくれ！ 絶対に乗せる訳には行かないんだ！ ちとせを！ この……『禁断の紋章機』に乗せる訳には行かないんだ!!)

4—5

衛星フェムト内部通路。

飛び出したアニスとナノナノを搜索する為に通路へと出たカズヤ、リコ、カルーア、ミモレット、そしてちとせは、二人が進んだと思わしき方向へと進み、左右に分かれた通路部分で立ち止まっていた。

「道が分かれていきますけど、二人はどっちに向かったんだらう?」

「いえ、二人が一緒に同じ方向に進んだとは言えません。もしかしたら此処で二人は別方向に向かった可能性も在ります」

「悩むカズヤにちとせは冷静に告げ、カルーア、リコ、ミモレットは同意するように頷く。」

ナノナノは身が軽いので猫のような俊敏な動きが出来る。アニスもトレジャーハンターとして活動しているので身体能力は高いが、ナノナノの方が足は速い。

先に追いかけたアニスがナノナノを見失って別方向に進んだ可能性は充分に考えられる。カズヤも納得したように頷き、ちとせに顔を向ける。

「それじゃ僕らも分かれて探しませんか? 二人を見つけたら通信機で連絡すれば大丈夫

夫でしようし」

「…そうですね。それでは私とカルーアさん、それとミモレットちゃんは右に。カズヤ君とリコちゃんは左の方をお願いします」

『はい』

「分かりましたわ」

「はいですに」

ちとせの指示にカズヤ達は頷き、指定された方向に向かおうとする。

その前にちとせがカズヤとリコに施設内での注意事項を教える。

「それと施設内に居る警備ロボットには出来るだけ発見されないように行動して下さい。頑丈なだけではなく、警備ロボットは他の仲間に報告する機能が在ります。報告されたら警備ロボット達が一齐に向かって来るでしょう。前の時は先輩方もそのせいで苦労しましたから」

「分かりました。気をつけて行動します」

ちとせの忠告にカズヤは真剣に頷き、リコも胸に手をやりながら頷く。

ムーンエンジェル隊の面々でさえも手を焼く警備ロボット。その中にはカズヤ達の教官だったフォルテも当然含まれている。教導の中でフォルテの銃の腕前を知っているカズヤは、ちとせの忠告を真摯に受け止め、リコと共に左の通路に進んで行く。

それを確認したちとせ、カルーア、ミモレットは右側の通路を進み、アニスとナノノを探す。

分かれたカズヤとリコは前を見ながら通路を進み、何か声が聞こえないか集中する。ナノナノとアニスは両方とも性格的に騒がしいので、もしも二人が一緒に居れば何かしらの声が聞こえて来る筈なのだ。

「…何も聞こえませんか？」

「うん……やっぱり、さっきの通路で二人とも別々の通路に向かったのかもしれない」「だとすると、ナノちゃんは何処かの部屋に隠れたかもしれません」

「そうかもね……でも、どうしてナノナノはあんなに変身を嫌がったんだろう？」

カズヤには何故ナノナノがあそこまで変身を嫌がっているのか、その理由が分からなかった。

見ただけではなく、口調や性格までナノナノのそっくりに変身する能力。寧ろ何故ナノナノが今まで隠していたのかさえカズヤには分からなかった。

しかし、カズヤと違ってナノナノが変身しない事情を知っているリコは顔を暗くする。

「……ナノちゃんが変身を嫌っているのは、ナノちゃんがナノちゃんじゃなくなっちゃうからそうです」

「えっ?」

「さつき、ナノちゃんはヴァニラさんに変身しましたよね? その時どう感じましたか?」

「どうつて? ……うくん? ……まるでヴァニラさんがもう一人増えたように感じたかな?」

それがカズヤの感じた印象だった。

ナノナノの変身は姿だけではなく、服装、口調、性格に至るまでヴァニラそのものになっていた。思えば、雰囲気自体まで完全にヴァニラが居るとさえ思えた。

もし傍に本物のヴァニラが居らず、変身したナノナノだけだったら、ナノナノをヴァニラ本人だと錯覚してしまうほどだった。そしてそれこそがナノナノが変身を最も嫌がっている理由だった。

「ナノちゃんが変身を嫌っている理由は其処なんです。服とか変身させるのは別で、誰かに変身するとナノちゃんの人格自体まで変わってしまう。だから、ナノちゃんは変身を嫌がっているんです」

「……そう言う事だったのか」

カズヤはリコの説明に納得して頷いた。

もしも自分の人格が全く違うモノに変化した時は、確かにゾツとする。ナノナノが嫌

がるのも当然だと思いながら、カズヤが前へと足を進めるとピチャつと言う音が足元から鳴る。

「ん？」

「如何しました？」

「…いや、足元を見てよ」

「足元？」

カズヤの指摘にリコが足元に目を向けて見ると、床に濡れた後が続いていた。

「……濡れてますね？ ……あつ！ ……もしかして!？」

「うん。きつとこの濡れた後はナノナノが進んだ後だよ。ナノナノはカプセルから出たばかりだから、まだ乾いていないからね」

カズヤはそう呟きながら、床に続く濡れた後を目で追って行く。

視線の先には扉が在り、濡れた後はその扉の中に続いていた。カズヤとリコは顔を見合わせて頷く。

「…あそこですね」

「うん。きつとナノナノはあの部屋の中に…」

ソツとカズヤとリコは部屋の入り口に近づく。

二人が近づくと共に部屋の中から途切れ途切れでは在るが、二人が探していた相手の

声が聞こえて来る。

「…親分……どいの……だ」

「居るね。良し！ ナノナノ!!」

「ッ!」

扉が開くと共に呼び掛けられたナノナノは、尻尾をピンと伸ばしながら振り向く。

其処に居るのがカズヤとリコだと気がつき、ホツとしながら口を開く。

「…カズヤにリコたん?」

「うん。僕とリコだよ。良かった。無事だったんだね」

「本当に無事で良かったです。もしかしたら警備のロボットに捕まっているんじゃないかと思って」

「……ゴメンなのだ」

安堵したように口を開く二人に、ナノナノは申し訳なさそうに謝罪した。

幾ら元々ナノナノが眠っていた場所とは言え、フェムト内部には警備ロボットが数え切れないほどに配置されている。ナノナノは見つかっても捕まらない可能性は在るが、カズヤ達は別。発見された瞬間に警備ロボットが大挙として襲い掛かって来るのは間違いない。それでもカズヤ達は自身を探しに来てくれた。

その事に気がついたナノナノは心の底から申し訳なさそうに顔を下に俯かせる。

「とりあえず無事で本当に良かった……それでナノナノ？ アニスが何処に行ったのか分かる？」

「……知らないのだ。親分に追い駆けられて、必死に逃げてこの部屋に飛び込んだから」

「それじゃ、アニスさんの事は分からないのね？」

「……そうなのだ」

「……僕やリコが気がついた濡れ後にアニスが見逃すとは思えないから、きつとちとせさんやカルーアが向かった方にアニスは向かったのかも知れない」

「その可能性が高いですね。それじゃ、ちよつと連絡を取って見ます」

リコはちとせ達に連絡を取る為に、服に備わっている通信用のクロノクリスタルに顔を向ける。

「此方桜葉です。ちとせさん、聞こえていますか？」

ナノナノ発見の報を知らせる為にリコは呼び掛ける。

だが、クロノクリスタルは何の反応も示さず、通信は繋がらなかった。

「アレ？ 可笑しいですね？」

「どうしたの？」

「ちとせさん達に連絡が繋がらないんです」

「えっ？ ちよつと待って？」

カズヤは慌てて自らのクロノクリスタルに顔を近づけ、リコと同じようにちとせ達に呼びかける。

しかし、リコと同じように通信は繋がらず、困惑したようにナノナノとリコに顔を向ける。

「僕の方も駄目だ。繋がらないよ」

「可笑しいですね？ 事前の教えられた話だと、施設内での通信は可能って聞いていたんですけど」

「うん。そうだよね……一体どう言う事なんだろう？ ……とにかく、急いで戻ってちとせさん達と合流しよう。もしかしたら、何か起きたのかも知れない」

「はい……私も何か嫌な予感がします」

カズヤの指示にリコは同感だと頷いた。

話を聞いていたナノナノも何かしらの異常が起きている事に気がつき、リコと同じように頷くが、何かを迷うように顔を背ける。ちとせとカルーア、ミモレットに合流するのは問題無い。だが、アニスの事が在る。

また、変身を迫られるのでは無いかとナノナノは心配なのだ。ナノナノにとってそれだけ他者に変身するのは嫌な事だった。カズヤはナノナノが迷っている事に気がつき、安心させるようにナノナノに笑みを向ける。

「大丈夫だよ、ナノナノ。もしもアニスがまた変身を迫ったら、今度は僕が止めるから」
 「私もです。それにアニスさんもちゃんと事情を説明すれば、分かってくれると思います」

「カズヤ、リコたん……うん！ 分かったのだ！」

「よし！ それじゃ急ごう！！」

『はい（なのだ）！！』

カズヤ達は部屋から飛び出すと共に来た道を戻り、ちとせ達が向かった方に急ぐ。

そのカズヤ達の前に通路を猛スピードで突き進んで来たミモレットが現れる。

「カズヤアアアアアアアアアアツ！！」

「うわっ！ ミ、ミモレット!?!」

「大変ですに!! テ、テキーラ様達が警備ロボットに連れて行かれたですに!!!」

「な、何だって!?!」

告げられた情報にカズヤ達は驚愕と困惑に包まれたのだった。

時間は少し戻り、カズヤ達と別の通路を進んでいたちとせとカルーア、そしてミモレットも通路の先に居たアニスを発見していた。

「…そう言う理由で、ナノちゃんは変身能力を使いたく無いのです」

「ア…：…そんな理由が在ったのか…：ナノにわりい事しつちまったな」

ちとせから何故ナノナノが他人に変身するのを嫌がる理由を聞いたアニスは、ぼつ悪そうな顔をしながら納得する。

ただ外見だけ変えるのではなく、人格さえも変わってしまうナノナノの変身能力。自らが自らで無くなるのを嫌がるのは当然の事であり、それを強要してしまった事をアニスは深く反省していた。少し考えれば自らを親分として慕っているナノナノが嫌がる理由に気がつけたのに、物珍しいモノを見て興奮して機がつけなかった事実アニスは、ナノナノに謝る事を決める。

「分かった。もうナノに変身を強要したりしねえよ。会ったら必ず謝る」

「そうしてくれると助かりますわ。私もナノちゃんとアニスさんが喧嘩したままなんて嫌ですから」

カルーアは自らの非を認めたとアニスに笑みを向け、アニスは申し訳なさそうに僅かに頷く。

これでアニスの方の問題は解決したと思ったちとせは、カズヤ達と連絡を取る為に服に付けているクロノクリスタルを使用して連絡を取ろうとする。

その間にカルーアは、見つけた時に気になった事をアニスに質問する。

「そう言えば、アニスさん？」

「何だよ？」

「私達がアニスさんを見つけた時に、何かしていらしてましたわよね？」

「そう言えば、何か仕切りに通路の壁を気にしていたようでしたに……何か見つけたんですかに？」

「ア、アレか？ いや、何かこの辺の通路の壁が可笑しく感じたんだよ。特にこの壁がよ」

アニスはそう言いながら突き当たりになっている壁を叩く。

言われたカルーアとミモレットはアニスが叩く壁を見つめるが、二人には何の変哲も無い壁にしか見えず、首を傾げる。

「…普通の壁にしか見えませんか？」

「そう見えけど、ほんの僅かだけ違和感を感じんだよ。まあ、本当に僅かだけど、何か気になってな。それで周りに仕掛けがねえか調べてたんだ」

「それで見つかったんですかに？」

「…いや、何も……仕掛けらしい仕掛けも無かった」

「それでは気のせいだったと言う事でしようか？」

「その可能性もあつけど……如何にも気なんだよな」

険しい瞳を問題の壁にアニスは向ける。

見つめる壁はどう見てもただの通路の壁にしか見えない。だが、アニスのトレジャーハンターとしての勘は何かを察していた。目の前の壁はただの壁などではない。何かがある。アニスは感じている。

しかし、仕掛けらしい仕掛けは発見出来ない。アニスは考え込むが、フツとこの施設に詳しい人物がすぐ傍に居る事に思い至り、ちとせに顔を向ける。

「……可笑しいですね？」

「ん？ 何がだよ？ もしかしてアンタもこの壁の事が気に入ったのか？」

「いえ、私が可笑しいと言ったのは通信が繋がらない事です。以前此処に来た時は確かにクロノクリスタルに寄る通信が出来た筈なのに」

「カズヤさん達と連絡が取れませんの？」

「カズヤ君達だけじゃなく、ヴァニア先輩とも、ルクシオールとも通信は繋がりません。一体どうして？」

以前は起きなかつた異常が起きている事にちとせは困惑し、アニスとカルーアも顔を見合わせる。

宙に浮かぶミモレットも三人の様子に不安を感じ、通路の周囲を見回し、曲がり角から大きな影が近づいて来ているのを目にする。

「危ないですに!!」

『ッ!?!』

ミモレットの警告にちとせ、アニス、カルーアが顔を向けて見ると、三メートル以上の大きさを持った警備ロボットが通路の角から姿を現した。

「コイツは!?!」

「警備ロボットです!!」

「ミモレットちゃん!」

「はいですに!!」

呼び掛けられたミモレットはカルーアの言いたい事を察し、口からウイスキーボンボンをカルーアの口に向かって放った。

口に入ったウイスキーボンボンをカルーアが飲み込むと共に、その体が光り輝きテキーラに変身した。警備ロボットと戦闘するとなれば、運動音痴で魔法が余り使えないカルーアよりも、自由自在に魔法を使えるテキーラの方が適任。

変身を終えたテキーラは、何時でも魔法が放てるように身構え、アニスもナイフを握り、ちとせもレーザーガンを構える。それに対して警備ロボットはゆつくりとテキーラ、ミモレット、アニス、ちとせの順にセンサーを向ける。

《……データ一致。目標発見。同一機二報告》

「やべえ！ 仲間を呼ぶ気だぜ!!」

「そうなる前に破壊してやるわ！ 行くわよ、アジート！ 烏丸！」

「力が強いので、絶対に掴まらないで下き……ッ!？」

ちとせが二人に注意を告げている途中で、突然、アニスが気にしていた壁に異変が起きた。

何らかの起動音と思われるガコンと言う音と共に、壁は上へと上がって行き、その先にはちとせも知らない隠し通路が在った。突然起きた事に呆然とちとせ達は固まる。

そして隠し通路の先から、ちとせ達の前に現れた警備ロボットと同一の機体が三機現れる。

「…おい、こりややべえぞ」

「……ええ、そうね」

汗を流すアニスに同意するように、テキーラも頷いた。

一体だけならばテキーラの魔法を使えば、簡単に警備ロボットは破壊出来る。だが、それが同時に四体となれば話はべつ。此処は牽制で魔法を放ち、その隙に逃げるべきだとテキーラは考える。

だが、そのテキーラの策を破るように背後から重い足音が響く。

《……目標発見》

「…ハハ、来るの速すぎだろ？」

背後の逃げ道を塞ぐように更に現れた警備ロボットに、思わずアニスは乾いた声を漏らした。

逃げ道も塞がれ、幾手も遮られた。ちとせ、アニス、テキーラは背中を合わせ、何とか活路を見つけようと警備ロボット達を見回す。

すると、突然警備ロボットの一体がちとせに近づき、三人は身構える。

《…オマチシテ居リマシタ… 『フロントムシューター』ノ搭乗者》

「えっ?」

『ハッ?』

襲い掛かって来ると思った警備ロボットが、肩膝をちとせに向かって着いた事に三人は啞然とする。

その間に次々と集まって来た警備ロボット達が肩膝を着き、ただ静かにちとせを機械で出来た瞳で見つめる。

《ワレワレハ…待ツテイタ… 『フロントムシューター』ヲ護ル…盾デアリ…矛デアル…

『プディングシリーズ』ト共ニ…選バレシ貴女ヲ》

『『プディングシリーズ』って? プディングの姉妹達の事?』

「おいおい、どうなってるんだよ? こりゃ?」

思っても見なかった展開にアニスは、当事者と思われるちとせを見つめる。

だが、ちとせも混乱していた。以前フェムトを訪れた時は今のようない出来事は起きず、警備ロボット達にちとせも襲われたのだ。一体どうなっているのかとちとせは警備ロボットに質問しようとするが、その前に警備ロボットは立ち上がる。

《此方へ：『フアントムシューター』ガ貴女ヲ待ツテイマス》

警備ロボットは立ち上がると共に、隠されていた通路を示した。

「…おい？ どうするよ？」

「行くしか無いでしょう？ どの道こいつらに囲まれていたら逃げようが無いし…：目
的のちとせを逃すとは考えられないしね」

「…行きましょう」

三人は頷くと共に隠し通路に向かって歩き出し、警備ロボット達はその後を逃がさないようにするかのように着いて来る。

明らかに自分達を逃がさないと言うような行動を見たテキーラは、傍に浮かぶミモレットを掴む。

（ミモ…：アンタはこの事をシラナミ達に伝えて来なさい）

（分かったですに！ テキーラ様。お気をつけて）

（ええ、分かっているわ。頼んだわよ）

テキーラは空中にミモレットを放した。

ミモレットは心配そうにしながら警備ロボット達の頭上を通過し、カズヤ達の下へと急ぐのだった。

「と言う事が在ったですに」

カズヤ達と合流出来たミモレットは、自分達に起きた出来事を説明した。

聞き終えたカズヤ達は事前に聞いていた警備ロボット達の行動との違いに、困惑したように顔を見合わせる。事前の話では侵入者を発見したら問答無用で警備ロボットは襲い掛かって来る筈。

だが、警備ロボットは襲い掛かる事は無く、寧ろ迎え入れるかのようにちとせ達を何処かに連れて行った。予想外過ぎる事態にカズヤ達は固まる。そんなカズヤ達の耳に何処か慌てているような足音が届き、通路の曲がり角からヴァニラが現れる。

「アッ！ ママなのだ!？」

「ナノナノ：無事だったのですね、良かった」

ヴァニラはナノナノの無事な姿に安堵の息を漏らし、次にカズヤ達に顔を向ける。

「あの、ヴァニラさん？ 如何して此処に？ シャトルの準備に向かったんじゃない？」

「…実は皆さんが部屋を出てから、メッセージが届いたんです。気がついていていると思いますが、通信が出来ないのです、その事を伝える為に来たのです」

「メッセージですか？」

「はい……そのメッセージに寄れば、ちとせさんが何者かに狙われているようなのです」
「ちとせさんが!? だったら、警備ロボット達の行動は……ヴァニラさん、実は!?」

カズヤはヴァニラにちとせ達に起きた出来事を説明する。

聞き終えたヴァニラは来るのが遅かったと苦い顔をする。最初はクロノクリスタルを使って連絡を取ろうとしたのだが、カズヤ達と同様に通信は繋がらず、急いで追い駆けて来た。だが、結局間に合わずメッセージの相手が警告したとおりにちとせは狙われた。

襲い掛かって来なかった事を考えれば、ちとせの命を狙っている訳では無いだろう。だが、嫌な予感をヴァニラは感じていた。今のフェムトは以前訪れた時とは何かが違う事を感じる。

「…とにかく、三人が連れて行かれた場所に向かいましょう。其処に今のフェムトに起きている事の答えが在る筈です」

「分かりました。ミモレット、案内をお願いします！」

「任せるですに!!」

「ミモレットは返事を返すと共に先に進みだし、カズヤ達はその後を追い駆けるのだった。」

「…なげえ通路だな？」

「ええ、そうね。かなり奥の方に在るみたいね」

「フェムトにこんな場所が在ったなんて」

アニス、テキーラ、ちとせは、警備ロボットの案内を受けながら通路を進んでいた。

途中には幾つかの隔壁が在り、警備ロボットが承認しなければ開かない仕組みになっており、如何にこれからちとせ達が案内される場所が重要なのかを示していた。

「こりゃ、かなり重要なもんが隠されているみたいだぜ。どんなお宝が出て来やがるか、楽しみだ！」

「あんまり、楽しめる状況じゃ無いんだけどね」

トレジャーハンターとしての血が騒いでるアニスと違い、テキーラは不安そうに背後に居る警備ロボット達に視線を移す。

少なく見ても背後に居る警備ロボット達は十機以上。これらを突破して逃げ出すのは、流石に難しい。しかも、警備ロボット達の狙いはどう言う訳かちとせ。テキーラや

アニスは今のところ襲い掛かって来ないが、状況が変わればちとせへの人質の為に動く事は充分に考えられる。

(警備ロボット達に指示を出している奴が居るわね。ソイツの目的はちとせみただけど、何が狙いなのかしら?)

この先に居るであろう警備ロボット達の主の狙いをテキーラは考える。

だが、答えは幾ら考えても出なかった。余りにもテキーラ達には情報が不足している。そもそも今のフェムトには可笑しい出来事が起き過ぎていた。

アニスが見つけた目覚めない筈のナノナノの姉妹が目覚めた痕跡。ただ侵入者を排除するだけの警備ロボット達の予想外の行動。極め付けは以前『E^エD^デE^エN^ン』の調査班が訪れた時に見つけられなかったフェムトの隠し通路。

一体何が起きているのかさえも分からない現状にテキーラが頭を悩ませていると、通路の終わりと思われる頑丈な扉が見えて来た。

この先に何が在るのかとちとせ、テキーラ、アニスが息を呑む。そして警備ロボットが信号を送ると共に扉は重たい音を立てながら開き、ちとせ達はその先に在る物を目にする。

「ハレは!?!」

「マジかよ!?!」

「予想外過ぎでしよう!」

扉の先に在ったモノ。それは。

闇色のダークブルーカラーが施された一機の小型の戦艦ぐらいの大きさを持った戦闘機。『E D E N』に於いてその形状を知らぬ者は無く、『N E U E』でも有名な機体。ソレは静かに羽を休めるかのようにハンガーデッキに設置されていた。

装甲は新品のように輝き、損傷は全く見えず、一部主翼部分がピンク色に染まっている事以外はヴァニラが言っていた状態が本当なのか疑問に思うほどになっている。

ちとせ、アニス、テキーラは、自分達が良く知っているその機体の通称を同時に叫ぶ。

『ゴーストツ?!』

そう叫び、ちとせ達の前には『E D E N』と『N E U E』の双方に於いて正体不明機で在る筈の『ゴースト』が、ハンガーデッキに鎮座していた。

「な、何故『ゴースト』がフェムト内部に!」

《…搭乗者二選バレシ者……ドウゾ、此方へ》

混乱するちとせ達に構わず、警備ロボットは『ゴースト』—以降『ファントムシューター』—のパイロット席に繋がる階段を示した。

ちとせは開いている『ファントムシューター』のパイロット席に繋がる階段に気がつき、思わず息を呑んで固まる。ずっと、追い求めていた『ファントムシューター』。それ

の搭乗者に自身が選ばれている。

本来ならば喜ぶべき事。だが、ちとせには喜べない事情が在る。その事情を知っているテキーラは苦い顔をし、警備ロボットに向かって口を開く。

「待ちなさい。いきなり、乗れって言われたってこっちは混乱するわ。出来れば事情を説明して欲しいわね？」

《…説明スル必要ハナイ》

「…何ですって？」

《此方ノ目的ハ、アクマデ搭乗者ノ確保ノミ……邪魔ヲスルナラバ……他ノ『紋章機』ノパイロットトハイエ、排除スル》

「ヘッ！ 排除だって？ 言ってくるぜ。俺様達がそう簡単にやられると思つてのかわ？」

《無駄ナ行動ヲスルノハヤメロ。〃本機〃ノ目的ハ、資格ヲ有スル搭乗者。烏丸ちとせノ確保ノミ。資格ヲ持タナイ……『紋章機』ノパイロットヲ排除スルノニ……問題ハナイ》

「資格？ どう言う事です？ テキーラさんやアニスさんに無くて、私に在る〃資格〃と言うのは何ですか!? 警備ロボット……いえ、『ゴースト』のAI!!」

ちとせは目の前に立つ警備ロボットを操作しているモノの正体を悟り、静かにハン

ゲーデツキに鎮座している『ファントムシユーター』に向かって叫んだ。

その問いに反応するかのように『ファントムシユーター』の機首部分に在る目の様な部分が光り、四年前に通信でちとせが聞いた男とも女とも言えない合成された電子音が響く。

《本機の名称は『GA—000 ファントムシユーター』》

「『GA—000』ツ!? そんな識別番号が在る筈が在りません!!」

在り得ない事実がちとせは思わず叫んでしまった。

『E^エD^デE^ン』で確認されている『紋章機』の識別番号で一番最初のは、『GA—001 ラツキースター』。『GA—000 ファントムシユーター』などと言う識別番号を持った『紋章機』は存在していない。

四年前にちとせ達の前に『ファントムシユーター』が現れた時の後、『E^エD^デE^ン』の情報データベースである『ライブラリ』を隅々まで調べ、『紋章機』の造り上げた『白き月』まで徹底的に調べ上げたのだから間違いは無い筈。

一体どう言う事なのかとちとせは、『ファントムシユーター』を睨む。だが、『ファントムシユーター』はちとせの困惑になど構わずに警備ロボット達を操作する。

操作を受けた警備ロボット達はちとせに向かって手を伸ばす。それに逸早く気がついたテキーラは、魔法を放つ。

「そうはさせないわよ!! ハアツ!!」

テキーラが放った魔法は警備ロボットの直撃した。

直撃を受けた警備ロボットは床に重たい音を立てながら倒れ伏す。ちとせも瞬時に警備ロボットから離れるように飛び去り、レーザーガンを構える。

アニスは魔法を放つテキーラを護るように蹴りやナイフを使って警備ロボットに攻撃を加える。だが、敵は侵入者撃退用の警備ロボット。頑丈な装甲に加え、十機以上居るのも在り、徐々にちとせ達は追い込まれて行く。

「クツッ! 不味いわね!!」

「ゲッ! ナイフが!」

「エネルギーが!」

周りを気にしてテキーラは大規模な魔法を使えない。

アニスは斬り付けた時に折れたナイフの刃先を見つめ、ちとせは使っていたレーザーガンのエネルギーが尽きてしまう。

それに比べ警備ロボット達は数機破壊出来ただけで、まだまだ数が居る。このままでは不味いとちとせが思った瞬間、突然警備ロボット達の動きが鈍る。

「えっ?」

動きが鈍った警備ロボット達に、ちとせ、テキーラ、アニスは呆然と見つめる。

ちとせ達が入ったと同時に閉まった筈の扉が開き、カズヤとリコが部屋の中に入って来る。

「ちとせさん！ 皆！！ 早くこっちに！！」

「ナノちゃんとヴァニラさんが、フェムトのシステムに侵入して警備ロボットに出されている指示を停止するようにしています！ だから、早くこっちに！！」

「良し！ 急ごうぜ！！」

「ええっ！」

脱出する機会がやって来たと悟ったアニスとテキーラは頷き合った。

だが、ちとせだけは迷うように『フロントムシューター』を見つめる。逃げなければならぬのは分かる。目的も正体も不明であり、強行手段まで行なって来た『フロントムシューター』には何かが在るのは間違い無い。

それでもちとせにとって『フロントムシューター』は、現状で唯一自らの望みを叶える事が可能な機体。このまま逃げて良いのかとちとせは苦悩する。そんなちとせに気がついたテキーラは、力強く手を握る。

「烏丸！ アンタの気持ちは少し分かるけど、今は逃げましょう！ 例えあの機体が望んだって、アンタは乗れないのよ！！」

「ッ!? ……分かりました」

在る事実を思い出した心の底から悔しそうにしながらもちとせは頷き、テキーラと共にカズヤ達が居る扉へと急ぎ走る。

その場に残された『ファントムシューター』は、システムに侵入して警備ロボット達の行動を邪魔をするナノナノとヴァニラに反撃する為に演算を急ぐ。

《プディング031号…余計な邪魔を……本来の役目を忘れている身で在りながら》
 (あの子は君が思っているような役目を持っていない筈だ)

《本機の盾であり、矛で在る事がプディングシリーズに課せられた役目。プディング031号は、本機の搭乗者をメンテナンスを課せられたナノマシン集合体》

(…それは絶対に違う。プディングシリーズの子達を造った人達は、君が思っているような考えは抱いてなかったと俺は思うよ。きっと未来の為に彼女達は遺されたんだ)

《……本機の役割を果たせなければ、未来など消え去る運命に変わりは無い。乖離》
 されてしまえば、全てが消え去ってしまう》

(ツ!? ……それは……)

《何れ搭乗者は必ず本機に乗る。それもまた変えられない》

今回は逃してしまったが、最後に見せたちとせの様子を『ファントムシューター』は見逃していなかった。

無理やり乗せるような行動をすれば、他の者達が邪魔をして来るが、ちとせが自らの

意思で乗り込めば話は変わる。今は待つべきなのだ。『ファントムシューター』は先ほどの様子から悟った。

どうやらちとせには何かの問題が在る。その問題が解消されるまでは、無理強いは止めるべき。ちとせ以外に現状で乗る資格を有している者は居ないのだから。それに今はちとせだけに構って居られない状況になって居た。

『センサーに敵影を複数確認。『ABSOLUTE』を占拠した敵艦と一致』
 (…敵が来たか。レスター達に任せてばかりは居られないか)

センサーから届いた情報を検証した結果、今からちとせ達がフェムトから脱出したとしても、ルクシオールに辿り着く前に敵が来てしまう。

ちとせ達がルクシオールに辿り着くまで時間を稼ぐ必要が在る。だからこそ、『ファントムシューター』のAIはちとせを搭乗させるのを急いで居た。しかし、テキーラの発言から、何かちとせには問題が在る事が分かり、見逃したのだ。

今は敵の迎撃を優先しなければならぬと、『ファントムシューター』は判断し、自らに掛かっていたロックを全て解除する。同時に前方の隔壁が開き、外へと繋がる発進デッキが現れる。

『GA-000 ファントムシューター』発進』

発進シーケンスが終わると共に、『ファントムシューター』の二つのブースターが噴

き、フェムトから宇宙空間へと飛び出したのだった。

4—6

「フェムトに居るちとせ達とは、まだ通信が繋がらないのか!？」

「駄目です!! 誰とも通信が繋がりません!!」

ルクシオールのブリッジではフェムト内部に居るちとせ達と連絡を取ろうと、ブリッジに居る面々が動いていた。

艦に備わっている長距離センサーがフェムト方面に近づいて来るクーデター軍の艦影を捉えた。敵側もルクシオールの事は察知している筈。戦闘になるのは間違いない。当然レスター達はフェムト内部に居るちとせ達に連絡を取り、ルクシオールに戻るように伝えるつもりだった。

だが、以前の時には確かに繋がった筈のフェムト内部との通信が繋がらず、レスター達は何とか連絡を取ろうとしていた。本来ならば別室で待機しているように命じたアルモにも解析を頼んだのだが、結果は芳しく無かった。カズヤ達が戻らなければ、ルクシオールの最大戦力で在る紋章機が使用出来ない。

幾ら『EDEN』の最新鋭艦である、ルクシオールとは言えクーデター軍の艦隊を相手に一隻では勝てないのだ。

（一体どうなっている!? 以前の時にはこんな事は無かった筈だ! 何が起きている!?）

「……ッ!? これは!? 指令!」

「どうした? ココ」

「フェムトの外壁の一部が動いています!」

「何!」

「映像を映します!!」

ココが言う場所を察知したアルモは、即座にコンソールを操作したモニターに映像を映す。

モニターに映し出された映像には、確かにフェムトの外壁の一角が動き、何らかの発進口のような物が現れた。自分達の知らないフェムトの秘密にレスター達が呆然とする。その呆然は次の瞬間、フェムトから出て来た機体を目にし驚愕へと変わる。

ダークブルーのカラーリングを施され、『E^エD^デE^ンN』製の紋章機と同じ形状のその機体は、フェムトから猛スピードで宇宙空間に飛び出すと共に真っ直ぐにクーデター軍の艦隊が居る方向に向かって行く。

「馬鹿な!?! ゴーストだ?!」

悠然と宇宙空間に飛び出したゴースト事、『フアントムシューター』の姿に、レスター

は叫んだ。

それはブリッジに居る誰もが同じ気持ちだった。何故重要施設であるフェムトからフアントムシューターが出て来たのかと誰もが疑問に思うが、フアントムシューターは構わずにクーデター軍の艦隊との戦闘を開始する。

戦闘が始まった事で膠着から立ち戻ったレスターは、すぐさま指示を出そうとする。その直前、今まで全く繋がらなかった通信が繋がる。

『此方ヴァニラ。ルクシオール、応答願います』

「ヴァニラか!? 無事なのか!」

『はい。此方は全員無事です。ナノナノの治療も完了しました』

フェムトからシャトルが飛び出す。

そのシャトルをココとアルモは確認し、ヴァニラ達が無事だった事を安堵する。レスターや他のブリッジメンバーも安堵していると、ちとせから報告が届く。

『クールダラス指令! 其方でも『フアントムシューター』を確認出来ましたか?』

「? 『フアントムシューター』? 何だそれは?」

『あつ! 申し訳ありません! 『フアントムシューター』とはゴーストの名称です』

「ゴーストの名称だと!」

報告を聞いたレスターは思わず叫んだ。

これまで謎だったゴーストの名称が明らかになった事実には驚愕しながらも、レスターはすぐさま驚愕を抑える。今は知った事実には驚いていられる状況でない。ファントムシューターが戦っているとは言え、近くにはクーデター軍の艦隊が居る。

「詳しい報告は後で聞く!! すぐさまルクシオールに戻って来てくれ! クーデター軍が近くにきている!!」

『りよ、了解しました!!』

手短かに伝えられた状況にちとせは返事を返し、シャトルは急ぎルクシオールへと帰還するのだった。

「何やっているんだい!! さっさと奴を撃墜しな!!」

艦隊の旗艦であるディスト・ディーターの艦橋で艦長であるディーターは叫んだ。

その間に先行していた突撃艦が爆発を起こし、爆炎を突き破りながらファントムシューターが現れ、近くでミサイルを放っていた巡洋艦に向かう。迫るミサイル群を回避し終えると共にファントムシューターは、大型ロングバレルレールガンの照準を合わせ、巡洋艦のエンジン部分を三発の弾丸で撃ち抜き撃沈した。

次々と味方艦がファントムシューター一機に撃沈されて行く現状に、ディーターは怒りと屈辱で満ちて顔を歪ませる。

(クウツ！ ルクシオール連中を見つけただけじゃなくて、ゴーストも見つけられたのに!!)

察知したフロントムシューターの電磁波を追って来たデータ達は、行方不明だったルクシオールを発見。

電磁波の反応が無くなったフロントムシューターを追うのを止め、ルクシオールへの追撃を行おうとした。それを阻むようにフロントムシューターは現れ、こうして戦闘は開始された。データには勝算は在った。フロントムシューターの一番厄介な点は、現行の技術では発見出来ないステルス性能。その一番厄介な機能は電磁波を発するインクに寄って破られている。

故にデータはフロントムシューターと戦闘になっても勝てると思っていた。だが、戦闘が始まると共にそれは間違いだと思いついた。

フロントムシューターは正確無比な射撃で艦艇を次々と撃沈して行く。データも指示を出して艦隊に攻撃させるが、その動きが分かっていると云うかのようにフロントムシューターは戦場を飛び回る。

(何なんだい、コイツは!?! 無人の機体じゃないのかい!?!)

ヴェレルの指示で、事前にフロントムシューターに生命反応が在るのかどうかをデータは調べていた。

『ABSOLUTE』内での戦闘でヴェレルは、ファントムシューターが無人機では無いと考えていたのだ。だからこそ、データーは発見したと同時に生命反応を調べた。結果は、生命反応無し。だが、明らかにファントムシューターの動きは人間が指示を出しているものと思えなかった。

無人機を扱う上で指示を出してから反応が遅れるのはどうする事も出来ない事柄。データー自身も無人艦隊を扱っているので、良く知っている。しかし、ファントムシューターには全く遅れが無いのだ。

データーが出した指示に即座に最適な行動を取り、データーが敷く包囲網を容易く破る。

(不味い!! ヴェレル様の言う通り、危険過ぎるね! 何とか此処で破壊しないと!)

「データー様! ルクシオールから紋章機が発進しました!!」

「クウツ!! こんな時に、ルクシオールの連中の相手なんかしていたら、ゴーストに逃げられ……待ちな。これは利用出来るかもね……ルクシオール側に数隻艦を向かわせな!」
そして旨くゴーストと巻き込むように戦闘をさせるんだよ!」

「りよ、了解しました!」

データーの指示を聞いた部下は無人艦に指示を送り、攻撃艦一隻と巡航艦三隻をルクシオールから発進した四機の紋章機に向かわせる。

(此れでフアントムシューターの動きは鈍る筈。指揮官が二人居て、それぞれに指示を出せば必ずぶつかると。その時こそがチャンスだよ!)

幾ら優秀であろうと、連絡も取らずに連携など出来る筈が無い。

シューターはそう考えながら、自らの策にフアントムシューターが嵌る時を待つ。

「指令! 敵艦が数隻此方に向かって来ました!」

「識別の結果、攻撃艦一隻と巡航艦三隻です!」

「……そうか……敵もやるな」

ココとアルモの報告を聞いたレスターは、自身の目の前に映る戦況図を見ながら呟いた。

シューター側の狙いをレスターは看破する。確かにシューターの策は旨い。連携が取れない状況で二つの指示が動けば、戦況は破綻する。それが相手の狙いだとレスターは悟るが、同時にこの状況は願ってもいないチャンスだった。

(悪いがこの状況、利用させて貰うぞ。フアントムシューターの後ろに居る奴が、アイツなのかを確かめる為にな)

そう決めると、レスター達はカズヤ達に指示を送る。フアントムシューターの背後に潜む者が予想通りで在る事が間違っている事を願いながら。

戦況は最初ディータの思惑通りに進んだ。ルクシオールから発進した四機の紋章機は、旨くファントムシューターが飛び回る戦場に引き込む事が出来た。

そのまま混乱するようにディータは戦場で無人艦隊を動かし、デイスト・ディータの主砲をファントムシューターに放つタイミングを待ち続けた。だが、ソレは目の前に広がる光景に寄って阻まれた。

「ど、どういふ事だい？ こりゃ？」

ディータの策通りに戦況は進んだ。

ファントムシューターと四機の紋章機が居れ乱れるように旨く事が運べた。だが、混乱するような状況には無かった。寧ろ連携が信じられないほどに旨く行き、次々とディータが操る無人艦隊は破壊されて行く。

「…在り得ない……こんなに連携が旨く行くなんて、在り得る筈が無いんだよ!!」

目の前に広がる光景が信じられず、ディータは混乱に包まれながら否定するように叫んだ。

そして戦場で連携が旨く行き過ぎている状況に混乱しているのは、ディータだけでは無かった。

「ど、どうなっているんだろう？ 此れは」

『レスター……凄いなのだ』

今回の戦闘でブレイブハートとファーストエイダーは合体し、共に乗っているカズヤとナノナノは、余りにも戦いが旨く行き過ぎる現状に混乱していた。

敵側が乱戦狙っている事に戦いながらカズヤ達は気が付いていた。その事をレスターに知らせたが、寧ろ乱戦にするように指示を出した。当初は困惑したカズヤ達だが蓋を開けてみれば、全く状況は違った。

果敢に敵艦を沈める事に集中していた筈のファントムシューターが、カズヤ達が戦場に乱入すると同時に、突如としてカズヤ達が敵艦を沈めやすいようにする為のサポートに回りだしたのだ。

敵艦の主砲や武装を大型ロングバレルレールガンレールガンの遠距離射撃で破壊し、クロスキャリバーの攻撃を援護する。遊撃に回っているファーストエイダーが狙われそうになれば、自らが狙っている敵艦の傍に近寄り囿なり、その隙をレリックレイダーとスペルキャスターに狙わせる。

逆にファントムシューターが敵艦に集中的に攻撃されそうになれば、レスターがそれぞれに指示を出して援護する。ソレは通信でのやり取りを行なっていると思えない連携。

だが、ファントムシューターとの間に通信のやり取りは無い。だからこそ、カズヤ達

は困惑している。何故通信のやり取りを行わずに、此処まで見事な連携が取れるのかと。

(と、とにかく、今は戦いに集中しないと)

余計な事を考えて場を乱す訳には行かないと、カズヤは戦いに集中する。

戦況はもはやデーター側が追い込まれていた。見事としか言えない連携によつて無人艦隊は殆ど破壊され、旗艦の護りにつかせていた二隻の巡洋艦以外に戦力が無くなっていた。幾ら無人艦の製造に問題はないとは言え、前回と今回の失敗は余りにも不味過ぎる。

本当の意味で利用出来る駒が少ないヴェレルとは言え、データーを処分する可能性は高い。その事実にはデーターが唇を噛み潰していると、部下から報告が届く。

「データー様！ ルクシオールから通信が届いてます！」

「通信だって？ 降伏でも進めるつもりかね。まあ、良いよ。繋ぎな」

少しでも相手側から情報を手に入れる為に、データーは通信に応じた。

モニターに光が走り、ルクシオールの艦長席に座るレスターが映し出される。

『此方ルクシオールの指令官、レスター・クールダラスだ。お前がマジック出身のデーターだな？』

「ッ!? どうしてあたしがマジック出身だって知っているんだい？ 名前はともかく、

出身地の事はあのトレジャーハンターには話して無い筈だよ？」

『私が教えたのよ』

「お前は!？」

新たにモニターに映し出された人物にデータは目を見開いた。

映し出された相手はデータにとって不倶戴天の怨敵と呼べる人物。憎々しげにモニターに映るテキーラを睨み付ける。

「マジヨラム!!!」

『元氣そうね、データ。あんた、マジックを出たって聞いていたけれど、まさか、クーデター軍に入っているなんてね』

「フン。出たんじゃないよ。捨てたのさ。あたしを認めず、アンタなんかを公認A級魔女にしたマジックをね!!」

『…相変わらずね。アンタ、私にA級魔女の試合で負けた時から、まるで成長してないわ』

昔と変わっていないデータにテキーラは呆れたように呟いた。

データとテキーラ。二人には因縁が在った。惑星マジックに於いて十二人にしかない公認A級魔女の資格を得る為に争った関係。最終的にカルーアとテキーラがデータに勝利し、データはマジックを去った。その身に自身を認めなかったマジ

クへの怒りとカルーア、テキーラへの憎しみを宿して。

「…そうかい。あたしの事はアンタが教えたんだね」

『ええ、そうよ。あくまで可能性だったけれど、まさか、本当にアンタだったとはね』

「……まあ、良いさ。今回も退かせて貰うよ。次に会った時は見てなさい!! 今までの借りを全部返させて貰うからね!!」

データが宣言すると共にデイスト・データは反転する。そのまま巡洋艦二隻を引き連れて、宙域から去って行った。

敵が居なくなったのを確認したレスターは息を吐き出しながら艦長席に深く体を沈め、次に宇宙空間を飛び続けているファントムシューターに目を向ける。

「…ココ。全周波通信でファントムシューターに呼び掛けられるか?」

「ソレは…相手側が通信を閉じていたら」

「あつ! でも、もしかしたら『ABSO^アLU^ブT^リE^{ュー}』で通信を繋いだ時の周波数で呼び掛けられるかもしれません!」

「その周波数を覚えているのか? アルモ?」

「はい! ココ、今から言う周波数で呼び掛けて見て!」

「分かったわ」

ココはアルモから知らされた周波数に合わせる。

通信が繋がるかどうかは賭けだったが、その賭けにレスター達は勝ち、フアントムシューターとの通信が繋がる。その通信はカズヤ達にも聞こえるようになっていた。とは言え、カズヤ達はフアントムシューターのAIが何かを答えるとは思えなかった。フエムトの中でやり取りから考え、何も答えずに戦場から去るだろうと、カズヤ達はある。だが、レスターが発した一声は全くカズヤ達が考えるモノとは違った。

「…どう言うつもりだ？」

（えっ？ 指令？）

突然のレスターの言葉にカズヤは疑問を覚えた。同時にレスターの声には隠し切れぬ怒りが含まれていた。

誰もがレスターの様子と言葉に疑問を覚え、ブリッジのメンバー全員の視線がレスターに集まる。それと共にブリッジに在るエレベーターの扉が開き、ちとせとヴァニラが入って来る。

それに気が付かず、レスターは眉間に皺を寄せながら口を開く。

「此処まで俺の指揮に合わせられる奴は、宇宙全体を見ても、一人だけだ。何をしているんだ、お前は!!」
 “タクト”
 “!!!”

「えっ……タクトさん？」

ちとせは思わず呆然と呟いた。

何故想い人の名前が此処で出るのかと、困惑したようにレスターを見つめる。その様子を見たヴァニアは、このまま此処にちとせを居させるのは不味いと悟り、止めようとする。だが、止める前にちとせはアルモが座っているオペレータ席に駆け寄り、ヘッドセットをアルモから取って通信を繋ぐ。

「タクトさん!! タクトさん何ですか!?!」

『……るな』

「えっ?」

返って来た返答の音声にちとせは疑問を覚えた。

それはちとせが良く知るタクト・マイヤーズの声ではなく、合成された男性の声。明らかにタクトと違う声にちとせだけではなく、レスター、アルモ、ココ、ヴァニアも困惑する。

だが、相手側はそんな様子になど構わず、焦りに満ちた声音で用件だけを告げる。

『絶対に乗っちゃ駄目だ!!』

「あつ! ファントムシューターの前方!! 空間歪曲を確認!!」

「何っ!?!」

ココからの報告にモニターに目を向けてみると、何時もファントムシューターが去る時と同じ光景が広がっていた。

まるで通信が繋がっている相手との会話を遮ろうとするファントムシューターの行動。その行動の意味をレスター達が考える前に、ファントムシューターから途切れ途切れながらも通信が届く。

『……『禁断の紋章機』……『EDEN』……『黒き月』……『白き月』……『NEUE』
技術……遺産……』

「おい！ 何を伝えようとしている!!」

「タクトさん!! タクトさん!!」

『“マジック”……予言……頼む、親友』

『ッ!?!』

最後に告げられたメッセージと共に、ファントムシューターは宇宙空間に開いた穴の中に消え去った。

だが、確かにレスター達にはメッセージを送った相手の正体が分かった。四年前にアナザースペースの向こう側に消えた人物。そしてちとせの想い人。

『EDEN』の英雄『タクト・マイヤーズ』が、ファントムシューターの背後に居る可能性が高い事が判明したのだった。

『ABSOLUTE』に在る『セントラルグロウブ』。

ヴェレル率いる無人艦隊に占領されたその場所の中核で、ヴェレルは苛立っていた。ディータからの報告で、フアントムシューターがルクシオールと手を結んでいる可能性が高い事が報告されたからだった。

「忌々しい機体め!!」 既に『E_ED_EN_N』の連中と手を結んでいるとは!!」

実際の所は違うのだが、余りにも旨く行き過ぎている連携は、ディータに手を組んでいると思わせるには充分だった。

(何とかゲートキーパーを確保出来たが、『E_ED_EN_N』の連中に私の情報が渡っている可能性は高い)

フアントムシューターは『セントラルグロウブ』から逃げ出す時に、アルモを連れて行った。

ルクシオールと協力しているとなれば、アルモの身柄は既に渡っている可能性が高い。そうなればヴェレルにとって不味い状況になる。フォルテを主犯とするように動いたのは、『E_ED_EN_N』と『N_NE_EU_UE_E』が連携するのを防ぐ為。だが、ヴェレルの情報が知られればマジックとルクシオールが手を結び、セルダール解放に動く。

そうなれば非常に不味い。ヴェレルには手駒が殆ど無いのだ。無人艦隊は戦力としては役に立つが、支配となれば話は大きく変わる。それが原因で最初は順調だった『N_NE_EU_UE_E』の征服状況が遅々として進まなくなっていた。

(やはり、早急にマジックを支配下に置かねば……だが、あの女だけに任せるのは……ムウツ！)

何かに気が付いたようにヴェレルがコンソールに目を向けると、何処かと通信が繋がる。

『やあ、ヴェレル』

「貴様は?!」

『随分と苛立っているね。まあ、計画通りに『N E U E』支配が進んでいないようだから仕方が無いだろうけど』

「黙れ! 私を嘲笑う気か!!」

『いや、そんなつもりは無いよ。僕らは一蓮托生。君の計画が良い出来だったから、僕らは支援しているんだよ。支援している僕らの事が知られたら、セルダールやマジックの連中が僕らの場所に攻め込んで来るのは目に見えているだろう?』

「ムウツ!」

通信の相手はヴェレルの『N E U E』での支援者。

一般的には『E D E N』排斥派と呼ばれている。何も『N E U E』全てが『E D E N』との交流を認めている訳では無い。そう言う者達とヴェレルは手を結んでいるのだ。

だからこそ、『A B S O L U T E』に引きこもっていた筈のヴェレルが、セルダールの

征服を手早く行なえたのである。

『このまま連中を調子づかせる訳には行かないだろう。その為にはマジックが邪魔になる。だから、僕らが更に支援してあげようと思ってね』

「支援だと？」

『そう支援さ。この手を使えば、容易くマジックを無力化する事が出来る』

「……見返りは何だ？」

『話が早いね。君が最も邪魔だと思っている機体、『ゴースト』のデータ全部を提供して貰いたいのだ』

「……良からう」

ヴェレルは厳かな声で相手側の要求を了承した。

魔法惑星マジック攻略の策をヴェレルと通信の相手の話し合う。そのヴェレルの背後には、マインドコントロール用の装置に拘束されたミルフィューが眠るように目を閉じていたのだった。

『NEUE』宇宙とは別宇宙である『EDEN』宇宙。

その宇宙に在る今は完全に閉じている『クロノゲート』の前には、『EDEN』軍の艦隊が集まっていた。その中には『EDEN』軍に於いて伝説と呼ばれるほどに有名な旗

艦。『エルシオール』の姿も在った。

その艦のブリッジには褐色肌に金色の髪を柵引かせている少女―『ノア』―が、何か『クロノゲート』を開く方法は無いかと調べていた。

「……駄目ね。やっぱりゲートキーパーであるミルフィューユが居ないと扉を開けるのは無理だわ」

『クロノゲート』が完全に封鎖されてから、ノアは何とか扉を開く方法は無いかと調べて続けていた。

ゲートが閉じる直前に帰還した『セントラルグロウブ』の防衛にあたっていた艦隊から、状況は大体聞いた。その中でファントムシューターが援護に当たった情報も届いている。

これまで全く接触が取れなかったファントムシューターが、突然接触して援護に当たったばかりか指揮を執って『EDEN』軍を退避させた事実も既に知られている。ノアはその経緯を聞いた時には呆れたが、同時に有力な情報も得られた。

（『ゴースト』の指揮がタクトに似ているね……正直信じられないけど、ルフトの言う事だし……可能性が高いわね）

帰還した艦隊に記録されていた映像から、ファントムシューターの指揮の執り方とタクトの指揮の執り方に似過ぎている事を恩師であるルフトは気が付いた。

当然ノア、そしてシヴァ女王は否定した。タクトならばどんな事情が在っても、先ずは仲間に相談すると言うやり方を行なう筈。四年前の戦いでも、一時は敵だったノアに協力を求めるほどのお人好しなのだ。そんなタクトが何も言わずに一人だけで動いているなど考えられない。だが、一つだけ可能性が在った。今のタクトが動いている理由が自分の為ではなく、大切な人であるちとせの為に知らせないのであるなら納得出来る。

(…タクト…もしもアンタがそんな理由で動いているなら、今度は私が教えてやるわ。あんた達から教えられた事をね)

ノアは誓う。もしもフアントムシューターの背後にタクトが居るならば、力尽くにでも引き摺り出してやる事を。

だが、ノアは、嫌、誰もが考えても居なかった。

フアントムシューターに隠されている秘密がノア達の想像しているものよりも遙かに重く、非道なモノだと言う事を。今のタクトが生きていと呼べない状況に在る事を。

誰も想像だにしていなかったのだった。

《第四章『衛星フェムト』終了・第五章『魔法惑星』に続く》

第5章 惑星マジック、悪夢に囚われる天使

5-1

『魔導惑星マジック』。『NEUE』に於いて『セルダール』に並ぶと称される魔法文明が発達した惑星。

『NEUE』寄りも科学技術が発達している『EDEN』にも無い魔法と言う魔導技術で栄え、多くの魔法使いや魔女が住んでいる。その魔法を使う者の中で最高位の称号を示すのが公認A級魔女であり、厳しい試練を乗り越えた十二人しか惑星内で選ばれる事は無いのである。

「と言うのが、大体のマジックの仕組みになります」

「へえ〜」

ティーラウンジでカルーアからマジックの説明を聞いたカズヤは、感心したように頷く。

同じ席に座るリコ、ナノナノ、アニスもカズヤと同じようにそれぞれ感心していた。ルクシオールに居るメンバーの中でマジックに関して最も知っているのは、そのマジックに住み、公認A級魔女の資格を持つカルーア。故にカズヤ達はこれから向かう事にな

るマジックに関してカルーアから説明を聞いていたのだ。

「それでよ。カルーア。お前と『データ』との間にどんな因縁があんだよ?」

「親分。『データ』じゃなくて『データ』なのだ」

「うっ!」

ナノナノの指摘にアニスは顔を赤く染めた。

カズヤ、リコ、カルーアはアニスの様子に苦笑を浮かべる。そんな雰囲気を変えようと、カルーアの傍に浮かんでいたミモレットがカルーアとテキーラの間に在る因縁に関して説明する。

「ディータはカルーア様とテキーラ様が公認A級魔女になる時の試合で争そつたのです。結果は言うまでもなくテキーラ様が勝利。でも、ディータは自分の敗北が認められずマジックを去つたです。それから全く話を聞く事が無かつたですにが……」

「今じゃ、セルダールを支配したクーデーター軍の幹部つて訳か。逆恨みも大概にしろつてんだ」

実際アニスの言う通り、ディータのカルーア、テキーラ、そしてマジックに対する憎しみは逆恨みとしか言えない。

公認A級魔女の認定はマジックに於いて厳選且つ公平に行われる。カルーア、テキーラはその資格を實力で獲得した。普通ならば選ばれなかつたと言え、カルーア、テキー

ラ、そしてマジックと言う惑星を憎むなどどう考えても可笑しい。

アニスだけではなく、カズヤ、リコ、ナノナノも疑問を感じていた。その疑問にカルーアは答える。

「デュータさんが私を嫌っている理由は、『私がマジック出身でない』事が大本の理由に在ります」

「えっ？ カルーアってマジックの出身じゃないの？」

「はい。私は元々は別の惑星に両親と一緒に住んでいました」

「その惑星に偶然カルーア様とテキーラ様のお師匠様が訪れたですに。お二方のお師匠様はカルーア様の魔法の才能を見抜き、マジックに来るように勧めたのですに。でも、マジック出身のデュータには、別の星の出身のカルーア様に負けた事が認められなかった。プライドだけは、人一倍高かったのはよく覚えてますに」

「それで、この前の通信の時にテキーラさんにあんなに敵意を向けていたんですね」

説明を聞いたリコは、デュータのテキーラに対する敵意の高さの原因が納得出来た。

プライドが高く、その上絶対に認められない相手に敗北したデュータの怒りは底が知れない。逆恨みだからと言って侮る事は出来ない。ましてやこれからルクシオールが向かう惑星は、デュータが最も憎んでいるマジック。どんな謀略や工作を仕掛けて来るか検討もつかない。

最悪、マジック全土も巻き込む謀略を仕掛けて来る可能性は十分に考えられる。

「マジックを逆恨みしてやがるデータータの事だ。ぜってえ碌でもねえ事してきやがるぜ」

「その可能性は高いですね」

「うん。この前の最後の通信の様子だと考えられるね」

「マジックが心配なのだ」

「…マジックには強力な魔法使いの方々も居りますし、データータさん一人だけに負ける事はありません……ですけど…」

「もしも『セルダール』軍が動いたら、ちよつと不味いですに」

「えっ？ どういう事なの、それ？」

何処となく不安と心配な様子を見せるカルーアとミモレットの様子に、カズヤは質問した。

それはアニス、ナノナノ、リコも同じなのか、カルーアとミモレットを見つめる。

「……マジックはセルダールと同じぐらい有名な星です。ですけど、決してマジックはセルダールと戦う事が出来ないんですの。それは歴史的にも証明されている事です」

「歴史的について？ どういう事だ、そりゃ？」

「何でマジックがセルダールと戦う事が出来ないの？」

「もしかして二人とも知らないのですに？」

『NEUE』出身であるアニスとカズヤの様子に、逆にミモレットの方が疑問を覚え、カルーアと顔を見合わせた。

『EDEN』出身であるリコと、長い間フェムトで眠っていたナノナノも詳しいマジックとセルダールの関係が知らず、首を傾げている。カルーアはその様子に説明すべきだと思ひ、口を開く。

「セルダールを護る騎士団には魔法を断つ剣技『練操剣』の使い手が居りますの。その剣技の前では如何なる魔法も通じませんの」

「昔、マジック出身の邪悪な魔法使いがセルダールを支配しようとして戦いを挑み、敗北に追い込んだという歴史があるので。だから、マジックはセルダールを『NEUE』の中心惑星だと認めているですに」

「な、なるほど」

「へえ、全然知らなかったぜ。マジックとセルダールがそんな関係に在るなんてよ」

初めて聞いたカルーアの説明に、カズヤとアニスは感心したように何度も頷く。

ナノナノとリコも感心しながらカルーアを見つめていると、何かを思い出したのか、ナノナノは憂いを覚えたように顔を下に俯ける。

「……そう言えば、リイちゃん……無事だと言いのだ」

「あつ！ そう言えば……」

ナノナノの言葉にリコも思い出したのか、同じように憂いを覚える。

二人の様子にカズヤとアニスは首を傾げ、カルーアに顔を向ける。

「リコちゃんとナノちゃんが心配しているのは、最後の『ルーンエンジェル隊』のメンバーの方の事ですわ。名前は『リレイ・C・シャーベット』。ルーンエンジェル隊に入る前にはセルダール騎士団の近衛隊長を務めてましたの」

『ルーンエンジェル隊』の任務に集中する為に近衛隊長の役職の引継ぎの手続きにセルダールに戻っていたんです」

「って事は、クーデターに巻き込まれている可能性は高いなこりゃ」

「そうだね。無事だと良いけど」

会ったことは無いが、カズヤも最後の『ルーンエンジェル隊』のメンバーの無事を祈る。

ピコで再会する事が出来たアルモのおかげで、今回のクーデターを引き起こした主犯の正体は判明している。しかし、気を抜くわけには行かない。主犯が分かったとしても今だクーデター軍がセルダールを支配下に置いているのに変わりはない。

気を引き締めて行かなければならないとカズヤ達は思いながら、代金をメルバに支払う。ティールアウンジを出る。

「それでは、私とミモレットちゃんの研究室に行きます。失礼しますわ」

「んじや、俺様は少しばかり運動してくっか」

「ナノナノは医務室のお手伝いに向かうのだ」

カルーア、アニス、ナノナノはティールアウンジの前でカズヤとリコと分かれた。

残されたカズヤはリコに顔を向け、これからどうするのか尋ねる。

「リコはどうするの？」

「私は倉庫の整理に行こうと思います。マジックでは補給も出来るようですし、今の内にリストを作って置こうと思って」

「それじゃ、僕も手伝うよ」

「あ、ありがとうございます！」

カズヤの言葉にリコは嬉しげな笑みを浮かべ、二人は一緒に倉庫に向かって歩き出す。

(良かった。リコが落ち込んでなくて)

アルモからの報告は確かにカズヤ達の助けになった。

だが、同時にリコには辛い報告も在った。大好きな姉であるミルフィーユが『ABSOLUTE』でヴェレルに囚われてしまっている。ゲートキーパーと言う特性を持つているおかげで命が奪われる事は無いだろうが、それでもミルフィーユが囚われ

ているという事実はリコに衝撃を与えた。

最も今は何とかその時のショックを乗り越えて、絶対にミルフィークを助けだすと決意をリコは抱いている。故に最近『紋章機』の調子が良くなっている。

しかし、それとは別の問題がルクシオールでは発生していた。

(……今日もちとせさん。格納庫で練習しているのかな?)

ルクシオールのブリッジでは、マジックとの通信可能距離に到達し、マジックに駐在している『EDEN』の大使である元『ムーンエンジェル隊』の隊員である『蘭花』ランファ・フランボワーズと連絡を取っていた。

『……そう、今回のクーデター騒ぎの犯人はヴェレルの奴だったのね』

「ああ、まんまと騙されていたようだ俺達は」

モニターに映るランファの不機嫌そうな様子に同意するように、レスターは艦長席に座りながら同意を頷く。

『ヴェレル』。今回のクーデターを引き起こした主犯をレスター、ランファ、いや『EDEN』関係者は知っている。『EDEN』が『ABSOLUTE』に在る『セントラルグロウブ』を発見した時、内部でコールドスリープ状態でヴェレルは眠っていた。

『セントラルグロウブ』の詳細を知る為にヴェレルを目覚めさせたのだが、とうのヴェレルは長い間コールドスリープ状態で記憶を失っていると証言。警戒は続けていたが、怪しい動きは見られず、また『セントラルグロウブ』には戦力らしい物を発見出来なかった。たので油断してしまっていたのだ。

「アルモの証言から考えるに、『ABSOLUTE』の何処かに大規模な戦力を隠し通せるだけの施設が在るのは間違い無いが……」

『そんなのが二年間も見つけられなかったなんて可笑しいわよね。第一『セントラルグロウブ』が攻められた時にも発見出来なかったんでしよう?』

「ああ……恐らく何らかのカラクリが在るんだろう」

『……まあ、主犯が分かっていたおかげでマジック政府との交渉が少しは進むわ。アンタ達が報告してくれたデータって言うマジック出身の協力者の情報も役に立つわね……で、話は変わるけど、『ファントムシューター』だったかしら? 『ゴースト』の正式名称は?』

「名乗ったのがその『ファントムシューター』に積まれているAIだがな」

『二年間も謎だった相手の情報が分かったのは嬉しいけれど』

「……逆に謎が増えてしまった」

レスター達が求めていた『ファントムシューター』の情報は確かに前回の事件で得ら

れた。

だが、同時に更なる謎が生まれた。『E_エD_デN_ン』製の紋章機に酷似しながらも『N_ノE_{エイ}U_エ』に修復施設が存在し、更にその修復施設がピコの衛星施設フェムト。その上、どうやっても目覚めさせる事が出来なかつたナノナノの姉妹であるプディングシリーズを目覚めさせる事が出来る。

極めつけは『フアントムシユーター』のAIが望んでいるパイロット候補が、今ルクシオールに居るちとせと言う情報。

『……ちとせパイロットに選ばれるなんて、一体どうなっているのかしらね？ それにタクトが絡んでいるかもしれないなんて何の冗談よ？』

「俺にも分からんが、少なくとも『フアントムシユーター』の後ろにタクトが居るのは間違い無い。俺の指揮に前置きなしで合わせられるのは全宇宙でアイツだけだ」

『でも、通信で繋がった時の声はタクトの声じゃなくて合成音だったんでしょ？ 何で声まで隠すのよ？』

それもまたレスター達を悩ませている事の一つだった。

レスターは間違いなく『フアントムシユーター』の背後にはタクトが居ると確信している。だが、何故タクトが二年間も自分達に内緒で行動していたのか分からない。

『E_エD_デN_ン』での戦いの時は率先して周りに協力を求め、一時は敵だったノアに協力を

頼むほどのお人よしなのがタクト・マイヤーズと言う男。一人では絶対に戦おうとはしない。何か在れば協力を頼んで来る筈なのだ。そのタクトが協力を要請せず一人で行動しているとならば、よほどの事情が在るとレスターは考えている。

「鍵が在るとすれば、アイツが残した言葉」

『絶対に乗つちや駄目だ』だったかしら？ ……どういう事なのよ。本当に？ 『ファントムシューター』のAIはちとせを乗せたがっていて、タクトはちとせを乗せたくない。もう！ 訳が分かんないわよ!!』

「俺に怒るな。だから、アイツが残したもう一つの情報に関して調べて貰いたいんだ。最後にアイツはマジックと予言と言う言葉を言っていた」

現実主義者のレスターとして予言と言うのは余り信じていないが、タクトに繋がる何ならかの手掛かりが得られるのなら形振り構っては居られない。

『それをマジック政府に確認して欲しい訳ね。……分かったわ。アンタ達がこっちに到着する前に何とか調べて見るわね。じゃ、待っているわよ、マジックで』

通信が切れると共に、モニター画面に映っていたランファの姿が消えた。

レスターは力を抜きながら椅子に深々と座り込むと、アルモがレスターに近寄ってコーヒーを差し出す。

「司令。どうぞ」

「すまん」

此処最近、正確に言えばピコを出てから余りレスターは休めていなかった。

クーデターだけではなく、『フアントムシユーター』に関する事柄まで神経を注がなければならぬ。アルモはそんなレスターを支えようと、今は秘密的な役所についている。時にはちとせの代わりにオペレーターとして仕事もこなしている。

そんなアルモの献身をココは優しげに見つめながら、レスターに話しかける。

「せめてもう少しフェムトを調べる時間が在れば良かったんですけど」

『フアントムシユーター』がフェムトを去ってからですぐに、警戒レベルが引き上がったから今の戦力では無理と判断するしかなかった。自らに関する情報は徹底的に隠すつもりだよ」

レスター達ともフェムトを調べれば何か分かると思っていた。

だが、それは無理だった。フェムトの周囲に配置されていた自動砲台は機能を即座に回復。更に内部の警備システムのレベルも最大になっている。現在のルクシオールの戦力ではフェムトの攻略は難しいほどにまで上がって居る為、レスター達はフェムトを調べずにマジックに向かうしか無かった。ただでさえ時間も無いのだから、今は諦めるしかなかったのだ。

「一体、『フアントムシユーター』ってなんなんでしょうね？」

「マイヤーズ司令は『禁断の紋章機』って言っていましたけど」

「『禁断』か。……一体『フロントムシューター』には何が秘められているんだ」

フェムトに『フロントムシューター』専用と思われる修復施設が在っただけでも、何らかの計画が過去に進められていた事は窺える。しかもその計画は『E D E N』と『N E U E』の両方の世界が関わっていた可能性さえも出て来た。

もしかすればクロノ・クエイクが起きる前に繋がっていただろう多くの世界も関わっていた可能性さえも在る。だが、それだけの途轍もない計画ならば何故『E D E N』には何一つ情報が無いのか。

（『E D E N』のライブラリにも情報は無かった。当時『ヴァル・ファスク』との戦争が在ったとは言え、ノアの話では少なくともクロノ・クエイクが起きる前の『E D E N』が必ず負けるという決まっていた訳ではないらしい。なのに何故だ？）

『ヴァル・ファスク』との戦争で負けると『E D E N』側が確信していたならば、情報を与えない為に消去した可能性は在る。

もしかしたらクロノ・クエイク後に『E D E N』が占領された時に情報を隠した可能性も在るが、殆ど抵抗も出来ずに占領された『E D E N』が大規模な計画の情報を隠せる可能性は低い。

「……一先ずはランファが何らかの情報を得てくれることを願うしかないか……それで

? ちとせは今日も?」

「……はい」

「……格納庫で紋章機に乗る練習をしています」

「……うっ!!」

「ちとせさん!!」

クロスキャリバーのコックピット内部に入ったちとせが口元を押さえて、膝を床につけると同時に医務官のモルデンが駆け寄る。

青い顔をしてガタガタと体を震わせるちとせを心配し、モルデンは背中を擦る。

「大丈夫ですか。今日はもう止めましょう。これ以上は流石に……」

「……だ、大丈夫……です」

明らかに痩せ我慢だと分かる声音で答えながら、ちとせは立ち上がろうと膝に力を入れようとする。

だが、幾ら意思を込めても膝は上がり床に着いたままちとせは両手で体を抱き締める。どんなに意思を込めても、心に負った傷が紋章機に拒否反応を起こしているのだ。

しかも、まだちとせはクロスキャリバーのコックピットの入り口付近の床に居るだ

け。コックピットの座席にさえ辿り着いていない。もしもモルデンがコックピットの座席に運んだりすれば、更に拒否反応を起こしてちとせは半狂乱になってしまう。

「……な、何で……何で私は……」

嘆きながらちとせは力無くクロスキャリバーの床に手を打ち付ける。

入り口から僅か数メートル先にコックピットの座席が在る。だが、其処に辿り着くまでの距離が、ちとせにとって実際の距離ではなく、何処までも遠く離れた地平線に思えるほどに離れていた。

「……乗れさえすれば……紋章機に乗れさえすれば……『フロントムシユーター』に……そうすれば……あの人の居る場所に……い、行けるのに……あああああつ!!!」

「……ちとせさん」

嘆き悲しむちとせの姿を見ていられず、モルデンは顔を背ける。

それは格納庫に居る整備班の面々も同じく、誰もが格納庫に響き渡るちとせの嘆きの声に辛そうに顔を歪めるのだった。